

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

2. 研究および共同利用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5476

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。「機関研究」とは近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。

「共同研究」はある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究を行う活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導で行うのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募も行っている。応募された共同研究の提案は、公募、館内募集の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、当の共同研究会のメンバーだけではなく研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究活動である。すなわち、館員個人の研究活動も、申請することによって館の公的な研究活動の一環に組み入れているわけである。

また、本館が属する人間文化研究機構が主催する研究として「連携研究」が2005年度から本格的に始動した。連携研究は人間文化研究機構を構成する6機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が連携してさらに高次の研究を目指すもので、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」と「『人間文化資源』の総合的研究」という2種類の大型プロジェクトが実施されている。

館の研究活動である「機関研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では特に機関研究の推進のために「機関研究推進経費」という枠組みがあり、大規模なシンポジウムの準備と開催のためにこの経費を使用することができる。同じく館長リーダーシップ経費には「研究成果公開プログラム」という枠組みもある。機関研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、6件の機関研究プロジェクト、40件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性、社会性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。

また、これら外部資金に付随する間接経費も貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の一環である刊行物に関しては、2013年度には『国立民族学博物館研究報告』38巻1～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報 2012』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会が、東京と大阪で開催されている。

2004年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革を行った結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けている。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況を見ると、まず標本資料は、文化資源プロジェクトの一環として海外資料収集が行われており、寄贈などにより新たに加わった資料もある。映像音響資料の収集も文化資源プロジェクトの一環として行われている。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSIS-CAT (全国規模の総合目録データベース) への登録作業を推進している。2013年度は日本語図書約29,000冊をはじめとして中国語、難読語、その他諸語の図書約6,000冊の他、コレクション資料から牧野漢籍1,998冊を追加で登録した。遡及入力事業で登録された所蔵

情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2013年度は本館所蔵図書資料の相互利用での貸出受付が1,000件、文献複写受付は2,245件と、大学間の共同利用に大きく貢献していることがわかる。また、館外者への貸出冊数も、のべ2,037冊と好評である。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録などを公開してきた。2013年度は、鹿野忠雄アーカイブの写真資料のデジタル画像などを公開した。また、新規に沖守弘アーカイブを受入し、その権利処理および岩本公夫アーカイブの写真資料3,086点のデジタル化を完了し、梅棹忠夫アーカイブズのリストを作成した。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応することにより、利用者に対するサービス向上を図っている。2013年度には345件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

2012年度に資料管理IDラベルの貼付作業が完了し、蔵書点検が簡略になったため、2013年度には、書庫3層にある約15万冊を対象に蔵書実査を行った。また、マイクロフィルム資料（11,273リール）について、長期保存に適した資料整備を行い、地図資料（約3万枚）についても、整理およびリスト化を実施し、本格的な整備を開始した。

そのほか、大学や研究機関などの研修・授業、あるいは学会の開催のために、展示場や講堂、セミナー室などの本館の施設が利用されている。

2-1 みんなの研究

機関研究

●機関研究の意義

本館では、現代世界が直面する学術的かつ社会的に重要な諸課題について探求するため、本館の組織をあげて重点的に取り組む大型で公開性の高い共同研究として、2004年度から機関研究を実施している。機関研究は、国内外の大学や研究機関との連携や学術協定に基づき研究者が参加する国際共同研究である。その研究プロジェクトの内容は、申請時に大学・研究機関などの外部評価者の意見を反映させるなど、大学共同利用機関として研究者コミュニティの意見が十分に反映されるような体制がとられている。また、機関研究ではプロジェクトに参加する海外の研究者をも国際共同研究員に任じており、本館と海外の研究者との連携を強化する機能も担っている。

2009年度にはそれまで4つに分かれていた研究領域の改組を行い、学術的かつ社会的な要請に基づいて、「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」という2つの研究領域を立ちあげた。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点をあわせつつ、新たな社会観や人間観の創出をめざして関連諸分野の研究者と協力しながら研究を実施している。

研究領域「包摂と自律の人間学」では、研究プロジェクト「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（代表者：齋藤 晃）、「ケアと育みの人類学」（代表者：鈴木七美）および「中国における家族・民族・国家のディスコース」（代表者：韓 敏）の合計3件のプロジェクトが展開している。一方、研究領域「マテリアリティの人間学」では、研究プロジェクト「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」（代表者：佐々木史郎）の1件に加えて、「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」（代表者：菊澤律子）および2013年度には、「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（代表者：飯田 卓）の2件を採択して、合計3件のプロジェクトを行っている。

「包摂と自律の人間学」では、2013年10月に公開セミナー「トレドの集住政策研究の新展開」（開催場所：教皇庁立ペルーカトリカ大学（ペルー））、同年11月に国際シンポジウム「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」（開催場所：社会科学院民族学・人類学研究所（中国））、2014年2月に国際シンポジウム「Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia」（本館開催）の合計3件の国際シンポジウムなどを開催した。

「マテリアリティの人間学」では、2013年9月に国際ワークショップ「民族学資料の記録化・情報化の諸問題」（開催場所：ロシア民族学博物館など（ロシア））および「手話言語学と音声言語学に関する国際シンポジウム（SSL2）『言語の語順と文構造』」（本館開催）、2014年1月に公開フォーラム「負の文化遺産の保存と展示をめぐる」（開催場所：千里朝日阪急ビル）など合計10件の国際シンポジウムなどを開催した。

以上のように、両領域において国際シンポジウムなどによる研究成果の公開を着実に進めている。

また、機関研究プロジェクトが当初の目的に沿って効果的かつ適切に達成されたかについて評価するとともに、将来における機関研究の水準の向上とさらなる発展に資する助言を受けるため、「機関研究プロジェクト評価要項」

を2013年6月に策定した。

2013年度機関研究一覧領域

領域	プロジェクト	代表者	研究年度
1 包摂と自律の人間学 (領域代表：塚田誠之)	近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究	齋藤 晃	2011～2013
	ケアと育みの人類学	鈴木七美	2011～2013
	中国における家族・民族・国家のディスコース	韓 敏	2012～2014
2 マテリアリティの人間学 (領域代表：寺田吉孝)	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究	佐々木史郎	2012～2014
	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	菊澤律子	2013～2015
	文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ	飯田 卓	2013～2015

●機関研究の領域とプロジェクト

1 「包摂と自律の人間学」 領域代表：塚田誠之

グローバル化が進む状況において人と人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい社会の構築を展望する。現代社会においては、マイノリティの自律性を保つとともに、社会的公正をめざす思想や方策が求められている。具体的には、公共圏や市民運動、ネットワーク、トランスナショナル、無国籍・重国籍、福祉、支援などが主要な研究テーマとなる。

「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」——
代表者：齋藤 晃 2011～2013

研究目的

集住政策とは広範囲に分散する小規模な集落を計画的に造られた大きな町に統合する政策であり、16世紀以降スペイン統治下のアメリカ全土で実施された。その目的は先住民のキリスト教化を促進し、租税の徴収と賦役労働者の徴発を容易にすることだが、それに加えて、人間は都市的環境でのみその本性を発現する、という考え方が背景にある。およそ3世紀にわたって数百万の人びとを数千の町に強制移住させたこの政策は、スペインによるアメリカ支配の基礎を固めるとともに、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれている。

本研究は互いに関連するふたつの目的をもつ。

- 1) 集住政策の先住民社会への影響の解明。この点に関しては、研究者のあいだでいまだ合意ができていない。先住民の多くが新設の町から逃亡した事実をもって、政策は失敗に終わったと唱える者がいる反面、同政策は地域ごとに多様だった先住民社会を画一化し、今日の共同体構造の基礎を築いたと主張する者もいる。本研究では、さまざまな地域の事例を比較検討することで、集住政策が先住民社会に与えた影響の全貌を解明する。
- 2) ヒスパニック世界における国家と共同体の関係の解明。アメリカにおいて集住政策が実施されていたとき、スペイン本国では、中央集権国家の建設が進むとともに、中世以来の自治共同体が根強く存続していた。本研究では、集住政策をスペイン帝国版図における国家と共同体の緊張関係の一局面ととらえる。そして、スペイン本国や南米以外の植民地の事例も参照しながら、両者の関係について再考する。

実施状況

10月24日、教皇庁立ペルーカトリカ大学（リマ、ペルー）において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、「Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas」（日本語訳：トレドの集住政策研究の新展開）と題する公開セミナーを開催した。Jeremy Ravi Mumford (Brown University)、Steven A. Wernke (Vanderbilt University)、Marina Zuloaga Rada (Universidad Nacional Mayor de San Marcos) を招聘し、彼らが最近刊行した著書の学術的意義について議論し、集住政策研究の最新の動向を把握した。

10月27日から11月4日まで、教皇庁立ペルーカトリカ大学において、研究成果刊行のための準備会合を開催した。

11月7日から11月9日まで、ヴァンダービルト大学（米国、ナシュビル）において、研究成果公開のための準備会合を開催した。

成果

最終年度である今年度は、スペイン語の論文集の刊行準備に労力と時間の大部分が費やされた。すなわち、研究員各人が論文を執筆し、編者である齋藤 晃とClaudia Rosas Lauroがそれをチェックし、書き直しを求めるという作業を複数回おこなった。また、いくつかの論文に関して、翻訳や校閲、図版の作成も実施した。2月現在、論文の大半が完成し、出版社に提出するための最終原稿を整える段階にさしかかっている。出版社は教皇庁立ペルーカトリカ大学出版局を予定している。

10月に教皇庁立ペルーカトリカ大学で開催した公開セミナーでは、16世紀後半にペルー副王フランシスコ・デ・トレドがアンデス全土で実施した集住政策について、通説とは異なる新たな見解が提示された。従来、トレドの集住政策は、アンデスの制度や実践、価値のいっさいをスペインのそれで置き換えることを目的とし、実施においては画一的なモデルが現地の事情を考慮することなく一方的に押しつけられた、と考えられてきた。そしてその結果として、集住政策は先住民の抵抗にあい、失敗に終わったといわれてきた。しかし、本セミナーでは、集住政策が民族学的探求という側面を備えており、在来の制度や実践のいくつかが維持されたこと、実施に際して現地の人びとと交渉がおこなわれ、彼らの利害を考慮した柔軟な対応がはかられたこと、先住民の抵抗はたしかにあったが、それと並行して譲歩や妥協、適応や流用も試みられたことなどが指摘された。

機関研究に関連した公表実績

1) 出版

Diez, Alejandro

Comunidades campesinas en la sierra de Piura: ensayo sobre su cultura, organización e historia. En Javier Hernández-Ramírez y Enrique García Vargas (coords.) *Compartiendo el patrimonio: paisajes culturales y modelos de gestión en Andalucía y Piura*, Sevilla: Universidad de Sevilla, 2013, pp. 241-254.

Diez, Alejandro

La leyenda de la Virgen de la Asunción y la historia local de Pacaipampa (o acerca del pensamiento antropológico y la historicidad de los mitos). En José Sánchez Paredes y Marco Curatola Petrocchi (eds.) *Los rostros de la tierra encantada: religión, evangelización y sincretismo en el Nuevo Mundo*, Lima: IFEA / Fondo Editorial PUCP, 2013, pp. 165-182.

Diez, Alejandro

De la fiesta al festival: identidad, territorio y autenticidad. En Rozas Alvarez, Jesús Washington, Valencia Blanco y Delmia Socorro (eds.) *Laicidad: política, Estado y religión*, Cusco: FUNSAAC / Convenio CIUF-UNSAAC, 2013, pp. 87-130.

Moreno Jeria, Rodrigo

La cartografía jesuita en el archipiélago de Chiloé en los siglos XVII y XVIII. En Ana Castro Santamaría y Joaquín García Nistal (coords.) *La impronta humanística (ss. XV-XVIII): saberes, visiones, interpretaciones*, Palermo: Oficina di Studi Medievali, 2013, pp. 325-334.

齋藤 晃

「集住政策はアメリカをどう変えたのか——機関研究：近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」『民博通信』143：8-9, 2013.

Saito, Akira

La guerra indígena y la expansión misional: el caso de Moxos, siglos XVII-XVIII. En Claudia Rosas Lauro y Alejandro Málaga Núñez-Zeballos (eds.) *Fiestas, religiosidad y cultura en los Andes: siguiendo la ruta de Luis Millones*. Lima: Fondo Editorial del Congreso de la República del Perú, en prensa.

Takeda, Kazuhisa

Cambio y continuidad del liderazgo indígena en el cacicazgo y en la milicia de las misiones jesuíticas: análisis cualitativo de las listas de indios guaraníes, *Revista Tellus* 23: 59-79, 2012.

Vergara Ormeño, Teresa

Evangelización, hispanización y poder: Agustín Capcha, fiscal mayor del arzobispado de Lima. *Nueva Corónica* 3: 109-123, 2014.

Wilde, Guillermo

The Political Dimension of Space-Time Categories in the Jesuit Missions of Paraguay (17th and 18th Centuries). In Wietse de Boer, Aliocha Maldavsky, Giuseppe Marcocci and Ilaria Pavan (eds.) *Space and Conversion: A Global Approach (c. 1450-c. 1850)*, Brill, in press.

Wilde, Guillermo

Global Patterns and Local Adaptations: A Typology of Jesuit Books of the Guarani Missions and Their Circulation in South-America. In Antoni Ücerler and Xiaoxing Wu (eds.) *Legacies of the Book: Early Missionary Printing in Asia and the Americas*, Brill, in press.

Wilde, Guillermo

The Sounds of Indigenous Ancestors: Music, Corporality and Memory in the Jesuit Missions of Colonial South America. In Patrica Zhall (ed.) *The Oxford Handbook of Music Censorship*, New York: Oxford University Press, in press.

2) 公開シンポジウム

公開セミナー「Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas」(日本語訳:トレドの集住政策研究の新展開)、2013年10月24日、教皇庁立ペルーカトリカ大学(リマ、ペルー)、実行委員長:齋藤 晃、Claudia Rosas Lauro

「ケアと育みの人類学」

代表者:鈴木七美 2011~2013

研究目的

本研究は、グローバル化、少子高齢化が進行する現代社会において、人々の共生と連帯に資する具体的な要素とその課題、すなわち、多文化共生に向けた方針(ポリシー)を議論し続ける場や参加の道筋、多様なアクターの協働について、現地調査に基づく文化人類学研究を核とした領域横断的国際共同研究によって明示することを目的としている。

実施状況

本研究プロジェクトは、館内メンバーが企画を中心的に担当する4つの研究グループ(シンポジウムなど主企画者、国際研究協力者、および若手研究者から構成)によって進められている。

2013年度に、I・IIは成果公開・成果出版準備を行い、III・IVは成果出版・出版準備を進めた。

研究グループ	主企画者	成果公開集会	実施年月	成果出版
I ライフコースに関わる文化的資源の共有	L. L. Thang 鈴木七美	国際パネル (IUAES2013) (マンチェスター大学) [3] ①参照]	2013年8月7日	SES87 [1] ①]
	鈴木七美	発表パネル (IUAES2013) (マンチェスター大学) [3] ①]	2013年8月7日	共著 [1] ③]
	鈴木七美 L. L. Thang	公開講演会 (イイノホール) [2] ②]	2014年3月8日	『人間文化』 [1] ⑥]
	鈴木七美	国際パネル (IUAES2014) (幕張メッセ) [3] ②]	2014年5月	英語論文集
	鈴木七美 J. Warner	国際シンポジウム (国立民族学博物館)	2012年11月11日	SER [1] ②④]
	鈴木七美	学会シンポジウム招待講演 (学術総合センター) [3] ③]	2013年11月9日	学会誌 [1] ⑤]
	鈴木七美	発表国際パネル2013 Amish America (エリザベスタウン大学) [3] ④]	2013年6月6日-7日	書籍他 [1] ⑤, 1) ⑫]
	鈴木七美	国際シンポジウム「エイジング」	2012年2月25日-26日	書評 [1] ⑪]

Ⅱ 東アジアにおける社会運動の人類学	平井京之介 野林厚志 太田心平 加賀谷真梨 楊 淑媛 趙 文英	国際シンポジウム “Social Movements and the Production of Knowledge” (国立民族学博物館) [2] ①]	2014年 2月22日-23日	SES [1] ⑩]
Ⅲ グローバル化における紛争と宗教的 社会運動	丹羽典生	国際シンポジウム「グローバル化に おける紛争と宗教的社会運動」	2013年 1月26日	共編著 [1] ⑨]
	丹羽典生	発表国際シンポジウム「グローバル 化における紛争と宗教的社会運動」	2013年 1月26日	共編著 [1] ⑨]
Ⅳ 多様な文化的存在を活かす空間デザ インの思想と実践	野林厚志 平井康之	国際シンポジウム「インクルーシブ・ デザインとはなにか」	2012年 3月 3日	共著 [1] ⑦]
	野林厚志	国際ワークショップ「包摂した社会 空間の実現にむけて」	2012年 3月 4日	論集 [1] ⑧]

成果

本研究は、グローバル化、少子高齢化が進行する現代社会の課題を考えることを通して、文化的資源の共有と新たな創出に関し、どのような知見を見だし実践に結びつけていけるのかについて検討した。人生におけるウェルビーイング観と関わる人や環境への関心・配慮と働きかけとしてのケアの数々が、いかなる生活環境構想に展開するのか、それらはいかにして共有され、またどのような要素を排除する可能性があるのかについて、文化人類学研究を核とした国際共同研究によって議論を深めた。プロジェクトの最終年度である2013年度までに、主として国立民族学博物館のSenri Ethnological Studies (SES)、およびリポジトリ、日本語書籍を通して成果を国内外に迅速に発信し、さらに2014年度中に、英文書籍あるいは日本語書籍によって成果を広く一般に伝えるべく準備を進めている。

機関研究に関連した公表実績

1) 出版

① Suzuki, Nanami (ed.)

2014 *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies* (Senri Ethnological Studies 87), Osaka: National Museum of Ethnology.

② Suzuki, Nanami (ed.)

2014 *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle* (Senri Ethnological Reports 120), Osaka: National Museum of Ethnology.

③ Suzuki, Nanami

2014 The Values Transmitted by Lifelong Education in Denmark: The Conditions of Social Inclusion. N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies* (Senri Ethnological Studies 87), pp. 175-199, Osaka: National Museum of Ethnology.

④ Suzuki, Nanami

2014 Care as Self-help: Self-fashioning Conducted by Alternative Medicine in Antebellum America. N. Suzuki (ed.) *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle* (Senri Ethnological Reports 120), pp.93-118, Osaka: National Museum of Ethnology.

⑤ 鈴木七美

2014 「未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス」『日本未病システム学会雑誌』20(2): 31-35。

⑥ Suzuki, Nanami and Tilda Hui

2014 Development of a Life-care Community a “Town” Enriched with Diverse Ethnic Cultures: Focusing on the Cooperation of People Having Chinese and Japanese Cultural Backgrounds. N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies* (Senri Ethnological Studies 87), pp. 129-147, Osaka: National Museum of Ethnology.

⑦ 野林厚志・平井康之・真鍋 徹・藤 智亮・川窪伸光・三島美佐子

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社

- ⑧ 野林厚志
2014 「情報を体感する展示の方法論——国立民族学博物館の取り組み」平井康之他共著『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』pp.65-96, 東京：学芸出版社。
- ⑨ 丹羽典生・石森大知編
2013 『現代オセアニアの「紛争」——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。
- ⑩ Hirai, Kyonosuke (ed.)
2015 *Social Movements and the Production of Knowledge* (Senri Ethnological Studies) (2014年刊行予定)
- ⑪ Danely, Jason
2014 書評 “Suzuki, Nanami ed., *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*, Senri Ethnological Studies No. 80, Osaka: National Museum of Ethnology. 2013,” *Anthropos* 109 : 743-744.
- ⑫ 鈴木七美
2014 「生命をつなぐ融合」『民博通信』144 : 8-9, 国立民族学博物館。
- 2) 公開シンポジウム・講演会
- ① 国際シンポジウム (国立民族学博物館第4セミナー室 2014年2月22日～23日)
“Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia”
主企画者：平井京之介／野林厚志／太田心平／加賀谷真梨 (機関研究員)／楊淑媛 (台湾・中央研究院民族学研究所副研究員)／趙文英 (韓国・延世大学助教)
主催：国立民族学博物館
後援：日本文化人類学会
- ② 公開講演会シンポジウム (イイノホール 2014年3月8日)
「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方——かわりゆく人の生 (ライフスタイル) から考える」
主企画者：鈴木七美、レンレン・タン
主催：人間文化研究機構、国立民族学博物館
後援：文部科学省、日本文化人類学会
- 3) 学会分科会
- ① 国際パネル (IUAES2013) (マンチェスター大学 2013年8月7日)
参加者：レンレン・タン、鈴木七美他4名
“Exploring well-being in later life: crossing cultures, crossing borders,” The 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences
- ② 国際パネル (IUAES2014) (幕張メッセ 2014年5月開催予定)
参加者：鈴木七美、山田千香子他9名
“Considering ideas and practices to create “age-friendly communities,” World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences with JASCA
- ③ シンポジウム (第20回日本未病システム学会学術総会)
(学術総合センター 一橋大学一橋講堂 2013年11月9日)
鈴木七美 (招待講演) 「ウェルビーイングとケア・養生の文化」超高齢社会における未病イノベーションシンポジウム3 「人はどう生まれ どう生きるのか——時間軸の未病」
- ④ 国際パネル2013 International Conference Amish America: Plain Technology in A Cyber World
(the Young Center for Anabaptist and Pietist Studies at Elizabethtown College 2013年6月6日)
鈴木七美 “Design and Support Network during Times of Home Schooling Conducted by Amish-Mennonite People in Rural Kansas”
- 4) 電子媒体など
鈴木七美、上野千鶴子、レンレン・タン、宮本太郎
「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方」『人間文化』人間文化研究機構 (2014年6月刊行予定)

「中国における家族・民族・国家のディスコース」

代表者：韓 敏 2012～2014

研究目的

家族・民族・国家は、人類の普遍的現象である。特に中国において、家 (jia)、族 (zu)、華夷、民族、国家などの概念は、複合的社会関係を生み出す仕組みとして機能してきた。また、中国の歴史を貫き、社会構造の連続性と非連続性を作り出す重要な要素でもある。上記の概念の中には家、族、華夷のような、歴史において中国人が自ら形成したものもあれば民族、国家のような外部から導入され、制度化されたものもある。王朝体制から共和制、社会主義国家へ、農耕社会から工業化・情報化社会への移行の中、上記の2種類の概念は複数の主体によって様々な状況に応じて再構築されている。グローバル化が進む近年、これらの概念は開発、福祉、移動、観光、文化遺産化などにおいて、人びとの関係や行動パターンを規制するディスコースとして再構築される局面をむかえている。

本研究の目的は、日本、中国、韓国、アメリカの中国研究者による国際共同研究を通して、中国の国民国家の成立と社会主義政権の誕生以降の家族・民族・国家の概念と動態を検討するところにある。またグローバルな観点から、中国の家族・民族・国家のディスコースの特殊性と普遍性の議論を通して非欧米型の人類学の視点と理論を構築する作業も射程に入れる。

実施状況

今年度は予定通りに2つの企画を実施した。

1) 準備会合の実施

2013年6月29日、民博大演習室にて機関プロジェクトメンバーと国外研究者、若手のオブザーバーが集まり、代表の韓 敏が2013年度の本機関研究プロジェクトの予定、11月開催予定の国際シンポの趣旨、問題意識および構成について、説明をおこなった。その後、各メンバーが今年度において個別研究の展開の方向性を報告し、今年度の予定と国際シンポジウムについて打合せなどをおこなった。また、機関研究の海外協力メンバーであるカリフォルニア大学ロサンゼルス校人類学部の Yan Yunxiang 教授が、「現代中国社会における個人と個人化の過程 (The Individual and Individualization Process in Contemporary Chinese Society)」について報告した。

2) 国際シンポジウムの実施

2013年11月18日～19日、中国北京、中国社会科学院民族学・人類学研究所第1会議室において、国際シンポジウム「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」を、中国社会科学院民族学・人類学研究所と共催した。

成果

1) 2013年6月29日に民博で開催された機関研究の準備会合において、国内のメンバーが集まり、本年度の研究計画と問題意識の共有、ならびに研究の役割分担の明確化がおこなわれた。また、社会の個人化や公共性など普遍的な課題について、プロジェクトの国内メンバーと海外のメンバーとの意見交換をおこなうことにより、広い視野で国際的共同研究を展開することができ、本機関研究の今後の新しい展開の一助となった。

2) 2013年11月18日～19日の2日間にわたり北京で開催された本国際シンポジウムには、民博からは、5名（塚田・横山・佐々木・韓・河合）、日本の9つの大学（東北大学、国学院大学、東京理科大学、東洋大学、神戸市外国語大学、日本大学、福岡大学、愛知大学、神戸大学）からは9名の研究者、計14名が出席し、全員発表をおこなった。中国側は、中国社会科学院民族学・人類学研究所のほか、中央民族大学、清華大学、北京大学、中国人民大学、中山大学、云南财经大学、四川大学、貴州民族大学、蘭州大学、南開大学などから38名の研究者が参加し、研究発表を行った。1日目は52名、2日目は57名、両日合計109名が参加した。

両日にわたって参加者たちは、家族・民族・国家に焦点をあてた最新の研究動向とそれらに関する理論的枠組みの構築を試みながら、フィールド調査の方法、倫理、民族誌の書き方なども議論した。また、ロシア、イギリス、日本、韓国、ベトナム、ラオスとの比較を留意しながら、世界各地の人類学的調査の動向を視野に入れて、活発な議論を展開した。同時に中国を含むアジアにおける人類学の研究連携とそのネットワークを強化し、アジアおよび世界の人類学・民族学研究状況に対する本館のプレゼンスを示すことができた。

現在、中国社会科学院民族学・人類学研究所のプロジェクトリーダーは、上記の国際シンポジウムの論文集を出版するための助成金を獲得して、中国での出版準備をすすめている。

機関研究に関連した公表実績

2013 『中日人類学民族学理論創新与田野調査 国際学術研究会 論文集』(予稿集)。

2013 「中日学者聚焦 人类学民族学理論創新与田野調査」『中国社会科学報』2版 (http://sub.cssn.cn/xk/xk_rxqy/201312/t20131210_899086.shtml)

2 「マテリアリティの人間学」 領域代表：寺田吉孝

グローバル化が進む状況においてモノと人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい人間観の構築をめざす。モノと人の関係を、産業化や都市化、越境化などの脈絡で問い直し、また長期的時間軸を視野に入れて歴史的にも究明する。物神化の問題、人によるモノの収集と所有の問題、人工知能や情報技術など先端的科学技術と人の関係などが主要な研究テーマとなる。

「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」

代表者：佐々木史郎 2012～2014

研究目的

本研究プロジェクトの目的は、民族学資料(標本資料と映像音響資料から構成される)の収集、保存、修復、情報化、そして利活用までを包括する総合的研究と実践を通じて、本館の大学共同利用機関としての機能と博物館としての機能を高め、その存在感を向上させることにある。そして、この目的を達成するために、2010年度に協定を締結したロシア民族学博物館(ロシア連邦サンクトペテルブルク市)との国際共同研究を実施する。本研究はマテリアリティ研究の最も基礎的な部分である、研究対象となるモノの選定、保存、記録化、情報化、そしてその価値の社会的、文化的文脈での見出し方を見直すものである。同時に、このような作業は博物館の実際の機能に欠かせないものでもある。本研究プロジェクトは基礎研究であるとともに、実践的な研究でもある。

なぜ、このような研究が必要なのか?実はこの種類の基礎研究は不断の見直しが必要とされるものである。「民族」の概念と社会的な枠組みは常に流動しており、民族学博物館が収集すべき資料もその時代によって変化する。また、過去の民族学資料の概念や枠組みに則って収集された資料の保存や管理、情報化、利用方法も不断に見直されていなければならない。しかし、日本の博物館はそのようなことを苦手とすることが多く、ことに本館ではそれが十分に行われて来なかったことは否めない。そこで古い伝統を持ち、資料の整理、管理、情報化でも長年の蓄積を持つロシアの民族学博物館の協力を得て、改めてその見直し作業に着手するわけである。ただし、本研究は本館とロシア民族学博物館との間だけでの共同研究にとどめるつもりはない。研究会や国際シンポジウムの際に2館以外からも研究者を招聘し、欧米やアジアの研究者や博物館とも情報交換を行う。それによって機関研究「マテリアリティの人間学」に基礎研究と実践研究の両面から貢献することを目指す。

実施状況

今年度は国際ワークショップを2回、国際シンポジウムを1回開催した。

国際ワークショップ1 Documentation and Database of Ethnological Materials (民族学資料の記録化・情報化の諸問題)

日 程：2013年9月23日～9月27日

場 所：ロシア民族学博物館、ヴィトスラヴィツィ民俗木造建築博物館(ロシア)

参加人数：日本側5名、ロシア側15名

国際ワークショップ2 Computers and Documentation: Establishment and Use of Digital Data on Ethnological Materials (コンピュータとドキュメンテーション——民族学資料のデジタル化とその利用)

日 程：2014年3月3日～3月7日

場 所：国立民族学博物館、天理大学天理参考館、元興寺文化財研究所、奈良国立博物館

参加人数：日本側15名、ロシア側6名

国際シンポジウム Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: Методы сбора, учета, хранения и экспозиции (博物館コレクションの中のシベリア、極東諸民族の文化——収集、保存、展示方法の検討)

日 程：2013年10月13日～10月14日

場 所：国立民族学博物館

参加人数：日本側5名、ロシア側8名

成果

国際ワークショップ1：日ロ双方から所蔵する民族学資料の収集方針、登録方法、文書管理方法、保存修復方針、そして資料とそれに関する登録情報の著作権についての報告がなされ、相互に活発な質疑応答がなされた。ロシアでは優れた登録システムが100年以上以前からあり、それが文書として保管されている。それをいかに継承しつつ現代の登録システムに的確に活かすかが焦眉の課題である。民博側ではいかに効率よく、的確な登録システムを構築し、そこに情報を付加するのかが問題であり、課題の方向性が異なる。しかし、双方とも、民族学資料の登録と情報管理が重要であり、さらに資料だけでなく、そこに付加される情報の活用とそのため解決しなければならない著作権問題とに取り組みなくてはならないという問題意識を共有することができた。

国際ワークショップ2：日ロ双方から、登録されて作成された民族学資料に関する情報を、いかにデジタル化して管理、活用するののかについての報告と議論が行われた。ここで最も議論が集中したのが、情報の管理を集中化するのか、分散化するのかという点であった。ロシア側は文化省がロシアの主要博物館、美術館のデータを一元的に管理することを目指す国家管理デジタルカタログの作成に邁進しているのに対して、日本側はデジタル化データの作成と管理は各組織に任せ、それを横断的に検索できるシステムの開発、さらにはクラウド型の情報集積を目指すという点で方向性が逆であることが明らかになった。しかし、いずれの方向でも、それぞれ問題があり、またデジタル化データの作成とその利用に伴う諸問題に、システム構築、著作権など共通の問題を抱えていることも明らかにされた。

国際シンポジウム：本館では民族学資料の収集、展示に関しては、アフリカ、アメリカ、アジア、オセアニアの諸地域の資料を有する欧米の博物館との共同シンポジウムは数多く行われてきたが、シベリア、極東ロシアの民族学資料を有する博物館とのシンポジウムはこれまでなかった。本シンポジウムはロシア連邦に含まれるこれらの地域の民族学資料の収集と展示について、初めての国際シンポジウムである。この地域の資料の大多数はロシア国内の博物館で収蔵、展示されていることから、ロシアの博物館からの報告を主体とした。しかし、ロシアの民族学系博物館の総本山であるサンクトペテルブルクの人類学民族学博物館とロシア民族学博物館だけでなく、地方博物館（ノヴォシビルスク、イルクーツク、ウラン・ウデ）からも学芸員、研究員を招聘して、シベリア、極東地域の地元の博物館での収集と展示の現状についても報告をしてもらった。本シンポジウムでは、現地の本館のコレクションと展示を現地の博物館のものと対比させながら、現地から見れば海外にあたる本館での北アジア展示のミッションについて考えさせることになった。

機関研究に関連した公表実績

2回の国際ワークショップはプロシーディングズを作成して参加者に配布した。将来的には昨年度と来年度のワークショップでの報告内容を束ねて、Senri Ethnological Reports (SER) として正式に刊行する予定である。

国際シンポジウムの成果に関しては、原稿（すべてロシア語）がそろったので、来年度早々にSERかSenri Ethnological Studies (SES) にS. Sasaki and O. Shaglanova (eds.) で刊行することを予定している。

「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」

代表者：菊澤律子 2013～2015

研究目的

本プロジェクトは、言語と、言語を担うヒトとの関係を、手話言語と音声言語の比較を通じてとらえ直すことを目的とする。

言語は、客観的に観察可能であり記述の対象となるという点で、ヒトからは独立した存在であり、人間が用いるツールのひとつととらえることができる。人間の言語には、手話言語と音声言語というふたつの形態があり、コード化という面で共通性を持つ一方、伝達のために用いるのが音なのかビジュアル情報なのかという「モダリティ」の面で異なっている。言語学は、長く、音声言語を対象とした研究成果に依ってきており、手話言語の記述研究への関心が高まってきた当初は、その音声言語との共通性について論じられることが多かった。本プロジェクトでは、そこから一歩すすみ、モダリティの違いに起因する「違い」を論じることで、人間の言語をよりよく理解しようと試みる。

手話言語と音声言語の違いを見ることは、さまざまな面で、言語学における基本概念の見直しにつながる可能性がある。たとえば、時間軸に沿って一本の情報が流れ続けるとされる「言語の線条性」は、長く言語の基本的な特徴とされてきた。手話では、時間軸に沿う、という点では共通しているものの、同時に並行する複数の系統による表出が可能である。同時並行する情報を、手話話者はどのようにコードとして認識し、理解しているのだろうか？

モダリティの違いに焦点をあてることで、言語というツールを人間がどのように認識しつづけているのかを新たに認識し、これからヒトはどのように言語と付き合っていくのか、本研究により、単にその記述のための方法論にとどまるのではなく、言語教育や社会体制などといったより広い文脈においても考察することができるようになることが期待される。

実施状況

1) みんなく手話言語学フェスタ2013の開催（国立民族学博物館）

言語の構造における基礎的な特徴のひとつである「語順」について、手話言語と音声言語を同時に観察することで、その概念が言語学においてもつ意味について再評価することを目的とし、一連の研究結果公開集会を主催した。語順は、音声言語においては線状性を前提とした自然な概念であるが、手話言語の記述においては、そう単純ではない。各種ワークショップやシンポジウムなど、大学院生、若手研究者、一般参加者（特に手話話者）および語順研究の専門家という異なるグループを対象とした異なるアプローチを準備し、それぞれの視点から、手話言語および音声言語における「語順」という概念の見直しに取り組み、その成果を共有した。シンポジウムの講演者には身体表現と語順に関する専門家を含むことで、ひろい意味での「語順」という考え方について考察をはじめのきっかけとできた。

具体的には以下の通り。

① 国際ワークショップ1 Word Order (2013年9月27日)

「語順」をテーマに、手話言語および音声言語話者を迎えて、模擬フィールドワークを行った。

② 国際ワークショップ2 Number Systems in Sign Languages (2013年9月27日)

さまざまな手話言語の数のしくみについて、ディスカッションを行った。

③ 国際ワークショップ3 Language Description and Documentation (2013年9月28日)

手話言語と音声言語に関する言語地図の作成および手話言語の現状把握のために言語研究者としてできることについて、議論した。

④ 第2回手話言語学と音声言語学に関する国際シンポジウム (SSLL2)「言語の語順と文構造」(2013年9月29日)

語順と身体表現をテーマに、世界で活躍する研究者による音声言語と手話言語を対照させての講演を伺い、最後にパネルディスカッションを行った。

この他に関連事業として、⑤通訳者交流会（2013年9月30日）、⑥機関研究関連みんなく映画会（2013年9月29日）を主催した。

2) 国際セミナー「暮らしの中の言語学『ことばの機能障害と言語学』」の開催（東京・日本財団ホール）

2004年7月、聴覚障害者で手話話者であるOさんが交通事故で重傷を負い、利き手の変形および機能障害を負った。現在の法律では、言語に関する障害等級認定基準は音声言語のみが対象となっており、手話言語について詳細を定めたものがない。裁判所の判定では「意思疎通が可能かどうか、手話能力がどの程度失われているのかを中心に個別に判断するのが相当」とされ、Oさんの事例については「意思疎通ができており、著しい障害とまで認めることができない」との判断となった。もし、手話言語に関する障害等級認定基準が整備されていたら、Oさんの手話の障害はどのように認定されていたのだろうか？

本セミナーでは、障害者等級認定基準に取り上げられている音声言語のひとつひとつの特徴が手話言語においては何に相当するのか、言語学的に考察し、日常生活における出来事が言語学の知識とどう結びついてくるのかという視点を通じて手話言語と音声言語の本質的な類似性と違いについて考察した。

成果

ワークショップおよびシンポジウムでは「語順」をテーマに、手話言語学に関する講演を基調とし、それに対して音声言語学の専門家がコメントする形で議論を進めることで、伝達様式の異なる2つの言語を対象にしたときに何が共通して、何が異なっているのか、少しずつポイントが明らかになってきた。例えば、情報構造に関する議論において、時間軸に沿った情報発信が1本であると認識されてきた音声言語においても、超音節要素（プロソディー）による情報伝達が主要言語におけるNMM（手の動き以外の言語表現）にあたるものであり、実は同時に複数の情報が発信されていると考えるべきである、という指摘や、手話の語順に関する分析にあたって、何をもちて主語とし述語とするのか、という音声言語と共通の問題点が指摘されるなど、今後の伝達様式の異なる言語間の類型論的研究（Cross-modal Typology）に繋げうる具体的な論点を明らかにすることができた。

セミナーにおいては、言語障害という具体的な事例を言語学的に分析することで、手話言語と音声言語の対象を試みた。言語聴覚学や法律学の専門家、また海外からの参加者を交えてディスカッションを進めることで、コミュ

ニケーションに關与する要素の共通点や違い、また社会におけるその捉え方など、幅広い視点から、伝達様式の異なる言語について検討することができた。ワークショップ・シンポジウムでの成果に加えて、「ことば」を少し大きな文脈で捉えると言う方向性についても、今後、継続して行きたいと考えている。

機関研究に關連した公表実績

- 1) ワークショップ、シンポジウムについては、インターネット配信（オリジナル言語（英語、国際手話、日本手話）に加え、アメリカ手話、日本手話通訳付き）を行った。
 - 2) ワークショップ、シンポジウムおよびセミナーは、いずれも一般公開で行った。
 - 3) 紙媒体での報告書、および、ウェブ配信用映像データについては、現在編集中である。
 - ① シンポジウムについては、英語字幕を付きでウェブ掲載のため、編集中。
 - ② ①のなかから数本を選択し、日本語字幕および日本手話付きで掲載する。
 - ③ セミナーについては、すべてに日本語字幕、日本手話通訳をつけてウェブに掲載予定。
 - ④ また、シンポジウムおよびセミナーのいずれについても講演起稿データを紙媒体で出版できるよう、準備を進めている。
- ※①～③については、総研大プロジェクト経費による。

「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」

代表者：飯田 卓 2013～2015

研究目的

過去との結びつきを断とうとするモダニティの圧力が高まり、記憶が共同体のなかで無条件には存続しなくなったいま、文化遺産を伝えようとする人びとがどのような物質の基盤をよりどころに過去との結びつきを保っているかを実証的かつ理論的に示す。また、過去との結びつきを模索する人たちの動きが合流し、文化遺産を支えるコミュニティがたち現われるプロセスを論ずる。

実施状況

複数回の研究打ち合わせをおこない、その成果を国際シンポジウム、国際ワークショップ、公開フォーラムのかたちで公開した。

- 1) 国際シンポジウム「文化遺産はコミュニティをかたどるか？——アフリカの事例から」
2013年5月27日～5月28日、国立民族学博物館
- 2) 国際ワークショップ「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築の営みを考える」
2013年7月13日、国立民族学博物館
- 3) 公開フォーラム「負の文化遺産の保存と展示をめぐって」
2014年1月18日、千里朝日阪急ビル

また、機関研究の枠とは別に開催した国際ワークショップ「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」（伊藤敦規が企画、民博が主催）において議論をおこなった。ここでは、館内メンバーのうち3名（伊藤・野林・福岡）が報告をおこない、他の若干名と館外メンバー3名（宮田・俵木・小川）が討論に参加した。そして、一種の文化遺産である博物館の資料を核として、コミュニティを活性化させる方策や条件について議論した。これにより、公開フォーラム企画者が提案するあたらしい博物館運営のありかたが、多くの文化遺産が直面するのと同様な実務的問題を生む可能性があることも明らかになった。

成果

まず、年度最初の国際シンポジウム「文化遺産はコミュニティをかたどるか？」では、コミュニティと文化遺産の相互規定的発展を確認し、研究期間全体の課題を明確化した。文化遺産の表現（祭事や民芸品、写真、映画、展示など）は、その担い手を再生産するはたらきをもち、担い手はあらたな表現にたずさわる。しかしその表現のありかたは、コミュニティの構成や価値観とともにたえず変化していくものであり、担い手どうしのあいだでもしばしば論争を呼ぶ。こうしたプロセスには、グローバルな政治経済や、「伝統」擁護者もはたらきかける。文化遺産は、プロダクツというよりプロセスであるというのが、シンポジウム参加者の合意点となった。

この議論の延長を見こんで1か月後に開催した国際ワークショップ「武器をアートに」では、モザンビークの内戦後に回収された武器をもとに現代美術的な表現をおこなうという活動について議論した。議論のなかでは、プロ

プロジェクトを通じて制作された作品が、アートと社会との関係を根源から見直すことを促す力を備えていることが指摘された。この力は、活動の継続によって文化遺産として定着していく可能性があるいっぽう、平和の定着にむけた実効力はかならずしもじゅうぶんといえず、現代アートという枠を越えてより広範な担い手を集めるには至っていない。制作スキルを備えた者にくわえて、それ以外の担い手が今後どのように参与していくかが注目されることとなった。

以上の議論をふまえて、年度終盤では、コミュニティとの関係をより強く意識しながらテーマ選択をすることになった。このため、公開フォーラム「負の文化遺産の保存と展示をめぐる」では、戦争や自然災害によって多くの人びとが負の記憶を抱えているなかでそれを伝える運動がどのように展開していけるかを議論した。広島原爆ドームが残された背景としては、広島が軍都から平和記念都市に脱皮をはたす時間が経過するまで放置され、建築物としての損傷も受けなかったことがあげられる。これに対して、当事者が冷静に歴史をふり返るほどにじゅうぶん時機が熟していない東日本大震災の遺構の場合は、早急に手続きを済ませようとする行政の圧力のなかで、精神的なトラウマを抱えた被災者をじゅうぶんに配慮して記憶を継承していくべきことが確認された。

次年度以降は、文化遺産の範囲がかならずしも明瞭でない無形遺産の継承や、担い手のいない埋蔵文化遺産の継承、戦争や災害によってコミュニティが離散し文化遺産も破壊されたケースなどについて、集中的な議論をおこなう。

機関研究に関連した公表実績

国際シンポジウムと国際ワークショップの成果は、2014年度中の Senri Ethnological Studies での刊行を目標として、現在準備中である。公開フォーラムの成果は、2014年5月に開催する国際人類学民族科学連合の国際学会分科会の成果とあわせて、2015年度中に Senri Ethnological Studies にて刊行する予定である

共同研究

2013年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2013年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	計	
一般	館内	課題1	3	2	12	15
		課題2	1	1		
	客員	課題1	3		3	3
		課題2				
	公募	課題1	10	5	11	16
		課題2				
若手	課題1	4	2	4	6	
	課題2					
計		21	10	30	40	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、□印は特別客員教員（申請時）による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に	山中由里子	1	2010～2013
□ 人類学における家族研究の新たな可能性	小池 誠	1	2010～2013
日本の移民コミュニティと移民言語	庄司博史	1	2010～2013

手織機と織物の通文化的研究	吉本 忍	1	2010～2013
○ 非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ	堀内正樹	1	2010～2013
○ 日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する	川田順造	1	2010～2013
○ 海外における人類学的日本研究の総合的分析	桑山敬己	1	2010～2013
梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用	小長谷有紀	2	2011～2013
パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点	菅瀬晶子	1	2011～2014
□ 実践と感情——開発人類学の新展開	関根久雄	1	2011～2013
人の移動と身分証明の人類学	陳 天璽	1	2011～2014
NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座	信田敏宏	1	2011～2014
□ 物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）	古谷嘉章	1	2011～2014
○ ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究	関根康正	1	2011～2014
○ ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究	名和克郎	1	2011～2014
○ グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究	松川恭子	1	2011～2014
○ 現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」	道信良子	1	2011～2014
○ 音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に	劉 麟玉	2	2011～2014
● 帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界	奈倉京子	1	2011～2013
○ 災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承	橋本裕之	1	2012～2014
熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から	池谷和信	1	2012～2014
贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究	岸上伸啓	1	2012～2014
肉食行為の研究	野林厚志	1	2012～2014
触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築	廣瀬浩二郎	1	2012～2014
明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイラタ、ニヅフ資料の再検討	齋藤玲子	2	2012～2015
○ アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究——資源利用と物質文化の時空間比較	小野林太郎	1	2012～2015
○ 「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	土佐桂子	1	2012～2015
● 現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して	小川さやか	1	2012～2014
● ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から	河合洋尚	1	2012～2014
● 「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生	津田浩司	1	2012～2014
映像民族誌のナラティブの革新	川瀬 慈	1	2013～2015
聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究	杉本良男	1	2013～2016
米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	伊藤敦規	2	2013～2016
○ 表象のポリティックス——グローバル世界における先住民/少数者を焦点に	窪田幸子	1	2013～2016
○ エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	杉島敬志	1	2013～2016
○ 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界	長谷千代子	1	2013～2016

○ 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化	福岡まどか	1	2013～2016
○ 近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	吉江貴文	1	2013～2016
● 宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究	石森大知	1	2013～2015
● 再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して	浜田明範	1	2013～2015

「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で *mirabilia*、アラビア語・ペルシア語で *'ajā'ib* と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。

本共同研究は中東およびヨーロッパの文学・歴史の専門家によって構成されており、これらが協力して各時代・地域の「驚異譚」を比較し、伝播の過程、世界観の相違、文化交流のダイナミズムなどを次の3つの主要軸を中心として解明してゆく。

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性

研究代表者 山中由里子

班員 (館内) 菅瀬晶子

(館外) 池上俊一 大沼由布 小倉智史 亀谷 学 黒川正剛 小宮正安 杉田英明
鈴木英明 辻 明日香 二宮文子 林 則仁 見市雅俊 守川知子 家島彦一

研究会

2013年6月30日

「驚異を集める」事例提供

小倉智史 「ムガル宮廷における驚異なモノの収集」および質疑応答

高橋三和子「近代初期イギリスにおける珍品陳列室？メタファーとしてのキャビネット」

質疑応答

小宮正安 「愉悦の蒐集——ヴンダーカンマー論」

質疑応答

全体討議

2013年11月9日

山中由里子「統括と成果刊行に向けて」

全体討議「刊行物の構成について」

成果

2013年6月30日に開催した研究会のトピックは「驚異を集める」とし、知識としてだけでなく、「モノ」としての驚異の物質性に迫った。

まずは、小倉智史が、ムガル朝前半期の王族たちの蒐集品について発表した。資料的な制約がある中で小倉が事例として提供したのは、挿絵入りの書物や絵画といった美術品である。特に、ヨーロッパからもたらされた絵画は珍重されたという。

次に高橋三和子がイギリスにおける珍品蒐集の発展、コレクションのカタログ化、そしてメタファーとしてのキャビネット（陳列室・陳列棚）概念の発展について考察した。

最後に小宮正安が、大陸側ヨーロッパ各地の「ヴンダーカンマー」（驚異の部屋）の在り方の変遷をマニエリスム、バロック、そして科学革命の時代にかけて追った。特権階級が世界中から集めた驚異なるモノ（珍しい動物のはく

製、奇形の標本、鉱物、民族資料、遺物など）を陳列する部屋であったヴンダーカマーの多くは、ナポレオンの時代に破壊された。接収されたものは、自然物は自然史博物館に、人工物は美術館や博物館に振り分けられ、近代的な博物館コレクションのコアとなった。

2013年11月9日に行われた研究会では成果刊行に向けての議論が行われ、『〈驚異〉の比較文化史』という仮題の論文集の章立てがほぼ固まった。名古屋大学出版会から2015年度に刊行予定である。

「人類学における家族研究の新たな可能性」

本研究の目的は、人類学における家族の研究を現代的な課題に応えられるように見直すことである。生殖医療、国際養子縁組、国際結婚、Transnational family、高齢者のケア、開発・近代化に伴う家族の変容の問題など、現代世界で生起する多様な問題を取り上げ、親子関係や家族とは何かという根源的な問いを念頭におきつつ、家族研究の最前線を切り開きたい。一見バラバラに映る上記の問題群を「家族」という視点から捉えなおすことを意図している。人類学の家族・親族研究の蓄積と断絶するのではなく、シュナイダー以降の親族研究、とくにM・ストラザーン、J・カーステンなどの研究成果も視野に入れて研究を進めたい。家族という分析概念の有効性自体に疑念が呈されていることを考え、その限界も検討し、また家族・親族に代わる概念、たとえば「つながり」(relatedness)の有効性も議論し、新たな家族研究のパラダイムを構築したい。

研究代表者 小池 誠

班員 (館内) 丹羽典生 信田敏宏 森山 工 (客員)
(館外) 伊藤 真 岩本通弥 上杉富之 木曾恵子 久保田裕之 高橋絵里香 津上 誠
出口 顕 森 謙二 横田祥子

研究会

2013年7月13日

小池 誠 「今年度の研究会の方針について」

佐藤奈穂 「子と高齢者のケアを支える親族ネットワーク——カンボジア農村の事例から」

梅津綾子 「現代ナイジェリアの『里親養育』に見る親子関係——生みの親・育ての親と子の長期的共存関係」
全員討論

2014年2月15日

津上 誠 「家族的なるものとは何か——『交換』という観点からの思考実験」

小池 誠 「研究成果の公開について」

全員討論

成果

2013年度は、血縁にもとづく関係性に限定されない親子の関係を主要なテーマに掲げ、2回の研究会を開催するとともに、研究成果の公開に向けて議論した。第1回の研究会では、佐藤奈穂（特別講師）がカンボジア農村の調査にもとづいて、高齢者と子が世帯間を移動することにより、親族ネットワークのなかでケアが実践されている事例を報告した。続いて、梅津綾子（特別講師）がナイジェリアのムスリム・ハウサで広く行われている「里親養育」を、生みの親と育ての親という複数の親子関係の構築という観点から分析した。第2回の研究会では、津上誠が交換論の視点から家族を捉え直す可能性について理論的考察を試みた。続いて、研究代表者を務める小池 誠が、4年度にわたる研究会全体を振り返り、その総括をした後、『家族研究の新たな地平（仮題）』と題する論集の公開に向けて、構成案を発表し、参加者の間で意見交換を行った。

「日本の移民コミュニティと移民言語」

今日日本では移民の流入にともない多くの言語（移民言語）が用いられているが、それらの日本語との接触における変容、使用実態、さらに維持や教育に関して、全体像は明らかにされていない。本研究では、日本の移民言語の現状を総合的に研究する上で前提となる、個々の移民言語の現状把握、さらにそれらに関与する諸要因を移民コミュニティ、言語政策、教育、言語とジェンダーとのかかわりから考察する。具体的には、日本における代表的な移民言語に関し、1) 言語接触、干渉、コードミキシング・変化などの言語実態、2) 言語領域・言語機能など言語

使用、3) 言語維持、言語教育状況の把握を主たる目的とする。また以上と並行して、移民が現実に社会参加、社会
上昇においてかかえる言語問題のうち、特にジェンダー、識字、学校教育とかかわる部分に焦点をあて考察する。

研究代表者 庄司博史

班員 (館外) 大上正直 オストハイダ・テーヤ 川上郁雄 金 美善 窪田 暁 宋 実成
高橋朋子 陳 於華 中田梓音 中谷潤子 中野克彦 野元弘幸 平高史也
福永由佳 安田敏朗 山下暁美 渡戸一郎

研究会

2013年7月20日

落合知子 「公立小学校における母語教育の意義——神戸市ベトナム語教室の事例から」

山下暁美 「定住外国人の身を守る日本語環境は万全か——命綱カード(仮)の作成に向けて」

渡戸一郎 「『編入モード』から見る日系ブラジル人第二世代の位置づけ——リーマンショック後の外国人集住地
域における日系ブラジル人の変容を中心に」

全 員 研究打ち合わせ

2013年9月28日

拝野寿美子「在日ブラジル人第二世代とポルトガル語①——母語・継承語の維持・習得とその資産性に関する試
論」

各メンバーのまとめに向けての構想発表

全 員 研究打ち合わせ

2014年1月18日

全 員 「まとめに向けての構想」

拝野寿美子「在日ブラジル人における言語の再学習」

野上恵美 「在日ベトナム人の言語状況」

全 員 打ち合わせ

成果

まとめの年度であることを念頭にいままで手薄であった分野での報告をうけた。まず近年の移民のめぐる社会的
状況について、特にリーマンショック以降の経済的影響が多でありそれにとまなうニューカマー移民コミュニテ
ィの変容が少なくないなか第二世代の教育、言語問題の深刻さが指摘された。また関西において公教育の中で数年
にわたり試行された移民児童への母語教育、2011年の東北大地震以降日本語能力の十分でない外国人へやさしい日
本語により緊急情報をつたえるための試行事例などの報告があった。最後の2回の研究会は、全員による成果報告
のまとめに向けての構想の発表と討議がおこなわれた。2013年6月の日本移民学会では、本研究代表者が移民言語
についてのラウンドテーブルを企画し移民言語の資産性について問題提起をおこなった。

「手織機と織物の通文化的研究」

本共同研究は、研究代表者である吉本 忍が1987年に『国立民族学博物館研究報告』12巻2号で発表した論文「手
織機の構造・機能論的分析と分類」にもとづき、吉本をはじめとする共同研究の参加者が、これまでに蓄積してき
た世界の諸民族のもとで使用されてきた手織機と、それらの手織機によって織られてきた織物を研究対象として、
人類史の中核技術のひとつとして位置づけられる機織り技術の通文化的、かつ歴史的な展開をあきらかにすると
ともに、産業革命やIT革命と深くかかわってきた機織り技術の実態をあきらかにすることをおもな目的としている。
また、本共同研究においては、産業革命、そしてIT革命によって進展している機械化や大量生産によって、人類が
古代から培ってきた手仕事の存続が危ぶまれる今日的な状況を、機織り技術を基軸として精査し、今後のデジタル
化時代における手仕事というアナログシステムのあるべき姿を模索することも計画している。

研究代表者 吉本 忍

班員 (館内) 上羽陽子
(館外) 井関和代 板垣順平 内海涼子 大野木啓人 金谷美和 鳥丸知子 ひろいのおこ
藤井健三 柳 悦州 行松啓子

研究会

2014年3月15日

吉本 忍 「織機と織物の新発見資料」

行松啓子 「織物の組織について」

2014年3月16日

全員・総括討論「手織り機と織物研究の総括」

全員・総括討論「手織り機と織物研究の展望」

成果

本年度の共同研究では、昨年度末に本共同研究の成果として刊行した『世界の織機と織物』につづく研究成果として、共同研究員や共同研究の特別講師の執筆による「特集 機織りの現場から」を本年度4月に『季刊民族学』144号の記事（千里文化財団刊）として公表した。また、年度末の3月に開催した本共同研究の最後となる共同研究会では、織物と織機の新発見資料の紹介や織物の組織図の有効性についての討論をおこなった。さらに、3年半にわたって継続してきた共同研究を終了するにあたって、これまでの共同研究を総括するとともに、今後における織機と織物に係る通文化的研究の展望についても討議した。

「非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ」

アラブ諸国では、いわゆる「コネ」が社会を動かす基本的な手段になってきた。しかしその背後には、絶えざる交渉によって作り上げられる諸個人のあいだの、必ずしも功利的とばかりとは言えない複雑な関係が横たわっている。ともあれ組織や制度ではなく、具体的な顔をもった人間関係が社会の主役なのである。そうした実名性に担われた人間関係は、中東を起点として8世紀以来今日まで、三大陸を舞台に国家や民族、言語、宗教、地勢などの境界を超えて、切れ目のない世界規模の人間のネットワークを生み出してきた。人々の、境界に拘泥しないフレキシブルな意識構造がそれを可能にしている。そうして結びついた広大な多文化複合空間を「非境界型世界」と呼ぶことにする。本研究は、その世界で実際にどのように人間関係が営まれているのかをネットワークのハブである中東各地にさぐり、非境界的な人間関係のしくみとその成立条件を当の人々の感覚や世界観にまで踏み込んで解明することを目的とする。

研究代表者 堀内正樹

班員 (館内) 西尾哲夫

(館外) 新井和広 池田昭光 井家晴子 宇野昌樹 大川真由子 大坪玲子 奥野克己

小田淳一 荻谷康太 小杉麻李亜 齋藤 剛 錦田愛子 水野信男 米山知子

研究会

2013年10月19日

全 員 「共同研究の成果のとりまとめについて」

2013年10月20日

荻谷康太 「中世のアラブ地理学とサハラ以南アフリカ」

2014年1月25日

堀内正樹 「世界のつながり方について」

2014年1月26日

全 員 「研究成果報告書最終方針の検討」

成果

本年度は研究の総括を念頭に置いて研究会を実施した。まず研究成果については、「非境界型世界」という考え方を研究者のみならず広く一般にも知ってもらう必要があるという点で合意した。続いて荻谷康太が中世アラブ世界の知識人たちによる地理的な「境界」認識を詳述し、もし中東地域を非境界型世界とするならば、その世界はサハラ以南アフリカを外部と位置づけることによって成立していたのではないかと論じた。「非境界」が「境界」をもつかという議論は検討課題となった。その点も含めて堀内正樹は世界のつながり方としての「非境界」を考え、中国からオセアニア、アフリカ、中東、さらには欧米までも含めた地域を想定し、「差異」と「境界」の基本的な違い、

およびグローバリゼーションとはまったく別のタイプの世界のつながり方としての「非境界」を論じた。最後に全員で、研究成果を一般の書籍として出版し、「非境界型世界」の概念を世に問うことで意見の一致を見た。

「日本の『近代化』をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する」

十九世紀なかばの日本における社会や技術の西洋化＝「近代化」は、西洋の一国による植民地支配の結果としてではなく、日本人が主体的かつ選択的に、軍事技術も含め、ある事柄について最も適切と思われた西洋の国からエリートを高給で招き、あるいはその西洋の国へ日本のエリートを派遣して、「西洋全体」から、ある意味では非整合的に学びとった結果である。そして当時同じ立場に置かれていたアジア諸社会と協調して外圧に抗するのではなく、近隣アジアを軍事侵略する富国強兵政策によって大国化を計り、その帰結として、世界情勢への適切な対応を欠き、独伊の独裁政権と同盟しつつ、自国中心の「大東亜共栄圏」を構想する破綻への道を進んだ。このような日本の「近代化」の性格を、現在も日本がむずかしい対応を迫られ続けているアジア・アフリカ諸社会がたどった「近代化」の過程と広汎な視野で対比しつつ、根底的に再検討することが、この共同研究の目的である。

研究代表者 川田順造

班員 (館内) 小長谷有紀 佐々木史郎 田村克己
(館外) 伊藤亜人 白杵 陽 勝俣 誠 金子正徳 栗本英世 桑山敬己 清水 展
濱下武志 古田元夫 三尾裕子 水島 司 宮崎恒二 吉澤誠一郎

研究会

2014年2月11日

清水 展 「日比比較の極私的近代化論——映像作家キッドラット・タヒミックと私自身を素材にして」

全 員 「コメントおよび討論」

栗本英世 「早すぎる崩壊——新生南スーダンにみる国家建設と国民建設の陥穽」

全 員 「コメントおよび討論」

2014年3月1日

勝俣 誠 「現代アフリカにおける国家のイミ——政治経済学からの提起」

全 員 「コメントおよび討論」

宮崎恒二 「教育制度の導入とその変容——日本とインドネシアの比較試論」

全 員 「コメントおよび討論」

田村克己 「ヤンゴンとネーピードーの間——ビルマ化とミャンマー化」

全 員 「コメントおよび討論」

成果

2月11日の研究会では、フィリピンの一映像作家との交流を軸にした清水 展の日比近代化比較論が、アジア国家近代化論にとって刺激的で、本研究計画の趣旨に直結する数々の問題提起がなされた。栗本英世は、南スーダン問題に人類学者として直接関与してきたが、新生南スーダンの危機の現場から帰国直後の生々しい報告は、3月1日の研究会における勝俣 誠の、西アフリカを中心とする広い視野から国家の意味を問う議論と呼応して、19世紀の列強によるアフリカ分割の後遺症としての「国家」「近代」のあり方の未来をめぐって、非・楽観的な、日本の近代化にとっても鏡となる問題を提起した。

3月1日の研究会では、このほか、教育制度における「近代化」のインドネシアと日本の比較(宮崎恒二)、「国家」と独裁権力、軍事政権、「民主主義」のあり方をめぐるユニークな事例であるミャンマーの、多年の体験に基づく田村克己の報告が、活発な討論を触発した。

「海外における人類学的日本研究の総合的分析」

本共同研究の最大の目的は、海外における人類学的日本研究の実態を把握し、異文化としての日本の表象にまつわる問題を検討することにある。地域的には研究蓄積のもっとも多い英語圏を中心とする。そのため、メンバーの半数以上は英米の大学で日本を研究対象に学位を取得した者であるが、日本を自文化として研究してきた日本民俗学の視点を活用すると同時に、日本が位置する東アジアにおける日本研究との比較も視野に入れる。以下は本共同

研究会の具体的目標である。1) 綿密な文献リストおよび文献解題の作成：徹底的な文献調査を行って研究会の基礎資料とする。2) 知的系譜の同定：主要な著作の理論的・民族誌的・政治的背景などを検討して、かの地における日本観の流れを明らかにする。3) 文化研究全般の再検討：自文化が異文化として外部者に描かれたときの問題を通じて、文化研究の在り方そのものを再検討する。4) 対話の場の形成：描かれた者が描いた者といかに対話して、双方に満足のいく文化像を提示するかを考える。

研究代表者 桑山敬己

班員 (館内) 太田心平 陳 天璽 (客員)
 (館外) 岩崎まさみ 太田好信 岡田浩樹 加藤恵津子 川橋範子 Roberson, James E.
 菅 豊 住原則也 泉水英計 竹沢泰子 中西裕二 中牧弘允 沼崎一郎

研究会

2013年 7月 6日

太田心平 「韓国における人類学的日本研究の動向」
 全体会議 「最終年度の活動および出版計画について」

2013年 7月 7日

中牧弘允 「谷口シンポ「文明学」の日本研究 その2」
 全体討議 「英語圏と東アジア圏における学問文化の比較」

2014年 3月 2日

全体会議 「研究成果の出版に向けて」

成果

最終年度の2013年度は、予算の都合で2回の研究会開催にとどまった。第1回目の研究会で、太田心平はソウル大学での留学体験を踏まえつつ、複数の韓国の大学における日本関係の授業のシラバスを分析して、誰のどの著作がどのように取り上げられているかを明らかにした。中牧弘允は、かつて初代館長梅棹忠夫の肝いりで行われた谷口シンポジウムにおいて、日本のどの側面が取り上げられたかを論じた。第2回目の研究会では、本共同研究の成果公開のための討議が行われ、単行本として刊行することで合意をみた。タイトルは『日本はどのように語られたか——海外の文化人類学的日本研究』（仮題）を予定している。

「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」

本館の創設に尽力し、初代館長をつとめた梅棹忠夫ののこした資料は「梅棹アーカイブズ」とよばれている。それらのうちすでに登録整備されているのは写真資料およそ3万5千点にすぎない。その他の資料については2011年度よりデジタル化とともに登録作業がおこなわれることになっている。本研究は、そうした資料整備によっていかに学術的な活用が展開されるかを具体的にしめす先例となるように、アーカイブズ資料の学術的な利用を目的とする。

梅棹忠夫ののこした資料のうち、もっとも多大なまとまりは1944年から1946年にかけて中国内モンゴル自治区などで調査研究がおこなわれたときの資料である。本研究は、それらの梅棹忠夫モンゴル研究資料に関するデジタル・データ化作業を活用して、それらの記載内容について、学術的に整理し、分析するものである。

分析にあたっては、国際学術交流協定にもとづき、中国関係諸機関とともに、別途、国際的な共同研究を実施し、その成果を公開して、地元にも還元する。

研究代表者 小長谷有紀

(館外) 大野 旭 (楊 海英) 呉人 恵 財吉拉胡 那沁 縄田浩志 堀田あゆみ

研究会

2013年 5月 18日

エリデニ 「梅棹アーカイブズの利用とリモートセンシングに基づくモンゴル高原における土地利用変遷」
 ナチン 「モンゴルの遊牧における季節移動と日帰り放牧の事例調査報告」
 討論

2013年11月17日

- 小長谷有紀「2013年夏および秋の現地調査報告」
ナチン 「国際民族学人類学連合大会における研究発表の報告」
上村 明 「フィールドノート22におけるモンゴル語の表記について」
辛島善博 「フィールドノート22における世帯調査の整理について」
富田敬大 「フィールドノート47・48における牧畜語彙に関する研究構想について」
風戸真理 「フィールドノート47・48における畜糞への注目について」
尾崎孝宏 「フィールドノート48における農牧複合に関する研究構想について」
討 論

成果

フィールドノートの整理をした結果、もっとも番号の大きな47番と48番が、事前の研究構想であることが判明した。その内容の多くは人文現象であるため、通説とは異なって、梅棹忠夫はモンゴル調査より以前から人文的関心の強いことが了解された。この全文を共同研究会メンバーの縄田氏がデジタル入力して共同利用に供した。情報共有の結果、若手モンゴル研究者たちがそれぞれ、梅棹忠夫が実際に研究論文にまとめることのなかった事項について、今後の研究の可能性を検討した。

またフィールドノート22番は梅棹自身によるインデックスノートであり、その整理を生かすことによって、ローマ字カードの資料集としての刊行を準備した。ローマ字カードは、梅棹自身がフィールドノートを項目ごとにカードに転記したものであり、約5000枚ある。このスキニングデータの公開は一次資料として意義深いのが、さらにテキストとして整備され、刊行されることにより、学術的利用は飛躍的に促進されるであろう。テキストの整備にあたっては、国際共同研究の協定にもとづき、内モンゴル大学の協力を得て、現地調査を遂行し、地名、人名、事物名などを確定した。

「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」

本研究会の目的は、パレスチナ・ナショナリズムとシオニズム、アラブ・ナショナリズムの比較研究を、人類学的、歴史学的、政治学的、地理学的、社会学的視点から多角的におこなうことにある。

パレスチナ・ナショナリズムの起源は1834年、オスマン帝国治下のパレスチナの主要都市で起こった民衆蜂起にさかのぼるといわれている (Kimmering and Midgal 1995)。しかしながら、これについては批判も多く、列強によるシリア行政州の分割と植民地化が契機であるとする反論がなされてきた。なかでも、シオニストとの対峙によってパレスチナ人アイデンティティが形成されたとする、ハーリディの説 (Khalidi 1997) が有名である。いずれにせよ、同じくオスマン帝国治下にあった周辺アラブ地域におけるアラブ・ナショナリズム、およびロシア・東欧地域からのシオニストによる入植活動に触発されて、パレスチナ・ナショナリズムが発生したことについて、疑問を差し挟む余地はないであろう。本共同研究会は、この三者を扱う研究者をメンバーに迎え、互いに情報を提供しあうことで、三者の相関関係を解明してゆくことを目的とする。

研究代表者 菅瀬晶子

班員 (館外) 赤尾光春 池田有日子 白杵 陽 奥山真知 蒲生裕恵 田浪亜央江 田村幸恵
奈良本英佑 早尾貴紀 藤田 進 細田和江 森 まり子 山本 薫 横田貴之

研究会

2013年4月21日

1) パレスチナ人アイデンティティの表象について

菅瀬晶子 「Basem L. Ra'ad, "Hidden Histories: Palestine and the Eastern Mediterranean"」

田浪亜央江「Nadia Abu El-Haj, "Facts on the Ground: Archaeological Practice and Territorial Self-Fashioning in Israeli Society"」

2) 委任統治期におけるパレスチナ・ナショナリズムとシオニズムのかかわりについて

田村幸恵・池田有日子 「Zeina B. Ghandour, "A Discourse on Domination in Mandate Palestine: Imperialism, Property and Insurgency"」

2013年7月29日

赤尾光春 「近代ヨーロッパ小説における『ユダヤ人国家』像の変遷 1884-1924」

藤田 進 「第二次世界大戦直後の英国中東植民地支配体制崩壊局面の考察」

国際シンポジウムに向けての話し合い

次回の日程調整、題目選定など

2014年2月9日

武田祥英 「1917年バルフォア宣言以前の英国における対ユダヤ教徒政策——自由党政権と英国ユダヤ教徒の関係の変遷とシオニズム台頭の背景に関して」

菅瀬晶子 「キリスト教徒アラブ・ナショナリスト研究に向けて」

国際シンポジウム開催に向けての話し合い

成果

最終年度である2014年度に国際シンポジウムを開催する準備として、本年度は先行研究の洗い直しと、英国委任統治時代とその前後の英国のパレスチナおよびユダヤ政策研究、ユダヤ・アイデンティティ研究の深化をめざした。本共同研究で各自がおこなってきた研究発表の内容をもとに、シンポジウムの方向性とトピックを選定した。

「実践と感情——開発人類学の新展開」

本研究は、開発や開発援助の文脈における人々の「感情」に注目した実践的人类学の可能性を検討することを目的とする。ここでは、ODA、NGOの海外における実践や国内での広報、啓発活動も含むさまざまな開発事例に関係する人々の行為や思考、語りに現れる感情を、感情語（例えば「怒り」「喜び」「悲しみ」「満足」「やる気」など）によって示される一般的・抽象的レベルだけでなく、その元にある個々の生きられた感情経験そのものにおいて捉える。開発実践のプロセスを民族的に検討すると、実践の動向が、関係する人々の感情（emotion, sentiment）や気持ち（feeling）の変化や転化に大きく左右されることがわかる。本研究では、開発の文脈の中から浮かび上がるそのような変化し転化する生きられた感情経験をリアリティの構成要素として回収した上で、それらを実践活動に結びつける方法について具体的な開発事例を通じて検討する。

研究代表者 関根久雄（客員）

班員 （館内）岸上伸啓 鈴木 紀 信田敏宏
 （館外）青山和佳 井上 真 小國和子 亀井伸孝 佐藤 峰 白川千尋 鷹木恵子
 玉置泰明 内藤順子 縄田浩志 西 真如 藤掛洋子 真崎克彦

研究会

2013年5月19日

鷹木恵子 「チュニジアのオアシス開発政策と革命後の農民暴動——農民の感情と論理についての一考察」

質疑応答

真崎克彦 「ブータンの民主主義研究の実践と感情」

質疑応答

2013年9月29日

井上 真 「居心地の悪さへの対処——学術研究と国際協力の狭間で」

質疑応答

亀井伸孝 「フィールドワークと高揚感——「盛り上がり」をいかに演出・制御・活用するか」

質疑応答

2013年11月3日

佐藤 峰 「開発業界のフィールドワーク——ODA女性人材の『やる気』を左右するもの」

質疑応答

片上敏喜 「観光ツアー開発過程における実践と感情の変化——アクションリサーチによる食文化観光ツアーから」

質疑応答

成果

本年度は研究会を3回実施し、それ以外にも国立民族学博物館の資金に拠らない会を東京で1回開催した。主な報告内容は以下の通りである。

鷹木恵子（桜美林大学）は「チュニジアのオアシス開発政策と革命後の農民暴動——農民の感情と論理についての一考察」において、1980年代後半から1990年代半ばにかけてチュニジアで構造調整の一環として進められた国営農地の民営化過程でオアシス地帯の貧農たちが抱いた感情とその背後にある彼らの論理に注目し、2011年のチュニジア革命後に発生した農民暴動の原因について検討した。

真崎克彦（甲南大学）は「ブータンの民主主義研究の実践と感情」において、国民総幸福（GNH）指向の民主主義の追求を国是とするブータンが実際には開発を通じて資本主義的民主主義の確立を目指す方向に傾きつつあることを指摘する。市場化というグローバルな流れと切り離せない人々の心情がある一方で、真崎は、ブータン人の基本的な「感情」には民主権と国王主権が共存しており、それは同時にブータン人の理性でもあると説いた。

井上 真（東京大学）の「居心地の悪さへの対処——学術研究と国際協力の狭間で」は、インドネシア・カリマンタンの焼畑民村落における調査および国際協力活動を通じて彼自身が抱えてきた、「誰のための調査か、国際協力か」という倫理的問題を起点とする葛藤に関わる報告である。

感情を介したフィールドワーク論を展開する亀井伸孝（愛知県立大学）は、「フィールドワークと高揚感——『盛り上がり』をいかに演出・制御・活用するか」において、カメルーンとコートジボワールにおける調査を通じて経験した現地の人々の「盛り上がり」を例示した。感情は人々の行動や情報の流れを左右するものであり、ある場における感情を理解しそれに対処することで、事態を特定の方向へ向かわせることも可能であることを例示した。

佐藤 峰（国際協力機構）の「開発援助業界のフィールドワーク——ODA女性人材の『やる気』を左右するもの」では、日本の開発援助業界で非正規に雇用される女性人材に注目し、彼女たちの「やる気」、すなわち、物事を積極的に進めようとする気持ちの持続性について検討した。

「人の移動と身分証明の人類学」

本研究は、人の移動・越境・滞在と身分証明をめぐる法的・行政的の制度、またそれらを利用する実践のあり方について明晰化することを狙いとする。具体的には、生から死に至る人生のなかで、人の移動と在留管理に基づく身分証明が、移動する人々の人生と次世代にどのような影響を与えるのかという視点に立ち、旅券、渡航証、身分証といった身分証明は、個人のアイデンティフィケーションや社会のトランスナショナルリズムにどのように関わっているのかを解明していきたい。移民二世・三世の時代を迎え、出産・育児から就学、就労、結婚・離婚、居住、家庭生活、街づくり参画、老後の生活、葬儀・墓や弔いに至るライフステージは、次世代へと繋がっている。そうした時間の流れの中で、身分証明が、越境の時代、ボーダーレスな経済社会にどのような影響を与えているのかは、研究価値の非常に高いテーマである。そのテーマを直視し、グローバルなネットワークが進行する過程で、国籍や在留資格など身分証明が果たしている役割と管理される側の一人ひとりの人権を人類学・社会学・法律学の研究者が共同で行う学際的研究は、今後の移民行政にとっても大きな財産となるだろう。

よって本研究は、国家による管理とその超克をめぐる、越境における法的・行政的な制度や身分証明が、生身の人間の人権を守っていくために果たす役割を検証し、さらにはそのあり方を提言することを目的とする。

研究代表者 陳 天璽（客員）

班員 （館内）庄司博史 南 真木人

（館外）明石純一	李 仁子	石井香世子	大西広之	郭 潔蓉	川村千鶴子	窪田順平
小林真生	小森宏美	近藤 敦	佐々木てる	館田晶子	中牧弘允	錦田愛子
西脇靖洋	付 月	松田陸彦	三谷純子	南 誠	宮内紀子	柳下宙子
柳井健一	山上博信	山田美和	林 泉忠			

研究会

2013年6月14日

三谷純子 「亡命チベット人の国境を越える移動とパスポート及び国籍取得」

2013年6月15日

田中志子 「移動するホームレスの現状」

櫛引素夫 「青森県の限界集落にみる他出者の動きと内面」

記録映画 「沖縄730——道の記録」 およびディスカッション

2013年6月16日

ディスカッション・研究打ち合わせ

2013年9月27日

錦田愛子 「政治に翻弄される身分証明——パレスチナ・レバノン間の国境線と人の帰属の変更」
討論

2013年9月28日

郭 潔蓉 「外国人学校の現状——移動する子ども達の資格証明」
付 月 「無国籍の世代間連鎖——親の身分証明と子どもの国籍取得」
討論、出版打ち合わせ

2013年12月21日

研究打ち合わせ
西脇靖洋 「超国家型市民権の伝播とその限界——EU・メルコスル関係を事例に」
南 真木人 「ネパールとブータンにおける身分証明」
小森宏美 「国籍法が変わるとき——ラトヴィアを事例として」
三谷純子 「無国籍研究の動向——バンコク無国籍セミナーに参加して」
研究打ち合わせ

2014年2月9日

伊豫谷登士翁 「『多文化共生』の両義性」
林 泉忠 「東アジアの『台僑』と『港僑』」
具 知瑛 「グローバル時代における韓国人の移動と『多文化共生』」
飯笹佐代子 「豪州の『ボートピープル』問題——アジアからの視点」
戴 エイカ 「多文化共生——米国の多文化主義を通して見る日本の課題」
陳 天璽 「虹のメタファーから多文化共生を再考する——華人の移動と身分証明」
佐々木てる 「在日コリアンの身分証明と移動」
南 誠 「中国帰国者と多文化共生——アンケート調査の結果を手がかりに考える」
討論

2014年2月10日

ディスカッション・研究打ち合わせ

成果

本年度の「人の移動と身分証明の人類学」共同研究会では、メンバーの最新の研究成果を報告し合う通常の共同研究会のみならず、2度の公開シンポジウム（2013年6月に青森、2014年2月に長崎）を開催し、メンバー以外の研究者と議論を深め、移動と身分証明に関連する見識を広める機会に恵まれた。

人の移動と身分証明が、いかに相互に影響をもたらすものであるのか。そして身分証明書というものが、恣意的なものであること、さらには国家や国際情勢の変動によって法や制度が変化し人の身分証明にも影響が出ていること、一方で、身分証明やパスポートの偽造が横行していることが、個別のケースから確認された。テーマとしてはホームレス、亡命者、難民、また、人の移動にもなって深まっていく多文化化、多民族化にも議論は広がり、日本における外国人学校の問題、新しい世代の教育やアイデンティティの問題、さらには多文化共生について議論を深めることができた。

本研究会のテーマと関連し収集した移民の身分証明書を標本資料として収集し、東アジア展示場の新構築展示にともない、日本展示場の多みんぞくニホンコーナー、および、中国地域の文化展示場の華僑・華人コーナーに展示した。

「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」

グローバルな支援の輪が地球規模で広がっている今日、NGOの活動域は、人類学が伝統的に研究のフィールドとしてきた世界各地の周辺地域にまで及んでいる。人類学が対象とするフィールドの人びとは、NGOによるボランティア活動や支援活動を媒介として、血縁や地縁に基づく従来の関係性を超えて新たな関係性を構築するようになってきており、NGO活動に関わる人びとは、グローバルな社会的ネットワークの中に自らを世界とつながる存在とし

て位置づけるようになってきている。一方、人類学者はフィールドワークの傍らで、ローカル NGO や国際 NGO が様々な支援活動を行っているのを目にするようになり、時には人類学者自身も NGO の活動に深く関わり、場合によっては自らが支援のエージェントとなっている。こうした NGO と人類学が接近しつつある今日の状況を鑑みて、本研究では、NGO 活動の現場における人びとの新たな関係性とグローバル支援のメカニズムを、人類学のミクロな視点を生かしてローカルな現場から解明していくことを目的とする。また、新しい電子メディアを通じて人びとが国境を越えて直接むすびつく「草の根レベルのグローバリゼーション」が進行する中で、国家や世界秩序の変革・再編に NGO をはじめとする市民社会の諸アクターがどのような役割を果たしているのかを探究することも大きな目的となっている。

研究代表者 信田敏宏

班員 (館内) 宇田川妙子 鈴木 紀 関根久雄 (客員)
(館外) 綾部真雄 小河久志 加藤 剛 清水 展 杉田映里 内藤直樹 中川 理
子島 進 福武慎太郎 藤掛洋子 増田和也 三浦 敦 渡邊 登

研究会

2013年5月18日

今年度の研究計画

渡邊 登 「韓国における地域社会のイニシアティブ——韓国全羅北道扶安郡放射性廃棄物建設反対運動を事例として」

子島 進 「被災地におけるジャパン・イスラミック・トラストの活動」

総合討論

2013年7月21日

信田敏宏 「グローバルとローカル」

増田和也 「『まなびあい』という関わり——双方向の気づきとそれぞれの展開」

内藤直樹 「『黄昏を生きる力』——徳島沿岸部における南海トラフ地震予測の影響」

総合討論

2014年2月8日

福武慎太郎「NGO と社会運動の人類学は何をめざすのか——東ティモールの地域開発プロジェクトと福島第一原発事故広域避難者支援の現場から考える」

清水 展 「公共人類学? ～もとい応答する人類学の試み——ピナトゥボとイフガオへのコミットメントの経験から」

総合討論

成果

本年度は、合計3回の研究会を実施した。昨年度までは、研究会の議論の方向性を共有することに力点が置かれていたが、本年度は、個別発表を中心に議論を進めていった。5月には、渡邊が韓国の社会運動、子島が日本のイスラーム団体の活動をそれぞれ報告した。また、7月には、増田がインドネシアの農村を支援する日本の NGO、内藤が徳島大学の学生を中心とした支援活動を報告した。2月には、福武が東ティモールと日本の支援の現場について、清水がフィリピンの少数民族への支援活動について、いずれも人類学者の役割に焦点を当てながら報告した。本年度は、NGO 活動の現場における研究者の役割について、集中的な議論を行なった。各地域の様々な事例に検討を加えながら、メンバー各自が問題意識を再認識し、さらにそうした知見を共有することにより、最終報告へ向けた議論を進めることもできた。

「物質性の人類学 (物性・感覚性・存在論を焦点として)」

インターネットをはじめとするテクノロジーの革新による仮想現実の蔓延の結果、人文社会科学の領域においても、人間にとっての物質世界の重要性が急速に低下しているかに見える。しかし、人間は依然として、(それぞれ特定の物性をもつ生物や無生物、自然物や人工物から構成される) 物質世界のなかに存在し、その物質世界に物質たる身体感覚を介して物質的に関与する、それ自身徹頭徹尾、物質的存在でありつづけている。本研究は、人間の生活と人生の基盤をなす「物質性」(materiality) が人類学においてこれまで不当に看過されてきたとの認識に立

ち、今後の人類学が問うべき「物質性」に関する問題系を、物性・感覚性・存在論の観点からラディカルに再考察することを通じて明らかにすること、「物質性」に照準する具体的な手触りのある事例研究を、各自のフィールドワークに基づいて生みだし、今後の研究のために範を示すことを目的とする。

研究代表者 古谷嘉章（客員）

班員 （館内）関 雄二 野林厚志
（館外）秋山 聡 鏡味治也 川田順造 佐々木重洋 武井秀夫 出口 顯 松本直子
溝口孝司 箭内 匡 渡辺公三

研究会

2013年 6月15日

「液体の物質性——血とか水とか」課題文献の講読および全員によるミニ報告
全体討論

2013年 9月21日

佐々木重洋『「物質性」から再照射される仮面論』
吉田ゆか子「インドネシア・バリ島の仮面と物性」
仮面と物質性をめぐる討論

2013年 9月22日

鏡味治也 「バリ人のモノ観とヒト観」
共同研究の中間的総括のための全体討論

2013年12月 8日

全員のミニ報告および討論「火で焼くという物質的变化について」
成果公表についてのディスカッション

2014年 3月 2日

古代出雲歴史博物館展示の見学およびディスカッション
柳浦俊一「縄文時代呪術具素材に対する価値観——中国地方の資料を中心に」
島根県在資料を焦点とする物質性的人类学についての包括ディスカッション

成果

起承転結の「転」にあたる第3期（2013年度）においては、3つの方向で「物質性的人类学」ならではの問題設定と分析方法を模索した。第1に、基本的な物質および物質変化を素材として「物質性的人类学」のアプローチを試みた。具体的には、「血」をテーマとした諸論考を素材として「液体の物質性」について討論を行い、参加者全員のミニ報告を素材として「火で焼くという物質的变化」について討論を行った。第2に、「物質としての仮面」と「バリ島の芸能・宗教」という2つのテーマで連続した3報告をベースに討論し、特定のコンテキストに即した分析手法を追求した。第3に、館外（古代出雲歴史博物館）で研究会を開催し、遷宮を実施した出雲大社関係資料をはじめとする同館展示を見学し、同館所属の考古学研究者による「素材の面からみた縄文時代呪術具」についての報告にもとづいて討論を行った。以上のような、物質性にかかわる人類学的議論の多面的な展開を承けて、最終年度には、理論的な概念構築などを通じて「結」へと導く予定である。

「ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究」

今日、ネオリベラリズムの主導する世界資本主義の浸透は社会に「恒常性の喪失」をもたらしている。しかも、主流社会とアンダークラスという垂直的に分離した「管理型」社会を産出している。アンダークラスや不安定労働者層は、保障なき世界をストリートに近接して剥き出しで生きる現代の前衛と言える。主流ホーム社会の中核の人々さえも現代社会の強い遠心力に不安を募らせている。故に、縁辺のストリートを生き抜く人々のぎりぎりの実践知は、今日すべての人々に要求されている。この図式を現代の地域構造に向ければ、今日のローカリティの盛衰も広義の「ストリート現象」と言える。流動する時間を生きるグローバル・シティの強大化の下で、周辺化されるローカリティはその生き残りをかけて格闘している。この狭義から広義までの「ストリート」現象（敗北と再創造の過程）の記述分析が本研究の第1の目的となる。つまり、主流社会の設計主義が通用しない、偶発的なフローを資源

にしたストリーートの戦術的生き延び方のエスノグラフィを作成する。

研究代表者 関根康正

班員 (館内) 岸上伸啓

(館外) 朝日由実子 阿部年晴 小田 亮 姜 竣 北山 修 高坂健次 鈴木晋介
近森高明 Gill, Tom 内藤順子 西垣 有 根本 達 野村雅一 古川 彰
松本博之 丸山里美 南 博文 森田良成 和崎春日

研究会

2013年6月29日

田嶋誠一 「児童福祉施設における暴力問題の理解と対応」

飯嶋秀治 「施設と暴力——児童福祉施設で人類学者として何を体験したか」

総合討論

2013年10月27日

南 博文 「都市の精神分析——ニューヨークと広島における抵抗と抑圧」

北山 修 「見るなの禁止——由来とその現在」

総合討論

成果

イライジャ・アンダーソンが言うように、ストリートと暴力は極めて親和的である。したがって、現代社会の暴力の所在を一度真正面から取り上げたかった。現代日本社会では文字通りのストリートでさえ暴力が追放され抑圧されている。そのことは暴力の消滅を意味しない。現代社会ではストリートが見えにくい形でホームに入り込んでいる。それはすなわち暴力空間がホームを侵食しているということである。児童福祉施設というホームに入り込んだ、外部の者には見えにくい暴力について、田嶋と飯嶋は徹底した心理学的・人類学的フィールドワークを敢行し、その成果を発表した。南は精神分析学の立場から自身のニューヨークでの都市ストリート空間の遊歩経験を中心にストリートの深みにホーム性を見出す。北山は、精神分析の本質に通常理解のホームからストリートへの移行が不可欠であることを明らかにする。いずれの発表からも、ホームにはストリート性がまわりついていくこと、逆にいえばストリートの中にホームを見出す必要が示唆されている。

「ネパールにおける『包摂』をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」

本研究は、かつてヒマラヤのヒンドゥー王国であり、現在連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、多種多様な中間集団の存在を前提として展開される種々の政治的な主張と、そうした中間集団に属するとされる様々な人々の行う実践とが織りなす布置を、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカラン（「包摂」）を鍵概念として明らかにするものである。カースト的秩序から一元的な国民統合路線を経て多民族性、多言語性が認められた1990年以降のネパールにおいて、「先住民族」「ダリト」などグローバルに或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動と、マオイストから王党派に至るナショナルな水準での政党の主張、さらには人類学的なフィールドワークによって明らかにされる、必ずしもこうした運動や主張により回収されないローカルな水準での人々の状況、以上三者の間の関係と齟齬を多層的、多元的に検討することから、ネパール社会の歴史と現状に関する統合的理解を提出することが目的である。

研究代表者 名和克郎

班員 (館内) 南 真木人

(館外) 石井 溥 上杉妙子 鹿野勝彦 佐藤齊華 高田洋平 橋 健一 田中雅子
外川昌彦 中川加奈子 丹羽 充 幅崎麻紀子 藤倉達郎 別所裕介
Maharjan, Keshav Lall 宮本万里 森田剛光 森本 泉 安野早己 渡辺和之

研究会

2013年6月23日

高田洋平 「ネパールの都市のストリート空間と生——ストリートチルドレンの『包摂』をめぐる」

宮本万里 「現代ブータンにおける『デモクラシー』の諸相」

研究打合せ

2013年7月6日

安念真衣子「ネパールにおけるリテラシー実践と『包摂』」

藤倉達郎 「何に包摂されるのか?——タルー人社会活動家たちの履歴から」

研究打合せ

2013年10月19日

丹羽 充 「分裂と統合——ネパールのプロテスタントの間で相次ぐ 教会分裂と統括団体の創設」

橋 健一 「ネパール・チェパン社会に見られる存在の分割と接合」

Abhijit Dasgupta 「Affirmative Action and Identity Politics: The OBCs in Eastern India」(MINDAS 2013年度国際ワークショップに合流)

研究打合せ

2013年10月20日

南 真木人「移住労働による社会的送付——『包摂』の可能性」

研究打合せ

2014年1月11日

全 員 「日本ネパール協会旧蔵資料の検討①」

上杉妙子 「在外ネパール人協会の多重市民権法制化運動とその意義について」

マハラジャン、ケシヤブ・ラル「包摂、NeRaPa、選挙、ネラパ そして包摂」

安野早己 「先住民の地位を要求する高位カースト——ブラーマン・サマージとチェトリ・サマージの活動から」

2014年1月12日

森本 泉 「ガンダルバをめぐる社会空間の変容——『歩く』を再考する」

佐藤齊華 「女は動く、女が動く——ネパール・ヨルモにおける移動の諸相」

中川加奈子「肉の2つの意味とその組み換え——カドギによる『カースト』の再創造」

全 員 「日本ネパール協会旧蔵資料の検討②」

2014年1月13日

宮本万里 「現代ブータンにおける屠畜と放生」

成果

第3年次にあたる2013年度は、共同研究者との日程調整の結果、4回の研究会を開催した。ジャナジャーティ(「民族」)を外枠としてその変容を批判的に分析したもの(藤倉・橋)、特定の「カースト」による主張や実践を論じたもの(中川・安野)から、特定のジャナジャーティやカーストに属する人々の移動に焦点を当てたもの(森本・佐藤)、識字教育(安念)、ストリート・チルドレン(高田)、プロテスタント(丹羽)といった、民族やカーストとは異なる枠組からの議論、政党政治と選挙の一側面(マハラジャン)、さらにネパール国外にいるネパール人を論じたもの(南・上杉)まで、ネパールにおける「包摂」の多様性と動態の諸側面に迫る充実した諸発表をもとに、議論を重ねた。また、ブータンを専門とする宮本が2回発表した他、北インドの留保制度に関する Abhijit Dasgupta 教授の講演会に参加し、さらに東洋文化研究所所蔵・日本ネパール協会旧蔵書の検討を行うなど、現在のネパールの多様な状況を時間的・空間的に相対化するための議論も行った。なお、これらの成果の一部は、2014年5月に開催される国際学会 IUAES に採択された2つのパネルの中で発表されることが決定している。

「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」

本研究の目的は、グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の現状を、同地域の政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけ、人類学的な観点から明らかにすることである。インドで起こった1990年代の経済自由化を端緒として、2000年代に入り南アジアの社会変化は更に進展した。そして、儀礼、演劇、舞踊、音楽などの南アジア芸能が、多様化する情報メディアの拡大および人の移動を通じて幅広く受容・消費される状況をもたらした。それに合わせ、芸能の実践形態や実践者の社会経済的な状況に大きな変化が生じていると同時に、海外への芸能の拡散状況や南アジアへの逆輸入という現象がみられる。本研究では、芸能実践者たちが従来の社会関係を越えたネットワークに参入することで生じる、南アジア芸能の再定義と拡張について考察を行う。現代の芸能実践者たちは、様々な観客・消費者の嗜好に応えるため、従来とは異なる美意識とパフォーマンスを身につけ、市場経済原理に合

わせたマネジメントとマーケティングを行う必要に迫られている。彼らが新たな需要に応える一方で、既存の芸能形態や社会形態を維持しつつ、南アジア芸能を創発・変容させていく過程を描き出す。

研究代表者 松川恭子

班員 (館内) 杉本良男 寺田吉孝
(館外) 飯田玲子 岩谷彩子 岡田恵美 小尾 淳 古賀万由里 小西公大 竹村嘉晃
橋 健一 田森雅一 村山和之 山本達也

研究会

2013年5月18日

松川恭子 「ICAS 8 (The Eighth International Convention of Asian Scholars) 分科会発表について」

橋 健一 「ネパールにおける“民謡”をめぐる景観について」

全 員 「全体討論」

2013年5月19日

岡田恵美 「北インドの芸能を支えるハルモニウム——外来楽器の採用と楽器産業の変容にみるインドの楽器観」

2013年7月27日

松川恭子・古賀万由里・小西公大 「グローバリゼーションと南アジア芸能に関連する先行研究のレビュー——メディア、舞踊、ワールドミュージック他」

全 員 「全体討論」

2013年7月28日

杉本良男 「パチもの逆襲——〈インド〉映画の21世紀」

2013年10月19日

山本達也 「Martin Stokes にみる民族音楽学 (ポピュラー音楽) でのグローバル化に関する議論の様相」

神本秀爾 「ローカルとグローバルをつなぐ——旅するレゲエ・ミュージシャンの経験について」

全 員 「全体討論」

Abhijit Dasgupta 「Affirmative Action and Identity Politics: the OBCs in Eastern India」(MINDAS 2013年度国際ワークショップに合流)

研究打合せ

2014年1月25日

的場裕子 「日本人はインド音楽をどのように聴くのかと問うインド人にどう答えるか」

小日向英俊 「インドを奏でる人々——現代日本におけるインド音楽受容とライフストーリー」

全 員 「全体討論」

2014年1月26日

全 員 「次年度の計画についての打ち合わせ」

成果

本年度は研究会を4回開催した。研究会メンバーの報告だけでなく、特別講師を招聘し、カリブ海地域の芸能のグローバル化や日本におけるインド芸能(特に音楽)の受容の事例を検討した。南アジア芸能のグローバル化の特徴を考える上で、世界各地における文化政策の動向および芸能を対象とした助成金の状況、さらに各国の芸能教育などに留意する必要性が明らかになった。また、本研究会での報告をもとに、マカオで6月に開催されたICAS 8 (The Eighth International Convention of Asian Scholars) で分科会を組織し、研究成果を発表した。

「現代の保健・医療・福祉の現場における『子どものいのち』

子どもは、年齢、性別、環境の違いにかかわらず生きることにおける主体性を持ち、自分のいのちに関する情報を発信している。個別社会や文化にはその情報を捉えるための共通の「認識枠組み」が発達しているが、他方において、社会や文化の内部における微妙な認識の違いもみとめられる。現代社会ではその認識のギャップが大きくなり、子どもの医療や福祉の政策に影響を与えている。そこで、本研究では、人類学、社会学、医学および保健医療分野の研究者による学際共同研究を行い、現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」のありようとその捉え方について考察する。研究の成果は、人類学と保健・医療・福祉、それぞれに意義のある問題の取組み

に応用する。

研究代表者 道信良子

班員 (館内) 信田敏宏

(館外) 神谷 元 亀井伸孝 木村晶子 白川千尋 波平恵美子 西方浩一 幅崎麻紀子
樋室伸顕 藤田美樹 前田浩利 山崎浩司

研究会

2013年6月22日

全 員 「平成25年度の研究計画と研究成果公開計画」「公開研究会の打ち合わせ」
道信良子 趣旨説明「障害・病気をもつ子どもの医療——在宅医療とリハビリテーション」
前田浩利 「医療と福祉の協働で支える小児在宅医療」
樋室伸顕 「障害児とその家族のためのリハビリテーション」
波平恵美子「コメント」
全 員 「全体討論」

2013年9月15日

道信良子 「平成25年度第1回研究会経過報告」「中間総括」
全 員 「次年度研究計画の検討」
全 員 「成果公表についての議論」
伊東祐子 「福島の新生児看護の現場から」
山崎浩司 「子どものいのちを描いた大衆メディア——その死生学的分析といのち教育における活用の可能性」
全 員 「全体討論」

2013年12月21日

道信良子 「平成25年度第2回研究会経過報告」「平成25年度研究計画及び研究成果の公表について」
全 員 「本の執筆に向けて」「平成26年度公開研究会について」
田辺けい子「子どものいのちを育む環境を考える——〈生殖から離れている身体〉という視点から」
白川千尋 「マラリア対策の『問題』とマラリアのリアリティ」
全 員 「全体討論」

2014年3月9日

道信良子 「今年度のまとめと来年度の研究計画（出版計画、公開研究会）について」
西方浩一 「食べる機能に困難をきたした子どもとその作業療法支援——子どもの生きる力を育む関わり」
亀井伸孝 「障害をもつ子どもの生態人類学的理解——身体と資源利用に注目して」
全 員 「全体討論」

成果

研究会を4回開催し、次の7つの研究課題について議論した。1) こどもの理学療法および作業療法におけるこどものいのちのとらえ方とその具体的な方法。2) 新生児集中治療における児のいのちのとらえ方とケアの方法。福島県の周産期医療センターから特別講師を招聘し議論した。3) マラリアをめぐる国際医療協力のチャレンジとおもしろさについて、マラリアは地域の人びとが共有する物語のなかに存在しないという観点からの考察。4) 大衆メディアで表象される「死」をめぐる言説の死生学的分析とそのいのち教育への活用。5) アフリカの狩猟採集民社会におけるこどもの毎日の生活や遊び、障がいをもつ子どもたちの資源利用。6) 生殖を否定する日本の若年女性の身体観。7) こどもの在宅医療の課題および福祉と医療の連携による在宅医療の仕組み作り。これらの研究発表により、こどものいのちを文化と身体性の2つの側面から相対化して考察することの大切さが明らかになった。

「音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」

本研究は、1945年以前に日本のレコード会社によって台湾と上海で発売されたレコードを取り上げ、両地域におけるレコード産業および音楽の発展の特徴と関連を明らかにすることを目的としている。本研究では、数多く存在する東アジアのレコード音楽から、「声」・「歌」を含む音楽ジャンルのレコードに焦点を当てる。東アジアの在来音楽には語り物が多い上、初期レコードは、演説、映画説明、戯劇など、「音楽」に限定されない多様な音を収録し

た。そこで、ここでは「声」という概念を用いた。具体的には、次の2点に重点をおいて研究を進める。

1) 台湾、上海、日本で発売されたレコードを比較し、各地域の音楽嗜好の傾向、共通点、独自性を探求し、更にそれらの関連性を見いだす。

2) レコード産業の発達と各地域の社会、文化、音楽の間の相互的影響について研究する。

台湾と上海の音楽文化には共通点があり、録音されたレパートリーには重なり合う部分も見られる。一方で、日本の企業が初期からレコード産業を支配した台湾と、欧米のレーベルが産業の基礎を築き、後に日本企業が進出した上海では、レコード制作のあり方は大きく異なっていた。両地域のレコードの比較は、東アジア音楽の近代史においてメディアの発展、日本の支配、そして地域間の相互交流がどのような影響を与えていたかを明らかにするだろう。

研究代表者 劉 麟玉

班員 (館内) 野林厚志 福岡正太
(館外) 今田健太郎 大畑(長嶺)亮子 尾高暁子 垣内幸夫 黄 英哲 西村正男
星名宏修 細川周平 三澤真美恵 四方田(垂水)千恵

研究会

2013年6月16日

西村正男 「トルストイ『復活』と中国語映画」

劉 麟玉 「台湾コロムビア会社の販売過程——注文書の分析を通して」

総合討論

2013年8月30日

齊藤 徹 「日本コロムビア百年の歩みとアーカイブの成立過程」

武沢 茂・冬木真吾・渡辺義之「アーカイビング作業の重要性・方法及び実践例」

工藤哲郎 「創設期の日本蓄音機商会について」

小林正義・中尾 博・鈴木敬弘「コロムビア・アーカイブの資料整理と現状」

質疑応答

2013年11月23日

西村正男 「書評 貴志俊彦著『東アジア流行歌アワー——越境する音 交錯する音楽人』」

貴志俊彦 「東アジアの地域と文化の相関関係の構築に向けて——音楽史の視点から」

岡田 孝 「コロムビア童謡歌手の時代を辿る——SPレコードの吹込みからLPレコードへ」

総合討論

2014年3月2日

尾高暁子 「中華民国期上海におけるアマチュア組織の音楽実践」

垣内幸夫 「パンソリの初期録音レコードについて」

質疑応答

出版を含めた成果公開と来年度の研究会計画の検討

2014年3月3日

八日市屋典之「蓄音器の歴史と種類」

齊藤 徹 「日本コロムビアの技術史概要」

王 櫻芬 「Sounding Taiwanese: A Preliminary Study on the Production Strategy of Taiwanese Records by the Nippon Phonograph Company」

質疑応答

成果

本年度の研究会では、共同研究員による研究報告が5件と特別講師による研究報告が9件行われた。それらの内容は以下のように括ることができる。

まず、昨年度に引き続き、1945年以前の東アジアの伝統音楽レコードの吹込み内容を通してその時代の音楽事情とメディアの関係についての歴史的研究である。西村はトルストイの小説「復活」が映画化された日本映画「カチューシャの唄」と中国映画「蕩婦心」において、主題歌を含める比較研究を行った。垣内は「朝鮮」時代に吹込まれたパンソリの名人の師承を辿った。尾高は中国上海の音楽愛好家の活動に焦点を当てた。

次に、日本蓄音器商会（現・日本コロムビア株式会社）の歴史的地位の重要性を鑑み、日本蓄音器商会におけるレコード製作の技術、蓄音器の発展との関わり、レコード発売のプロセスに着目した。劉は社内文書である発売通知書に基づき、台湾の在来音楽や流行歌などのレコードの発売をめぐる日本蓄音器商会と子会社の台湾コロムビア販売会社との応酬を調べた。また、特別講師らの報告内容もそれぞれ日本蓄音器商会もしくは台湾コロムビア販売会社の録音の技術や歴史に関連したものであった。

「帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」

国際的な移動が一般化するにつれ、世界各地の帰還移民の研究も近年盛んになりつつある。だが、先行研究では、「帰還」を移民が出身国を出てそこに戻るだけの現象として捉えた結果、帰還移民に含まれる「移住先に数世代滞在した後に本国に戻った」移民の形態が等閑視されてきた。そのため、「帰還」という経験の多様性や「故郷」という概念が内包している論点——頻繁な往復や第三国への再移住、出身地と同時に移住先も「故郷」として認識されていること——について、他分野の研究成果との対話は乏しいばかりか、人類学内でも十分に議論されているとはいえない。

こうした状況を踏まえ、本研究では帰還移民の生活世界について比較民族誌的に考察をし、まずは「帰還」や「故郷」をめぐる概念の再検討を行いたい。それにより人類学内での理論的な統合を試みることで、他分野との帰還移民研究の対話に向けてのモデルを構築できる。更には、人類学的研究では見過ごされがちであった20世紀の（脱）植民地／帝国化といった歴史性にも配慮しつつ、両概念を批判的に検討することを通して、「帰還移民」の生活世界の創造や戦略といった問題群に切り込む方法論を案出することを目的としている。

研究代表者 奈倉京子

班員 (館外) 浅川晃広 足立 綾 飯島真里子 市川 哲 大川真由子 比留間洋一 山田香織
渡会 環

研究会

2013年4月28日

アンジェロ・イシ「トランスナショナルなイベントから考える〈在日ブラジル人〉と〈在外ブラジル人〉の生活世界」

渡会 環「自己実現からみる在日ブラジル人の生活世界」

2013年11月24日

山田香織「ドイツにおける2つの時代の『帰還』現象と故郷認識」

比留間洋一「在日ベトナム難民の新しい物語——『二世』にとっての『故郷』をめぐる」

奈倉京子「中国系移民の複合的な『ホーム』——あるミャンマー帰国華僑女性のライフヒストリーを事例として」

成果

2013年度は、本研究のテーマである「帰還」、「故郷」、「生活世界」のうち、「生活世界」に重点を置き、ゲストスピーカーを含む5名が報告を行った。

第1回研究会では、在日ブラジル人・在外ブラジル人の生活世界について、渡会とイシが、個人・ローカルレベル並びに集団・トランスナショナルレベルから「自己実現」をキーワードに報告が行われた。帰還移民が何らかの自己表現・自己実現のツールを手に入れることにより、自らの生活世界を創造していくことは、新たな居場所・「故郷」を見出すことにつながるなどが議論された。

第2回研究会では、山田がドイツにおける第二次世界大戦終結直後に東欧地域から強制追放されたドイツ人（被追放民／ハイマートフェアトリーベネ）と、これ以降に東欧からドイツへ移住した「ドイツ人」（アウスズィードラー、シュペートアウスズィードラー）を対象とし、それらが生じる歴史的背景の整理を踏まえ、帰還後の彼らの生活世界を描写・考察した。引き続き比留間が、在日ベトナム難民二世のラップ歌手——「MC ナム」のエンターテインメントの調査を基に、故郷が議論された。最後に奈倉が、1969年にミャンマーから中国へ「帰還」した帰国華僑女性とその家族のライフヒストリーをもとに、ある特定の土地に所属意識を見出すことができず、土地と所属意識の結びつきから抜け落ちる人の「ホーム」について考察された。

被災体験の記録化や記憶の継承は、被災者自身による体験記の執筆や第三者による聞き取り調査などによって、これまでも数多く試みられてきた。近年では、災害発生によって予期せぬ事態に遭遇した際の判断と行動に関して、一般市民だけでなく災害の現場での対応に当たった行政官や消防士などをも対象として、言語記録として残し、そしてそれを災害状況下での教訓として共有化を図るための災害エスノグラフィも実施されている。しかしながら災害エスノグラフィでは、将来の防災や減災への貢献を目的に、災害発生直後や避難所などの非日常的な環境下での判断・行動にテーマが限定されがちである。本研究は、人びとが自然・社会環境と日々関わる中で形成される実践的、経験的な知（在来知）が、災害発生により被った影響やその再生の活動、地域社会の再建に果たす役割、さらにはそうした経験の継承に注目し、社会的・歴史的背景に照らして、解明することを目的としている。主な対象は東日本大震災における無形文化とする。

研究代表者 橋本裕之

班員 (館内) 林 勲男 日高真吾 吉田憲司
(館外) 猪瀬浩平 植田今日子 大矢邦宣 柄谷友香 川島秀一 木村周平 小谷竜介
佐治 靖 関 礼子 寺田匡宏 丹羽朋子 政岡伸洋 松前もゆる

研究会

2013年5月11日

林 勲男 「防災研究における在来知への関心」

寺田匡宏 「自然災害・戦争などに関する博物館における『復興』の表現の特徴」

2013年5月12日

吉田憲司 「記憶の継承——津波災害と文化遺産」

2013年7月20日

見市 健 「橋本裕之氏と『社会実験』としての民俗芸能復興支援——政策学からのアプローチ」

2013年7月21日

松前もゆる 「『コミュニティ』と女性の役割——岩手県宮古市重茂の1地区を例に」

柄谷友香 「被災限界からの再建に向けた『中核被災者』の役割と可能性」

全員・総合討論

2013年11月9日

宮内泰介 「高台集団移転とコミュニティのゆくえ——宮城県石巻市北上町における順応的なアクション・リサーチから」

最終年度計画と成果公開に関する協議

2013年11月10日

植田今日子 「なぜ大災害の非常事態下で祭礼は遂行されるのか——相馬野馬追いと古志の角突きから考える」

2013年12月21日

三田村敏正 「東日本大震災が昆虫類に及ぼした影響——昆虫の回復力と原発事故により崩れた人と昆虫との関係」

関 礼子 「避難と生活 (life) ——旧警戒区域における“豊かさ”の位相」

2013年12月22日

猪瀬浩平 「『放射能の人類学』にむかって——在来知の可能性／不可能性」

2014年2月9日

出版を含めた成果公開と来年度の研究会計画の検討

成果

本年度は5回の研究集会を開催し、そのうち2回を館外開催（盛岡、郡山）とした。東日本大震災被災地で調査研究に従事する社会学と農学者に特別講師として発表をお願いし、メンバーの知見を広めることができたのは今年度の大きな収穫であった。とりわけ、「コミュニティ」「絆」「つながり」など、地域社会の紐帯の断絶や回復についての言表が、住民、多分野の研究者、支援者、行政などからなされていることについて、その使用の脈絡や普及状況に留意することの重要性は共通認識として確認した。

第5回の研究集会（2014年2月9日開催）で成果公開と次年度の計画を話し合う予定であったが、関東と東北地

方が大雪のため公共交通が麻痺状態となり、メンバー3名と編集者のみの参加であった。そのため、成果出版に関する民博の諸規定と出版事情について確認したのみで、成果公開に向けての実質的な実務とスケジュールの決定は、次年度の第1回研究会での検討事項とした。

「熱帯の『狩猟採集民』に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から」

本研究は、熱帯の「狩猟採集民」を対象にして彼らの資源利用や民族間関係を環境史の視点から構築することを目的とする。申請者によると、彼らの歴史は、1) 狩猟採集民の時代、2) 狩猟民と農耕民との共生関係や農耕民化の時代、3) 前近代・近代の国家形成の時代、4) グローバル化の時代という4時代に便宜的に区分できる。本研究では、これらの時代状況をふまえて、アジア、アフリカ、南アメリカという3大陸に暮らす「狩猟採集民」の視点からみた世界史を環境史として新たに構築することを試みる。具体的な問いは、時間軸に沿って1) 狩猟採集民は、熱帯雨林や熱帯高地において自給的に暮らしていたのか、2) どういう状況下で狩猟採集民と農耕民との共生関係がみられたのか、3) 前近代の国家形成（ムガル帝国と林産物、コンゴ王国と象牙など）や植民地形成にともない狩猟民はどのように対応したのか、4) 沈香などの森林産物や象牙を求める中国経済の増大などグローバル化が進むなかで、狩猟民社会にどのような変化がみられたのか、などである。これら4つの個別の問題を解くことによって、これまでの都市文明中心の世界史ではなく狩猟採集民の視点からの世界史を、地球の環境史として構築することが研究会のねらいである。

研究代表者 池谷和信

班員 (館内) 信田敏宏

(館外) 伊澤紘生 稲村哲也 大石高典 大橋麻里子 小谷真吾 小野林太郎 加藤裕美
金沢謙太郎 小泉 都 佐藤廉也 鮫島弘光 関野吉晴 高田 明 辻 貴志
鶴見英成 中井信介 那須浩郎 服部志保 増野高司 松井 章 松浦直毅
八塚春名 山本太郎

研究会

2013年4月27日

池谷和信 「趣旨説明」

八塚春名 「生業変容をめぐる『狩猟採集民』と隣人との関係——タンザニアのサンダウエとハツツアの比較から」

大石高典 「カメルーン東南部における狩猟採集民バカと移住商業民の間の多様なインタラクション——狩猟採集民＝農耕民関係との比較」

稲村哲也 「ヒマラヤの狩猟民ラウテ——外部社会との関係およびその変容」

手塚 薫 「アイヌの生業の再検討——農耕をどのように捉えるべきか」

2013年4月28日

加藤裕美 「近くて遠い隣人——ボルネオのシハンにみる隣人との境界性について」

大橋麻里子「ペルーアマゾンの『狩猟採集民』と『農耕民』——氾濫原に棲むシピボと山に棲むアシャニカの関係から」

総合討論

2013年6月21日

池谷和信 「趣旨説明」

河合 文・小谷真吾「Mobility and Recognition of Space: The Bateq and their Use of River S'ystems」

William Balée「Historical Ecology of Amazonia」

大石高典 コメント1

Peter Mathews コメント2

総合討論

2013年7月21日

池谷和信 「趣旨説明」

中井信介・池谷和信「ムラブリ研究の現状」

池谷和信ほか「狩猟採集民研究の最近の動向——国際狩猟採集社会会議に参加して」

手塚 薫 「北方狩猟民研究の動向」

総合討論

2014年2月1日

池谷和信 「趣旨説明——狩猟採集民の人類史」

那須浩郎 「温帯および熱帯域における先史時代の遊動民の定住化」

鶴見英成 「南アメリカにおける海洋資源と内陸交易」

山本太郎 「感染症と人類——文明以前と文明以後」

2014年2月2日

池谷和信 「趣旨説明——狩猟採集民と農耕民の生業の違い」

辻 貴志 「フィリピン・パラワン島の焼畑農耕民パラワンの事例」

池谷和信 「スマトラ島の狩猟採集民クブの事例」

佐藤廉也・小谷真吾 コメント

成果

本年度は、熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究のなかで、1) 狩猟採集民と隣人との関係、2) 狩猟採集民と農耕民との生業の違い、3) 人類史構築の枠組みをめぐる研究の3点に焦点を当てて、研究会を進行することができた。1) では、アフリカ、アジア、南アメリカという3大陸の地域での比較を通して、両者の関係の多様性と地域性が議論された。この研究成果の一部は、代表者が主催して8名のメンバー（実際のパネルの報告数は20件）が報告した、英国で開催された国際狩猟採集社会会議においても公表された点が特徴である。2) では、狩猟方法や狩猟活動などでは共通性が多く違いはみられないが、動物観のレベルで比較することの重要性が指摘された。3) では、アマゾンの環境人類学に関する世界的権威であるバレー教授を招聘することから、歴史生態学の最先端の内容を学習することができた。同時に、考古学、人類学、医学の分野の報告から、人類史構築の新たな方法について議論された。以上のように、本研究会は個別の事例報告を積みあげると同時に、地域比較の枠組みを練り上げることに重点が置かれた。

『贈与論再考——『贈与』・『交換』・『分配』に関する学際的比較研究』

個人間や集団間のモノや食料などのやり取りを説明する人類学理論にモースの贈与論がある。この贈与論は後に、互酬性 (reciprocity) に着目したレヴィ=ストロースによって社会的交換論へと展開を見た。また、贈与論を批判的に検討したワイナーやゴドリエは「贈与できないモノ」の概念を提起した。これらの流れとは別にマリノフスキーはクラ交易によって当事者間に連帯が生み出され、社会が統合されるという一種の交換論をモース以前に提起していた。狩猟採集社会を研究する人類学者は、食料のやり取りを分配 (sharing) や再分配 (redistribution)、交換 (exchange) などの概念で記述し、説明しようと試みてきた。さらに上記の概念に関連する説明モデルとして、サーリンズモデルなどが存在している。

本研究の目的は、アメリカやオセアニア、アジア、アフリカなど世界各地における贈与や交換、分配の民族誌事例を学際的に比較検討することによって、贈与や交換、分配などの概念と説明モデルの内容や有効性を検証することである。また、グローバル化が進む市場経済の浸透によって、各社会の贈与・交換・分配慣行がどのように変化してきたかについても検討を加えたい。

研究代表者 岸上伸啓

班員	(館内) 小林茂樹	丹羽典生	藤本透子				
	(館外) 井上敏昭	小川さやか	小田 亮	風戸真理	佐川 徹	立川陽仁	友野典男
	中川 理	中倉智徳	仁平典宏	比嘉夏子	深田淳太郎	丸山淳子	溝口大助
	山極寿一	山口 陸	渡辺公三				

研究会

2013年7月6日

岸上伸啓 「趣旨説明」

丹羽典生 「ヴァス論再考——母方交叉イトコ婚からみた社会的秩序の誕生」

深田淳太郎「『買う』儀礼と『売らない』嫁と『強欲』な老人——パプアニューギニア、トーライ社会におけるモ

ノのやり取りをめぐる言葉と態度」

比嘉夏子 「首長制とキリスト教の繋がり——トンガ王国における贈与実践の検討」

全 員 総合討論

2013年9月29日

岸上伸啓 「趣旨説明」

佐川 徹 「東アフリカ牧畜社会における『敵』との友人関係と贈与」

小川さやか「インフォーマル経済のダイナミズム——非正規品の流通・消費にみるシェアの論理」

丸山淳子 「誰と分け合うのか——サンの食物分配にみられる変化と連続性」

総合討論

2013年10月27日

岸上伸啓 「趣旨説明」

山極寿一 「人間以外の霊長類における所有、贈与、分配、交換」

中村美知夫「チンパンジーにおける『贈与』・『交換』・『分配』」

岩田有史 「ガボン、ムカラバ＝ドウドゥ国立公園にて観察されたゴリラの『食物落とし行動』についての報告」

田島知之 「オランウータンにおける食物分配——目にみえないベギングに着目して」

全 員 「総合討論」

成果

本年度は、共同研究会を3回開催した。

第1回目は「オセアニアにおける贈与・分配・交換」をテーマとし、ポリネシアにおけるヴァス慣行（エゴと母方オジとの交換）、ニューギニア・トーライ社会におけるタブ（貝貨）の利用、トンガ王国におけるキリスト教教会への献金が紹介され、検討が加えられた。これらの地域における贈与・交換は変化をしつつあるものの、モノや財貨・貨幣が移動し続けることの重要性、人びとの人間観や社会関係との関係が指摘された。

第2回目は「アフリカにおける贈与・分配・交換」をテーマとして、東アフリカ牧畜社会ダサネッチによる「敵」への歓待と贈与、タンザニアのインフォーマル経済における非正規品の流通と消費、カラハリ・サンの定住地における分配について紹介され、検討された。これらの地域では、やり取り上の臨機応変さや曖昧さ（曖昧にしておくこと）が重要であることが指摘された。

第3回目は「霊長類の食物分配行動」をテーマとして、人類以外の霊長類の食物分配行動の総論、チンパンジーとゴリラ、オランウータンの食物分配行動が紹介され、検討された。とくに自発的な分配（利他行動）には、たかい共感能力や認知能力が必要である点が指摘された。

本年度の共同研究によって、人類社会内の贈与・分配・交換の多様性、人類とそれ以外の霊長類の食物分配行動の相違や共通性がより明確に理解された。

「肉食行為の研究」

本研究の目的は、人類の採食行動の構成要素の1つである肉食に焦点をあて、その生態学的適応と文化的位置づけとの関係、さらに今日のグローバル消費社会のなかで変質してきた人類の肉食行為の動態を明らかにし、将来の展望を与えることである。人類は進化の過程において、肉食と菜食の双方に生態学的に適応するとともに、それを文化的な行為として社会の中に位置づけてきた。食肉の分配や共食、供犠における利用、肉食の忌避や規範化は、人類学が明らかにしてきた肉食の重要な社会的機能である。食肉の生産や流通が産業化された20世紀後半から、肉食は先進国社会の中で日常化される反面、動物から食肉を得るという光景は希薄となった。こうした社会的背景のもと、欧米では「動物解放論」に代表される倫理的なアプローチを中心に、肉食の是非を含めた動物の権利をめぐる議論が盛んとなった。しかしながら、これらは功利主義と義務論が中心で、異なる社会的、文化的脈絡の中で人間と動物との関係が構築されてきたことについては必ずしも注意がはられていない。本研究では、肉食とそれに関連する行為の背景にある複雑で多様な問題群を明らかにしたうえで、これからのグローバル消費社会における肉食のありかた、さらには、人間と動物との関係のありかたに新たな視座を作り出すことをねらいとする。

研究代表者 野林厚志

班員 (館内) 池谷和信

岸上伸啓

(館外) 伊勢田哲治

五百部 裕

鶴澤和宏

内澤句子

梅崎昌裕

永ノ尾信悟

大森美香

研究会

2013年5月18日

全 員 「年度計画の見直し」

岸上伸啓 「アラスカ先住民イヌピアットの鯨肉の分配と流通について」

加藤裕美 「食べられる肉／食べられない肉——食肉概念のあいまいさと多義性」

全 員 「討論」

2013年5月19日

林 耕次 「ネズミからゾウまで——アフリカ熱帯における狩猟採集民の狩猟・調理・摂取・禁忌」

全 員 「総括討論」

2013年9月7日

宮平盛晃 「沖縄県立博物館・沖縄における供犠関係資料、シマクサラシ儀礼に関する解説」

参加者による討議

宮平盛晃 「南城市志喜屋・セーファウタキ（齊場御嶽）・ウキンジュハインジュ（受水拝水）・周辺村落のシマク
サラシ儀礼現場の実見と解説」

参加者による討議、意見交換

2013年9月8日

原田信男 「供犠における肉食行為の歴史」

宮平盛晃 「シマクサラシ儀礼と肉のもつ象徴性」

2013年12月21日

全 員 「研究計画の進捗状況の報告」

永ノ尾信悟「インド古典文献にみられる肉食に関する諸観念」

菅瀬晶子 「パレスチナ自治区およびイスラエルにおける豚肉食」

全 員 「総合討論」

2013年12月22日

大森美香 「(肉)食をめぐる自己制御の心理学」

全 員 「次年度計画の策定」

成果

昨年度の研究会を通して参加者には肉食行為の研究の意義や考えるべき点等に一定の共通理解を得られたと判断し、本年度は、第1回目を人類学のフィールドワークのデータにもとづく肉食行為とそれに関わる諸事例の分析を課題とし、第2回目は、肉食とそれに関わる諸行為が展開される空間の存在を班員で追体験することもかねて、沖縄での動物供儀の歴史と象徴性をテーマとした研究会を実施した。第3回目は肉食の忌避を歴史学、人類学、心理学の3つの分野から横断的にとりあげることを試みた。これらの3回の研究会での研究発表とそれともなう議論を通して、1)生理学的属性（腐敗しているか否か等）、2)認識学的属性（知識、獲得の可否の見直し等）、3)文化的属性（食べない習慣、禁忌等）、4)個人的属性（食べたくないという感情等）といった属性が、肉食の可否を決定していく具体的な切り口になることが考えられた。

「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」

本共同研究は、2009～2011年度に実施した科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究——視覚障害者を対象とする体験型展示の試み」を発展的に継承し、人類学的視点から「触文化」（さわらなければわからない事実、さわって知る物の特徴）について考察することを目的としている。上記科研プロジェクトの成果としてまとめられた広瀬編『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（青弓社、2012年5月）は、「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の入門書、実践事例集と位置づけることができる。この本の内容を敷衍する形でユニバーサル・ミュージアム、さらには21世紀の多文化共生社会の具体像を指し示すための理論構築を試みるのが本研究の狙いといえよう。これまでの人類学においては、視覚（映像）・聴覚（音響）などに比較して、触覚に注目する研究は少なかった。本研究では、博物館展示を活用した“手学問”理論を切り口として、「触文化」にアプローチする。

研究代表者 廣瀬浩二郎

班員 (館外) 石塚裕子 及川昭文 大石 徹 大高 幸 小山修三 五月女賢司 鈴木康二
原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 増子 正 宮本ルリ子 山本清龍

研究会

2013年7月7日

- 三間 茂・岸田春二「観光・まちづくりのユニバーサルデザイン化——宇治を事例として」
山根秀宣「大阪の水辺再生プロジェクトとユニバーサルデザイン」
美濃伸之「緑地・公園のユニバーサルデザイン——肢体不自由者の立場から」
小林俊樹「観光地箱根における教育普及活動——彫刻の森美術館での実践事例について」
篠原 聡「観光型ミュージアムと大学との連携——キュレーターの“たまご”プロジェクトの実践に関する事例研究」
石塚裕子「観光・まちづくりのユニバーサルデザイン化に向けて」(コメント1)
山本清龍「観光・まちづくりのユニバーサルデザイン化に向けて」(コメント2)

成果

今年度は、研究代表者である廣瀬が2013年8月から2014年3月まで在外研究(シカゴ)に出たため、共同研究会を1度しか開くことができなかった。昨年度以来、本共同研究では、「ユニバーサル・ミュージアム理論の他分野への応用」を主題としている。今年度の最初で最後の研究会(2013年7月7日)では「観光のユニバーサルデザイン」をテーマとして、特別講師を交え議論した。

午前中は宇治観光ボランティアガイドクラブの福祉部会から講師を招き、五感を活用した観光プランの立案、障害者(とくに視覚障害者)の受け入れ状況などについて、具体的な取り組みを紹介していただいた。午後は公園のユニバーサルデザイン、障害当事者の意見を採り入れた「まちづくり」「まちあるき」の提案、観光型ミュージアムと大学の連携によるワークショップ企画など、多彩な事例報告が続いた。今回の研究会の議論を通じて、「さわる展示」の実践的研究で培ったユニバーサル・ミュージアムの理念が、博物館のみならず、観光分野にも応用できることが明らかとなった。

今年度後半は研究会の開催はなかったが、「個々のメンバーがそれぞれのスタンスでユニバーサル・ミュージアムの具体化に向けて何らかの活動に取り組むこと」を共通課題とし、メーリングリストでの情報交換を継続した。各メンバーの試行錯誤の成果は、来年度の研究会で随時発表される予定である。

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動 ——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討」

国立民族学博物館が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたことが明らかなものは、アイヌが1,000点以上、ウイльтаで280点以上、ニヴフで70点以上ある。これらは伝統的な特徴をよく残しており、素材や製作技法といった物質文化研究を進めるうえで重要であるとともに、現在では収集できない貴重なものが多数含まれている。ただ残念なことに、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、資料データの欠けているものや誤りが少なくない。しかし、これらの資料は収集者が明らかなものが大部分で、その足跡をたどることによって、情報を再検討し、修正・追加できる可能性が十分にある。本研究では、各民族の物質文化、言語等に関する専門家が共同研究を行うことによって、資料に適正な情報を付すとともに、あわせて明治から昭和前期までの人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにする。

研究代表者 齋藤玲子

班員 (館内) 近藤雅樹 佐々木史郎
(館外) 大塚和義 小川正人 加藤 克 北原次郎太 木名瀬高嗣 小西雅徳 田村将人
丹菊逸治 津曲敏郎 手塚 薫

研究会

2013年6月22日

小西雅徳 「石田収蔵の樺太調査関係書類について」

石田収蔵の樺太調査関係資料の実見と討論

2013年6月23日

北原次郎太「保谷のチセ建設及びチセノミ（落成式）関連資料」

田村将人 「サハリン先住民族の村落の変遷」

大塚和義 「明治期におけるアイヌ風俗写真について」

研究計画等の打ち合わせ

2013年11月9日

齋藤玲子 「東京大学理学部人類学教室旧蔵資料の情報カードについて」報告と検討

2013年11月10日

宇野文男 「東京大学理学部人類学教室および日本民族学会附属民族学博物館旧蔵資料の受け入れと整理について」

研究計画等の打ち合わせ

2014年2月26日

次年度研究計画の打ち合わせ

木名瀬高嗣「『第一回北方文化研究会記事』について」

小川正人 「宮本千萬樹の足跡を追う①」

討論

成果

2013年度は3回の研究会をおこない、引き続き東京大学理学部人類学教室と日本民族学会附属民族学博物館旧蔵資料のデータの確認や、おもな収集者の活動の足跡や記録の検討などをおこなった。この2大コレクションについては、1975年に民博に移管された際、受け入れを担当した宇野文男氏にどのように資料の整理・登録が行われたかを報告いただき、旧蔵先の原簿や台帳と本館での登録情報のあり方について検討した。

また、学会附属博物館の活動の中心的存在だった宮本馨太郎が残した写真や資料カード（宮本記念財団所蔵）を複写することができた。これらの資料から、1938年に樺太で収集されたウイルトおよびニヅフの資料の詳細な情報が得られた。また、1950年に同館の野外展示として建設されたアイヌの家屋の記録写真（約280カット）を端緒に、この家屋の建築や儀式、住まいに関する習俗などの一連の調査記録がきわめて貴重な学術資料であることを改めて確認した。

「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」——

アフリカ大陸で誕生した現生人類は、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼海域に移住・拡散した。島嶼海域に進出した人類は、自然資源や加工生産物を交換するために海を渡る移動を繰り返し、その過程で広範囲に及ぶネットワークを形成してきた。アジア・オセアニアには、そうした海域ネットワークを生活基盤とする社会が各地にみられる。

本研究の目的は、この海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式ならびにその分布に関する時間と空間双方の面での比較を通じて、人類学的視点から検討することにある。このうち時間面では、5万年程度の幅の考古学的時間（ただし約4000年前の新石器時代以降に主眼をおく）と約100年程度の幅の民族誌的時間を、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアの海域を、それぞれ比較の準拠枠とする。本研究では、考古学と文化人類学を主とする分野横断的な研究メンバーが、時間・空間軸に従いながら比較検討を行うことにより、アジア・オセアニアにおける人類の海洋生態への適応過程に関する時代別・地域別のモデル構築に挑戦し、さらにこれらの成果を相互比較することで、『海域ネットワーク社会の人類史』（仮題）をまとめることを目的としている。

研究代表者 小野林太郎

班員 (館内) 飯田 卓 印東道子

(館外) 赤嶺 淳 秋道智彌 片桐千亜紀 島袋綾野 鈴木佑記 田中和彦 長津一史

橋村 修 山形真理子 山口 徹

研究会

2013年7月20日

小野林太郎「テーマの趣旨と発表者の紹介」

秋道智彌 「海のエスノ・ネットワーク論——南と北の海から」

辻 貴志 「フィリピン・パラワン島の生業活動、資源利用、民族間関係」

常設展のオセアニア展示を実見しながら人類による海の利用とネットワークについて討議

鈴木佑記 「ナマコで歩く——海民モーケンの来し方行く末」

総合討論

2013年11月10日

公開研究会への打合せと11日の考古遺跡・遺物実見に関する打ち合わせ

小野林太郎「研究会のテーマと趣旨説明」

長津一史 「東南アジアの海民サマと海産資源を巡る海域ネットワークの在り方」

飯田 卓 「あらたな漁法の習得と普及——海域ネットワーク社会の技術的基盤」

玉城 毅 「糸満漁民の社会と海域ネットワーク性」

総合討論（地元参加者の方々からのコメント・情報提供を含む）

2013年11月11日

石垣島における考古遺跡・遺物実見とその検討（案内役：島袋氏・片桐氏）

島袋綾野 「石垣島における津波関連遺跡群——津波被害が島民に与える影響の再検討」

片桐千亜紀「白保竿根田原遺跡と旧石器時代以降の八重山における海域ネットワーク」

印東道子 「ミクロネシアにおける土器流通と海域ネットワーク——サウエイ交易再考」

山極海嗣 「下田原期～無土器時代の先史八重山とオセアニアとの関連性」

総合討論

2014年1月26日

小野林太郎・長津一史「第5回研究会の趣旨とこれまでの総括」

橋村 修 「アジア・オセアニアにおけるシイラをめぐる利用と文化」

常設展のオセアニア展示を実見しての物質文化比較

小野林太郎「海域ネットワーク社会の諸相と時空間比較」

総合討論

成果

2013年度は沖縄を中心とする東アジア、東南アジア、オセアニアを枠組みとし、時間軸による比較では先史時代までを含む考古学的な時間軸と同時代を中心とする民族誌的時間軸を枠組みとし、海域ネットワーク社会を物質文化と資源利用という2つのテーマから、計3回の研究会を開催できた。このうち2013年7月20日、および2014年1月26日の研究会は国立民族学博物館にて実施し、主にメンバーによる個人発表とそれに対する全体での議論を進めた。これに対し、2013年11月10～11日に沖縄県石垣島で行った研究会は、初日を公開研究会として石垣市大濱信泉記念館の多目的ホールにて開催し、地元の研究者ら多数の参加者を交え、メンバーらによる発表と参加者からのコメントや情報提供を頂き大きな成果があった。またその内容については翌日の八重山毎日新聞朝刊にも掲載された。2日目となる11月11日の研究会はメンバーのみで実施し、石垣市内の重要遺跡・遺物の実見を踏まえた上で、メンバーによる発表と議論を進めた。これらの研究会を通し、2013年度は本研究の対象地域の中でもとくに沖縄との比較検討を発展させることができたといえよう。

『「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ』

ミャンマー（ビルマ）は1962年ネーウィンの軍事クーデター以来、半世紀の間に3つの政治体制（社会主義、軍政、大統領制）と2つの経済体制（社会主義体制における統制経済、経済制裁下の市場経済）を経験したが、一貫して物の流れや人的移動、情報などを中心に厳しい統制が課せられてきた。本研究会で扱う「統制」とは比較的可視化されやすい国家政策に留まらず、宗教、ジェンダーといった多様な領域に及ぶ不可視のイデオロギーと支配装置、さらに、隣組的な相互監視システムや言論統制などを通じて身体化された統制をも含む。他方、それぞれのコミュニティ内で、例えばミャンマーであれば、僧院を核とする宗教ネットワークや在家組織、精霊信仰の霊媒や信者たち、各少数民族や国際・国内NGOなどの組織やその参加者、その他ジェンダーや「親しい（キン）」を媒介と

する繋がりの中に、「統制」をすり抜け、オルタナティブなネットワークを作る戦略的実践が存在してきた。本研究会では、こうした実践に着目し、「統制」と公共性という2つの観点から、統制解除へと急激に移行しつつあるミャンマーを中心に、社会的再編成、コミュニティの公共性やその変容を明らかにすることを旨とする。

研究代表者 土佐桂子

班員 (館内) 田村克己

(館外) 飯國有佳子 生駒美樹 伊藤まり子 伊野憲治 岡本正明 藏本龍介 斎藤紋子
高谷紀夫 田村慶子 テッテツヌティ 松井生子

研究会

2013年4月14日

土佐桂子 「ミャンマーにおける文学と生活文化における統制と公共性」(“Control” and “Public” appeared in the Myanmar Literature and Everyday life)

ウー・トーカウ 「ミャンマーにおける文学批評家と文学批評——言論統制の観点から」(Myanmar Literary Critics and Literary Criticism in Myanmar) (英語)

田村克己 コメント

全 員 討 論

2013年6月16日

伊野憲治 「88年民主化運動下の民衆行動の諸特徴」

コメント(岡本正明)と討論

総合討論と情報交換

2013年7月21日

斎藤紋子 「バマームスリムの視点からみたミャンマー宗教対立の現状」

飯塚正人 「中東におけるムスリム同胞意識の変容と東南アジアへのまなざし」(コメントを含めて)

総合討論と情報交換

2013年10月5日

飯國有佳子 「ヘテロトピアとしての霊媒カルト——統制・統治をめぐる歴史的变化と霊媒カルトの現在」

藏本龍介 「サンガ統制の行方——国家から市民へ？」

総合討論と情報交換

2013年11月10日

高谷紀夫 「シャン文化の行方」

田村慶子 コメント、総合討論

情報交換

2014年1月26日

松井生子 「カンボジアにおける『統制』と公共性——在カンボジア・ベトナム人と地方行政の関係を中心に」

伊藤まり子 「ベトナムにおける『統制』と公共性——宗教政策の変遷とカオダイ教組織の活動に焦点をあてて」

情報交換

成果

2013年度は全部で6回の研究会を開催した。今年度はミャンマー研究に関わる研究者に主に報告してもらった。50年近い言論統制の歴史を通じた統制の在り方、民主化運動の意義を振り返りつつ、危機下のコミュニティをいかにとらえるか、また、自己規制をいかに考えるかといった視点が示された。その他宗教や民族という領域の事例を通して、政治的な「統制」にとどまらず、教義・儀礼の身体化や規律や身体の統制という問題への考察が行われた。換言すれば、権力の内在化というレベルでの自己規制、あるいは、無政府下、ないしは民主化の進むなかでの自己統治の範囲などの考察への必要性が示された。こうしたミャンマー関連の研究を踏まえ、インドネシア、シンガポール、中東、カンボジア、ベトナム研究者による報告やコメントを通じて、公と私、ハーバマスの公共性(公共圏)、あるいは個別「公共性」の発露の可能性を含めて、それぞれの社会における展開を再考する必要性も改めて指摘された。これらは次年度以降の研究会のなかで追及すべき課題ともいえる。

「現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して」

本研究の目的は、モノの流通・消費をめぐるグローバル化現象の多元性に注目した、現代消費文化に関する人類学的研究の新しい可能性を提起することにある。具体的には、アフリカにおける中古品やコピー商品、タイに輸入される日本アニメ、ガーナやラオスのフェアトレード製品、ネパールの宝石、既製服化される中国ミャオ族の民族衣装、トルコの手織り絨毯、エジプトに浸透する空手や化粧品、鯨肉の流通・消費における日本人論の消費といった多様なモノの流通・消費にかかわる事例報告をおこない、以下の2つの課題に取り組む。第1に、先進諸国・新興国・研究対象地域のあいだをモノが動くプロセスと、そこでのモノの価値変化を明らかにし、グローバルな経済システムの再編・再創造のあり方を考察する。第2に、モノの流通・消費の実践にみられる研究対象地域の自己表現のあり方やアイデンティティの変容、新しい環境観・ジェンダー観、階層化や世代間関係を析出し、研究対象地域間、および日本をふくむ先進諸国におけるそれらとの共通性・異質性を考察する。

こうした状況を踏まえ、本研究では帰還移民の生活世界について比較民族誌的に考察をし、まずは「帰還」や「故郷」をめぐる概念の再検討を行いたい。それにより人類学内での理論的な統合を試みることで、他分野との帰還移民研究の対話に向けてのモデルを構築できる。更には、人類学的研究では見過ごされがちであった20世紀の（脱）植民地／帝国化といった歴史性にも配慮しつつ、両概念を批判的に検討することを通して、「帰還移民」の生活世界の創造や戦略といった問題群に切り込む方法論を案出することを目的としている。

研究代表者 小川さやか

班員 (館外) 相島葉月 牛久晴香 田村うらら 鳥山純子 箕曲在弘 宮脇千絵 若松文貴
渡部瑞希

研究会

2013年7月21日

小川さやか「本年度の予定と昨年度のまとめ」

箕曲在弘 「〈消費〉を通して考察するラオス南部コーヒー生産地域の動態」

牛久晴香 「アフリカ農村と先進国市場をつなぐ仲介者」

総合討論

成果

本年度の共同研究会では、代表者の小川が、昨年度におこなった共同研究の論点を整理した後、フェアトレードを通じたモノの価値の転換をテーマとして2つの個人発表がなされた。箕曲は、ラオス南部における農民組合の独自の活動形態・倫理に関わる問題点に焦点を当て、現行のコーヒーのフェアトレード商品化をめぐる変容について発表した。また牛久は、ガーナのバスケット産業において厳しい納期や品質基準を求めるフェアトレード企業と取引する生産者グループと同時に、それらのフェアトレード企業との取引からこぼれ出る人びとが取引するインフォーマルな交易空間が同時並行的に発展していることを論じた。対象地域や商品は異なるものの、両者の発表からは先進諸国の消費者と現地の生産者をつなぐインフォーマル／セミフォーマルな中間アクターや空間が、現行のフェアトレードを支えるバッファーとして機能しており、ここに商品の価値の転換や折衝を解きほぐす鍵があることが明らかとなった。これらの議論を踏まえ、『民博通信』No.146に成果の一部を執筆した。

「ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から」

グローバル化の進展に伴い世界各地で地域的特色をつくりだす動きが顕著になっているが、なかでも自然、建築、公園などの景観は、現地の歴史文化や民族文化と結合し、その特色を示すランドマークとなっている。しかし、こうした景観と文化のポリテクスの関係性について、我が国の人類学はいまだに十分な議論を展開しておらず、景観人類学という分野も定着していない。本共同研究は、多様な行為主体による景観への意味付与や競合に焦点を当てることで、景観研究における人類学の意義と役割を考察する。

本共同研究は具体的に、主に2つの視点から、世界各地における景観形成のメカニズムを検討する。まず、地方政府、プランナー、開発業者、旅行会社、マス・メディアなどが、紋切型の現地文化を可視化し、現地らしい景観を物理的に構築していく「視覚化」の力学(1)について探求する。次に、そうした景観が住民、観光客、芸能集団の身体経験に基づき再解釈されていく「身体化」の過程(2)を、民族誌的記述により探求する。さらに、この

2つの枠組みを統合する理論モデル（3）を導き出すことで、日本における景観人類学の促進を図ることを、本共同研究の目的とする。

研究代表者 河合洋尚

班員 （館外）岩田京子 石村 智 大西秀之 小西公大 小林 誠 里見龍樹 辻本香子
椿原敦子 土井清美 安田 慎

研究会

2013年7月6日

大西秀之 「生態学的アプローチによる景観人類学の可能性——ソビエト体制期のナナイ系先住民の集落景観」
山越 言 「構築される自然——西アフリカにおける景観イメージのポリティクスと自然保護」

2013年7月7日

土井清美 「もうひとつのヘリテージ・ツーリズム——表象と形象のあいだ」
里見龍樹 「ソロモン諸島マライタ島の『海の民』における土地利用、『資源』概念と景観体験」
総合討論

2014年3月1日

椿原敦子 「まなごしのコンフリクトと景観の創出——ビバリーヒルズ市におけるデザインビュアのプロセスから」
安田 慎 「『共有の連鎖』が生み出す風景——ザムザム・タワー建設とマッカ宗教景観論争をめぐる」

2014年3月2日

岩田京子 「京都・嵐山『景観まちづくりサロン』にみる風景をめぐるコンフリクトの解決方策の検討」
小林 誠 「地球温暖化に『沈む島』 ツバルとインターネット空間における被害者の景観化」
総合討論

成果

2013年度は、8名の発表者が世界各地の事例を踏まえながら人間と景観の関係性について討論した。その研究成果は多岐にわたるが、全体の方向性としては、景観人類学における〈空間〉と〈場所〉の分析枠組みのうち、〈場所〉における生態、記憶、マテリアリティをより考察していくことの重要性が再確認された。そのうえで、従来の景観人類学が「認識論」に偏りがちであったことを反省し、人間の行為性やマテリアリティを景観人類学の分析モデルにいかに関与させていくかの議論が交わされた。他方で、従来の景観人類学において、〈空間〉の生産および景観形成の議論は、特に国家権力の強いアジア、ヨーロッパ、北米に関する事例に集中してきたが、本研究会ではアフリカやオセアニアにおける事例も提起された。さらに、〈空間〉と〈場所〉とを対立して捉えてきた従来の景観人類学を反省する動きとして、対立・競合ではなく、整合・併存・共有といった視点も新たに提示された。

『『国家英雄』から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生』

現代インドネシアでは、中央の民主化と地方分権化政策に呼応した地方の小地域社会や民族集団が、独自の文化や歴史を創生し、国家レベルの認証制度を活用しながらその権威づけを目指す動向が顕在化している。本研究では、これらの諸動向を複数の地域・民族間で比較検討することで、対象社会が国家中央との関係を模索しながら文化的自己呈示を行い、そこから「地方」や、特定地域への帰属によらない「民族」といった人間集合が生成、再生する動態を、文化、歴史、政治、開発など複眼的に考察する。具体的には、本来は国民統合の手段であった「国家英雄」認定制度に注目することで、1) 近現代の国民国家の形成過程を再検討し、2) 国民統合とは異なる次元で進む「国家英雄推戴運動」による地域振興や文化創生の現状、3) その動機と背景となる各対象社会の歴史過程を共通の問題として探求しながら、脱中央集権を標榜する国民国家と「地方」や「民族」との関係を、グローバルな政治経済的状況や民主化動向を視野に明らかにすることを目指す。

研究代表者 津田浩司

班員 （館外）太田 淳 岡本正明 小國和子 金子正徳 北村由美 佐々木拓雄 中野麻衣子
見市 建 森下明子 森田良成 山口裕子 横山豪志

研究会

2013年7月6日

山口裕子 「関連諸法令に見る『国家英雄制度』の変遷」

中野麻衣子「バリと国家英雄——無関心とその帰結」

横山豪志 「『3月1日総攻撃』に関する言説の変遷にみるスハルトの英雄化と脱英雄化」

参加者全員による総合討論

2013年12月21日

見市 建 「1998年以降のインドネシア映画——宗教、ナショナリズムと国家英雄」

Fadjar Ibnu Thufail 「Moh. Yamin, from Talawi (West Sumatra) to Mangkunegara Palace: Ethnic Network, Revolution, and the Shaping of a Nationhood (ムハンマド・ヤミン、西スマトラ・タラウイからマンクヌガラ王宮へ——エスニック・ネットワーク、革命、そして国民性の形成)」(英語・インドネシア語)

全 員 総合討論

成果

2013年度には2度の研究会を開催し、招聘講師1名を含む計5名が発表した。山口の発表では、国家英雄という存在が、独立以後の短い歴史の中でその時代の政治や、利害団体のありようを反映しながら紆余曲折を経て現在のよう位置づけにあることが明らかになった。

中野の発表では、中央の意向により、地域史の中で好ましくない人物が選出され、地域社会における論争を引き起こした状況が明らかになった。また、バリ人のもつ独特な国家観と自己の位置づけが明らかになった。

横山の発表では、現在も国家英雄として認定するかどうか大きな議論が引き起こされるスハルト元大統領の英雄的事績がその統治期に創出されていった過程と、その辞任後に修正が進められた過程とを明らかにすることで、インドネシアにおける国史叙述の多角的な再検討を可能とした。

見市の発表では、国産映画の中でも近年顕著なテーマとなっている宗教とナショナリズムを分析することで、世代交代が進むインドネシアにおける「英雄」認識をみることができた。

最後にFadjar Ibnu Thufail氏の発表では、独立以後の国家形成に大きな理論的影響を与えたミナンカバウ人民族主義者ヤミンに注目し、多くのミナンカバウ人独立運動家が親族ネットワークでつながれていたこと、あらたな国家観構築に対してジャワ的な世界観が与えた影響、そして、同時代のインドの民族運動家であるガンジーやタゴールが与えた思想的影響などを明らかにした。

「映像民族誌のナラティブの革新」

近年、民族誌映画祭を中心とした国際的な研究交流が、メディアアートや映画界をも包摂しつつ、世界各地で盛んに展開し、人類学における新たな理論潮流が生み出されている。本研究の目的は、これらの国際的な研究動向を踏まえ、人類学、映画、アートの実践が交差する場から、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓することである。本研究では、映像人類学の各学派の研究潮流の分析、アートや映画界における人類学的に援用可能な方法論の考察を行う。そして、共同研究のメンバーが実践する民族誌映画制作、音や写真のインストール等々の報告、議論を経て、映像民族誌の新たなナラティブを創造し、人類学および隣接する学問へその可能性を提言する。

研究代表者 川瀬 慈

班員 (館外) 伊藤 悟 春日 聡 小林直明 佐藤剛裕 田沼幸子 丹羽朋子 分藤大翼
村橋 勲 柳沢英輔

研究会

2014年3月1日

川瀬 慈 「映像民族誌の新たな時代に向けて」

成果

初年度は1回の会合を持った。そこでは、代表者の川瀬が本研究の趣旨説明と問題提起を行い、共同研究メンバ

一の役割と研究会の進め方について説明をした。その後、各メンバーがプレゼンテーションを行い、各自が現在取り組む研究プロジェクトのおおまかな紹介と、今後の研究の展望を示し、メンバー間で意見交換を行った。各自のプロジェクトの発展にむけた建設的な議論、成果公開の方法に関する意見交換、国際的な研究交流とネットワーク構築を基本軸に据え、メンバー間で連携して本研究をすすめていくことを確認しあった。

「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」

本研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通性を明らかにするための比較研究である。その際、聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をインド、中国、ロシアに限定し、当該地域における聖地の現代的意義とその歴史的背景について比較検討しようとするものである。西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、輓近のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化される事態となっている。こうした現代的状況のなかで聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園である。本研究では、いわゆるユーラシア地域大国、ロシア、中国、インド、における聖地の政治経済学的研究を通じて、宗教の現代的意義を問い直すとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが主要な目的である。

研究代表者 杉本良男

班員 (館内) 河合洋尚 韓 敏

(館外) 川口幸大 後藤正憲 小林宏至 桜間 瑛 高橋沙奈美 前島訓子 松尾瑞穂

望月哲男

研究会

2013年12月7日

杉本良男 「幻想の聖地——ユーラシア地域大国における聖地の研究に向けて」

全 員 「今後の研究計画について」

2014年3月8日

河合洋尚 「客家聖地のポリティクス——同時代世界における華人ネットワークと宗教景観の創造」

小林宏至 「客家の物語へ接合するための『聖地』寧化石壁」

総合討論 「客家の『聖地』をめぐる政治経済学」

成果

本年度は2回の研究会を実施した。第1回目は代表者の杉本が、共同研究全体の趣旨および方向性について述べたのち、自身の南インド、タミルナドゥ州におけるインド津波災害復興過程に関する調査研究についての報告を行った。とくに、被害の大きかった海岸部には重要なキリスト教聖地があり、復興過程で、ヒンドゥー・ナショナルリズムの影響を受けて、複雑な展開を見せたことが示された。さらに、神智協会の創設者マダム・ブラヴァツキーにおける「聖地」としてのチベットの象徴的意義について、イデオロギー批判の視座からの検討の可能性が示唆された。2回目は中国客家社会における「聖地」の社会政治的意義について、中国外の華人ネットワークと中国内部における事例報告があり、「聖地」の政治経済学的研究の視座にまで踏み込んだ議論が行われた。今後、「聖地」概念そのものの歴史性、イデオロギー性について一層の検討が必要であることが確認された。

「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」

近年のITおよび交通網の整備により、世界の「秘境」は急激に消滅しつつある。現在ではかつての「秘境」に暮らす人々は、研究者に直接問い合わせをすることが可能で、民族学系の博物館にその民族集団に関連する資料情報の提供を求めたり、熟覧や適切な管理を依頼することもある。その意味で、現在、民族学系の博物館や研究者は、対象として設定するユーザー（来館者・資料等の利用者や研究成果の読者）を、来館圏居住者や学界だけではなく、資料を製作したソースコミュニティの人々にも拡大していく必要性に迫られており、それを実施するための協働のあり方を模索することが緊急の課題となっている。本研究の目的は、「調査者・被調査者（米国先住民）との関係」、
「知的財産管理」、「所蔵先機関と研究者との協働」を柱として、博物館資料をきっかけとするソースコミュニティの

人々と研究者や所蔵先機関との新たな関係性構築のあり方を模索することにある。そのために、米国本土先住民資料を所蔵する日本国内のいくつかの民族学系の博物館を事例として、資料情報のソースコミュニティの人々との共有のための協働に関する思想を、社会学、博物館学、歴史学、社会心理学、文化人類学などを専門とする研究者と所蔵先機関とで検討・考察する。

研究代表者 伊藤敦規

班員 (館内) 岸上伸啓

(館外) 阿部珠理 大野あずさ 川浦佐知子 佐藤 円 谷本和子 玉山ともよ 野口久美子
藤巻光浩 水谷裕佳 宮里孝生 山崎幸治 山本真鳥

研究会

2013年11月24日

伊藤敦規 「民族誌資料を活用する研究者とソースコミュニティとの協働関係構築の可能性」

全 員 「これまでの研究活動の紹介と共同研究会への展望」

全 員 「全体討論」

2013年11月25日

伊藤敦規 「国立民族学博物館が所蔵する米国先住民資料について」

全 員 「展示場および収蔵庫の実見」

全 員 「日程調整・題目選定など」

2014年1月28日

Atsunori Ito, Jim Enote, Octavius Seowtewa, Robert Breunig, Koji Yamasaki, and Ken'ichi Sudo "Collection Review on the Zuni origin objects at the Japan National Museum of Ethnology"

全 員 国際ワークショップ「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」の内容確認

2014年1月29日

国際ワークショップ「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」

Ken'ichi Sudo "Opening Remarks: Brief overview of Minpaku Collection and Foresight"

Atsunori Ito "Introduction"

Nobuhiro Kishigami "Info-Forum Museum Project at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan"

Atsushi Nobayashi "Documenting Information Heritage on the Indigenous Taiwanese"

Jim Enote "Creating Collaborative Catalogs Project of AAMHC"

Octavius Seowtewa and Jim Enote "Collection Reviews for the Source Community"

Robert Breunig "MNA's Collection Management with Source Communities"

Shota Fukuoka "Information Museum as a Place of Formation and Sharing of the Ethnographic Knowledge"

Koji Yamasaki "Ainu Objects in Oversea Museums"

Atsunori Ito "Closing Remarks"

2014年2月10日

伊藤敦規 "Introduction of the A:shiwí A:wán Museum and Heritage Center"

Jim Enote 「世界の民族学博物館を衛星化する——トライブ博物館による民族誌資料情報の一元管理の試み」

Jim Enote 「民博ビデオテーク『インディアン・ジュエリーの現在』講評」

全 員 「総合討論」

成果

2013年度には3回の研究会を開催した。第1回研究会では、本研究の趣旨と基本的な比較の枠組みや論点を確認した他に、展示場や収蔵庫を実見した。2回目と3回目の研究会では、国際化とより広い視野に基づく議論の展開を図った。

第2回共同研究は、国立民族学博物館国際ワークショップ（『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』）と本共同研究会とを連動させて実施した。前者の開催経費で特別講師として3名を米国から招聘した。米国ニューメキシコ州のズニ博物館のジム・イノート館長、ズニの宗教

指導者であるオクテイピラス・シオウテワ氏、アリゾナ州フラッグスタッフ市の北アリゾナ博物館のロバート・ブルーニグ館長である。1月28日には本館が所蔵・保管するズニ資料を取蔵庫で熟覧し、山崎幸治准教授（共同研究員・国際ワークショップ共催）、須藤健一館長、岸上伸啓副館長（共同研究員）、研究代表者らが、外国人招聘者とズニの宗教儀礼具の今後の取扱いなどについて意見を交わした。29日の口頭発表とディスカッションには、共同研究のメンバーだけではなく、関連プロジェクトとして2つの機関研究も連名した。館内教員や館外の機関研究のメンバーらが60名以上集い、様々な角度から本館が所有する民族誌資料の協働管理に関する議論を行うことができた。

第3回研究会では、特別講師として上掲の日本滞在中のズニ博物館長を招聘し、ズニ博物館の活動などを発表してもらった。また、本館ビデオテーク番組『インディアン・ジュエリーの現在』（ビデオテーク番組番号1706）の上映と講評会を実施した。イノート氏によるビデオテークの講評として、本共同研究会の目的の1つである協働の思想の検討という観点からは、撮影の事前に被写体に対して行った趣旨説明や、肖像権等の取扱いについての文書での許諾取得といった点について高い評価が得られた。

「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」

本研究では、先住民／少数者集団が、彼らを包摂する主流社会において様々に表象されている場面に注目する。彼らが絵画や工芸品、布、衣装などを製作し、それらが市場にのり、時には国際的な注目をあつめる。こうしたモノによって表象されることで、少数者には経済的恩恵がもたらされ、地位の向上につながるがある一方で、彼らを本質化する圧力ともなり、また商品化によって表象が希薄化される場面もある。このような表象のポリティックスの違いは、少数者集団に対する各主流社会の対応と国際社会を背景にしているとともに、グローバリゼーション、ネオリベラルの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いの中でおきている。この共同研究では、このような動態の現場に注目することによって、先住民／少数者の生のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相を具体的な形で明らかにすることをめざす。

研究代表者 窪田幸子

班員 (館内) 上羽陽子 齋藤玲子 竹沢尚一郎 野林厚志 吉田ゆか子
(館外) 青木恵理子 池本幸生 大村敬一 川崎和也 新本万里子 隅 杏奈 田村うらら
中谷文美 中村香子 名和克郎 深井晃子 松井 健 丸山淳子 宮脇千絵
渡辺 文

研究会

2013年10月20日

窪田幸子 「表象のポリティックス」共同研究のめざすところ
全 員 「共同研究員自己紹介、および各個研究計画について」
松井 健 「ものからみるマイノリティ文化の再評価——柳 宗悦の場合」
今後の研究会についての打ち合わせ

2014年1月11日

新本万里子「セビックスタイルという戦略——パプアニューギニア東セビック州出身者の網袋販売をめぐる」
田村うらら「『他者』の志向と向き合う——トルコ絨毯の流通・修繕・加工の現状と考察」
野林厚志 「台湾原住民族の『正名運動』における物質文化の位置づけ」
次回研究会の打ち合わせ

2014年2月22日

岩立広子 「岩立フォークテキスタイルミュージアムについての解説」

2014年2月23日

窪田幸子 「これまでの研究会についての整理」
中村香子 「『伝統』を演出する『戦士』たち——ケニアの牧畜民サンプルのビーズ装飾」
深井晃子 「日本ファッションの表象性——Future Beauty 展の現場から」
池本幸生 「表象のポリティックス——ベトナムの少数民族の場」

成果

2013年の10月から開始した本共同研究は、これまでに予定通り、3回の研究会を開催した。初回は、代表者の問

題意識を共有してもらうことを大きな目的としたが、2回目以降、最初の5回程度の研究会（第2年次の中ごろまで）で、共同研究者のそれぞれの専門領域についての個別発表を行い、世界各地の広いひろがりのなかに、少数者／先住民のモノの表象をめぐる現状、問題、それぞれのポリティックスの状況についての情報を共有しようとしている。そのうえで、例えば、「アイデンティティと表象」、「モノの流通と転化」、「美術と工芸の対立」、「衣装と表象」など、いくつかの研究のまとまりを見出す予定で、研究会を重ねている。第3回目は、この時期に開催されていた岩立フォークテキスタイルミュージアム見学を行うことを目的として、東京で開催した。岩立氏による解説をうけ、ファッションという非常に身体に近いモノによる表象という興味深い論点も現れた。

「エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」

人間が営む生活の諸局面は、特定の具体的な権威者を中心とするコミュニケーションとして成立しており、そこでは、規範や信念への随順やその異端的解釈の抑制が図られるとともに、生々しい実在感を持ち、対他的に作用する非-人間存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。現代世界において、精霊は呪医を権威者とするコミュニケーションでは人に病気をもたらすエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。同様に、米国の銃規制運動において銃は「人を殺す」エージェンシーとされるが、全米ライフル協会はそうしたエージェンシーの定立に強く異議をとる。

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの等根源性に留意しながら民族誌研究をおこなうなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれる傾向にあったモノ、技術、身体、動物に関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わるこれまでの研究を架橋する、通地域的・通研究对象的であると同時に、民族誌的データを豊かに内包しうる次世代人類学の理論基盤を整備する。

研究代表者 杉島敬志

班員 (館内) 飯田 卓

(館外) 東 賢太郎 片岡 樹 金子守恵 桑原牧子 高田 明 津村文彦 中村 潔
馬場 淳 古澤拓郎 森田敦郎

研究会

2013年10月26日

杉島敬志 「エージェンシーの定立と作用——共同研究会の趣旨説明」

2014年1月11日

飯田 卓・中村 潔・津村文彦・桑原牧子・森田敦郎

「『エージェンシーの定立と作用』に関わる今後の自身の研究計画」

各発表をめぐる総合討論

2014年2月8日

高田 明・片岡 樹・東 賢太郎・馬場 淳

「『エージェンシーの定立と作用』に関わる今後の自身の研究計画」

各発表をめぐる総合討論

成果

2013年10月から3回の研究会を実施した。第1回では研究代表者が共同研究会の趣旨をのべるとともに、共同研究会を構想組織するにいたった基本的な考え方を説明した。また、第2回と第3回の研究会では、第1回での研究代表者の発表をうけて、海外出張などで出席できなかった者をものぞく共同研究員の全員が、この共同研究をとおして実施可能と思われる研究課題を提示し、議論をおこなった。第2回と第3回の研究会で発表し、議論された研究課題は以下の通りである。第2回：マダガスカルにおける漁民のブリコラージュ実践とコミュニケーション、インドネシア・バリにおける土地をめぐるコミュニケーション、タイにおける精霊の存在と力、フランス領ポリネシアにおける養育者を定めるエージェンシー、タイにおける洪水とその制御。第3回：ナミビア・ボツアナ狩猟採集民の相互行為における構造とエージェンシー、タイ山地民ラフの宗教から考えるエージェンシー、フィリピンにおける人と人とのコミュニケーションにおける超越的エージェンシーの発現、パプアニューギニア・マヌスにおけるモノと人格。

合理化を推進する近代主義の影響のもと、これまで多くの地域において、人々は「宗教」を政治・社会制度から排除しようとしてきた。しかし近年、宗教原理主義や公共宗教論の盛行、宗教伝統の復興や再評価などに見られるとおり、いったん隔離したはずの「宗教」がわれわれの社会へと滲み出し、新たな姿を見せつつある。その場合の「宗教」はかつての伝統的な姿のままとは限らず、環境思想のような新たな倫理・道徳の底流に見え隠れしたり、観光資源として人目を驚かせたりしている。

このように、伝統宗教のみならず、従来の「宗教」イメージとは異なりながらどこか宗教性を感じさせる新たな現象をも視野に取り込み、現代世界の「宗教」状況をよりよく理解することが、本研究の目的である。また、その研究実践を通じて、個々の宗教的世界観の研究に特化した感のある日本の「宗教人類学」を、上記のようなグローバルな潮流に対応したものへと鍛えなおしたい。

研究代表者 長谷千代子

班員 (館内) 伊藤敦規 藤本透子
(館外) 岡本亮輔 加藤敦典 門田岳久 川口幸大 川田牧人 神原ゆうこ 國弘暁子
西村 明 別所裕介 溝口大助 宮本万里 矢野秀武

研究会

2013年10月5日

長谷千代子「研究会の趣旨と方針、実行計画、成果発表方法等についての説明、その再確認と細部の調整」

長谷千代子「今津人形芝居の舞台はいかに成立するか——聖地論への予備的考察」

施 光恒 「政治理論と世俗を超えるもの——日本の善き生の理念に着目しながら」

討論

2014年3月1日

長谷千代子・川口幸大・別所裕介「近代宗教制度報告（中国）」

矢野秀武 「近代宗教制度報告（タイ）」

溝口大助 「近代宗教制度報告（マリ）」

加藤敦典 「近代宗教制度報告（ベトナム）」

門田岳久・西村 明「近代宗教制度報告（日本）」

神原ゆうこ「近代宗教制度報告（スロバキア）」

2014年3月2日

内藤順子 「近代宗教制度報告（南欧・中南米）」

川田牧人 「近代宗教制度報告（フィリピン）」

個別報告についての質疑・補足

各報告内容についての総合討論

今後の研究目標と成果発表についての討論

成果

本プロジェクトが開始して半年の時点での成果は、主に以下の2点である。

1つは、3月の研究会で各研究員が「近代宗教制度報告」を行い、それぞれのフィールドが置かれている国家の宗教政策や宗教環境について、認識を新たにした。宗教に対する政治介入を日常的に行う国家、管理監督機構の必要性を感じていない国家、管理したくてもその余裕がない国家など、実に多様で、そうした違いが予想以上に各研究員の「宗教」イメージに影響しており、議論が混乱したほどであった。今後はこうした違いを咀嚼し、共有できる視点を見つけることが課題となる。

もう1つは見過ごされていたフィールドやテーマを発見する筋道が見えたことである。ゲストの講演や討論を通じて、人権教育に現れる宗教的精神性や、チベット活仏の転生を届け出制とする条例など、政教分離思想が破綻する局面でフィールド調査を行うことの可能性を認識することができた。

「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」

この研究は東南アジアの様々なポピュラーカルチャーを対象としている。研究の目的はグローバル化する現代社会における文化表現や身体表象の考察を通して、ジェンダー、エスニシティ、言語、宗教、階級などの差異が表現され、アイデンティティが生まれ出されるプロセスを明らかにすることである。対象地域の東南アジアは、その多くが20世紀後半に植民地支配からの独立を果たした国民国家であり、多様な民族文化を擁する国家としてのアイデンティティが模索されてきた。一方でポストコロニアル時代の国民国家は、民族や宗教の違い、地域間の格差、社会階級やジェンダーの格差などの様々な違いを抱えてきた。グローバル化する現代社会の中で、文化的表現の多くは「脱中心化」、「脱地域化」、「商品化」、「断片化」という状況を経験し、それらはしばしば既存の文化的境界を越えて流通し読み替えられている。この研究では、現代東南アジア社会における音楽、芸能、文学、映画、美術、ファッションなどの各分野におけるポピュラーカルチャー産業や各種メディアを研究対象としてとりあげ、文化的表現の生産と消費の場における人々の実践を通して現代東南アジア社会における自己意識形成の過程をとらえていきたい。

研究代表者 福岡まどか

班員 (館内) 寺田吉孝 福岡正太
(館外) 井上さゆり 小池 誠 竹下 愛 津村文彦 馬場雄司 平松秀樹 丸橋 基
山本博之

研究会

2013年11月2日

福岡まどか「東南アジアのポピュラーカルチャー研究にむけて」
全 員 「研究テーマの紹介と展望」

2014年2月22日

福岡まどか「研究成果のテーマ設定検討と今後の予定」
福岡まどか「インドネシアのコミックにおけるジェンダー表現」
小池 誠 「インドネシア映画における宗教と結婚をめぐる葛藤」

成果

2013年度の最初の研究会は、メンバー全員の調査地域の概要や研究テーマを確認し合い、東南アジアのポピュラーカルチャー研究において検討すべき諸課題を共有することから始まった。東南アジアという地域の多様性、そして様々な芸術ジャンルや身体表象などの研究対象の広がりを重視しつつ、音楽、映画、舞踊、ファッション、画像メディアなどに関する各メンバーのテーマの可能性を検討した。第2回の研究会ではインドネシアを対象とした研究発表を通して、コミックに見られるジェンダー表象、現代の映画に見られる宗教と結婚を考察した。コミックに見られるジェンダー表象の事例発表とそれに続く議論は、「男らしさ」や「女らしさ」をめぐる価値観とその変化について考える契機となった。また映画における宗教と結婚に関する事例発表とその後の議論では、宗教が異なる男女間の結婚、結婚を契機に様々な価値観の葛藤が現れる場としての家族について考える視座を得ることができた。人々のアイデンティティ形成に関わる要素である「ジェンダー」と「宗教」について具体的な事例を通して検討し、またインドネシアという地域の独自性も考察することができた。と考える。

「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」

本研究は、15世紀末以降、スペインが世界規模で拡張した帝国統治のメカニズムについて、行政・司法・財政・宗教・軍事の諸分野を交差して領域横断的に張り巡らされた文書ネットワーク・システムの展開に焦点を当てながら解明を目指すものである。

近代初期、アジアからアメリカに至る広大な領域を支配下に治めたスペインの統治原理は、文書主義の優越というイデオロギーに支えられており、帝国内の統治機構においては、マドリッド中枢から植民地最末端の先住民までをカバーする広域的な文書ネットワークが張り巡らされていた。その網の目に沿って、植民地経営の実務を支えるヒトやモノ、情報の流れが構造化され、領域の隅々にまで拡張されることで、近代ヨーロッパ史上、類をみない規模の世界帝国を支えた統治機構の礎が整備されていったのである。

本研究では、スペインおよびラテンアメリカ、アジア各地の文書館における実地調査を通して史料分析の研鑽を

積み、文化人類学、歴史人類学、識字・リテラシー研究、史料論、エスノヒストリー、文書管理論、アーカイブズ学などの方法論に精通したエキスパートたちの知見を結集することにより、スペイン帝国の礎となった文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開について総合的に究明を試みるものである。

研究代表者 吉江貴文

班員 (館内) 齋藤 晃
(館外) 足立 孝 網野徹哉 井上幸孝 小原 正 坂本 宏 清水有子 中村雄祐
伏見岳志 溝田のぞみ 安村直己 横山和加子

研究会

2013年12月14日

吉江貴文 「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開——趣旨説明」
全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」
全 員 「今後の共同研究についてのディスカッション」

2014年2月24日

坂本 宏 「課題資料に基づく研究報告」
全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」
齋藤 晃 「課題資料に基づく研究報告」
全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」
全 員 「次年度の研究活動について」

成果

2013年度は2回の共同研究会を実施し、スペイン帝国の文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開という本研究会のテーマについて、メンバー全員の共通理解を深める作業を進めた。12月に実施した第1回の共同研究会では、研究代表者の吉江が冒頭報告を行い、本研究会の主なねらい、問題意識の所在、今後の研究方針などについて簡潔に説明した。つづいて、メンバー各自が現段階における文書史料への関心の在り方を説明し、本研究会におけるそれぞれの役割について意見交換を行った。2月に実施した第2回研究会では、本研究テーマに関連する課題資料(K. バーンズの“Notaries, Truth, and Consequences”とJ. ラパポート & T. カミンズの“Beyond the Lettered City”)について坂本 宏と齋藤 晃が研究報告を行い、文書ネットワークの解明に向けた検討課題のあぶり出しと具体的なアプローチの在り方について、各自の知見を交えながら包括的な討論を行った。

「宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究」

20世紀後半以降、世界各地で宗教復興が顕在化すると同時に、公共領域における宗教の影響力が増大している。その背景には、新自由主義経済の浸透による国家財政の緊縮化とそれともなう社会・福祉サービスの低下がみられるなか、宗教(宗教者や宗教集団)が、独自のネットワークに基づき、そして多くの場合、地域社会・援助供与国・国際NGOなどと連携しながら、社会開発に積極的に参画するというグローバルな流れが指摘できる。

そこで本研究では、宗教の開発実践が顕著にみられるアジアとオセアニアをおもな舞台として、以下の2点を目的とする。第1に、宗教による経済開発、医療と公衆衛生、教育などの領域における活動を民族誌的な事例として収集し、そこに反映される宗教固有の理念や規範およびネットワークの性質を明らかにする。第2に、このような現象が社会全体にかかわる諸問題を主題化し、公共性およびその変容を喚起していることを明らかにする。この2点を明らかにすることで、本研究は、ポスト世俗化の宗教論を超える視点を提示することを目指す。

研究代表者 石森大知

班員 (館内) 丹羽典生
(館外) 岡部真由美 岡本亮輔 小河久志 門田岳久 倉田 誠 小西賢吾 舟橋健太

研究会

2013年11月23日

石森大知 「趣旨説明——宗教・開発・公共性をめぐる人類学的研究」

岡部真由美「宗教と開発をめぐる問題群——タイ上座部仏教の場合」

全 員 「研究紹介および今後の研究計画」

2014年2月22日

福島康博 「企業の寄付をめぐるふたつの語り——イスラーム金融機関の社会貢献活動の事例から」

白波瀬達也「単身男性集住地域における Faith-Related Organization の支援——あいりん地域を事例に」

全 員 「本年度の総括および今後の研究計画」

成果

第1回研究会では、本共同研究の趣旨および問題意識等の説明とともに、研究の実施計画について確認した。また、初回ということもあり、研究会に参加する各メンバーが、これまでの研究テーマと本共同研究で実施する研究計画の概要を述べた。その後、本共同研究の方向性をめぐって質疑応答をおこない、問題意識を共有すると同時に、各メンバーの専門領域に対する理解を深めた。第2回研究会では、マレーシアと日本の事例に基づく研究報告がなされた。マレーシアの事例ではウンマの実現と企業の社会的責任の完遂の共存について、一方の日本の事例ではあいりん地域のセーフティーネットの一翼を担ってきたキリスト教系支援団体の活動やその歴史について報告された。これらの報告は、当該社会における宗教団体の位置づけや宗教の社会参加パターンを考察するうえで重要であり、本共同研究の2年目以降につながる内容となった。

「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」

本共同研究では、再分配が集団を生成している点に注目することで、集団と再分配の関係の多様性を明らかにしていく。ポランニーは、再分配を〈富や労働を中心に集めたうえで配り直す〉経済活動の様式として定式化し、その中に儀礼や祝祭、租税、家政が含まれるとした。そこでは、社会の存在が前提とされ、いかに再分配が社会統合に役立つかという構造機能主義的な枠組みが強調されている。それに対し本研究では、社会の存在を自明視するのではなく、他ならぬ再分配によって集団が立ち現われている点に注目する。思想史家のエヴァルドがフランスの社会保険を例に示したように再分配はそれに参加する者に連帯感を喚起することで集団意識を醸成しうるし、また、再分配への参加は集団の境界を引く際の重要な留意点にもなるからである。本共同研究では、この視点から世界各地の事例を比較し、再分配の具体的な手続きと集団の特性の関係について検討していく。

研究代表者 浜田明範

班員 (館内) 加賀谷真梨 吉田ゆか子

(館外) 伊東未来 久保忠行 里見龍樹 高橋絵里香 高橋慶介 田口陽子 友松夕香

研究会

2013年12月7日

浜田明範 「共同研究会趣旨説明と今後の進め方について」

全 員 「これまでの研究と本共同研究会での研究テーマ」

友松夕香 「収穫分益におけるジェンダー化された再分配——ダゴンバの人口緻密地における落花生を事例に」

成果

本共同研究の初年度にあたる2013年度は、12月に1度の研究会を開催した。そこでは、再分配が経済人類学や「社会的なもの」に関する議論の中でどのような位置づけにあるのかを確認したうえで、各メンバーが本共同研究との関連でどのような現象に関心を持ち、今後検討していくのかについて意見交換を行うことができた。また、メンバーの1人である東京大学の友松夕香より、ガーナ北部のダゴンバにおける落花生栽培に関する重厚な報告がなされ、今後の本共同研究の発展可能性を予感させる濃厚な研究会となった。

本共同研究は、2014年度以降もメンバーの研究発表を中心に、将来的なシンポジウムの開催や論文集編纂を視野に入れて、人類学における再分配に関する議論の活性化を目指してゆく。

人間文化研究機構連携研究

「人間文化資源の保存環境研究」

代表者：園田直子

本研究は、これまで人間文化研究総合推進事業で進めてきた「文化資源の高度活用：有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成」（2006～2008年度）、「保存環境解析法の再検証」（2009年度）の研究成果を発展的に継承し、より広範囲な資料群を対象とした保存環境研究を行うことを目的としている。研究対象はモノ資料にかぎらず、映像音響資料、図書文書資料、さらには電子データなど多様な形態から構成される研究資源に広げ、それぞれの形態に応じた保存環境モデルを構築するために必要となる保存環境分析システムを研究開発する。

成果

- 1) 温度・湿度分析システム・スモールパッケージのプロトタイプ完成
- 2) 生物生息調査分析システム・スモールパッケージ開発の可能性の検討
- 3) 研究会開催
2014年2月13日 2013年度第1回研究会（国立民族学博物館）
園田直子 「温度・湿度分析システム・スモールパッケージ」
川上 亘 「温度・湿度分析システム・スモールパッケージ標準動作環境」
河村友佳子「温度・湿度分析システム・スモールパッケージ 操作概要」
国立民族学博物館のバックヤード視察
- 4) 論文発表
園田直子・日高真吾・河村友佳子（ポスター発表）
2013年7月20日～21日 「省エネを考慮した持続的な空調管理——国立民族学博物館の事例から」『文化財保存修復学会第35回大会 in 仙台研究発表要旨集』pp.142-143, 東北大学百周年記念会館川内萩ホール
Sonoda, N. and S. Hidaka (Oral Communication)
2013年10月23日～25日 ‘Sustainable and Environmental Friendly Museum Environment: A Case Study from the National Museum of Ethnology after the Great East Japan Earthquake,’ Cultural Heritage Conservation Science and Sustainable Development: Experience, Research, Innovation, International Conference in the Frame of the 50th Anniversary of the Centre de Recherche sur la Conservation des Collections – CRCC, Bibliothèque Nationale de France – Site François Mitterrand
Sonoda, N. (Oral Communication)
2014年1月15日 ‘Preventive Conservation in Japan: Case Study from National Museum of Ethnology, Japan,’ The Open International Seminar on Conservation of Archeological Bronze Objects, Armenia History Museum
- 5) その他
保存環境分析システムで得られた知見の研究発表（シンポジウム、研究会、講義ほか）
2013年7月3日 「人間文化資源」の総合的研究 連携研究総括班会議
園田直子「2013年度計画 温度・湿度分析システム・スモールパッケージの開発」
2013年12月12日 第1回知覧特攻平和館保存対策委員会
園田直子「国立民族学博物館での保存科学研究」

「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」

代表者：福岡正太

一定の視点から芸能の動きと音を記録し、再生することができる映像は、第三者に具体的に芸能の姿を伝えることができる。その性質により、学術資料であっても、多くの人に活用され、芸能のイメージを広めることにひと役立つ可能性も持っている。一方、芸能の関係者にとって、外部の人間が撮影編集した映像を見ることは、外からのまなごしを意識し、自己イメージを再形成する機会ともなる。この研究は、映像による芸能の民族誌的記録が、芸能を支える人々や研究者、映像を視聴する第三者など、立場を異にする人々のあいだにどのような相互関係を築き、

どのように芸能の上演と伝承に影響を与えうるのかを実践的に明らかにし、学術的な民族誌映像の作成および活用の望ましいあり方を探ることを目的としている。

成果

これまでの研究活動により、硫黄島のような小規模なコミュニティ、徳之島のような複数の町からなる地区、東南アジアのような大きな規模の地域など、調査記録の対象とする社会の規模や性質により、映像記録作成における視点や有効な映像活用の方法が異なりうることが明らかになってきた。硫黄島については、これまで撮影した八朔太鼓踊り、盆踊りと柱松行事、九月踊りなどの映像の整理編集を進め、島の芸能を概観するとともに、中心となる八朔太鼓踊りの各年度の上演を比較できるマルチメディアプログラムの製作の準備を進めた。徳之島については、島内各町との間で築いてきた協力関係に基づき、本年度は天城町から伝統芸能の映像記録作成事業を受託し、実質的な共同研究を進め、成果として町内のケーブルテレビで放映する映像番組の製作を進めている。また、島内各集落の芸能を出来る限り網羅的に記録し、比較対照できるようなマルチメディアプログラムをほぼ完成させ、今後の島内での活用について協議を進めている。東南アジアのゴングについては、ラオス、マレーシア、インドネシアにて調査撮影を進めたほか、東洋音楽学会大会のパネルディスカッションにて、中間的な成果報告をおこなった。流通過程の変化によるゴングの製作拠点の再編、その中での調律という行為の重要性、また、青銅製ゴングに比べて従来軽視されてきた鉄製ゴングの独自の製作過程と流通経路の存在などが明らかになってきた。

本年度は上記のほか、本館が製作した芸能関連の映像番組を様々な機会をとらえて上映し、学術的な芸能の記録映像の活用の可能性についての考察を深めた。

1) 研究会開催

- 2013年 5月15日～16日 「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」研究会、国立民族学博物館
- 2013年 9月22日 上映会『『怒』——大阪浪速の太鼓集団』大阪人権博物館リバティホール
- 2013年10月31日 映像上映「20世紀の映像百科事典エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを見る連続上映会⑤仮面」Space & Café ポレポレ坐
- 2013年11月10日 パネルディスカッション「東南アジアのゴング文化研究への視角」東洋音楽学会第64回大会、静岡文化芸術大学
- 2014年 2月17日 上映会「Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan」ロンドン大学ゴールドスミス校
- 2014年 2月18日 上映会「Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan」ロンドン大学東洋アフリカ研究学院
- 2014年 2月20日 上映会「Sbaek Thomm: Cambodian Shadow Puppet Theater」ロンドン大学ゴールドスミス校
- 2014年 2月22日 上映会「Drumming out a Message: Eisa and the Okinawan Diaspora in Japan」ロンドン大学東洋アフリカ研究学院

2) 論文発表

- Terada, Y.
2013 Audiovisual Ethnography of Philippine Music: A Process-oriented Approach. *Humanities Diliman* 10 (1): 90-112.
- 福岡正太
2013 「メンドンと映像記録」『月刊みんぱく』37(5): 5。
- 寺田吉孝
2013 「語りを撮る」『毎日新聞』9月19日。
- 梅田英春
2014 「ロンボック島におけるゴング工房と楽器商」『沖縄芸術の科学』26: 120-130。
- 福岡まどか
2014 「伝統芸能を次世代に伝え遺す——インドネシアにおける NGO 団体の取り組みから」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』40: 71-91。

3) 著作物

- 藤岡幹嗣
[映像作品]
2013 『硫黄島の柱松 (仮)』。
2013 『ベトナムのゴング製作 (仮)』。

寺田吉孝監修

[マルチメディアプログラム]

2014 『遠い記憶、呼びさます声——ダナンマル家の南インド古典音楽』。

笹原亮二・福岡正太監修

[マルチメディアプログラム]

2014 『徳之島の唄と踊りと祭り』。

笹原亮二・福岡正太監修

[映像番組]

2014 『天城町の芸能Ⅰ——稲作と芸能』。

2014 『天城町の芸能Ⅱ——祭りと唄と踊り』。

2014 『天城町の芸能Ⅲ——シマの唄と踊り』。

4) その他

寺田吉孝

2014年2月20日 'A Process-oriented Applications of Audiovisual Media in Safeguarding Intangible Heritage.'
(研究発表)、国際シンポジウム "Safeguarding The Intangible: Cross-cultural Perspectives on Music and Heritage"、ロンドン大学ゴールドスミス校

人間文化研究総合推進事業

「画中画の世界」

代表者：宇田川妙子

「画中画」とは、なんらかのテーマをもって描かれた絵画作品の中に背景あるいは点景として描かれたものである。日本画であれば、絵巻物・屏風・襖絵、衝立などの調度、錦絵・引札類に描きこまれた掛軸、襖絵、屏風などがある。欧米諸国では、王侯貴族とその家族の肖像画や静物画などの背景にあしらわれた額絵・タピストリー・装飾家具、また飾戸棚に並べられた絵皿などがある。それらの中には、オリエンタリズムなどが反映している作品も多々あるが、異国趣味以外にも、さまざまな幻想的・牧歌的な風景や神話の場面が描かれている事例も少なくない。

「画中画」は、絵画本来の主題とどのようなかかわりをもって描かれるのだろうか。この連携研究は、従来美術史の範疇で論じられてきた諸説に拘束されことなく、学際的な観点から自由な着想により考察し、意見交換して成果を得ようとするものである。意図的な暗喩、あるいは格別の意図はなく偶然に描きこまれたものだったのか、いずれの場合もあり得る「画中画」は、時代・地域・階層を問わず人びとの日常的な「あこがれ」や「祈り」などを可視化し、自己実現の擬似行為を図ろうとした、その点を、いみじくも描き出していると考えられる。

以上のように、この連携研究では「画中画」のさまざまな態様に着目し、新研究領域の創出をめざして多面的なアプローチを試みるものである。

成果

あらたな画中画という分野に関して、日本や西洋などの各地の作品について議論を重ねることによって、画中画の多様性と多義性があきらかになった。そして画中画に注目することの意義についても様々な観点があるとともに、美術・美術史のみならず社会史・文化史、カルチュラル・スタディーズ等々の関連諸分野への貢献も高く期待されることを具体的に指摘することができた。なお本年度は、本研究の最終年度であったため、以上の議論の成果を研究報告という形でまとめ、メンバー間で共有することによって、今後のさらなる研究にむけた土台作りをした。

昨年度まで行っていた日本を中心とする画中画の図版のデータ収集についても、途上ではあったが、研究報告の中にまとめた。

「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」

代表者：日高真吾

本研究は、大規模災害において壊滅的な被害を受けた文化遺産を被災地の大学機関やミュージアムと連携し、どのように復興させ、活用していくのかを調査・研究するものである。そして、そのような活動に研究機関である大学共同利用機関がどのような役割を果たせるのかを明らかにしていくことを目的とする。

成果

「1. 有形の文化遺産の恒久的な保管体制の構築について」では、一時保管場所の環境モニタリングと塩分除去の技術開発に取り組んだ。ここでは、一時保管場所である気仙沼市旧月立中学校の環境モニタリングを実施し、今年度はその成果をもとに㈱金剛の協力を得て調湿ボードの仮設置を設置した。

「2. 無形の文化遺産への支援と社会貢献」では、宮城県石巻市雄勝法院神楽を招聘し、研究公演をおこなった。また、被災地における芸能復興の状況について、釜石市の笹山氏、大槌町の古水氏に調査員として調査活動を依頼し、モニタリング活動をおこなっている。

「3. 震災の記録・記憶の継承」では、三陸沿岸、紀伊半島沿岸の津波碑等のDBについては、WEB公開を念頭に微修正を加え、早期的な公開を目指した活動を実施した。

「4. 災害時におけるミュージアムの連携体制の構築」については、日本博物館協会との連携を模索しており、今後は日本博物館協会のネットワークに当研究会の成果を反映させていくこととしている。

1) 研究会開催

2013年7月19日 公開シンポジウム「救え！故郷の証——津波被災資料の応急処置と修復」仙台市博物館

2013年9月20日 「被災文化財の二酸化炭素殺虫処理ワークショップ」東北北学院大学

2013年10月10日～11日 「被災文化財の応急処置ワークショップ」萩博物館・萩市須佐歴史民俗資料館

2013年11月19日 「被災した漆器製品の応急処置ワークショップ」東北歴史博物館

2013年11月23日 「雄勝法印神楽みんぱく公演」国立民族学博物館

2014年1月10日～12日 「被災文化財の脱塩処理ワークショップ」仙台メディアテーク

2014年1月25日 「大規模災害と人間文化研究」公開シンポジウム「災害に学ぶ」津田ホール

2014年2月7日 「被災文化財のさび止めワークショップ」東北学院大学

2014年3月16日 公開シンポジウム「災害と展示」国立民族学博物館

2) 著作物

日高真吾 IPM 活動清掃マニュアル 2013年10月。

日高真吾 漆製品の応急処置マニュアル 2014年1月。

3) 論文発表

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介

2013 東日本大震災で被災した民俗資料の脱塩処理に関する一考察『文化財保存修復学会第35回大会要旨集』pp.46-47。

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介・幡野寛治・村上市教育委員会

2013 「東日本大震災による被災民俗文化財の一時保管場所の環境について」『文化財保存修復学会第35回大会要旨集』pp.108-109。

日高真吾

2013 「東日本大震災における文化財レスキューについて」『文化財の虫菌害』65：3-9，文化財虫害研究所

2013 「国立民族学博物館の支援活動」『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成24年度活動報告書』pp. 84-86。

2013 展示紹介「国立民族学博物館企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』」『日本民具研究』147：144-148。

加藤幸治

2013 「東日本大震災後の民具の救援・保全活動の展開——宮城県における取組みとコレクションのこれから」『日本民具研究』147：21-34 日本民具学会。

「第2回国際シンポジウム『手話言語と音声言語の記述・記録・保存』の開催」

代表者：菊澤律子

本研究では、手話言語と音声言語の記述・記録・保存に関するシンポジウムを開催する。手話言語と音声言語の言語としての共通点を重ね合わせたとき、逆に、ふたつの言語の表現形式の違いを対比したとき、人間の言語について何がわかるのか、その本質に迫るための研究の方向性を探ることを目的とする。

手話言語に関する記述研究の事例も理論研究の蓄積が少なく、話者自身が記録・保存に取り組む場はほとんどない。その対応の必要性および緊急性は国際的に強く認識されており、近年では手話言語学をテーマとした事業の数が増えてきている。本提案ではその一歩先にすすみ、手話言語研究を音声言語研究と意識的に突き合わせ、言語の性

質の総合的な把握を試みる。言語の記述を軸にすえた上で、関連する具体的な側面に焦点を当てて議論を展開する。

今回は、2011年、2012年に開催し、高い評価を受けた国際ワークショップおよびシンポジウムの内容をさらに発展させ、認知科学や人間科学の視点を取り入れることを試みる。このシンポジウムに先立つ9月27、28日には、一般および若手研究者などを対象とした2日間のワークショップを開催する予定である。ワークショップではハンズオン形式を取り、具体的な言語の記述や記録に関する実践および理論的な内容を検討する予定としており、それに続く本シンポジウムは、そのしめくくりとしての位置づけにもなる。

本シンポジウムは一般公開とし、英語、アメリカ手話、日本語、日本手話の4言語で開催する。

成果

1) 現在、紙媒体での報告書、および、ウェブ配信用映像データを編集集中である。

- ① シンポジウムについては、英語字幕を付きでウェブ掲載のため、編集集中。
- ② ①のなかから数本を選択し、日本語字幕および日本手話付きで掲載する。
- ③ また、講演起稿データを紙媒体で出版できるよう、準備を進めている。

2) シンポジウム開催

第2回手話言語学と音声言語学に関する国際シンポジウム (SSLL2) 「言語の語順と文構造」

時間：9：10～17：00

場所：国立民族学博物館 講堂

言語：英語、アメリカ手話、国際手話（日本語・日本手話への同時通訳あり）、英語同時筆記あり

一般公開（参加無料／要事前申込／定員450名）、インターネット配信あり

プログラム

- 8：40～9：00 受付
- 9：00～9：10 ご挨拶
- 9：10～9：55 「手話言語の語順」(英語)
スーザン・フィッシャー（ニューヨーク市立大学大学院センター／国立民族学博物館）
- 9：55～10：40 「イヌイット手話の語順——問題と課題」(英語)
ヨーク・スハウト（アムステルダム大学）
- 10：40～10：55 「音声言語研究からみたコメント——音声言語の語順」(英語)
ブラシャント・バルデシ（国立国語研究所）
- 11：10～11：55 「ロシア手話とオランダ手話における情報構造」(英語)
ヴァディム・キンメルマン（アムステルダム大学）
- 11：55～12：40 「インドネシアの手話言語における否定と完結に関する統語論」(国際手話)
ニック・パルフレイマン（セントラル・ランカシャー大学）
- 13：30～13：45 コメント：音声言語の視点から
ドーリス・ペイン（オレゴン大学）
- 13：45～14：30 「会話における文と発話：手話言語と音声言語の類似性と相違性の観点から」(英語)
坊農真弓（国立情報学研究所）
- 14：30～15：15 「言語と文化のインターフェイス：カクチケル語（グアテマラ、マヤ系言語）における目の動きと文や身ぶりの生成の相関性」(英語)
酒井弘（広島大学）
- 15：45～16：00 講演 一般に対するコメント（ジェスチャー研究の視点から）
細馬宏通（滋賀県立大学）
- 16：00～17：00 パネルディスカッション
発表者全員

「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」

代表者：山中由里子

本連携研究は、申請者が代表を勤める共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と国際日本文化研究センターの小松和彦教授が率いてきた共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造——研究のさらなる飛躍に向けて」の成果を対照させ、未知なるものをめぐる思考様式の地域性や時代性を浮かびあがらせ、伝承やイメージの東西伝播を明らかにしようとするものである。機構連携展示としての特別展の開催を成果の一つとす

ることを視野に入れつつ、特に驚異・怪異の表象物（挿絵・絵画、民俗資料、珍品・からくり、博物標本など）に焦点をあてる。

中東とヨーロッパという一神教世界における驚異にある程度の共通性があるとしたら、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、またどう違うのか、といった問題に取り組む。

成果

代表者が下記にあげる複数の国際研究会・シンポジウムで、驚異と怪異の比較研究の枠組みについて発表した。分野の異なるそれぞれの会合で、今後の研究の展開に参考になる反応を得ることができた。

1) 学会等発表

2013年7月19日～7月24日

‘Not “just” Fantasy: A Comparative Study of Mediaeval Marvel Literature in the Middle East and Europe.’ 国際比較文学学会大会 Workshop “The Fantastic across borders” パリ大学、フランス

2013年9月23日～9月27日

‘Ajā’ib as Discourse on Cultural Relativism? A Comparative Study of Persian, Arabic, European and Chinese Marvel Literature.’ ドイツ東方学会、ミュンスター大学、ドイツ

2013年11月25日～11月26日

「未知との遭遇——驚異と怪異の比較研究」国際研究集会『怪異・妖怪文化の伝統と創造——「内」と「外」の視点から』国際日本文化研究センター

2013年11月29日

‘Not “just” Fantasy: Mediaeval Perspectives on the Marvelous and Uncanny.’ 国際コロキウム “Future of Comparative Literature” 東京大学駒場キャンパス

2014年3月24日～27日

‘Authenticating the Incredible: Comparative Study of Narrative Strategies in Arabic and Persian ‘Ajā’ib Literature.’ Strategies of Preservation and Guardianship of the Authorial Composition in Medieval Arabic and Persian Literature (2d/8th-9th/15th centuries)、ヘブライ大学、イスラエル

2) 刊行物：論文

Yamanaka, Y.

2013 The Arabian Nights in Traditional Japanese Performing Arts. In Marina Warner and Philip F. Kennedy (eds.) *Scheherazade’s Children: Global Encounters with the Arabian Nights*, pp. 274-281. New York: New York UP.

山中由里子

「女人族伝承の東西伝播」『中央評論（特集：驚異と好奇心）』284：59-73。

3) データベース等の公開

本機構連携研究開始以前からすでに国際日本文化研究センターで立ち上げられているものとして、「怪異妖怪伝承データベース」が挙げられる (<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)。

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して2006年度から「地域研究推進事業」を開始した。本事業は、機構が関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して研究を推進する方式の研究事業である。2006年度から「イスラーム地域研究」事業、2007年度からは「現代中国地域研究」が始められているが、これに加え2010年度より「現代インド地域研究」事業が開始された。

「現代インド地域研究」事業においては、京都大学を中心拠点とし、これに東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学、および国立民族学博物館の5拠点が加わってネットワーク型の研究推進が図られている。

以下では「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の2013年度の事業概要を記載する。

【拠点の整備】

国際的共同研究の基盤整備と推進

2010年度に応募・採択された日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」）の主担当研究機関となり、2012年度まで「現代インド地域研究」プ

プロジェクトと密接に関係を保ちながら本事業を推進してきた。

今年度はプロジェクト終了後の評価のためのデータや成果のとりまとめを本拠点において行った。日本学術振興会国際事業委員会が実施する事後評価ではどの観点においても非常に高い評価を得た。プロジェクトの成果は、エジンバラ大学やデリー大学との協力により英文論文集の公刊に向けて編集作業が進められている。

一方、2010年度にエジンバラ大学南アジア研究センターと締結した研究交流のための覚書に基づき、同センターと協力してRoutledge社から刊行する予定の叢書の編集作業を行った。国立民族学博物館拠点はこの事業の交渉窓口としての役割を果たした。

インド研究アーカイブ資料の整備

インドの宗教祭礼や民俗文化の写真撮影を行ってきた写真家 沖 守弘氏のスライド写真約2万点と関連文書資料を、民族学博物館図書館と共同して受け入れてデータベースとして公開するプロジェクトを進めた。今年度は、同氏のスライド写真と関連文書資料の国立民族学博物館への譲渡に関する交渉窓口となり、著作権を含む所有権の全面譲渡を進めるための支援を行い、資料受け入れ後、スライド写真8,600点余りをデジタル化するとともに、5,000点余りについて写真情報の打ち込み作業を行った。データベースはデジタル化と資料情報の整理が終わり次第、2015年中に公開する予定である。

【拠点の活動と成果】 国際シンポジウムの共催

国際ワークショップの開催

日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」経費による「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」事業において、派遣若手研究者の受け入れ先の1つとなったデリー大学社会学部のAbhijit Dasgupta教授を招聘し、上記事業で2012年度にインドで開催した国際シンポジウムのフォローアップとしてインドにおける後進諸階級(OBCs)の社会的包摂と排除に関して、同教授の発表に基づいて討論を行った。

なお、このワークショップは、国立民族学博物館共同研究『ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究』(代表:名和克郎・東京大学東洋文化研究所准教授)ならびに同『グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究』(代表:松川恭子・奈良大学社会学部准教授)との共同で開催した。

日時:2013年10月19日 午後3時30分~午後5時30分

場所:国立民族学博物館第7セミナー室

プログラム

Opening Address: Minoru MIO (National Museum of Ethnology)

Lecture: Abhijit Dasgupta (University of Delhi)

“Affirmative Action and Identity Politics: The OBCs in Eastern India.”

General Discussion

研究会活動

研究グループ1および2合同の拠点研究会を合計4回開催した。今年度の研究会は、本事業の成果のとりまとめと発信に向けて、前半の2回は事業全体で計画されている叢書の出版のための執筆者会議、後半の2回は拠点独自での出版を計画している論文集執筆に向けた本事業での現地調査の成果報告とそれに基づく意見交換を行った。

各回の研究会の発表者と題目は下記の通り。

① 国立民族学博物館拠点第1回合同研究会

日時:2013年6月1日 午後1時~午後7時

6月2日 午前10時30分~午後4時30分

場所:国立民族学博物館第3セミナー室

「現代インド地域研究」プロジェクト全体で出版を計画している叢書『現代インド』の第6巻の内容に関する検討会を行った。

② 国立民族学博物館拠点第2回合同研究会

日時:2013年7月20日 午後1時~午後6時30分

7月21日 午前10時30分~午後4時

場所:国立民族学博物館第3セミナー室

「現代インド地域研究」プロジェクト全体で出版を計画している叢書『現代インド』の第6巻の内容に関する2度目の検討会を行った。

③ 国立民族学博物館拠点第3回合同研究会

日時:2013年10月20日 午前10時30分~午後3時30分

場 所：国立民族学博物館第3セミナー室

報告1：香月法子（中央大学政策文化総合研究所）

「イラニーから見たパールシー」

報告2：豊山亜希（国立民族学博物館外来研究員）

「大戦間期のインド建築における日本製マジョリカタイルの受容——シェーカーワーティー地方のハ
ヴェーリーを中心に」

④ 国立民族学博物館拠点第4回合同研究会

日 時：2014年2月10日 午後3時～午後5時

2月11日 午前10時30分～午後3時30分

場 所：国立民族学博物館第3セミナー室

報告1：鈴木晋介（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）

「現代スリランカにおける『路傍の仏堂』の増加について——調査報告と予備的考察」

報告2：田森雅一（東京大学非常勤講師）

「インド音楽伝統と多様性の環流——インドとフランスを結ぶグローバル化の諸相」

報告3：杉本星子（京都文教大学総合社会学部教授）

「アジア・アフリカ向け日本製プリントテキスタイルの輸出とインド商会」

海外調査

拠点の研究メンバーをのべ15回インド、ネパール、ブータン、ドバイ、タイ、シンガポール、インドネシア、マ
レーシア、フランス、カナダ等に派遣し、海外現地調査や学会等での研究成果発表や意見交換にあたらせた。派遣
先やテーマの詳細は下記の通り。

- ① World Zoroastrian Congress の動向調査
出張期間：2013年12月25日～2014年1月4日
出張先（インド）：マハーラーシュトラ州ムンバイ
出張者：香月法子（中央大学政策文化総合研究所準研究員）
- ② キリスト教改宗問題とコミュニズムに関する追加調査
出張期間：2013年7月6日～7月18日
出張先（インド）：タミルナードゥ州チェンナイ、オディシャ州カンダマル地区
出張者：アントニサーミー・サガヤラージ（南山大学人文学部准教授）
- ③ インド・ラージャスターン州のローカルな憑依霊信仰とメディアの関係に関する現地調査
出張期間：2013年11月7日～11月22日
出張先（インド）：ラージャスターン州ウダイプル市
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）
- ④ インドの憑依霊信仰とメディアの関係に関する補充調査、および今後の共同研究に関する意見交換
出張期間：2014年2月13日～2月26日
出張先（インド）：デリー市、ラージャスターン州ウダイプル市およびその近郊
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）
- ⑤ ブータン高地における近代化と物質文化の変容調査
出張期間：2013年10月29日～11月8日（南） 同10月29日～11月11日（宮本）
出張先（ブータン）：ハ県、パロ県、ティンプー県
出張者：南 真木人（国立民族学博物館准教授）、宮本万理（人間文化研究機構地域研究推進センター研究員）
- ⑥ ネパールにおける結婚式儀礼と物質文化の変容調査
出張期間：2013年11月18日～12月11日
出張先（ネパール）：カトマンドゥ市、パルパ郡
出張者：南 真木人（国立民族学博物館准教授）
- ⑦ シンガポール市内のタミル系ヒンドゥー寺院における寺院儀礼の調査
出張期間：2014年3月20日～3月28日
出張先（シンガポール）：シンガポール市
出張者：山下博司（東北大学大学院教授）
- ⑧ 染め、織り、刺繍の製作現場の現状の調査
出張期間：2013年8月24日～9月28日

- 出張先（インド）：ラージャスターン州、グジャラート州
出張者：上羽陽子（国立民族学博物館准教授）
- ⑨ 染め、織り、刺繍の製作現場の現状に関する継続調査
出張期間：2013年11月30日～12月28日
出張先（インド）：グジャラート州、ウツタルプラデーシュ州、オディシヤ州
出張者：上羽陽子（国立民族学博物館准教授）
- ⑩ 野蚕糸生産の実態調査
出張期間：2014年2月25日～3月11日
出張先（インド、ブータン）：アッサム州、ブータン
出張者：上羽陽子（国立民族学博物館准教授）
- ⑪ インド南部の経済発展と社会変化に関する聞き取り調査
出張期間：2013年8月21日～28日
出張先（インド）：タミルナードゥ州クンバコーナム市およびその近郊
出張者：杉本良男（国立民族学博物館教授）
- ⑫ 神霊信仰にもとづく舞踊芸能の脱領域的広がりに関する実態調査
出張期間：2014年3月19日～3月31日
出張先（ドバイ）：ドバイ市
出張者：竹村嘉晃（国立民族学博物館外来研究員）
- ⑬ フランスにおけるインド人音楽家の音楽活動とフランス政府の芸能振興などの実態調査
出張期間：2013年8月7日～8月15日
出張先（フランス）：パリ市
出張者：田森雅一（東京大学非常勤講師）
- ⑭ インド伝統音楽の海外における伝承に関する実態調査
出張期間：2013年8月7日～8月29日
出張先（カナダ）：トロント市
出張者：寺田吉孝（国立民族学博物館教授）
- ⑮ 両大戦間期の南アジア・東南アジアにおける日本製装飾タイルの受容に関する実態調査
出張期間：2014年2月17日～3月18日
出張先（インド、インドネシア、シンガポール、マレーシア）：左記各国の諸都市
出張者：豊山亜希（国立民族学博物館外来研究員）

資料整備

現代インドの宗教と文化の動態に関する文化人類学およびその関連分野の研究図書および民族誌のなかから、国立民族学博物館に未だ所蔵されていないもの38冊を購入した。購入書籍は、本拠点事務局内の書架に配架した。

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家 沖 守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する作業を行った。スライド写真2万点あまりとその関連文書資料を沖氏から国立民族学博物館に寄贈していただくための交渉を支援した。また、受け入れ完了後は資料の点検・調査を行い、スライド写真8,600点余りのデジタル化、および5,000点余りについては写真情報の打ち込み作業を行った。関連文書資料は国立民族学博物館と協力して内容を精査し、効果的な保存・公開方法について沖氏の要望も聞きながら検討を行っている。

日本関連在外資料調査研究

「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」

代表者：近藤雅樹（～2013年8月）、佐々木史郎（2013年9月～）

19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち、まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを、可能な限り総合的に調査研究する。その際、少なくとも資料に関する詳細なデータをできる限り多く共有することで、同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち、いくつかのモデルケースを設定し、国内外の研究者コミュニティが、詳細な「記録」というかたちであれ、「実物」のままであれ、未来にわたって「共有」するために、長期にわたって継続でき、かつ成果を広く共有しうる調査方

法と実現できる調査計画と公開方法を立案、実行する。同時に、すでに目録が整備されているもののうち、相互利用に関する合意ができる場合は、協定など利用規程を定めたうえで「共用」化を進める。さらに、資料群の現状（状態）を把握することで、今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指す。

毎年度海外の博物館等の研究者を招聘し、国際フォーラムを開催する。この国際フォーラムは「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」（代表：近藤雅樹、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」の一環）の企画である。その目的は、バルト海沿岸地域の諸都市を中心に博物館などが所蔵する日本および東アジア関連の民族資料（物品、写真、映像、文献など）を6か年計画で幅広く調査し、未紹介資料を含めて概要を明らかにしようとするものである。

成果

- 1) ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（サンクトペテルブルク）において日本関連資料のうち刀剣類の悉皆調査を実施した。
- 2) デンマーク国立博物館（コペンハーゲン）において日本関連資料の悉皆調査を実施した。
- 3) 2014年2月にボーフム大学で実施した機構主催の国際シンポジウムで加藤幸治が北欧調査の成果について報告した。
- 4) 2012年度の国際フォーラム実施報告書を刊行した。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

国内シンポジウム「渋沢敬三を語る——偉大なる学問の庇護者」

2013年10月13日 国立民族学博物館

代表者：久保正敏

民族学のみならず、渋沢敬三が支援した研究者の専門領域は多岐にわたる。巨額の私費を投じて大勢の研究者を育成したにもかかわらず、その功績は世間に周知されておらず、渋沢敬三の名前も一般にはあまり知られていない。それは一に渋沢敬三自身の一貫した匿名性によるところが大きい。

渋沢敬三は、彼自身すぐれた学究の徒であった。また学問的指導者、研究の組織者としてもすぐれたリーダーシップを発揮した。

このシンポジウムは、そのような渋沢敬三の素顔に迫り、学問のあり方に対する理念と功績を、没後50年を機に明らかにしようとするものである。

実施状況

2013年10月13日、本館講堂において、以下のプログラムでシンポジウムを開催した。一般参加者は約130名であった。

須藤健一（国立民族学博物館）「開催の挨拶」

久保正敏（国立民族学博物館）「趣旨説明」

井上 潤（渋沢史料館）「祭魚洞・渋沢敬三というひと」

内田幸彦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）「渋沢敬三と父祖の地・埼玉県——アチックミュージアム・コレクションを中心に」

武田晴人（東京大学大学院）「銀行家渋沢敬三」

宮本瑞夫（宮本記念財団）「映像人類学の先駆者」

全 員「ディスカッション」

成果

渋沢敬三は、学問の基本はData Firstであるとの信念から、様々な資料を収集してきた。民俗学・民族学に関わるモノ資料だけでなく、映像や写真資料、さらには経済や流通に関する資料をも収集し、それに基づくアーカイブズ形成や博物館設立の構想を打ち立てた。彼の学問は、常に庶民目線に基づいており、人々を国民ではなく常民と呼ぼうとする姿勢にも如実に示されている。彼の謙虚な研究態度や人への接し方は、学際的な共同研究を組織し、それをパトロン、学問的庇護者として展開させていく原動力となり、多くの学徒がそこから育っていったことが、あらためて明らかとなった。学問研究が祖国興隆の基礎である、そのための人作り、組織作りを重視すべきだ、という彼の思想は、現在の我々にとっても大きな指針となる。

彼の収集した資料は、その多岐にわたる性格から、現在では各機関にまたがって収蔵されているが、彼の遺志を受けて、今後はそれらを横断するアーカイブズ化とその連携が必要であることが、シンポジウムのディスカッサント全員の間で共有できたのは、本シンポジウムの大きな成果である。

発表やディスカッションを完全に記録しており、それに基づいた報告書を、『国立民族学博物館調査報告』(SER)などで発表することを計画している。

国際シンポジウム「北太平洋沿岸諸文化の比較研究——先住権と海洋資源の利用を中心に」

2014年1月11日～1月13日

代表者：岸上伸啓

本シンポジウムの目的は、北太平洋沿岸諸文化についての研究者15名を国内外から招聘し、研究の成果と調査の現状に関する比較検討することである。また、本シンポジウムを基に、北太平洋沿岸諸文化の研究ネットワークの形成を目指す。

本シンポジウムでは北太平洋沿岸諸文化における先住権と海洋資源の利用の現状に焦点をあて、3部に分けて比較検討する。第1部では日本における北太平洋沿岸諸文化に関する最新の研究成果を報告し、比較検討する。第2部と第3部では米国、カナダ、ロシアにおける北太平洋沿岸諸文化に関する最新の研究成果と連携研究の現状について報告し、比較検討する。その上で、本館とアラスカ大学、アリゾナ大学、ワシントン大学、プロティッシュ・コロンビア大学を核として北太平洋沿岸諸文化研究ネットワークの形成を検討する。

実施状況

今回、北太平洋沿岸諸先住民文化と調査の現状について比較検討するためのシンポジウムを、第一線で活躍している研究者を国内外から招聘して、実施した。また、本シンポジウムを基に、北太平洋沿岸諸先住民文化に関する研究ネットワークの形成を目指すものである。

本シンポジウムでは、米国やカナダなど6か国から23名の研究者を招聘し、北太平洋沿岸先住民文化および調査の現状について比較検討を行い、115名の参加者を得た。

成果

本シンポジウムでは、先住民の先住権と海洋資源の利用の現状に焦点をあて、3部に分けて報告と検討がなされた。

第1部では日本における環北太平洋沿岸諸先住民文化に関する最新の研究成果について報告と検討が行われた。第2部と第3部では、米国やカナダなど諸外国の研究者による北太平洋沿岸諸先住民文化に関する最新の研究成果と連携研究の現状について報告と検討が行われた。その上で、北太平洋沿岸諸先住民文化研究ネットワークの形成について議論がなされ、本館と北海道大学、東北大学、アラスカ大学、アリゾナ大学、ワシントン大学、プリティッシュ・コロンビア大学等を核とした研究ネットワークが結成されることが決まった。

国際シンポジウム「個人・家族・国家のゆくえ——文化人類学と人口学からの学際的アプローチ」

2014年3月1日～3月2日

代表者：三島禎子

このシンポジウムは、本館とフランス国立パリ・デカルト大学人口開発研究所との学術提携にもとづき、学際的な国際共同研究の一環としておこなうものである。

今日の複雑な社会における個人と家族、国家が直面する課題を、サブサハラ・アフリカ地域の人口問題に絞り、国際人口移動や保健医療、ジェンダー、家族などのテーマから検討する。その際、それぞれが意思決定の主体とみなされる個人と家族、国家などの場において、文化人類学と人口学を中核として分析対象の定義と分析概念を確認しつつ、理論的考察をめざすところに特徴が見いだされる。

人口学は国家政策と深く結びついているゆえに、個人や家族の意思決定の多様化に対応することが将来的課題である。一方、文化人類学は現代社会の新しい枠組みに即した研究をすることが求められている。本研究は、このような学問領域の葛藤と模索を踏まえ、現代アフリカ社会の具体的事例を取りあげながら両分野の理論的考察をめざし、同時にこれらの成果を日仏の援助機関などと共有することによって、研究の社会的実践の場とする。

実施状況

2014年3月1日～3月2日の2日間、国立民族学博物館において、国際シンポジウム「個人・家族・国家のゆくえ——文化人類学と人口学からの学際的アプローチ」を日仏同時通訳付きで開催した。本館が学術交流協定を結んだフランス国立パリ・デカルト大学との共催により実現したもので、同大学からフランス人7人が来日した。併せて、国際移住機関ナイロビ事務所からも専門官を招聘した。

2日間のシンポジウムでは、人口学と文化人類学の融合に関する基調講演に引き続き、4つのセッションでアフリカにおける人口問題を国際移動と保健医療について検討した。それに続く最後のセッションでは、日本やフランスのNGOおよび開発機関の参加者とともに、援助プログラムに社会・人文科学がどのような貢献をすることができるのかという点について議論した。

成果

シンポジウムには総勢99人（初日54人、2日目45人）の参加があった。この中には17人の一般参加もあり、アフリカや開発援助について社会の高い関心が示された。開発の対象地域のデータを必要とする開発援助機関と研究機関が協働できる部分について理解が得られた。それにより、本館が市民社会と援助の世界および学問との接点を設定し、フォーラムとしての本館の社会的意義があらためて確認された。

今後、シンポジウムの成果はフランス語と日本語での出版が予定され、フランスではすでに出版社の同意が得られている。また両機関のインターネットサイトを通じて、成果を公表することも検討中である。

公開シンポジウム「片倉もとこ先生をフィールド・ワークする」

2014年3月29日 国立民族学博物館

代表者：岸上伸啓・中牧弘允（国立民族学博物館名誉教授）

片倉もとこ先生（国立民族学博物館名誉教授、国際日本文化研究センター元所長／名誉教授、元比較文明学会副会長）は、2013年2月23日に逝去された。没後1周年を機に、イスラーム研究を中心に文化人類学、比較文明学等の幅広い分野で国際的に活躍された片倉先生の研究業績を振り返り、それを一層発展させていくための公開シンポジウム「片倉もとこ先生をフィールド・ワークする」を企画した。

実施状況

総合司会：中牧弘允（国立民族学博物館名誉教授、比較文明学会副会長（関西支部長）、吹田市立博物館長）

13：30～13：45 挨拶 須藤健一（国立民族学博物館長）

小松和彦（国際日本文化研究センター所長）

趣旨説明 中牧弘允

13：45～14：15 講演 1 「イスラームの世界観——アラビアンナイトから考える」西尾哲夫（国立民族学博物館教授）

14：15～14：45 講演 2 「イスラームの音文化」龍村あや子（京都市立芸術大学教授、比較文明学会理事（関西支部副支部長））

15：00～15：55 パネル1 「イスラームの女性たちは今」、討論

司 会：加藤久典（大阪物療大学教授）

パネリスト：宮治美江子（東京国際大学名誉教授）、鷹木恵子（桜美林大学教授）、中西久枝（同志社大学教授）

16：00～17：00 パネル2 「出会いとフィールド・ワーク」、討論

司 会：三井 泉（日本大学教授）

パネリスト：清水芳見（中央大学教授）、藤本透子（国立民族学博物館助教）、井上章一（国際日本文化研究センター教授）、吹田靖子（片倉先生ご学友）

成果

講演1（西尾哲夫）では、和辻哲郎の「砂漠的人間」と片倉もとこの「ゆとろぎ」の比較を導入とし、アラブ遊牧民の民俗的空間認識と他者観について言語学的分析をおこない、「ゆとろぎ」とも通じあうよそ者を迎え入れる「ダヒール」とよばれる制度をモデル化し、アラビアンナイトの世界観にも言及した。講演2（龍村あや子）では、イスラームの礼拝におけるアザーンの比較をとおして多様な音文化の紹介がなされた。

パネル1では、イスラームの女性の現在につき、チュニジアの民衆革命後の女性たちについて宮治、鷹木からの報告が続き、中西からは、イランの女性とヴェールの問題について、いずれも片倉との関係に触れながら、報告があった。

パネル2では、片倉にすすめられて着手したヨルダンの調査について清水が語り、片倉とは1回しか言葉を交わしたことがなかった藤本がそのときの会話をふまえたカザフスタンのイスラーム社会でのとりくみについて報告した。井上は日文研所長時代の片倉についてエピソードを語り、吹田は節々における片倉との協働の思い出を親友として披露した。

討論では、夫の片倉邦雄氏（元駐UAE、イラク、エジプト大使）が片倉もこのフィールド・ワークの特徴についてコメントした。

●研究フォーラム

国際研究フォーラム「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」

2013年7月14日 国立民族学博物館

代表者：丹羽典生・宮崎広和（国立民族学博物館外国人研究員（客員）・コーネル大学人類学科教授）

本研究フォーラムでは、近年欧米で著しく進展した金融人類学の成果を紹介する。金融人類学は、ウォール街や中央銀行など新しい民族誌的研究の対象を提示するとともに、方法論的にも様々な実験を行い、現代人類学で最も活発な議論が展開されている分野の1つとなっている。また、金融市場の研究を通して貨幣や贈与交換など経済人類学の古典的な問題の再考も行われてきた。このフォーラムでは、とりわけ長年オセアニア民族誌を中心に蓄積されてきた贈与交換論におけるさまざまな知見を踏まえつつ、金融の分析に広角度の文化人類学的視点を提供すると同時に、金融危機など現代金融市場をめぐる諸問題を射程に入れた包括的な経済人類学の構築を目指す。

実施状況

2013年7月13日に、研究フォーラムに関する事前の打ち合わせを本館第3演習室にて行った。翌7月14日に、研究フォーラム「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」を本館第4セミナー室にて開催した。

フォーラムは、3本の発表で構成された。日本中世における債務と贈与の抽象化・効率化をめぐる過程を、桜井英治（東京大学教授）が、オセアニア贈与交換論に依拠しながら分析した。次に、アナリス・ライズ（コーネル大学教授）と宮崎広和が、アベノミクスと金融について分析した。最後に、神山直樹（メリルリンチ証券ストラテジスト）が、贈与交換論の観点から「株式」の概念を再検討した。それぞれの発表について、オセアニア贈与交換論の研究者である山本真鳥、メラネシア貨幣論の研究をしてきた深田淳太郎、そして日本経済史・経営史の中村尚史（東京大学教授）が、コメントを付し、最後にそれを受けて総合討論が行われた。

成果

国際ワークショップ「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」を本館で開催することで、発表者4名、コメンテーター3名の他、参加者が約30名集まり、歴史家、人類学者、金融研究者といった学問分野の異なる研究者相互の交流を図った。世界的にも金融の人類学的研究は、近年着手されはじめたばかりであり、日本ではいまだ存在していなかった。そのため、本ワークショップによる活動を通じて、日本の金融人類学という領域を開拓するとともに、本館を金融人類学の研究拠点のひとつとすることができた。

また、ワークショップを通じて、日本の金融を対象に「贈与交換論」の視点から、歴史学・金融学・経済学の研究者とお互いに連携しつつ、議論を重ねることで、現代社会の状況に合致した包括的な経済人類学を構築する礎石となることができた。その際、贈与、株式、負債の概念について中心的に議論がなされた。

さらに、これらの議論から、金融における期待や希望、夢とリスクや不可知性などを帯びた投資行為は、贈与交換の基本的な態度と共通する側面があることが明らかにされた。

参加者各自による学会発表、原稿作成のほかに、Senri Ethnological Reportsにて成果報告の一部を発表（公表、報告）する予定である。

国際研究フォーラム「ロシアと中国の国境——諸民族の混住する社会における『戦略的パートナーシップ』とは何か?」—
2014年1月8日～1月9日 国立民族学博物館
代表者：小長谷有紀

「戦略的パートナーシップ」とは、自己に利益があることを前提に他者と協力的関係を築くことであり、国際関係をめぐる政治用語として定着している。ロシアと中国のあいだはすでに1996年4月に「戦略的パートナーシップ」を宣言している。本会議では、そうした国際関係のもとにある地域で具体的にどのような社会現象が生じているかを、諸民族の生存戦略という視点から具体的にあらわにするものである。

対象とするのは、ロシアと中国がまさに国境をもって接している中国東北地方である。当該地域には、モンゴル系のバルガ族、ブリヤート族、ダグール族、モンゴル族（ハルチン部やホルチン部）のほか、ツングース系のエヴェンキ族、さらに白系ロシア人、ウクライナ人などが混住している。伝統的に、彼らのあいだでは「アンダ」とよばれる同盟関係があったことはよく知られており、現在でも諸民族の共生がみとめられる。しかし、それらの諸民族は国際関係の急激な変化のもとで関係性を変えている、と考えられている。すなわち、国際政治の用語を参照することによって、現代の国境地域における諸民族関係をより深く読み解くことができるのではないかと期待される。モンゴル研究にとっては、人類学が政治学と学際性を切り結ぶことによって新たな実りがもたらされることになるだろう。

実施状況

予定通り、1月8日～9日の2日間にわたって国際シンポジウムを実施した。

現在、ケンブリッジ大学モンゴル・内陸アジア研究所では、ボーダーに関する文化人類学として研究が進められており、その研究を率いている Caroline Humphrey 名誉教授とその弟子である Franck Billé 氏をはじめとして、彼らと共同研究の経験をもつ4人の研究者（韓国から国際関係を研究する人類学者、アメリカから中国・ロシア関係を研究する人類学者）を招聘した。

一方、政治学の立場からボーダースタディーズを率いている北海道大学スラブ研究センターの岩下明弘教授に参加を要請し、その共同研究者として中国でロシア研究をおこなっている Yang Cheng 教授を招聘した。

館内からは、外来研究員としてロシア連邦ブリヤート共和国から本館に滞在している Olga Shaglanova 氏がコーディネイトから司会までをつとめ、佐々木史郎、小長谷が参加した。

当日は、遠来からの大学院生の参加もふくめて、人類学、政治学、モンゴル研究などの分野からのおよそ10名の聴講者があり、積極的な質問もあり、当問題の関心の深さがうかがわれた。

成果

まず冒頭で、国際政治学の立場から中口関係の急激な変化がもつ研究史上の意味が整理されたうえで、人類学の立場から国および文化による国境認識のちがいが指摘された。次に、政治学の立場から中口国境地域で実施された経済開発の影響評価があり、人類学の立場からは過去の損失に関する記憶が現在の政治キャンペーンに大きく影響するという、影響の異なる側面が指摘された。

ロシア、中国双方の現在のテレビ番組で、当該地域の歴史がどのように放映されているかという観点からの分析からは、現在の政治環境にもとづいて過去が再構成されていることが明らかになった。すなわち、政治学が分析する現状を反映して過去が語られることを人類学が分析するうえで、テレビ番組は格好の対象となるわけである。

現地の人々の実態調査にもとづく4つの研究のうち、3つはブリヤートの研究であり、ロシア、モンゴル、中国の3か国をまたぐ国境地域において越境が新たな集団特性を生んでいることが明らかとなった。一方、もう1つのナナイ（ヘジェ）に関する研究は、中口の国際関係が影響したがゆえに民族誌的記述が原始的な人びとという理解をもたらしたことを明らかにした。

以上のような発表にもとづいて、質疑応答がおこなわれた。その過程で、現地の人々の生活に関して実態的な分析をおこなおうとする人類学の特徴が明瞭となるとともに、政治学にも一定の影響を与えうることが確認された。また、モンゴル研究にとっては、現代のトランスナショナルな動きを捉える枠組みが、本シンポジウムを契機に提示されるだろう。

ただし、国際シンポジウムのタイトルに含まれていた「戦略的パートナーシップ」というキーワードにこだわった研究は少なかつたため、論文集をまとめるにあたっては、より広義なタイトルをつけなければならないと判断された。

発表者9名からの完成原稿の締め切りを2月末とし、オーガナイザーとして小長谷および Olga. Shaglanova 氏に

よる編集作業をへて、研究出版委員会に Senri Ethnological Reports として英語論文集の提出を予定している。

公開フォーラム「古代文明の生成過程——西アジアとアンデス」

2014年1月26日 JPタワーホール&カンファレンス（東京）

代表者：関 雄二

西アジアの文明を専門とする国内の考古学者2名を招聘し、権力生成に関して南米の古代文明と比較する研究フォーラムを古代アメリカ学会の協力を得て行う。これは、科研費プロジェクトの成果公開の一環であり、アンデス文明における権力生成とその変容を相対化するために、経済という視点を共有したうえで、文明間の比較を行うことを特色とする。こうした広い視野に立ったテーマ設定を行うことで、学問領域の細分化が進み、個別具体性への関心が高まり、普遍化、一般化への試みが顧みられない現代の学問潮流に一石を投じることができると考えられる。

このシンポジウムを通じ、西アジアにおいて成立した古代文明の経済的基盤を明らかにするのみならず、権力形成という視点を通して、経済を支えていた農作物、海産物、動物資源、そして他の自然資源自体に刻み込まれた世界観にまで光を当てる予定である。これにより、生態学、あるいはマルクス主義的歴史観の中で矮小化されてきた先史時代の資源利用をより多角的、複合的にとらえることが可能になる。また西アジアと比較することで、アンデス文明の特徴が浮かび上がることは間違いない。結果として、これは文明論の新たな研究動向を一般社会に公表し、人類の未来像を探るための機会を提供することにつながると考えられる。

実施状況

公開フォーラム「古代文明の生成過程——西アジアとアンデス」

日時：2014年1月26日 13:00~16:00 [開場 12:30]

会場：JPタワーホール&カンファレンス ホール1（東京都千代田区丸の内2丁目7番2号 JPタワー4階）

プログラム

13:00~13:05 あいさつ

13:05~13:35 「西アジア最古の『神殿』——アナトリア考古学最新事情」
三宅 裕（筑波大学）

13:35~14:05 「西アジアにおける文明形成と社会変容——最近の調査成果を中心に」
下釜和也（古代オリエント博物館）

14:05~14:35 「古代アンデスの神殿と世界観——ワカ・パルティータ遺跡の壁画をめぐって」
芝田幸一郎（神戸市外国語大学）

14:35~15:05 「ジャガー人間石彫の発見——アンデス文明における社会的格差の出現」
関 雄二（国立民族学博物館）

15:15~16:00 ディスカッション

成果

従来、西アジアでは豊かな自然環境のもと、狩猟採集から農耕定住、余剰生産物の蓄積、そして巨大なモニュメントの建設へと連なる文明形成過程が示されてきた。その一方、アンデスでは西アジアと異なり、神殿を中心とした独自の文明形成過程が指摘されてきた。しかしながら、近年の両地域における調査成果によると、両地域に展開した古代文明についての文明観、あるいは両文明の特性についての議論は大きく変化しつつある。

このことをふまえて、本フォーラムでは最新の調査成果にもとづいた発表がおこなわれた。前半の西アジアの発表では、はじめに三宅氏よりトルコ南東部に位置するギョベックリ・テペ遺跡での発掘調査データを中心に、新石器時代についての新たな社会像が提示された。とくに定住を伴う採集狩猟社会で巨石公共建造物が築かれること自体は、かつて経済基盤を重視する唯物史観が西アジアで隆盛を極めたことを考えると隔世の感を禁じ得ない。次に下釜氏は、新石器時代から銅石器時代までのメソポタミア地域を俯瞰しながら、社会内部に格差のない単純な集落から、首長層が集権的に支配し多くの人口を支える都市集落へと連続的に発展してきた様相を明らかにした。後半のアンデスの発表では、まず、芝田氏がペルー北部海岸ネペーニャ谷のワカ・パルティータ遺跡での調査成果をもとに、神殿における図像表現が天上、地上、地下の世界観と関連している点を示した。また、関はペルー北部高地のパコパンパ遺跡におけるジャガー人間を表した石彫の発見などを通じて、アンデスにおける社会的格差の出現について論じた。そして最後には、両文明の比較検討を含めた総合的な討論がおこなわれた。

●国際研究集会への派遣

国際会議「モンゴルの文化遺産——サンクトペテルブルグおよびウランバートルにおける史料とアーカイブズコレクション」—
2013年4月19日～20日 ロシア科学アカデミー
小長谷有紀

ロシアのなかでもサンクトペテルブルグの諸学術機関には、モンゴルに関する一級の資料が多く保管されており、この学術的利用を促進するために、モンゴル側との協定にもとづいて、初めての国際会議が実施される。協定は2国間であるが、会議にはロシアおよびモンゴル両国以外からも参加することによって、国際的な学術利用のための公開が果たされることになる。この重要な会議に、日本から参加することは、モンゴル研究の日本のプレゼンスを示すうえで重要である。

実施状況

ロシア各地各研究機関およびモンゴルからの研究者のみならず、中国、ハンガリー、ポーランド、日本からの研究者が、およそ30名参加して、2日間にわたって国際会議が開催された。

成果

ロシア人研究者の関心をもっぱら古典的なチベット仏教学の観点に偏っており、チベット語・モンゴル語の言語学的な検討に集中しているのに対して、他の地域からの研究者は、さまざまな資料の利用の可能性を示した。たとえば、ハンガリーのシャルゴジは、チベット仏教の研究の一貫として「地獄絵」をとりあげつつ、その描写が民族誌として利用できることを明示した。

日本から参加したのは、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所の中見立夫氏と小長谷であり、中見氏は日本におけるモンゴル学関係の資料を概説し、小長谷はモンゴル文化財の海外流出に関してレポートした。小長谷の発表は、文献資料ではないために、ひとり異質ではあったが、学術資料の国際的な公開という点で、本会議の意図に沿っており、今後の国際協力が期待された。とくに、ポーランドの研究者の発表が、ポーランド人の研究者がモンゴルから持ち帰った資料を利用するものでありながら、モンゴル人による研究成果を非難し、あたかも自国だけの宝物であるかのようにふるまう傾向にあったため批判が寄せられ、ひとたび流出した在外資料が誰のものか？という問題をなげかけることとなった。資料を現在所有する側と、資料の発祥地である側との二項対立ではなく、資料を利用するという第三者の立場のかかわりがあることによって、対立を避ける「円卓化」が可能になることがあきらかとなったことは、意義深い。

現在、フルペーパーが集められており、2013年中にサンクトペテルブルグから、3か国語（英語、ロシア語、モンゴル語）で刊行される予定である。

「第10回国際狩猟採集社会会議での研究報告」

2013年6月25日～6月28日 リバプール大学（イギリス）
池谷和信

国際狩猟採集社会会議は、世界の狩猟採集民研究者が一堂に集まる会議である。そこでは最先端の研究が報告され、最新の調査内容などの情報交換が行なわれる。このため、この会議で個人研究を報告することによって、世界のなかでの自分の位置を確認することが目的である。

実施状況

今回の会議では、世界中からおおよそ250名の研究者が会議に参加をして、世界の狩猟採集民に関する歴史、現状、将来について活発な論議がなされた。なかでも熱帯の狩猟採集民であるアフリカのピグミーやハツア、東南アジアのブナンなどの研究報告が多かった。同時に、今回は第10回目であるが、Richard Lee や James Woodburn などのように第1回から参加をしている研究者が報告をしているのみならず、初めて参加する若手の研究者の数も多かった点は注目される。さらに、日本での研究が遅れている行動生態学、遺伝学、言語学などの視点からの研究が目立っていた点も新たな研究傾向として指摘できる。

成果

今回の会議は、上述したようにアフリカやアジアにおける熱帯の狩猟採集民を対象にした研究があまりにも多く、

極北や中南米の研究はほとんどなかった。また、各研究者の関心も専門地域に限定することが多く、世界的な視野をもつような研究者がほとんどいないことがわかった。この点で、池谷が代表を努めた「狩猟採集民と隣人とのかわり」(Hunter-Gatherers and their Neighbours) というセッションは、ユニークなものであったと確信している。つまり、これは、本会議のなかで最大規模のものであり、報告は2日間にわたり17件(17名、8か国)の報告がなされたのみならず、アフリカ、アジア、アマゾンやオリノコ地域などの南アメリカの熱帯地域、日本のアイヌ、ロシアのエヴェンキの事例もまた紹介された。また、隣人とは農耕民に限定することなく牧畜民、商業民、行政施行者など様々であり、その関係の年代も17世紀から現在までを対象にしている。今回の個別の研究をうまく統合することは、これまでの狩猟採集民研究をこえる新たな研究枠組みの構築につながるであろう。

その一方で、池谷による個別の報告(Historical Changes of the Relationship between Hunter-Gatherers and Farmers in Botswana)では、カラハリ論争の議論を整理して、自らのフィールドでのエスノヒストリー研究を報告した。これは、これまで研究蓄積のあるカラハリ地域において新たな事実を提示するのみならず、これまでの狩猟採集民と農耕民とのかわりをめぐる多様な事例をまとめあげる1つのモデルを提示することになったであろう。

今回の国際会議への参加によって得られた知見は、『国立民族学博物館研究報告』に研究論文として投稿する計画である。

「第10回 全ロシア人類学者民族学者会議 シンポジウム8『研究史と研究方法論』

セッション31『18世紀のロシア社会近代化におけるクストカーメラと科学アカデミー』

2013年6月30日 ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所

佐々木史郎

ロシア人類学者民族学者会議は今年20周年を迎え、10回目の記念大会となった。この大会において、佐々木は本館と学術協定を結んでいるロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館より、当博物館が計画しているセッションへの参加を呼びかけられた。そのセッションは『研究史と研究方法論』というシンポジウムの枠組みに組み込まれたセッション31「18世紀のロシア社会近代化におけるクストカーメラと科学アカデミー」である。そこで佐々木は「18世紀のアカデミーによる千島列島調査がアイヌ研究に残したもの」(Contribution to the Ainu Study: by the Russian Academic Expedition to the Kuril Islands in the Eighteenth Century)というタイトルで、報告を行うことにした。そこで、ロシア科学アカデミーが行ったカムチャツカ探検とその波及効果で進展した千島探検、そして千島アイヌとの接触がロシアのアイヌ研究、あるいは極東研究にどのような貢献を残したのかという点を明らかにしていきたい。

実施状況

2013年7月3日にロシア科学アカデミー民族学人類学研究所(ロシア連邦モスクワ市レーニン大通り32番)の727番会議室にて、セッションを実施した。セッションは18世紀に創立されたロシア科学アカデミーが、18世紀のロシアにおける学術調査研究に話した役割と今日的な意義を問い直す内容で、代表者はユーリー・チストフロシア科学アカデミー人類学民族学博物館長だった。そこで佐々木は「18世紀のアカデミーによる千島列島調査がアイヌ研究に残したもの」(原題は、Вклад к изучению по айнам: Русскими академическими экспедициями на Курильские острова в XVIII веке)という発表を行い、ペーリング、クラージェニンニコフ、ステラーらをはじめとする18世紀のロシア科学アカデミーのメンバーによるカムチャツカ・千島調査が、その後のアイヌ研究に果たした役割と意義について述べた。彼らの調査そのものはロシアでは有名だが、それを国際的なアイヌ研究という視野から評価したのは今回が初めてである。

成果

佐々木の発表に刺激されて、人類学民族学博物館のメンバーから新たな事実も紹介された。すなわち、佐々木が取り上げたJ. G. Georgiの編著(*Beschreibung aller Nationen des Rußischen Reichs*, 1776)にある千島アイヌのイラストには、白描画が有り、そこに着色して作成されたものであること、その人物が着用している衣装には元になった標本資料があり、それは18世紀のクラージェニンニコフの調査によって収集された衣装であること、そしてその資料は現在人類学民族学博物館に保管されている木綿の衣装(халат 資料番号820-7/2)である可能性が高いことなどが判明した。今後『夷酋列像図』など同時代に我が国で描かれたアイヌ像に関する製作過程や描法などとの比較により、18世紀のアイヌ文化の実像に迫るとともに、当時アイヌと接したロシア、日本の調査者たちのアイヌイメージについてもっと掘り下げることが求められるが、そのための糸口をつかむことができた。

その他、シベリア関係のセッションに出席し、質問、コメントを行った。かつてロシア科学アカデミー民族学研究所はシベリア研究の世界的な中心だったが、ソ連崩壊後の混乱の中で、資金不足に陥り、満足な研究ができない状況におかれた。しかし、ロシア経済が持ち直した2000年代以後は、政府や民間の補助金を得て調査に赴く若手研究者が育ち、ようやく活況を呈してきている。今日の民族学人類学研究所（ソ連時代の民族学研究所）はロシアの民族学・文化人類学の研究センターとしての役割を取り戻し、シベリア研究でも先住民族のエスニシティやアイデンティティの諸問題、新たな宗教活動の問題、開発と伝統文化振興との両立の問題など現代的な諸問題に取り組む姿勢を見せている。ただソ連民族学からの伝統ある歴史的な方法を用いた研究はほとんど見られなかった。

同じセッションでの報告を元に、人類学民族学博物館では論集を作成する予定で、今回の発表を書き直して、そこに投稿する予定である。

「国際伝統音楽評議会 第42回世界大会における研究発表」

2013年7月11日～7月17日 上海音楽院（中国）

寺田吉孝

中国上海市で開催された国際伝統音楽評議会の第42回世界大会に参加し研究発表を行う。

実施状況

中国上海市にある上海音楽院を会場として、2013年7月11日から17日まで7日間にわたり開催された国際伝統音楽評議会（International Council for Traditional Music）の第42回世界大会において研究発表をおこなった。国際伝統音楽評議会は世界最大規模の音楽・芸能学会であり、隔年で世界大会を開催している。本大会の参加者は約550名であり、大会の研究テーマである「マイノリティ音楽・舞踊の表象」「音楽における過去の再考」「民族音楽学、民族舞踊学、音楽教育」「儀礼、宗教とパフォーマンスアート」に沿って、個別発表（約400）、パネル（35）、ラウンドテーブル（6）、映画の上映（6）が実施された。寺田は大会2日目のラウンドテーブル「マイノリティ、音楽、権力」で発表をおこなった。また、大会第3日目の第3セッションで座長を務めたほか、研究グループの総会、各種委員会などに出席した。

成果

ラウンドテーブル「マイノリティ、音楽、パワー」は、2012年8月に開かれた同評議会傘下の研究グループ「音楽とマイノリティ」の国際シンポジウムにおける議論が起点となって企画されたものである。その目的は、音楽研究におけるマイノリティ概念の再検討であり、グローバル化の進行に伴い、マイノリティ／マジョリティ、自己／他者などの二項対立的な概念規定は実効を失いつつあるという共通認識から出発して、新しいマイノリティ概念の形成を目指した。ロシア出身の民族音楽学者インナ・ナロディツカヤ（アメリカ合衆国、ノースウェスタン大学）が座長をつとめ、メンバー3名による報告に基づいて議論をおこなった。報告者は、北米のアジア人の事例をもとに、1）マイノリティは一元的に劣位におかれるのではなく、マイノリティ・マジョリティ関係を形成する複数の軸（民族、宗教、言語、階層、カースト、ジェンダー、セクシュアリティなど）が絡み合っているため、そのよう複合的なアイデンティティと音楽実践との関連を調査する必要があること、2）マイノリティの音楽実践の基底に、力の不均衡に基づく社会関係や被抑圧の歴史が存在するのならば、その記憶装置として機能する身体により注目する必要があることを指摘した。他のプレゼンターからは、北米におけるマイノリティ概念の歴史的な変遷に関する報告（アデライダ・レイェス）、ロシアのアディゲ人の舞踊を事例とした民族間の交流に関する報告（マルジェット・アンザロコヴァ）があり、多角的にマイノリティ概念の再検討をおこなった。また、フロアからも数多くのコメントが寄せられ、活発な議論がおこなわれた。

「第17回国際人類学民族科学連合における民族誌映画作品特集のコーディネーター」

2013年7月30日～8月12日 マンチェスター大学（イギリス）

川瀬 慈

日本の若手による映像人類学研究、民族誌映画制作の水準は、国際的なレベルに比肩するにも関わらず、当該分野の論壇で評価されているどころか、一部の例外を除きほとんど知られていない状況にあった。そのようななか、本上映企画の実施を通じ、我が国の映像人類学研究、民族誌映画制作の新たな潮流を、世界にアピールする。

実施状況

2013年8月にマンチェスター大学で開催された第17回国際人類学民族科学連合（IUAES）において、映像人類学に関する9つの分科会、並びに4つの“region”（日本、中国、ラテンアメリカ、西アフリカ）の研究者作品を特集上映する民族誌映画プログラムが実施された。川瀬はIUAES映像人類学理事として、日本の若手研究者による研究作品の特集上映のコーディネートを行った。

成果

第17回国際人類学民族科学連合（IUAES）当日には、川瀬による、日本の民族誌映画制作の歴史に関わる口頭のプレゼンテーションを行った。それに続き、日本の映像人類学を牽引する若手研究者4名、田沼幸子（大阪大学大学院）、森田良成（大阪大学大学院）、伊藤 悟（国立民族学博物館外来研究員）、分藤大翼（信州大学全学機構）による民族誌映画作品を、各国の映像人類学者の前で、上映発表し、参加者と討論を行った。討論のコーディネーター（ファシリテーター）は川瀬が行った。本企画は、映像人類学研究における日本の研究潮流のアピール、研究交流の足掛かりとなる一歩であったといえる。

各国におけるキューバ移民の夢と希望を描いた田沼による「Cuba Sentimental」は、制作者の立場を前景化するラディカルな方法論をとり、カメルーンのバカピグミーの食文化を描いた分藤の「Jo Joko」は、ピグミーの狩猟採集、食生活に関する多様なエピソードを網羅する詩的なモンタージュ法をとる。これに対し、廃品回収を生業とする西ティモールの集団アナボトルを描いた森田の「Ana Botol in West Timor — Life in the City and Village」は制作者森田によるナレーションを基軸にした観察記録映画、雲南省、宏徳タイ族の葬送儀礼を記録した伊藤による「Sensing the Journey of the Dead」は、字幕やナレーションを排した観察記録映画であった。このように発表者各自の調査地、研究対象、さらには制作方法論も大きく異なる4作品の制作方法論について、大会のホスト校であるマンチェスター大学グラナダ映像人類学センターの関係者をはじめ、雲南大学、ライデン大学、トロムソ大学、フランス国立科学研究センター、ゲッティンゲン大学、バルセロナ大学等の世界の映像人類学主要研究機関の関係者たちが、発表者と活発に議論をまじ合わせた。

本研究の成果は、川瀬が『国立民族学博物館研究報告』において、2014年度中に公表する予定である。

「応用人類学会」

2014年3月18日 ホテルアルバカーキ アット オールドタウン（アメリカ合衆国）

加賀谷真梨

第74回応用人類学会大会に参加し、研究成果を発表する。

実施状況

3月18日に「Children's Bodies and Parenting」というセッションにおいて、「Friction in Value as Represented by Children's Bodies」という題目で発表を行った。

成果

加賀谷は、日本の最南の島に移住してきた30代・40代の子どもを持つ内地出身女性に、自然主義的思考を持つ人が少なくない背景を、島社会における彼女たちの不安定な位置づけと結びつけて考察した。また、必ずしもそうした母親の価値観が子どもに踏襲され母子が島社会で疎外されるのではなく、むしろ在来の住民がその子どもに積極的に働きかけるため、それが母親の思考を更に強化させるプロセスがあること。子どもの身体上で母親と在来の住民との間で子の帰属をめぐる駆け引きが展開されていることを指摘した。

聴講者からのコメントとして、今後本土の同世代の母親との比較や、アメリカの女性との比較に展開していくことが望ましいとの助言を得た。

本学会は学会名の通り、人種、階層、文化の交差点に生じる現象が多々取り上げられており、人類学的調査を通じた問題解決への期待が大きい現状が伺われた。なお、ジェンダーに関心のある複数の研究者との関係性も構築できたことを付言する。

発表原稿に加筆修正を加えて、SfAAの機関誌 *Human Organization*、あるいは、子ども研究の雑誌 *Childhood* に投稿する予定である。

総合研究大学院大学若手教員海外派遣事業

総合研究大学院大学の教育研究の中核を担う若手教員を、海外の独創的・先進的な教育研究を行っている大学・研究機関等に派遣し、専攻する学問分野等の調査研究を通じて教育研究能力等の向上を図り、本学の国際的通用性の向上に資することを目的とし、併せて総研大国際ネットワークを構築するものとして、総合研究大学院大学若手教員海外派遣事業がある。

2013年8月5日～2014年3月31日 アメリカ合衆国

廣瀬浩二郎

今回の在外研究における成果は、以下の3点に要約することができる。1) 米国内の大学、研究者との連携の強化 2) 米国内の博物館・美術館の視察 3) 「触文化」に関する論文、エッセーの執筆。まず1) については、11月～2月の4か月間で8つの大学を訪問し、10回の講演を行った。以下に大学名と講演日を列挙する。

- ・シカゴ大学（日本研究、2013年11月17日）
- ・テキサス大学（日本研究、2013年12月3日）
- ・セントラルワシントン大学（博物館学・人類学、2014年1月21日）
- ・ミシガン大学（日本研究、2014年1月30日）
- ・アラム大学（日本研究、2014年2月4日）
- ・イェール大学（人類学、2014年2月10日）
- ・プリンストン大学（日本研究、2014年2月12日）
- ・モンタナ州立大学（人類学・博物館学、2014年2月27日）

この他、フランス国立東洋言語文化研究所主催の国際シンポジウム「日本文化の独自性」（2013年12月20日）、プリンストン日本語学校（2014年2月6日）、シカゴ地区「天理教よのもと会」（2014年3月23日）、シカゴ市立ナマステ・チャータースクール（2014年3月24日）でも講演した。

講演のテーマは瞽女の歴史、および日本における「さわる展示」「ユニバーサル・ミュージアム」の現状と課題が大半だったが、いずれの参加者も熱心で、多くの研究者と知り合うことができた。予想以上にたくさんの講演依頼をいただいたのは嬉しい。自分の研究内容をまとめ、各地で発表し、それがきっかけとなり、さまざまな大学、個人と情報交換できるのは、長期間の在外研究ならではの魅力といえよう。

次に2) について。8か月の米国滞在中に訪ねた博物館・美術館の数は20館を超えるので、ここでは館名を挙げることは省略する。各館では「さわる展示」やアクセシビリティ（障害者対応）に関して実地調査を行うとともに、担当者と意見交換した。いくつかの美術館に併設された「彫刻庭園」で触学・触楽体験を満喫したことが、米国の思い出として印象に残っている。「さわる展示」やアクセシビリティの分野で、日本に比べ米国のミュージアムの方が先進的だということはなく、意識の高いエデュケーターが個人レベルで展示の改善、プログラム立案に取り組んでいるのが現状だった。「ユニバーサル・ミュージアム」理論の実践という面で、日本はけっして遅れていないという自信を得て帰国することができた。

米国ではアクセシビリティやユニバーサルデザインに関心を持つミュージアム関係者が多様なネットワークを作り、積極的に情報交換しているのが注目される。私自身、このネットワークを活用して、各地の博物館・美術館を訪問することができた。おりしもシカゴ地区では2014年1月に文化施設の有志がアクセシビリティの学習を目的とする協議会を結成し、月1ペースで研修会を開くこととなった。協議会の参加メンバーはまだ少なく、劇場関係者が中心だが、これからの展開が楽しみである。

シカゴの協議会設立の現場に立ち会うことができたのは有意義であり、こういったネットワークの運用方法は、日本でも大いに参考になるに違いない。「さわる展示」、アクセシビリティの本格的な研究は日米ともにまだ日が浅く、今後の発展が期待される分野である。今回の在外研究で培った人的つながりを大切にし、「ユニバーサル・ミュージアム」の国際的ネットワーク構築に向けて、引き続き努力していきたい。

最後に3) について。シカゴ大学では授業・会議への出席義務がなく、自分のペースで自由に研究することができたのがありがたかった。8か月の派遣期間に、「共活という思想」（山下麻衣編『歴史のなかの障害者』法政大学出版局、2014年2月、pp.169-175）、「ユニバーサル・ミュージアムの構想」（黒沢浩編『博物館展示論』講談社、2014年3月、pp.145-157）をはじめ、多くの論文、エッセーを執筆した。

在外研究の最大の成果は、本館のホームページに連載したシカゴ報告「ミドルライフ・ブルース」だろう。合計18回分の記事をアップすることができた。本連載に加筆し、2015年2月には『身体でみる異文化の世界』（仮題、臨川書店）を刊行する予定である。その他、2冊の編著の出版計画を進めることもできた。『大学からのバリアフリ

一』（仮題、京都大学学術出版会）、『世界をさわる』（雑誌「季刊民族学」の連載コラムの単行本化、文理閣）を2014年度中に刊行すべく、最終準備に入っている。シカゴでの研究活動から単著1つ、編著2つが生まれることになる。

館長リーダーシップ経費による事業・調査

企画展（国際連携展示）「アリラン—— The Soul of Korea」の開催

2012年に韓国国立民俗博物館で開催された特別展「アリラン展」の巡回展が世界で開催され、日本会場として2013年5月2日～6月11日の間、韓国国立民俗博物館および旌善アリラン研究所との共同主催による「企画展（国際連携展示）『アリラン—— The Soul of Korea』」を本館にて開催した。さらに、企画展閉幕後は東京の駐日韓国大使館韓国文化院においても開催された。成果としては、韓国文化の底流にあるアリランを日本で紹介することにより、日韓の民間次元の友好を深めることができた。また、会期中に開催したイベント（アリラン公演や講演会）を通して、多くの来館者に韓国文化を肌で感じとってもらうことができた。

国立民族学博物館創設40周年記念・日本文化人類学会創立50周年記念 特別展「民博コレクション イメージの力」（仮称）に係るデータベース及び図録作成並びに東京会場開催準備等

国立民族学博物館創設40周年・日本文化人類学会創立50周年記念事業として、2014年2月から6月まで、東京・国立新美術館において本館の所蔵品を展観する「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を開催し、さらに同展を同年9月から12月まで本館が開催すべく、その展示の企画立案、作品選定、図録の編集執筆を進めた。東京での展示は2月19日に開催し、同時に図録の配布・販売も開始した。

本展では、国立民族学博物館と国立新美術館の協働により、美術（アート）と器物（アーティファクト）、芸術と文化、美術館と博物館、美術史学と文化人類学、西洋と非西洋といったさまざまな既成の区分を改めて問い直す展示企画が実現することとなった。

また、国立民族学博物館のコレクションを首都圏に位置する美術館で公開することにより、国立民族学博物館の収蔵品の価値と文化人類学のもつ役割を国民に周知することができた。

平成25・26年度本館展示新構築に関する資料収集等について

2013年度に新構築する日本の文化のうち「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」展示、2014年度の南アジア展示および東南アジア展示の標本資料収集・映像取材を実施した。

各プロジェクトで提案されている標本・映像音響資料を収集・取材することによって、これまであまり収集されていなかった地域、生活、文化等に関する資料が質・量ともに充実し、当該展示場の新構築を実現させることが可能となった。

東日本大震災被災地における文化遺産の復興支援に関わる情報の収集と整理

2011年3月に発生した東日本大震災と福島第1原子力発電所の事故による被災地および被災者に対し、主として有形・無形を含めた文化遺産の再生支援を通じての、本館としての支援の在り方を検討するため、被災地および各支援組織・団体の活動に関する情報の収集と整理をおこなった。

東日本大震災に関連するモニュメントと震災遺構、語り部活動やガイドツアーに関して、本館ホームページ上の「東日本大震災関係情報」に掲載した。人間文化研究機構の連携研究「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究」との連携のもと、東京文化財研究所を中心とした「無形文化遺産情報ネットワーク」の運営に携わっている方々を本館に招聘し、双方の進行中のプロジェクトについて発表し、情報の共有化と意見交換をおこなった。

日本の文化展示新構築 PR 事業関連 研究公演「雄勝法印神楽 みんぱく公演」

本館では、有形・無形の民俗文化財への支援を実施しており、無形の民俗文化財については、被災地の芸能を本館で演じる「場」を創出し、その芸能の再開のきっかけとする活動をおこなっている。本事業では、三陸沿岸部で伝承されてきた雄勝法印神楽を実施し、来館者に東日本大震災についての関心をもってもらうとともに、新日本の文化展示の「東日本大震災と民博」のコーナーについてより理解を深めてもらい、来館者を新日本展示に誘導することができた。

国際ワークショップ「文理融合実践としての新しいアジア展示がもつ可能性」の実施

この国際ワークショップでは、文理融合実践としてアジア展示の新構築をおこなおうとしているアメリカ自然史博物館の現況を、本館の研究者たちおよび日本国内の研究者たちと共有し、近未来型の博物館展示を構想していくための機会とする。本事業の主たる成果は、本館で展示実践をおこなっている本館の教員たちに、博物館展示の国際学術動向情報を提供できたことにある。かつ、本館の教員たちがアメリカ自然史博物館の研究者たちと議論したことで、新しい博物館展示についての議論を切り開くことが出来たものと評価できる。

この国際ワークショップには、本館とアメリカ自然史博物館との国際協力体制の礎を築くという副次的な成果もみられた。これを契機とし、今後相互のあいだで展示や研究における交流と相互協力が進んでいくものと期待できる。

モンゴル秋祭り「ナマリン・バヤル」

在大阪総領事が元モンゴル国文部副大臣であったことから、総領事の肝いりで、大阪でもモンゴル秋祭りを開催することとなり、関西在住のモンゴル国および中国内モンゴルなどの留学生が集合するとともに、民間活動としてモンゴルとの交流を行っている諸NPO団体も積極的に企画参加し、一般来場者に広くよびかけておこなうことになった。当日は、本館講堂において、開会式、開会に際して馬頭琴をバックに民謡長唄が歌われ、催し物として、現代モンゴルポップ音楽として有名な女性3人組のユニット「KIWI」による演奏が午前、午後1回ずつ行われた。普段NPO活動に従事している人たちが、自分たちの活動を熱心に伝える場となり、国際交流の要としての役割を果たすことができた。他方、大阪府、大阪市、および外務省大阪支部の担当者らが開会式に参加して、本館が国際交流の拠点として機能していることを実証することができた。

(その他館の整備、運営などに関するもの4件)

民博研究懇談会

第248回 2013年4月9日

インゲ・M・ダニエルズ「別の語り方——文化人類学とフォトグラフィー」

第249回 2013年6月19日

浜田明範「結核対策における統治の干渉——ガーナ南部における医療と家族について」

第250回 2013年7月10日

ミリー・クレイトン「日本文化の窓としての百貨店——社会の変動、過去の時代、および将来の展望を読みとる」

第251回 2013年10月23日

金田純平「関西の女性による笑い話の構造」

第252回 2013年11月6日

吉田ゆか子「バリ島文化観光論再考——パロン・ダンスの仮面に着目して」

第253回 2013年12月11日

小長谷有紀「研究の展開マネジメント——小長谷有紀の場合」

第254回 2014年1月8日

山本 睦「アンデス文明形成期社会の動態と考古学調査からはじまる文化遺産管理——ペルー北部ワンカバンパ川流域を事例として」

第255回 2014年2月12日

田村克己「民博25年、ミャンマー35年、人類学45年、そしてタイガース55年」

第256回 2014年2月26日

ペドラム・ホスローネジャード「イランにおける宗教画の広がりとその分類」

第257回 2014年3月19日

咸 翰姫「韓国の近代史を書く——記憶、口述、そして歴史人類学」

2-2 外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2013年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度	
新	基盤研究 (B) 海外	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究	杉本良男	2013 ～2015	
	基盤研究 (C) 一般	水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究	平井京之介	2013 ～2015	
	基盤研究 (C) 一般	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学 ——オセアニア大国の移民を事例に	丹羽典生	2013 ～2016	
	基盤研究 (C) 一般	バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容	飯田 卓	2013 ～2015	
	基盤研究 (C) 一般	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究	鈴木七美	2013 ～2015	
	若手研究 (B)	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究	鈴木博之	2013 ～2016	
	若手研究 (B)	17-19世紀南米ラプラタ地域イエズス会布教区の住民名簿に関する歴史人類学的研究	武田和久	2013 ～2015	
	若手研究 (B)	漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編 ——中・越隣接エリアの調査研究	河合洋尚	2013 ～2015	
	若手研究 (B)	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	川瀬 慈	2013 ～2016	
	若手研究 (B)	高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究	加賀谷真梨	2013 ～2015	
	若手研究 (B)	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	太田心平	2013 ～2016	
	規	挑戦的萌芽研究	動的共創型デジタルアーカイブズ構築 ——梅棹忠夫資料に基づいて	久保正敏	2013 ～2014
		研究活動スタート支援	西アフリカにおける生権力の複数性 ——ガーナ南部における結核対策を事例に	浜田明範	2013 ～2014
	研究活動スタート支援	モノからみる芸能文化のグローバル化 ——バリの仮面と楽器を事例として	吉田ゆか子	2013 ～2014	
	研究成果公開促進費 (学術図書)	無文字社会における歴史の生成と記憶の技法	大場千景	2013	
	研究成果公開促進費 (学術図書)	「開発」を生きる仏教僧	岡部真由美	2013	
	研究成果公開促進費 (学術図書)	現代インドに生きる〈改宗仏教徒〉	舟橋健太	2013	
	研究成果公開促進費 (データベース)	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2013 ～2016	
	特別研究員奨励費	紀元後5世紀イロバング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究	市川 彰	2013 ～2015	
	特別研究員奨励費	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究 ——ポリネシアにおける贈与の全体性	比嘉夏子	2013 ～2015	
継	基盤研究 (S)	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	關 雄二	2011 ～2015	
続	基盤研究 (A) 一般	モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究	小長谷有紀	2009 ～2013	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究 ——「高地文明」の発見に向けて	山本紀夫	2011 ～2015	

	基盤研究 (A) 一般	世界の中のアフリカ史の再構築	竹沢尚一郎	2012 ～2015
	基盤研究 (A) 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016
	基盤研究 (B) 一般	中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究	山中由里子	2010 ～2014
	基盤研究 (B) 一般	社会的包摂のための実践人類学的研究	鈴木 紀	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権	岸上伸啓	2009 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究 ——学術、制度、当事者の相互作用	野林厚志	2010 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動	田辺繁治	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	インド音楽・舞踏のグローバル化に関する総合的研究	寺田吉孝	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究	Peter J. Matthews	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	宗教と移民のアイデンティティ・共生 ——南アジア系ディアスポラを事例として	辻 輝之	2011 ～2014
	基盤研究 (B) 一般	劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発	園田直子	2012 ～2014
継	基盤研究 (B) 一般	映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究	福岡正太	2012 ～2014
	基盤研究 (C) 一般	21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究 ——ベルリン外国人集住地区の事例	森 明子	2010 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究	吉本 忍	2011 ～2013
続	基盤研究 (C) 一般	現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ	韓 敏	2011 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究	笹原亮二	2011 ～2014
	基盤研究 (C) 一般	博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究	松岡葉月	2012 ～2014
	基盤研究 (C) 一般	海外生産の技術移転の実態調査	出水 力	2011 ～2013
	若手研究 (B)	ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究	宮本万里	2010 ～2013
	若手研究 (B)	チャム系住民とイスラームの関係に関する地域間比較研究	吉本康子	2011 ～2013
	若手研究 (B)	現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究	相島葉月	2012 ～2015
	研究活動スタート支援	ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態 ——楽器の製造・流通に着目して	柳沢英輔	2012 ～2013
	研究活動スタート支援	生理用品の流入による女性の身体観の変容 ——パプアニューギニアの事例から	新本万里子	2012 ～2013
	研究活動スタート支援	現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究	呉屋淳子	2012 ～2013
	研究活動スタート支援	ベトナム・ハノイにおける都市民衆の相互扶助に関する人類学的研究	長坂康代	2012 ～2013
	研究活動スタート支援	女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多角的リアリティの解明——タイを事例に	松井智子	2012 ～2014
	特別研究員奨励費	民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築	梶丸 岳	2011 ～2013

継 続	特別研究員奨励費	タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究	八塚春名	2012 ～2014
	特別研究員奨励費	タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究	岡部真由美	2012 ～2014
	特別研究員奨励費	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究	小長谷有紀 Caijilahu (サイジラホ)	2012 ～2014

【新規】

基盤研究 (B) 海外

経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究

代表者 杉本良男

目的・内容

本研究は、1990年代以降のインド社会の構造変動について、南インド、タミルナードゥ州および周辺諸地域を対象に、人類学者と経済学者、地理学者などとの協働により、共同調査、資料収集、文献研究を実施して、総合的・全体関連的に研究しようとするものである。とくに、カースト制を基盤とする農村社会の比重が高かった南インドにおいて、メガシティや海外を結ぶグローバル化が進行するとともに、1) 農村と地方都市を包摂する「地域(ナードゥ)・ネットワーク」を基本単位とする伝統的な社会構造の空洞化が進み(社会経済的基盤の崩壊)、2) カースト制がむしろ都市的・国家的な政治的・イデオロギックな基盤へと変化している(社会政治的意義の拡大)、構造的な社会変動の実態について実証的に明らかにすることを目的としている。

活動報告

- 1) 南インド、タミルナードゥ州タンジャーウール県クンバコーナム市および近郊農村において共同の村落調査を実施した。また、2011、2012年に同地域で実施した調査資料の整理作業を行い、1990、1991年の調査資料と比較分析を行った。その結果、とくに女性の教育水準の変化が著しいこと、耐久消費財の急速な普及に政治的要因が強く働いていることなどが、実証的に明らかになった。
- 2) チェンナイ市のMadras Institute of Development Studiesにおいて南インドにおける工業発展に関する資料を収集し、また1980年代末に実施したティルチラーパッリ県の村落社会調査資料を分析し、クンバコーナム地域と同様、教育水準の大幅な工場が見られることが実証的に明らかになった。
- 3) タミルナードゥ州各地におけるキリスト教におけるカースト問題について調査を実施し、とくに改宗法の施行以後、キリスト教内部でのカースト問題が一層先鋭化している実態が明らかになった。
- 4) ケーララ州起源の神霊信仰が、デリー、バンガロールなどの大都市、そして海外にまで広がり、それがまたケーララ社会に影響を及ぼし、さらに世界を巡るような環流現象が顕著であることが明らかになった。
- 5) ナグプールのマハール・カースト仏教徒の集住地区に拠点における調査により、改宗をめぐる元不可触民ヒンドゥー教徒との緊張関係が生じていること、グジャラートにおいてヒンドゥー教とカーストとの連関調査によりグローバル化の影響が大きいこと、などが明らかになった

本年度は、調査対象村落における世帯聴取調査資料をエクセル・データ化し、分析を進めるとともに、補充調査を実施し、実証的研究としての質が飛躍的に高まった。また、クンバコーナム地域、ティルチラーパッリ地域において経済自由化前に実施した調査資料との比較検討が進み、さまざまな面での構造変化の実相が明らかになってきている。さらに、在外インド人の活動などによってグローバル化の影響が都市を経由して農村にまで及んでいることも視野に入ってきた。その意味で、「比較」研究の実が上がり、構造的な社会変化について説得的に実証する見通しができている。

基盤研究 (C) 一般

水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究

代表者 平井京之介

目的・内容

本計画は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本計画では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NGO「水俣病センター相思社」をコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社

会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

活動報告

本年度は、相思社および水俣市周辺において、約2か月間にわたる現地調査を実施し、水俣病被害者支援NPO「水俣病センター相思社」（以下、相思社）の現在の活動内容、組織形態、メンバーの社会的属性、メンバーどうしの関係、所有する運動の資源等についてデータを収集した。その結果、2005年に実施した調査結果と比べて2つの大きな変化が生じていることが明らかになった。

ひとつは、世代交代の進行である。90年代以降、相思社の活動をリードしてきた60歳代のメンバーに代わり、30歳前後の新しいメンバーが活動の中心になっており、それにとまって活動の方向性や運営方法等に変化が顕れ、ときにはそれがさまざまな困難を生じさせていることが明らかになった。このことは、相思社という個別の団体に限られた問題ではなく、水俣で被害者を支援している多くの市民団体において観察されることであることもわかった。

もうひとつは、市民団体と行政との関係の変化である。研究者は現地調査において、相思社のメンバーとともに、水俣市および熊本市でおこなわれた国際水銀条約会議、水俣市立水俣病資料館の展示リニューアル検討会議に準備段階から参加した。これらの活動を通じて、これまで敵対的な態度をとることが多かった水俣病被害者を支援する市民団体と熊本県や水俣市とのあいだで、少しずつではあるが信頼関係が醸成され、ときに協働するようにさえなっていることが観察された。このことは、市民団体の活動の方向性を理解するうえできわめて重要な要件であり、今後も注視していくことが必要である。

基盤研究 (C) 一般

トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学——オセアニア大国の移民を事例に

代表者 丹羽典生

目的・内容

本研究は、第三世界における社会運動の特質の一端を、オセアニアをフィールドとして解明することを目的としている。オセアニアにおいては、植民地時代の宗教的・反植民地的運動、プロトナショナリズム運動の時代を経て、1980年代後半以降グローバル化の影響のもと、暴動から民族紛争、クーデタが生起する中で様々な政治的な社会運動が再度活性化している。本研究では、理論的には1980年代以降の新たな社会運動、参加型民主主義の研究、事例としては移民コミュニティと宗教復興やナショナリズムとの相関関係に関する研究を念頭に置きつつ、民族誌的記述分析を通じて、社会運動に関する文化人類学的考察を行う。最終的には、グローバル化された現在の社会運動の特質を明らかにし、さらには社会運動論に対する理論的貢献を試みたい。

活動報告

本年度は、これまで収集してきた研究関係資料の集約と整理に予算を用いることで、未整理であった資料のデータベース化を進めた。

成果としては、ハワイで開催された国際学会オセアニア社会人類学会にて研究発表を行った（「Ethnographic Research and Written Fijian Testimonies: from Studies of Social Movements Around 1950」）。国内では、日本オセアニア学会および各種の研究会にて発表を行った。

また、本研究課題のための集まりをもち、研究に関する情報交換を行った。以上の学会、研究会の場では、来年度以降の調査のため専門家相互の情報ネットワークを構築することを試みた。特に国際学会では、本研究課題ともかかわるプロジェクトの遂行について海外および現地人研究者とのあいだで将来に向けての打ち合わせを行った。

著作・論文については、編著を編集中であり、原稿が概ね集まりつつある。近日中の刊行を目指して編集を進めている。

基盤研究 (C) 一般

バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容

代表者 飯田 卓

目的・内容

本研究の目的は、2009年初頭以降のマダガスカル暫定政権下において、村落部の生活がこうむった影響を明らかにすることである。この時期、国家の統治力が減退したにもかかわらず、国外との結びつきは遮断されず、むしろますます緊密なものとなった。この結果、国家が明確な方針をもたないまま国外企業の活動を許してしまい、とくに村落部ではさまざまな輸出天然資源の採取が活発化するようになってきている。このように国家の調整を受けずいわずバイパスするかたちでおこなわれる民間活動の実態を、小生産者からの聞きとりによって把握し、村落部住民の

行動や地域構造に与えた効果を主として現地調査によって明らかにする。

活動報告

2013年末におこなわれた大統領選挙により、マダガスカルは5年にわたる暫定政権期に終止符を打ったが、首相指名に多大な時間を要するなど、国政が安定するにはいたっていない。こうしたなかで、国家の統治力が減退したまま国外企業が活発に動くという状況は変わっておらず、当初予定の調査を遂行することができた。

とくに、砂金採取がおこなわれている山麓部河川流域では、中国系企業が選鉱機械を導入しており、現地の労働力を雇用して砂金採取をする見返りに道路を拡幅・整備しているらしいことがわかった。この企業活動は、本研究が想定していたバイパス型私企業活動によく合致しており、今後もしこの活動を追跡調査できれば、その特色を明らかにできると期待できる。

また、それとは別に、人道的支援と称して山間部の住宅新築を奨励するフランス系 NGO にも接触をはかった。この NGO は、ユネスコが無形文化遺産に登録している家屋装飾の木彫りを保護伝承するため、木造家屋だけの新築を奨励しており、非伝統的な素材を使った家を壊すことを条件に無償援助をおこなっていた。しかし、そのために木材資源が少なくなってきたり、建材に適さない種類が代用されたり、適した種類であっても長もちする老木でなく傷みやすい若木が使われるなど、かえって木彫り実践の寿命を縮めるのではないかという懸念が出はじめている。この現象に関しては、本研究が終了した後も調査を継続することで、バイパス型私企業活動の問題点を明らかにできると考えられる。

基盤研究(C) 一般

スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究

代表者 鈴木七美

目的・内容

社会の高齢化に伴い、完治困難な心身の不調への対応として、養生法や代替医療への関心が高まっている。本研究の目的は、「補完代替医療 (CAM)」や「ヒーリング・オルタナティヴス」とも呼ばれてきた、近代西洋医学 (コスモポリタン医学) に一体化されない代替医療や養生の実践と、地域における治療・養生に関する考え方や制度との関係を、高齢者ケアの充実という観点から検討することである。

調査対象とする主な地域は、近代西洋医学とホメオパシー (同種療法) の併用を基盤として植物療法など多様な民間医療・代替医療が実践されてきたスイスである。ホメオパシーおよび植物療法に関し、スイスと影響関係にあるドイツやアメリカ合衆国と比較しつつ検討することにより、地域資源を生かした治療やヒーリングの実践の可能性について、様々な領域の研究者・実践者が参照可能な形で、フィールドワークに基づく成果を具体的に呈示する。

活動報告

社会の高齢化に伴い、心身の不調への対応として、養生法や代替医療への関心が高まっている。本研究の目的は、「補完代替医療 (CAM)」や「ヒーリング・オルタナティヴス」とも呼ばれてきた、近代西洋医学 (コスモポリタン医学) に一体化されない代替医療や養生の実践と、地域における治療・養生に関する考え方との関係を、高齢期の充実という観点から検討することである。

近代西洋医学と多様な民間医療・代替医療が実践されてきたスイス、およびホメオパシー (同毒療法) や植物療法に関し、スイスと影響関係にあるドイツやアメリカ合衆国と比較しつつ、情報収集・現地調査を展開した。健康長寿との関係で注目されている代替医療の中でも、現代医療と併用されているホメオパシーを中心に、ドイツのロバート・ボッシュ研究所にて集中的に基本的情報・資料収集を行った。また、高齢者が暮らしやすい町づくりを推進しているハイデルベルク市において、高齢者と若者世代が共に作る環境と養生に配慮した暮らしの場について、情報を収集した。高齢者ケアと補完代替医療については、スイス中部地域において、高齢者ケアにフィットセラピーを活用している高齢者対象生活支援付き住居施設で基本的資料を収集し現地調査を行った。この施設は、障害者が学び働く場、子どもたちの教育の場、農産物生産の場、コンサートホールやレストラン・ホテルなど外部に開かれた場などを併設する統合的施設である。

地域資源を生かした治療やヒーリングの実践の可能性について、国内外の研究集会で発表し議論を深め、情報収集した。高齢者のウェルビーイングと生活に関する情報を収集し、議論を深めるため、国際民族科学連合 (IUAES) 2013世界大会に参加し、健康長寿・多世代共生をテーマとした国際パネルで発表した。また、ウェルビーイングとケア・養生の文化に関し、第20回日本未病システム学会学術総会にて、招待講演を行った。

若手研究 (B)**言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究**

代表者 鈴木博之

目的・内容

チベット文化圏の南東端に位置し、他の民族文化圏と接する中国雲南省北西部で話されるチベット語諸方言は、その分布地域の範囲に照らして非常に大きな多様性を持っている。本研究では、同地のチベット語諸方言が多様で独特の言語特徴をいかに持つようになったのかという問題を提起し、同地の多言語状況に配慮しながら、記述言語学の方法論を用いて数十地点にわたる語彙・文法事項に関する方言調査によって得られたデータを、比較言語学および地理言語学の方法論で分析することを通じてこの問題を解明することを目的とする。

活動報告

本研究は1) 臨地調査と、2) データ整理・解釈に分かれる。

1) については、短期の臨地調査を3度行い、雲南省香格里拉県および維西県において合計5種のカムチベット語方言 (Choswateng, Myigzur, Phuri, Gagatang, sKobsteng) の語彙・文法調査を行った。また、次年度の調査に向けて、村落の選定を行うための基礎情報を収集した。また、村落に伝わる宗教文献も収集し、それにまつわる村民の歴史を口頭で語ってもらい、言語資料として供するだけでなく、移民の年代・状況などを把握する史料価値のあるものを収集できた。

2) については、まず収集した言語データは電子的にデータベース化し、検索可能な電子的資料を作成した。次に、言語地図を作製するベースとして、フリーソフト MANDARA および Google Maps の性能比較を逐次行い、その機能性から、当初予定していた前者ではなく、後者をベースとすることに決定した。また、作成した言語地図を解釈する方法を検討し、語彙形式の多様性に富む語、少数の特定の語彙形式が用いられる語、音韻対応のみが問題になる語、と種別を分けて解釈を加える見通しが立った。

以上の成果に基づいて、論文を4件発表し、口頭発表を3件行った。口頭発表の際には、参加者との交流において、地理言語学の方法論を検討する機会を持つことができ、本研究を推進するために役立った。また、研究最終年度末に予定している単著の執筆について、基本計画を立てた。

若手研究 (B)**17-19世紀南米ラプラタ地域イエズス会布教区の住民名簿に関する歴史人類学的研究**

代表者 武田和久

目的・内容

16-18世紀のスペイン領南米では、王権主導のキリスト教布教が行われた。この過程で作成された記録の中で興味深いのが先住民名簿である。彼らの氏名、年齢、家族構成といったデータを分析することで、先住民の社会や文化の変容プロセスや、こうした変容の帰結が現代に生きるその子孫に与えている諸影響を解明できる。本研究では、南米ラプラタ地域 (現在のパラグアイ南東部、アルゼンチン北東部、ブラジル南部、ウルグアイからなる領域) でイエズス会宣教師が17-18世紀に運営した総数30の布教区と呼ばれる居住地の住民名簿の分析を通じて、先住民社会、文化の変容の過程を、歴史人類学的な観点から分析する。この分析を通じて、およそ3世紀にわたり南米で実践されたキリスト教布教が先住民文化・社会に与えたインパクトを明らかにする。

活動報告

本年度はスペイン、セビリアにおいて在外研究の年に相当した。この機会を利用して、主として、インディアス文書館 (セビリア)、スペイン国立図書館 (マドリッド)、フランス国立図書館 (パリ)、イベロアメリカ研究所 (ベルリン) において、史料ならびに文献調査を実施した。インディアス文書館には、アルゼンチン、ブエノスアイレスの国立文書館が所蔵するイエズス会グアラニ布教区住民名簿の欠損部分 (特に18世紀前半) が収められており、この在外研究期間中に、アルゼンチンの史料の不足分を補うことができた。

また、その他の機関においては、住民名簿の分析を補完する諸文献、具体的には、グアラニ先住民の在来の首長制度についてイエズス会宣教師が17世紀前半に言及した史料や、17世紀後半に軍事役職に就いていたグアラニに言及した、19世紀中葉の刊行史料を入手することができた。

若手研究 (B)

漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究

代表者 河合洋尚

目的・内容

中国／ベトナムの隣接区は、多数の少数民族が居住することで知られているが、最近、漢族を資源として地域的特色を出し、地域経済を推進する動きが強まっている。本研究は、こうした最近の動向に焦点を当て、地方政府、開発業者、旅行会社、地域住民、華僑等が、どのように漢族文化を用いて地域空間の特色を生産してきたのか、国境を超えたポリティクスについて解明することを目的とする。同時に、漢族的な地域空間の生産が、現地の漢族間、漢族／少数民族間関係を再編してきた過程についても明らかにする。本研究では、国境を超えて活動する漢族の下位集団として、とくに客家および客人に焦点を当てる。

活動報告

本年度は、特に漢族の一エスニック集団である客家に焦点を当て、中国広西チワン族自治区、雲南省、ベトナムで調査をおこなった。具体的な調査の項目は、主に、1) 中国からベトナムへの客家の移住、2) ベトナムにおける客家の社会文化生活とアイデンティティの所在、3) ベトナムにおける漢族（客家）的特色の主張と社会空間の再生産、4) ベトナムから中国への帰還と文化的フィードバック、5) 広西チワン族自治区と雲南省における客家的特色の主張と政府の空間政策、の5項目にわたっている。現段階の調査によって明らかになったのは、以下の2点である。

第1に、ベトナムにおける客家の研究は、世界的に非常に限られており、特に現代の民族誌的研究が皆無に近い。それゆえ、ベトナムにおける客家の民族カテゴリー、ルーツ、移動、社会組織、生活文化、アイデンティティについて現地でも聞き取り調査をおこなった。その結果、ベトナムでは、客家は、ホア族、ンガイ族など複数の民族に属しており、前者は広東省、後者は広西チワン族自治区をルーツとしている。特に、前者に関しては客家アイデンティティが強く、客家文化の特殊性を強調し、観音閣など客家を体現する空間を形成している。逆に、後者は、ほとんど客家としての自己認識をもたず、さらに中国、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに再移民している。

第2に、中国では、ベトナムに隣接する広西チワン族自治区の防城港市が、最も多くのンガイ族客家を輩出していることが明らかになった。しかし、ここでは政府が客家を利用した空間政策をおこなっていないため、特に中高年層ではンガイを自称し、客家としての自己認識に乏しい。逆に、ベトナムの国境際から少し離れた北海市、玉林市では政府が客家を利用した空間政策を実施しており、客家ではなかった他の漢族までが客家を自認する現象が顕著になっていることが明らかになった。

若手研究 (B)

アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用

代表者 川瀬 慈

目的・内容

本研究の目的は、エチオピアの無形文化を対象にした民族誌映画を事例に、映像を活用した文化保護モデルの構築を目指すことである。近年、無形文化遺産の保護を推進している UNESCO は、アフリカの無形文化を映像によって記録し活用する方法を推奨している。しかし、国際機関が掲げる記録・保護すべき無形文化遺産の理念と、地域住民の無形文化に対する認識の間に溝があり、対象地域における映像記録の活用に関する議論が十分に行われていない。本研究では、保護すべき「無形文化遺産」について、応用映像人類学的な観点から検討し、今日消滅ないしは著しい変容を強いられているアフリカの無形文化を対象にした望ましい映画制作・活用の指針を示す。

活動報告

2013年度は、民族誌映画「ザフィマニリストスタイルのゆくえ」を制作し、みんなく映画会で公表した。エチオピア北部において調査を行い、伝統的な刺青の変容をテーマにしたインスタレーション作品「Tattoo Gondar」を制作し、東京都写真美術館において開催された第6回恵比寿映像祭において発表した。

ブレーメン大学人類学部、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究科、愛知県立大学、ブリュッセル SoundImageCulture、ルーヴル美術館 Filmforum において、川瀬の作品の特集上映が開催され、すべての上映・討論の場に参加した。川瀬のこれまでの民族誌映像制作と上映活動に対して、日本ナイルエチオピア学会より第19回高島賞が与えられた。

よこはま創造都市センターにおいて開催された第5回アフリカ開発会議（TICAD）パートナー事業「Sound/Art——Tuning in to Africa」、マンチェスター大学において開催された IUAES2013 民族誌映画上映プログラム、上記の第6回恵比寿映像祭に、川瀬は企画の段階から関わり、アフリカの無形文化の映像記録に関心を持つ研究者、アーティスト、行政関係者と交流を行い、無形文化保護における民族誌映画の活用に関する意見交換を行うことができた。

また、2014年に開催が予定されている第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭の作品選抜委員として、出品された作品の審査・選抜、上映プログラムづくりに関わり、アフリカをテーマにした最新の民族誌映画作品に関する情報を収集した。

若手研究 (B)

高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究

代表者 加賀谷真梨

目的・内容

本研究は、介護保険サービスの拡充後もなお「家族」が高齢者の生に対する責任を手放さない要因を「継承」という行為それ自体を重んじる日本人の観念に由来すると仮定し、それを高齢者介護と位牌や土地の相続との相関に関する実態調査を通じて検証する。調査地は、位牌継承における長男の単独相続と親の介護・扶養とが理念的・実体的に結合した沖縄の波照間島と久高島とする。高齢者とその「家族」間にどのようなパワーポリティクスが展開し、数いる成員の中からいかなる論理に基づき特定の介護者が選定され、また、位牌と土地の相続はそれぞれどのような論理で決定されたのか、介護と相続という本来別個な行為が「家族」というチャンネルを通じて同一化／非同化化する局面に立ち現れる論理と、そこに読み取れる合理性を明らかにする。その上で、「家族」が何を希求する集団なのかを見定め、高齢者の生に対する責任を手放さない日本の「家族」の深奥に迫る。

活動報告

2013年度は、領域横断的に国内外の「介護と相続」に関する文献をレビューした。介護サービスを利用しながら自律的な生活を送るために転居も厭わない個人主義が徹底した北欧とは異なり、日本では高齢者の生の有体として血縁家族が認識されてきたため、介護保険法施行後も家族が介護から分離しにくいこと。そうした家族観が、介護者の寄与分を考慮せずに血縁者間で相続の権利を主張し合う事態を招いていることを明らかにした。また、家社会の中国や韓国では、互酬性という論理に基づき配偶者の代襲相続権が認められているのは異なり、日本では家は家に帰属するという家制度下における個の不在が、高齢者介護に互酬の関係を見出していく視座を排除してきたという見立ても導いた。

また、高齢者介護と土地の相続の相関に関する実態調査を行う予定の久高島で展開されてきた土地総有制の沿革を文献を通じて明らかにした。その結果、次年度の現地調査では、土地制度のみならず、家単位で相続される位牌や家屋、屋号の継承論理も明らかにすることで、家永続の願いと土地総有制という2つの矛盾する理念の相克を前景化させ、それらの理念と現実の介護実践とが交錯する有り様を立体的に描出できそうであることがわかった。

2013年度の具体的な研究成果として、本研究課題の調査地の1つである波照間島における介護の実態を日本民俗学会で発表し、その発表原稿に加筆修正を加え、森話社から発刊される『民俗学的人間観の探求』(2014)に寄稿した。

若手研究 (B)

博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明

代表者 太田心平

目的・内容

各国の民族学博物館では、韓国・朝鮮文化の展示が劇的に改装されつつある。本研究では、諸博物館で同時進行するこれらの改装作業を調査し、各準備過程の共通点と相違点を明らかにする。

本研究の目的は2つある。第1は、韓国・朝鮮研究の立場から、民族学、特に知識人類学の分野に理論的に貢献することである。韓国・朝鮮の「真正な文化」が再編される様相を、深層のかつ総合的に分析することで、民族文化の権威的知識が生成されるメカニズムの解明に寄与する。

第2は、博物館展示学に寄与するためのもので、展示の準備過程の国際比較である。同時に進む同類の改装作業を包括的に精査して、展示実践の過程と、近未来の博物館像を演繹的に解明する。本研究は博物館展示を、完成した展示の良悪や善悪や正偽で評価しようとするのではない。その準備過程に潜む文化的な装置に着目し、ブラック・ボックスとされていた展示準備過程を解明するものである。

活動報告

本年度には、日本、米国、ロシアにある3つの民族学博物館で、インタビュー調査および参与観察調査をおこなった。この作業で明らかとなったのは、博物館の展示を創りあげる唯一の主体は学芸員だということこれまでの定説が、大きな誤りを含んでいるということである。実際のところ、展示というものがどういう内容や形態になるかは、学芸員以外の博物館職員、および展示に関わる外部業者の裁量により、大きく左右されることがわかった。

挑戦的萌芽研究

動的共創型デジタルアーカイブズ構築——梅棹忠夫資料に基づいて

代表者 久保正敏

目的・内容

国立民族学博物館（以下、民博）初代館長・梅棹忠夫が残した膨大な資料は、フィールドワーク途上の諸記録だけでなく、生涯にわたる知的生産活動に関わり、幅広い地域と分野をカバーした世界に誇る文化資源である。2011年度来、民博ではこの「梅棹忠夫資料」の整理保存を開始し、目録情報のデータ入力と解析を進めている。

本研究では、入力されたデータに基づき、多分野研究者がそこで見出し記述した資料間の関係性を共有し、動的に共同で知を創出できる共創型デジタルアーカイブズ・システムを構築する。これを多分野研究者が共有することで、民族学史・調査探検史等の解明を共同で進めることが期待できるとともに、他機関でも研究者の残したアーカイブズ資料のデジタル化を進める際のモデルとなることが期待できる。

活動報告

膨大な梅棹忠夫資料のカテゴリー別整理基本方針の策定および内容索引について検討し、まず「時間値・空間値・主題値（キーワード）群」3つ組による内容索引の設計を進めた。時間値については、代表者も関与してきた、人間文化研究機構で開発中のGT-Timeを参考に、JIS X0301などの標準を援用し、かつ必ず〈Begin-End〉の2項表記とすること、あいまいな時間や範囲の表現については、その範囲を年数で示すこと、などを確定した。空間値については、地域中心の緯度・経度、あるいは、囲む四辺の緯度・経度で表記すること、民族名については、既に民博で採用しているHRAFシステムのOWCコードを援用し、対照辞書を作成した。テーマKWについては、同じく、既に作成しているHRAFシステムのOCMコード辞書、および民族学事典等の索引に基づいた辞書を作成中であるが、シソーラスの導入など検討事項が山積している。

資料内の相関関係の発見については、既刊の『梅棹忠夫著作集 別巻 年譜・総索引』のデジタル化に着手した。梅棹忠夫自身、および、長年整理担当を担った者によって作成された総索引項目のデータは、梅棹忠夫資料に特化したシソーラスと見なすことが出来るために、OWCコードの下位カテゴリーに位置づける。また、索引における相互参照は、まさに梅棹忠夫資料間の関係性を示すデータであり、本研究で構築する関係性リンク構造の基礎となるものである。

以上のように、2013年度は、基礎データ作成を中心に研究を進めた。

研究活動スタート支援

西アフリカにおける生権力の複数性——ガーナ南部における結核対策を事例に

代表者 浜田明範

目的・内容

今日、西アフリカで暮らす人々の多くは、ヘルスセンターや病院、薬剤の日常的な利用を通して生物医療と関わっている。人間の生病死に関わる生物医療とそれをめぐる状況への注目は、人々の生活における重要度に加え、科学技術の普及やグローバル化の影響の格好の事例となるという点からも、人類学的研究の有効な出発点を提供してくれる。

本研究の目的は、ガーナ南部における結核対策プロジェクトの展開に注目することにより、生物医療が1) どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、2) どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、3) どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の3点について明らかにすることである。

活動報告

初年度となる2013年度は、当初の予定通り、ガーナ南部の農村地帯における結核対策プログラムに関する文字資料の収集・分析と現地調査を実施した。具体的な成果として、1) 当該地域の結核対策プログラムは患者の発見に力を入れていること、2) 看護師に対する働きかけが焦点化していること、の2点が明らかになった。

ガーナにおける結核に関する文字資料は、結核のみに焦点を当てたものよりも感染症対策という枠組みの中でHIV/AIDSやマラリアなどと共に包括的に議論しているものが多い。それらを含め、現地やネットを通じて収集した文字資料を分析した結果、結核対策に関しては投薬管理などの患者に対する統治は一定の水準を満たしているとされ、結核に感染しているながら患者と診断されていない人をより多く発見するための対策に重点が置かれていることがわかった。

現地調査を実施した農村地帯においては、患者の発見は看護師への働きかけを通じて強化することが目指されていた。看護師たちは、外来を訪れた、咳を頻繁にしている患者に塗抹検査を指示したうえで、その結果にかかわら

ず登録し、リストを作成している。その上で、そのリストに基づいて家庭訪問という形で村落内部を歩き回りながら、結核やその他の病気が疑われる患者を発見することが求められていた。

このように、当該地域の結核対策プロジェクトでは、投薬管理のような患者に対する統治よりは看護師に対する統治が重視されている。しかし、このことはガーナ政府が主張しているように患者への投薬管理がすでに十分にうまくいっていることを必ずしも意味しない。現地調査では、患者に対する投薬管理に対する看護師の遠慮のようなものを感じる場面が多々あり、薬剤の服用が定められた通りなされているかどうかは必ずしも確認されていないからである。

研究活動スタート支援

モノからみる芸能文化のグローバル化——バリの仮面と楽器を事例として

代表者 吉田ゆか子

目的・内容

本研究は、世界各地で現地の芸能家によって演奏や上演に用いられるようになった、バリのガムラン楽器および仮面が、その後各地の人々とのどのように関わっているのかを明らかにする。バリでは、楽器や仮面は神格（あるいはその力）を宿す存在である。これらのモノが新たな土地でどのように扱われ、またその土地のモノの配置（e.g. 住環境）や物質文化や音楽文化にどのように影響され、また現地の人々にどのような働きかけをしているのかを、日本、北米、香港、ジャワ島の事例から明らかにする。また、米国や日本でみられる、自作のガムラン楽器や仮面の利用実態も明らかにし、これらのモノが、現地のバリ芸能実践にいかなる影響を与えるのかも考察する。民族芸能のグローバル化という現象を、モノの側から考察し、音や舞踊や演劇だけでなく、それを支える物質文化をも含みこんだ「芸能文化」の越境の問題として問い直す。

活動報告

【現地調査】1年目の本年度は、日本国内の団体を対象とした調査を中心に活動した。特に都内の3チームを訪れ、練習に見学・参加した他、主宰者や主要メンバーへの聞き取りを行った。

調査項目は

- 1) 各上演団体の概要と歴史や現在力を入れている活動内容
- 2) 所有している（或いはかつてしていた）仮面と楽器について種類と歴史。入手経路や発注・制作プロセス、作成年、作者、制作時の儀礼の有無等
- 3) それらのモノの移動および収納の方法や場所
- 4) 所有する（していた）仮面や楽器に対する儀礼の有無、定期・不定期に供えられる供物の内容
- 5) 仮面や楽器に対する思い入れや愛着
- 6) 仮面や楽器の維持・修理の方法や加工の履歴

上記の調査項目について、大分情報が集まってきた。どのチームも所有する（していた）楽器と仮面について他チームとの細かな違いを意識し、愛着を寄せている。楽器や仮面を部分的に自作する事例もあった。都市部に特有の問題もある。楽器は1つ1つが重くまた場所をとる上、演奏はかなり大音量となる。各チームは、周囲と騒音トラブルを起こさない環境や、練習場に隣接した十分な収納スペースの確保などに気を使う。

バリでは楽器や仮面は多かれ少なかれ神格と結びつくものとして扱われる。この信仰（kepercayaan）とでも呼べる態度は、日本の場合、神道や仏教の宗教実践とも緩やかに結びつきつつ、日本の都市の物理的環境にも影響されながら、うっすら「信仰らしきもの」として存在していることを示す興味深い事象がいくつか観察された。これらのデータをまとめつつ、来年度の調査計画を立てた。

【文献調査】芸能のグローバル化に関連する先行研究に目を通した。また、反対に芸能を特定の地域と結びつける「文化遺産化」に関わる先行研究に対し、本研究との関連性を検討している。加えてウェブ上での諸外国のガムラン・チームの活動状況の把握に努めた。また、この点に関連し、『月刊みんぱく』38巻7号に「文化遺産は誰のもの？——越境する人形劇ワヤン」というエッセイを寄稿した。

研究成果公開促進費（学術図書）

無文字社会における歴史の生成と記憶の技法

代表者 大場千景

目的・内容

1) 目的

本書において、無文字社会に生きる人々が、自分たちの過去をいかにして語り、集団の「歴史」として構築し、

文字記録をもつことなしに膨大な過去への記憶を一致させ、継承しているのか、その文化的なメカニズムを解明した。

2) 内容

のべ32か月におよぶ現地調査を実施して口承史を取録し、現地語のローマ字転写によるテキスト化と邦訳をおこなうとともに、それらの膨大なテキストを分析しながら、口承史に内在する文化的な過去への認識や概念、ローカルな視点での因果論、出来事に関する語りを記憶し、共有する技法など、無文字社会に生きる人々の歴史のあり方を明らかにした。

成果刊行物

大場千景

2014 『無文字社会における歴史の生成と記憶の技法——口頭年代史を継承するエチオピア南部ボラナ社会』
東京：清水弘文堂書房。

研究成果公開促進費（学術図書）

「開発」を生きる仏教僧

代表者 岡部真由美

目的・内容

1) 目的

本書の目的は、貧困、エイズ、環境などの現実的課題に取り組む仏教僧を対象に、仏教と不可分なタイ社会特有の「開発」のあり方を明らかにすることとおして、急速な近代化ならびにグローバル化に直面する現代世界における、開発言説の生産と宗教実践の変容との相互作用の動態を民族誌的に解明することである。またそれにより、人類学における開発研究と上座部仏教研究とを架橋することを目指している。

2) 内容

本書は、まず、社会学ならびに開発論の先行研究を批判的に検討し、「開発僧」を、国家やNGOによって多元的に生産される開発言説のひとつとして位置づけるとともに、そうした言説の生産過程に僧侶が巻き込まれてきた歴史的経緯を示す。また、北タイ・チェンマイの事例考察から、僧侶が、タイ社会における開発言説の生産過程に巻き込まれる一方、さまざまな現実的課題に取り組むこととおして、国家や地域コミュニティと自らの関係をつくりかえながら行為主体性を発揮し、世俗領域においてカリスマ性を追求する姿を描出する。このように、開発人類学の視点から、僧侶の実践を開発言説との相互作用のなかで動的に捉えることを可能にする本書は、従来の「開発僧」研究の問題点を乗り越えるだけでなく、僧侶が地域コミュニティにおける儀礼や民俗知識の継承を担い、またサンガという教団組織を介して王権や国家の政治と深く関わってきたことを明らかにするとどまってきた、人類学の上座部仏教研究に対しても新たな理解を提示するものである。

成果刊行物

岡部真由美

2014 『「開発」を生きる仏教僧』東京：風響社。

研究成果公開促進費（学術図書）

現代インドに生きる〈改宗仏教徒〉

代表者 舟橋健太

目的・内容

本書は、現代インドのウッタル・プラデーシュ州西部に生きる〈改宗仏教徒〉に関して、かれらの仏教改宗の背景をたどり、かれらが自らの「過去性」、ならびに、親族・婚族をはじめとする他者との「関係性」を勘案しながら、いかに実践的・遂行的に自らの位置を定めようとしているのか、種々の生活実践・儀礼実践を詳細にとりあげて分析・考察を行う。これは、現代北インドにおける改宗仏教徒たちの実践する「仏教」を仔細に検討する試みでもある。

本書の刊行目的のひとつは、「宗教」そして「カースト」という、人類学分野において長くそして多岐にわたって議論されており、また、近現代インドにおいてなお強く人びとの生を規定している概念／現象について、これら2つがせめぎ合う地平に自らの身を置いている改宗教徒——とりわけ改宗仏教徒——に着目して、かれらの語りならびに実践から、現代インドにおける「宗教」と「カースト」の新たな形態の可能性を探るものである。またいまひとつの目的として、往々にして一枚岩的・固定的・本質的に捉えられがちな「不可触民」について、仏教に改宗したかれらの語りや生活実践ならびに宗教儀礼実践に着目することにより、不可触民解放運動／ダリト運動の展開、

エリート・ダリトの存在やその意義、社会的・政治的变化など、近年における「不可触民」の変容を多角的に描き出すことを目指す。

これらの目的は、これまでの「宗教」や「カースト」に関わる通説、すなわち、改宗とはAからBへの移行であり、実践形態もひとつの宗教に従うべき静態的かつ教義的なものとする考え、また、人びとを本質的に規定して交渉の余地が少ないものとするカーストの捉え方などに対して、改宗教徒という「はざま」の観点から捉え直し、新たな姿を見出すための重要な視角を提供しよう。ここからは、西洋近代的な「宗教」概念の再考、インドを把握するうえでの「カースト」概念の再検討、そして差別的言説の再生産から外れるかたちでの「不可触民」を捉える視角の提示など、多くの意義深い展開可能性を有している。

成果刊行物

舟橋健太

2014 『現代インドに生きる〈改宗仏教徒〉』京都：昭和堂。

研究成果公開促進費（データベース）

梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ

代表者 久保正敏

目的・内容

梅棹忠夫は国立民族学博物館に膨大な資料を残した。フィールドノート、スケッチ、写真などフィールドワーク途上で作成された一次資料に始まり、原稿執筆のアイデアを記したカード類、その整理結果から原稿の各段落に対応する梗概を記した「ござね」、原稿、自著への書評などの知的生産活動に関わるもの他、学術調査探検隊・共同研究会・学会の組織活動、学術機関運営や学術行政、民博創設と準備の博物館調査等に関わる資料も含まれる。梅棹はこれら資料を駆使し、モンゴル・アフリカ・東南アジアなどの地域研究のほか、情報論、比較文明論、女性論、家庭論、博物館展示論、研究経営論など、幅広い学を打ち立てた。従ってこれら資料と資料間の関係性を分析することは、梅棹の知的生産の過程のみならず、日本の民族学史や海外調査・探検史、文化行政史等の研究に寄与することが期待できる。そのため、データベース化と共有が切望されてきた。

そこで今回、資料間の相関関係に基づく梅棹忠夫「知的生産の学」を解明し、関連する分野の今後の研究に生かすために、本館だけでなく、梅棹の研究分野に関わる多分野研究者の参加を求め、それぞれが発見した資料間の相関関係の記述も含めたデジタルアーカイブズの構築を目指すに至った。これは、梅棹自身の望んでいた共同的な知の創造にかなうものである。

研究成果データベース

梅棹デジタルアーカイブズプロジェクト

『梅棹忠夫アーカイブズ』<http://nmearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/index.html>

特別研究員奨励費

紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究

代表者 市川 彰

目的・内容

本研究の目的は、次の3点である。

- 1) 先古典期から古典期にかけてのメソアメリカ太平洋沿岸部の製塩活動と社会の実態を解明すること
- 2) イロパング火山噴火が沿岸部社会に与えた影響を解明すること
- 3) 紀元後5世紀イロパング火山の巨大噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の特質について考古学的に明らかにすること

活動報告

【イロパング火山噴火の年代とインパクトに関する研究】

イロパング火山灰との前後関係が明瞭なチャルチュアパ遺跡出土の建造物と土器を分析した。その結果、噴火年代は紀元後400～450年頃、火口から西約80kmに位置するチャルチュアパでは従来の研究が示すような壊滅がおきるほどのインパクトはなかったことを確認した。また、火口から東に約55km離れたヌエバ・エスペランサ遺跡の調査成果を検証したところ、噴火時に避難する猶予が存在したことが明らかとなった。

【ヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学調査】

イロパング火山灰に覆われた太平洋沿岸部集落であるヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学調査をおこなった。その結果、当該地域では初となる高さ約2m、長さ約70mの人工の土製マウンドを発見した。これらは大量の粗製土

器片、炭化物、焼土片からなる。

【エルサルバドル太平洋沿岸部集落における20世紀の製塩活動に関する調査】

調査地域であるエルサルバドル太平洋沿岸部において近年まで存在した塩田での製塩活動に関する聞き取り調査を実施した。塩田跡地の記録、製塩方法および当時の経済状況などについて記録することができた。また、別の村落では、塩田による製塩活動以前におこなわれていた製塩方法、つまり鉄釜を用いた製塩活動に従事していた人物に聞き取り調査を実施した。

特別研究員奨励費

社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究——ポリネシアにおける贈与の全体性

代表者 比嘉夏子

目的・内容

本研究の目的は、ポリネシア地域における社会経済実践を1) 社会空間の動態と2) 行為の演劇性という新たな視角から分析し、人文・社会科学の中心的命題となってきた「贈与の全体性」を実証的に解明することである。本研究の遂行により、現代的な社会文脈の中で生きる島嶼民がいかにして全体的営為としての贈与経済を存続させてきたのか、その実践が明らかになると同時に、近年の知の潮流における贈与論再評価の動向や反功利主義思想に対して、実践的な参照枠組みを提供することが可能となる。

したがって本研究では、贈与論の主要な事例を提供してきたポリネシア地域を研究対象に、これまでの研究とは異なった新たな2つの視点を用いて現地における実践を検証し、贈与経済理論の新機軸を確立することを目指す。

理論と実践の間に存在する上述した矛盾を克服しそれら社会的実践の「全体性」へ接近する具体的方法論として、1) ローカルな社会空間認識と、2) そのような社会空間において顕在化する行為の演劇性に焦点をあてて考察を進める。これらの視点を導入することで、複数の参加者が集う場の相互行為力学と、そのような空間に深く滲透している演劇性を解明することができる。そこから両者の統合的な理解が達成されることで、人びとの経済・宗教・政治などあらゆる諸実践を実践的な地平において有機的に統合する営為があきらかとなるだろう。それによってこそ初めて、先行研究において論じられてきた、対象社会を覆う「全体性」の本質を照射することができる。

活動報告

2013年度は本研究活動の初年度として2度にわたる海外調査（計約3か月間）を実施し、以下の主要な成果を得ることができた。

- 1) トンガ王国における贈与・交換儀礼の調査では、村落部における葬儀や結婚式のありかたと、それに伴う贈与交換、また儀礼実践の現代的変容について、村落での聞き取りをおこなった。また首都においては、トンガの贈与儀礼および伝統的舞踊に関する歴史資料の収集と歴史性についての調査をおこなった。
- 2) サモア独立国における舞踊や演劇の調査。毎年開催されるサモア文化の祭典 Teuila Festival に参加し、そこで演じられるさまざまなパフォーマンスを映像として記録した。
- 3) ニュージーランド（オークランド）でオセアニア系移民によって開催される行事 Pasifika Festival および、ポリネシア系移民の学生たちが主催する Polyfest に参加し、移民コミュニティによるパフォーマンス実践に関して調査を実施した。ここでは特にトンガ人移民コミュニティのネットワークや母国との関係性維持についての調査をおこなった。

上記のフィールドワークで得たデータからは、とりわけ1) において贈与交換儀礼に内在するパフォーマンス性が明らかになった。その一方で、2) や3) からは舞踊や演劇から現れる即興性や観客とのやりとりが占める重要性を指摘することができた。更にこの両者を照らしあわせることによって、一見するとその形態や目的を異にする各々の場面を、ある種の演劇性や即興性によって織りなされたパフォーマンス実践として包括的に分析することが可能となった。

本研究の成果については、年度内の研究会等においても積極的に発表してきたが、現在も『国立民族学博物館研究報告』への投稿論文および2014年度内に出版予定の著書として出版の準備を進めている。

【継続】

基盤研究 (S)

権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築

代表者 關 雄二

目的・内容

本研究の目的は、50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも権力という新たな分析視点と分

野横断的な手法を考古学調査に導入し（マイクロ・レベル）、文明初期における complex society の成立過程を追究する（メソ・レベル）とともに人類史における文明形成を理論的に解明することにある。本研究では権力生成の特徴を、経済、軍事、イデオロギーという権力資源間の関係性に注目しながら帰納的に抽出する。具体的には、アンデス文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）に焦点を合わせ、ペルー北高地のパコパンバ遺跡を調査し遺構や遺物の分析を分野横断的に進める（マイクロ・レベル）。さらに、同時期の遺跡のデータと比較することで文明初期の多様な社会状況を把握する（メソ・レベル）。ここから得られた文明形成論を、中米および旧大陸の文明形成過程と比較し、相対化する作業も併せて行う（マクロ・レベル）。

活動報告

アンデス文明における権力の変容をさぐるため、文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）の祭祀遺跡パコパンバ（ペルー北高地）を約3か月にわたって調査し、遺構、出土遺物の分析を行い、基礎資料の収集に努めた。経済面からのアプローチとして、同遺跡で出土した人骨を用いた炭素・窒素同位体比分析を行った。その結果、貴重な副葬品を伴う墓の被葬者ほどトウモロコシの摂取が少ないことがわかり、食糧や儀礼用の酒の材料として重要なトウモロコシの導入が、社会のリーダーによって推進されたわけではない点が明らかになった。この成果は現在、国際ジャーナルに投稿中である。また、出土した獣骨の歯のエナメル質のサンプリングとストロンチウム同位体分析を行い、ラクダ科動物の移動性を探ったが、分析結果に多様性が見られたため、慎重を期してサンプル数を増やすことにした。金製品の分析では、墓ごとに副葬品の金の相対比率に違いが存在し、それがエリートの序列を示唆する点を論文として公表した。

一般調査については、2013年8～9月に実施し、計120の遺跡を同定した。形成期における遺跡の分布が人間の移動ルート沿いに集中することがわかり、学会で公表し、論文を推敲中である。また考古学資料をGISデータベースで統合する作業を進め、ほぼ完成した。さらに、同じペルー北高地に位置するクントゥル・ワシ遺跡をはじめ、ヘケテベケ谷中流域、中央海岸北部のネペーニャ谷下流域でも調査を展開し、文明初期の多様な社会状況の把握に努めた。これらの成果は、学術誌で公表するとともに、2013年8月にペルーで開催された国際シンポジウム、そして2013年11月、2014年2月に日本で開催した国際シンポジウムで発表し高い評価を得た。また2013年1月に東京で、西アジア文明との比較を主題とするワークショップ、公開フォーラムを実施し、本プロジェクトの視点が他地域の文明形成を考察する上でも参考になることが確認された。

基盤研究（A）一般

モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究

代表者 小長谷有紀

目的・内容

本研究は、現代ユーラシアを理解するには社会主義のもとでの変容に関する把握を欠かすことはできないという観点から、当時の公的な「記録写真」と、ポスト社会主義の現在から語り得る私的な「記憶」との、異なる2種類の資料を併用して対比的に分析し、その成果を国際的に発信するものである。

具体的にはロシア連邦ブリヤート共和国、モンゴル国、カザフスタン共和国、キルギス共和国、ウズベキスタン共和国の5か国を対象とする。社会主義的近代化という共通の歴史に着目し、その実践を比較し、普遍性と個性を明らかにして地域理解を促進する。

比較研究の方法として、公的な記録写真から当時のプロバガンダと、人々の語りを組み合わせて分析し、過去と現在の認識を共に明らかにする。写真という物質文化を援用しながら、歴史学、文化人類学、政治学の人文系諸学の協業を果たし、更に地域差の分析に際して自然科学系諸学と連携し、新しい知見を得る。

活動報告

本研究は、社会主義のもとで近代化が進められたユーラシア中央部を理解するために、公的な図像記録と私的な記憶を対比的に分析して、地域間比較をおこないつつ、地域研究の新たな手法を確立することを目標とした。本年度はその最終年度にあたるため、国際会議での発表等、研究成果の発信に努めた。

モンゴルについては、昨年度に引き続き農業部門の社会主義的近代化に焦点をあて、新たにオーラルヒストリーをモンゴル語、日本語、英語の3か国語版で刊行するとともに、一般書でも解説論文を刊行した。当該資料によって、社会主義時代にどのように環境が破壊されたか、ならびに、どのようにチベット仏教が生き延びたかが明らかになった。また、広義のモンゴルのうち、西のトルゲートや東のブリヤートを対象にして国境をまたぐ移動に関して収集したオーラルヒストリーを用い、エスニシティや国際関係を国際会議で論じることによって、当該資料のもつ学際的価値を証明した。

ウズベキスタンについては、新聞『東方の真実』に掲載された写真約500点を整理し、社会主義下の女性に関する

表象データベースを構築した。一方、すでに収集したオーラルヒストリー資料を用いて、現代における社会主義時代との連続性と断続性を国際会議や国際学術誌で明らかにした。

クルグズスタン（キルギス）については農村コミュニティを対象に収集した口述資料を用いて、社会主義時代への評価の二面性について国内の招待講演で明らかにした。

以上のように、これまで収集した資料を公開し、それらを利用して成果を国際的に発信した。とくに、文化人類学、宗教学、国際政治学、生態学などへの貢献によって地域研究に本来内包されている学際性を強化することができたことは、方法論の構築という点で重要である。

基盤研究 (A) 海外

熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——「高地文明」の発見に向けて

代表者 山本紀夫

目的・内容

熱帯高地は、これまで辺境とみなされ、ほとんど注目されなかった地域であるが、そこは古くから多数の人口を擁し、高度な文明も成立、発達した可能性が大きい。また、近年はアンデスやチベットなどの高地において急激に人口が膨張し、環境変化の動きが加速するとともに、環境破壊の問題も深刻になっている。本研究の目的は、このような熱帯高地に焦点をあて、そこでの環境と人間との相互関係を環境開発および地域間比較の視点から究明することである。さらに、研究代表者の山本が40年あまりにおよぶフィールドワークをもとに提唱するに至った「高地文明」の仮説を検証確立することも大きな目的とする。これらの目的を達成することにより、熱帯高地における環境と人間の関係、とくに環境を改変し文明を成立させるに至った人類史の基本的枠組みが明らかとなる。

活動報告

前年度の調査に引き続き、研究分担者の月原敏博がブータンおよびネパールにおいて2度にわたり約1か月間の現地調査をおこなった。また、山本と連携研究者の本江昭夫はネパール東部のクンプ地方において2週間の現地踏査をおこない、アンデスとの比較調査を試みた。さらに、山本、研究分担者の大山修一、連携研究者の杉山三郎、稲村哲也がメキシコにおいて環境利用および遺跡分布に関する2週間の踏査をおこなった後、杉山はペルーおよびアメリカ合衆国において約1か月間の比較調査を実施、大山もペルーにおいて中米との比較調査をおこなった。さらに、連携研究者の川本 芳はブータンからタシ・ドルジ博士（ブータン農業省畜産局）を日本に招聘し、京都大学霊長類研究所において在来家畜の起源に関する遺伝学的研究を共同でおこなった。

調査地への経路は、ブータンへはバンコク経由ティンパー着、そこからは陸路、メキシコへは空路でメキシコ・シティー着、そこからは陸路、ネパールへは空路でカトマンズへ、そこからは陸路である。

基盤研究 (A) 一般

世界の中のアフリカ史の再構築

代表者 竹沢尚一郎

目的・内容

本研究の目的は、経済、政治、交易、宗教、生態、考古などの諸分野を専門とし、地域的にもアフリカ全土をカバーする研究者の結集により、『アフリカの歴史』全5巻を完成させることにある。

歴史研究は当該の諸社会の深い理解のための前提条件であるが、わが国のアフリカ史研究は立ち遅れた状況にある。そのため、上記の目的の達成のためには、多数の研究者による長期にわたる共同研究が不可欠である。

本研究はこうした観点から構想されたものであり、本研究が実現されたなら、アフリカ史研究はもちろん、文化人類学、地域研究、国際関係論、政治学、開発研究などの諸分野の一層の発展のために多大な貢献をなすとともに、とりわけ文化人類学的なアフリカ研究をさらに発展させるための基礎的資料となるはずである。

活動報告

本研究の最終目的である『アフリカの歴史』全5巻を世界的に評価される水準にするには、1) 斬新な問題意識の構築と、2) 未公刊史料の開拓、および 3) 世界各国の研究者との緊密な連携が不可欠である。

本年度は、まず本研究に参加する研究者全員が参加する研究会を組織して、徹底した討議を通じて 1) の斬新な問題意識の構築をめざした。

また、2) の未公刊資料の開拓のために、各研究者が現地に赴いて研究を進めた。具体的には、アフリカ各国での考古学の発掘調査の実施やその最新の知見の吸収、各地域の資料館や文書館での一次史料の入手、口頭伝承の収集とその分析につとめた。

さらに、3) の世界的な研究ネットワークの拡充に関して、各自がこれまでに築いたネットワークの連携を強化

した。

本研究はアフリカ全土をカバーし、なおかつ通時的にも、歴史の始まりから現代までをカバーするものであるため、以下の分担を行った。

地域別分担 北アフリカ担当＝大稔哲也、高宮いずみ（連携研究者）。東アフリカ担当＝鈴木英明、松田素二（連携研究者）、富永智津子（研究協力者）。西アフリカ担当＝竹沢尚一郎、坂井信三。中部アフリカ担当＝杉村和彦、武内進一（連携研究者）。南部アフリカ担当＝北川勝彦。

分野別分担 政治史＝松田素二、武内進一。経済史＝北川勝彦、富永智津子、武内進一。対外交易史＝竹沢尚一郎、大稔哲也、富永智津子。生態史＝杉村和彦。農耕史＝杉村和彦、竹沢尚一郎。オーラルヒストリー＝坂井信三、松田素二。ジェンダー史＝富永智津子。考古学＝竹沢尚一郎、鈴木英明、高宮いずみ。

テーマ的には、以下の課題を念頭に置きながら、各研究者が研究を遂行した。1) 新たな歴史資料の発掘（考古学、碑文、旅行記、行政文書、植民地資料、口述記録等）。2) アフリカ史記述のための単位の設定。3) 世界の中のアフリカ史記述の実現（中東、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジアとの関係）。4) オーラルヒストリーを歴史記述に採用するための手続きの明確化。5) 環境変化と社会経済システムの変容の関係を重視。6) アフリカ史研究の意義の明確化（世界史・人類史の視点からの明確化）。

本年度は、このうちとりわけ1)、2)、3)に重点を置いて、研究を進めた。

基盤研究 (A) 一般

アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く

代表者 西尾哲夫

目的・内容

中世の中東で成立し、世界文学となったアラビアンナイト（千一夜物語）は、シリアで私家本として伝承されていたが、近世エジプトにおける都市部中流層の台頭にとまなう中間アラビア語の誕生がきっかけとなって、現在のようになった。

本研究では、新発見の写本も含めて従来は未研究だったエジプト系全写本の分析によって、その編集過程と言語的特性を明らかにするとともに、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられる、アラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

活動報告

本研究ではアラビアンナイト形成に関する以下の研究項目を実施した。

- 1) 文学伝統の地域民衆化で形成された写本群の分類と系統的分析として、写本データベース化の一環、とくにシンドバード写本と百一夜物語写本の分析を継続するとともに、主としてドイツの各図書館所蔵の非標準的なアラビアンナイト写本（断片）を積極的に収集した。
- 2) 地域民衆の口語が文字化された中間アラビア語の歴史の実態と民衆文学変容の分析として、①「カルカッタ第二版」の計量文献学的分析と民衆文化語彙索引の作成、②国民共通語としての中間アラビア語使用実態の分析とそのための海外調査、③国民共通文化形成における民衆文化の現代的変容の分析とそのための海外調査を実施した。とくにトルコ、モロッコ、イスラエルにて現地調査をおこなった。なお当初予定していたエジプトやシリアについては政情不安のため調査を次年度以降に延期した。
- 3) アラビアンナイトをめぐるヨーロッパ的文学伝統の物語伝承への影響の比較分析として、①マルドリユス遺贈コレクションの調査とマルドリユス版形成過程の分析とそのための調査、②アラブ世界での再受容と文学伝統の関係の分析とそのための海外調査、③日本での受容と文学伝統の関係の分析を実施した。とくにフランスにてマルドリユス遺贈コレクション関連の調査を集中的に実施した。

国際会議等の発表による成果として特筆すべきこととして、フランスで開催された世界比較文学会にて青柳悦子が参加し、発表をおこなった。

基盤研究 (B) 一般

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

代表者 山中由里子

目的・内容

本研究が対象とする驚異譚とは、ラテン語で「ミラビリア」、アラビア語・ペルシア語で「アジャーイブ」と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説であり、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行

記・見聞記などに登場する。本研究の主要な軸は次の3点である。

- 1) 驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通するモチーフや逸話を関連作品から抽出し、分類を試みる。
- 2) 知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

活動報告

国立民族学博物館における共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と連携させ、研究会を2回開き、研究代表者と分担者は本研究課題と各自の専門テーマの関連について発表を行った。1回目の会のテーマは「驚異を集める」とし、知識としてだけでなく、「モノ」としての驚異の物質性と、それを集めるという行為について考察した。ヨーロッパでは大航海時代以降、特権階級が世界中から集めた驚異なるモノ（珍しい動物のはく製、奇形の標本、鉱物、民族資料、遺物など）を陳列する「驚異の部屋」（ヴンダーカマーまたはキャビネット・オブ・キュリオシティーズ）を造った。ナポレオンの時代以降は、これらの蒐集物は接収され、自然物は自然史博物館に、人工物は美術館や博物館にと振り分けられ、近代的な博物館コレクションのコアとなった。近世・近代にかけて驚異は手に取ってみることができるモノとなり、次第に飼いやられてゆくという過程が見えてきたと同時に、中世的な文脈においては自然界に関する「総合知」の一部であった驚異は、近代科学の周縁に追いやられてゆくことが明らかになった。

2回目の会では、成果刊行に向けての議論が行われ、『〈驚異〉の比較文化史』という仮題の論文集の章立てが固まった。1冊の本の構成として、中東とヨーロッパの比較すべき要点は、かなりおさえられたかと考える。しかし、中世的な驚異の黄昏期、つまり近世・近代へのつながりに関しては、中東での展開がヨーロッパの場合ほど明確に見えてこないという課題が残った。出版物においてはその部分を補えるよう、代表がメンバー外の執筆者と交渉した。すでに原稿も集まりつつあり、名古屋大学出版会とともに編集作業を進めている。

基盤研究 (B) 一般

社会的包摂のための実践人類学的研究

代表者 鈴木 紀

目的・内容

本研究の目的は、現代社会の課題である「社会的包摂」を国際的に推進するために、どのような支援活動が必要かという問題を検討することにある。社会的包摂とは、社会から排除された人々を再び社会に取り込む試みを意味する。先行研究では、社会的包摂は一国家の公共性に関わる課題として認識され、官・民（企業）・市民セクター間の協働のあり方が探求されてきた。これに対し本研究では社会的包摂を、国家を越えるグローバルな領域の課題として位置付ける。このため、公共性もグローバルな文脈に置いて再考する必要性が生じてくる。とりわけ本研究はグローバルな公共性を機能させるための市民活動に焦点をあて、官や民による支援との軋轢や連携の可能性を検討する。そのために5種類の支援活動（フェアトレード、国際協力NGO活動、国際協力ボランティア活動、都市在住の先住民族支援活動、無国籍者支援活動）に関する事例研究を行い、その相互比較を試みる。

活動報告

社会的包摂を目的とする支援活動（フェアトレード、国際協力NGO、国際協力ボランティア、先住民族支援、無国籍者支援）に関する研究をおこなった。

鈴木 紀は、ベリーズのTCGA、コスタリカのCoopeagri、ガーナのKuapa Kokooなどのフェアトレード生産者組合を訪問し、フェアトレードが媒介する消費者と生産者の間の交流事業について調査した。またイギリス・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツで、フェアトレード商品の販売戦略を調査した。

岸上伸啓は、カナダ国モントリオールにおいて収集した都市イヌイットの生活実態に関するデータを整理、分析した。また、調査結果の全体像を取りまとめ、先住民団体に提出するとともに、出版の準備を進めた。白川千尋は、フィリピンで、コミュニティ開発の活動に取り組む青年海外協力隊員を訪問し、その活動や隊員とカウンターパート・活動対象者の相互関係などに関する聞き取り調査を実施した。

関根久雄は、ソロモン諸島において青年海外協力隊の支援活動に注目し、現地の地域性が隊員の感情の変化に及ぼす影響に関する聞き取り調査を、隊員、現地のJICA支所、隊員の配属先諸機関の関係者に対しておこなった。鈴木七美は、アメリカ合衆国のNPOテンサウザンド・ヴィレッジズに関し、宗教的価値観、扱っている商品、地域コミュニティとの関わりに注目して、現地調査を行った。陳 天璽は、ジュネーブで開催されたNGOと国連難民高等

弁務官事務所のコンサルテーション会議に参加した。世界各地の無国籍者支援団体の支援活動について情報収集を行った。また日本で難民、無国籍の支援を行っている団体や学生とコラボレーションを行い、当事者などを招き「無国籍って？——難民と考える国籍のはなし」と題するワークショップを筑波大学（2013年9月30日）および関西学院大学（2013年11月23日）に開催した。

基盤研究 (B) 海外

北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権

代表者 岸上伸啓

目的・内容

米国やカナダでは先住民の「伝統的な生業」(狩猟漁撈)活動の継続は先住権のひとつと考えられており、アラスカ・イヌピアットやカナダ・イヌイットにはホッキョククジラを捕獲し、利用する権利がそれぞれの国家によって承認されている。本研究の目的は、現代の先住民生存捕鯨が、いかなる政治的、経済的、社会的、環境的条件のもとでどのように実施され、それが捕鯨コミュニティの維持や変化にいかに関与しているかを、北アメリカ先住民の事例を通して解明することである。さらに、それらの捕鯨を分析することによって、先住権が具現化された実態とはどのようなものであるかを解明する。

活動報告

本年度は、北アメリカ北西海岸先住民、カナダ・イヌイット、グリーンランド・イヌイットの捕鯨について、アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨と比較しながら、その実態と先住権に焦点をあてながら、現地調査を行った。

北アメリカ北西海岸先住民のヌーチヤヌルスとマカーの捕鯨の現状と先住権との関係について調査した。前者は歴史的に捕鯨を行ってきたことが知られているが、ランドクレームで捕鯨を先住権として主張しておらず、捕鯨再開はきわめて困難な状況にある。後者はかつて米国を相手に締結した条約によって捕鯨の権利は守られているが、国内法との抵触や環境 NGO による訴訟によって捕鯨ができない状況にある。

捕獲枠の拡大を求めたグリーンランドのイヌイットの捕鯨は、2012年7月に開催された第64回国際捕鯨委員会総会において否決された。同自治政府は、捕鯨をイヌイットの権利として考え、クジラ資源を自らの手で管理し、捕鯨を継続する道を選んだ。国際捕鯨委員会から脱会しているカナダは、イヌイットの捕鯨を先住民の権利として認め、ヌナヴート準州で3頭とヌナヴィクで1頭の年間捕獲枠を付与している。

先住民生存捕鯨は、国家によって承認されていても実施できない状況が出現しつつある。この背景には、世界各地で繰り返されているクジラをめぐる動物愛護運動や環境保護運動が、クジラを「神聖なる海獣」とみなし、それぞれの運動を強力に推進し、世論に大きな影響を及ぼしていることがあると考えられる。このため、1970年代以降、世界各地において人類とクジラの関係は大きく変わりつつあり、国家や国際社会によって承認されている先住民生存捕鯨の存続にも悪影響を及ぼしつつあることが判明した。これまでの成果を基に国際シンポジウム「北太平洋沿岸諸先住民族文化の比較研究——先住権と海洋資源の利用を中心に」を国立民族学博物館において開催した。

基盤研究 (B) 海外

台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用

代表者 野林厚志

目的・内容

本研究の目的は、1) 台湾のオーストロネシア系先住諸民族(「原住民族」)が台湾の日本統治期(1895~1945年)に複数の民族集団へと分類されてきた歴史的背景を明らかにする、2) 現在の台湾社会における民族認定の様相とそれにもとづく民族集団の再編に、従前の歴史的背景がどのような影響を与えているかを現地調査によって明らかにする、3) 1)と2)の結果にもとづき、民族の分類という営為をめぐる先住民族、先住民族含む現地社会、および分類を行ってきた施政者や研究者の関係についての人類学的モデルを引き出す、以上の3点である。

日本統治期に収集された学術資料の分析と再評価を現地調査と連結させて行い、既存の歴史資料のデータとしての質を高める。その上で、当事者たる原住民族自身が民族分類に対して有してきた認識のありかたにせまり、学術、制度、当事者の相互作用の動態を明らかにすることを狙う。

活動報告

本年度は当初研究計画に沿った捕捉調査ならびに研究活動の総括を行った。野林(代表者)は物質文化とエスニシティとの関係についての現地捕捉調査を実施し、本研究課題の実施期間中に収集したデータを活用した論文の発表ならびに一般社会への研究成果公開の一環として所属する機関において企画展「台湾平埔族の歴史と文化」を企画実施した。

これに関連し、台湾より平埔族ならびに展示担当のキュレーターを招聘し、研究と展示評価に関わるワークショップを開催するとともに、平埔族のエスニシティ表象を主題とする映像番組の製作を行った。森口恒一は本研究課題の実施期間中に収集したデータを活用し、原住民族の主要言語のうちのブヌン語、ヤミ語の辞書編纂の基礎作業を行った。松岡 格は本研究課題の実施期間中に収集したデータを活用し、民族概念、他者および自己の分類について整理し、身分の制度的側面とエスニシティとの関係論の構築を行った。笠原政治は原住民族の新規認定と日本統治以前のヨーロッパ人による分類、明治期、大正期の日本統治時代の分類との関係を検証し、原住民族分類の歴史論を総括した。宮岡真央子は本研究課題の実施期間中に収集したデータを活用し、民族集団のマクロ性（民族分類）とミクロ性（当事者意識）とを接合させるエスニシティ論の構築を行った。

また、研究計画参加者全員で、現地における原住民族の文化研究の中核機関の1つである国立政治大学（台湾台北市）で開催された「原住民族研究フォーラム」（2013年8月27日開催）に参加し、台湾の研究者ならび当事者である原住民族の人々と民族分類に関する研究の総括となる議論を行った。

以上の研究活動にもとづき、研究分担者全員が本研究課題の成果として論集『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現代』（野林厚志主編）に総括的論考を寄稿し現地台湾において刊行する予定である。

基盤研究 (B) 海外

東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動

代表者 田辺繁治

目的・内容

本研究の目的は、近年、東南アジアで勃興しつつある新しいタイプのコミュニティ（共同体）の実態を運動の視点から捉えることによって、そこに参加する人々の現在と未来に向けた想像力、情動および社会変革のイメージと、それを実現しようとする関係性、組織や手段を人類学的に解明することである。本研究では、特に宗教、環境や医療などに注目し、人々がコミュニティに参加し、あるいはコミュニティを作り上げながら、いかに〈生〉の多様な局面に関わる社会変革を志向していくかを明らかにする。そこでは、コミュニティが異質な勢力、制度や集団との組み合わせ〈アセンブリ〉の中で接合していく実態を描きだすとともに、その過程において創出される共同性、価値や倫理の様態を解明することが目指される。以上をふまえ、本研究は、タイを中心に、東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動について、海外共同研究者とともに各地の事例を調査するものである。

活動報告

最終年度である本年度は、過去2年間の調査研究実績を検討し、まず欠落・不足している項目・データの補充調査を行った。また報告書作成に向けて、新しいコミュニティ運動の実態を各事例にそって検討し、統合的な視点を得るためにシンポジウムを開催した。

1) 代表者の田辺は、北タイの仏教的ユートピア運動では、男性隠者や女性修行者たちが社会的、仏教的秩序の外に身をおいて自らを生成変化させながら新たなコミュニティを構成していることを明らかにした。2) 松田素二は、チェンマイ県の農村コミュニティと隣接するリゾートとの間の水利用をめぐる対立をとりあげ、上からの「統治」に対し、下からの生活主義的思想の可能性を追究した。3) 西井涼子は、ビルマ国境メーソットにおける草の根イスラム主義・ダツワ運動の調査から、ムスリム・コミュニティがビルマ人プロダツワ派とタイ人アンチダツワ派によって構成されることを明らかにした。4) 平井京之介は、チェンマイのコミュニティ博物館を調査し、博物館活動と、1990年代以降の観光開発の進展、産業構造の変動、地域主導の開発の推進等との関係を明らかにした。5) 阿部利洋は、カンボジア・パイリン市における、公立学校、元仏教僧による私立学校、キリスト教私立学校の競合状況の調査から、各学校の運営の特徴や生徒獲得戦略を明らかにした。6) 古谷伸子は、チェンマイの民間医療復興運動に焦点をあて、民間治療師グループ・ネットワークの形成過程・活動を調査し、治療師たちの実践と経験を明らかにした。7) 岡部真由美は、「北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク」の調査から、運動内部で伝達・共有される知識と僧侶個人の実践との関係を明らかにした。

また2014年3月7日～8日には、チェンマイ市ランナー・レポートにて、海外共同研究者と外部コメンテータを招いて総括シンポジウムを開催し、各メンバーの研究成果を比較検討し、新しいコミュニティ運動の全体像の描出に努めた。

基盤研究 (B) 海外**インド音楽・舞踏のグローバル化に関する総合的研究**

代表者 寺田吉孝

目的・内容

本研究では、インド音楽・舞踏の現代的展開と変容をグローバル化との関連で考察するために、インド国内における音楽変容と、インドにおける音楽・舞踏文化に大きな影響力をもつ在外インド系コミュニティにおけるインド音楽・舞踏の実践を関連づけて考察する。地域間を結ぶ個人・団体の特定、かれらの活動内容や交流の実態の把握、音響としての音楽への影響に関する考察をおこなう。音楽・芸能における変化は内的要因だけではなく、グローバル化を背景とする音楽・舞踏文化の変質がその主要因になっている点を具体的に示すことができると考える。

本研究は、これまでの南インド古典音楽の研究蓄積を土台にしなが、北インド古典音楽や南北の古典舞踏を調査対象に加え、インド音楽・舞踏とグローバル化との複合的な関係を包括的・総合的に考察するものである。

活動報告

研究代表者の寺田吉孝は、昨年度同様カナダ、トロント市で調査を行った。同市で最も活発に南インド音楽・舞踏を実践するタミル人は、出身国によりインド系とスリランカ系に大別され、それぞれが個別のコミュニティを形成している。今年度の調査では、スリランカ系タミル人の積極的な関与の背景と音楽・舞踏に及ぼす芸術的、社会的影響について、主に舞踏公演への参与観察と関係者への聞き取り調査から検討し、カナダでの永住を決意したスリランカ系難民が、ホスト社会における永続的な自文化継承の核として南インド音楽・舞踏を位置づけていることを明らかにした。

研究分担者の田森雅一は、昨年度に引き続き北インド・ラジャスタン州ジャイプルで現地調査を実施した。フランスとインドを往来する音楽家の活動に焦点をあて、世界的な均質化と地域的な多様化が同時に進行する世界でのインド音楽の再生産をめぐる問題についてローカルでミクロな視点から検討した。その結果、1980年代前半にラジャスタン地方からフランスの地方都市に渡った、当時無名のムスリム世襲音楽家の音楽活動と、カーストを超えたネットワーク形成が、その後の同州の音楽世界に大きなインパクトを与えた点を明らかにした。

研究協力者の竹村嘉晃は、昨年度に引き続きシンガポールにおいて現地調査を行い、20世紀の同国におけるインド芸能の伝播と培養、変容と発展について資料を収集した。文献資料と舞踊家のライフストーリーの聞き取りから、シンガポール発のインド音楽・舞踏・演劇が国内外で積極的に公演されており、インドとの交流が実演家レベルで盛んに進められている実態を明らかにした。

なお、班員3名が東洋音楽学会第64回大会において分科会を組織し、研究成果の一部を公開するとともに、上記の3つの事例研究の比較検討を行い、インド音楽・舞踏のグローバル化の重層的な構造について理解を深めることができた。

基盤研究 (B) 海外**南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究**

代表者 Peter J. Matthews

目的・内容

南日本、東南アジアにおける野生サトイモ (*Colocasia esculenta*) の民族植物学的調査 (現地におけるサトイモの歴史・用途・管理などに関して) を行う。遺伝子比較により、南日本 (琉球列島) の野生サトイモの起源を同定する。植物の自然史・文化史、琉球列島におけるヒトの定住と生活の歴史、必要とされる野生サトイモの個体群の保全といった観点から、得られた成果を解釈する。

活動報告

今年度は、分析を進めることと執筆、学会での発表に集中した。フィリピンの中部から南部にかけて収集した *Colocasia esculenta* (29サンプル) の葉緑体の5つの遺伝子座と、*Alocasia macrorrhizos* (15サンプル) の葉緑体の3つの遺伝子座の配列に関する新しいデータを得ることができた。データの分析は現在も進行中である。このプロジェクトの主たる成果として、第11回国際サトイモ科植物学会をハノイで開催した。今年度末に出版した *On the Trail of Taro* (Senri Ethnological Studies 88) にもこのプロジェクトにより行われた研究を紹介した。

基盤研究 (B) 海外

宗教と移民のアイデンティティ・共生——南アジア系ディアスポラを事例として

代表者 辻 輝之

目的・内容

本研究は、これまでの調査・研究の結果を基に立てた以下の問いについて社会学・人類学の視点から考察する。

- 1) 移動のプロセス (migratory process) において、移民の宗教がどのように再構築・展開されているか。
- 2) 宗教の再構成・展開がトランスナショナリティ、帰属意識、「コミュニティ」の定義など、移民の社会資本形成、市民参加、他集団との共同性にかかわる様態に如何に影響しているか。

これらの問いを「長期的観点 (longue dur & eacute; e perspective)」から考察するため、民族誌と歴史研究の組み合わせによってデータを収集・分析し、その結果を学際的・国際的に共有することで、「移民と宗教」に関する研究の方法論・理論的枠組みの検討に貢献することを目指す。

活動報告

【第1四半期 (4～6月)】 4月および5月にトリニダッドにおけるフィールドワークを2度実施し、カトリック教会へのヒンドゥー教徒による巡礼について、参与観察と聞き取り調査を行うと同時に、当地大学、ナショナルアーカイブスおよび大司教古文書館にて史料収集を行った。

【第2四半期 (7～9月)】 セント・ルイス大学 Center for Intercultural Studies において前年度および本年度第1四半期までに収集したデータの分析を進め、その結果を基に、9月末までに査読学術雑誌 American Ethnologist に論文を投稿した。同期に予定していた南フロリダでのフィールドワークは、トリニダッドの事例研究の進捗状況に鑑み中止したが、その代わりに前年度の予備調査の結果をまとめ、プロポーザルを作成してアメリカ宗教学会に提出した。

【第3四半期 (10～12月)】 前年度から纏めてきた書籍出版計画書が完成し、11月半ばのアメリカ人類学会においていくつかの出版社に査読のため提出した。また、同月には先に提出したプロポーザルが受け入れられたため、アメリカ宗教学会の特別セッション North American Hinduism において、南フロリダにおける予備調査の結果について発表を行った。論題は Between “Indian” and “West Indian”: Ethnoreligiosity and Social Capital Development of the Indo-Caribbean Migrants in South Florida.

【第4四半期 (1～3月)】 9月末に提出した学術論文が査読の結果、掲載が見送られることとなり、査読者の示唆を参考に論文の書き直しを行うとともに、さらにデータの分析を継続した。併せて、2月28日、3月1日の両日、セント・ルイス大学において国際学会 Perspectives on Interculturality が開催され、論文発表を行った。論題は A Theoretical Proposal on Cultural Mixing. (still) a “Miracle Begging for Analysis.” また、同年4月11～17日に開催されるアメリカ人類学会宗教学部会学会での発表が受諾された。論題は Sharing Mothers: Religious Conflict, Statue’s Play, and the Simultaneity of Origins.

基盤研究 (B) 一般

劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発

代表者 園田直子

目的・内容

本研究の目的は、日本の酸性紙研究で未解決となっている課題、実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、現在稼働している気相型の脱酸性化処理法の弱点克服、これらに新たな展開を提示することにある。前者では、強化剤の重合度や溶剤を再検証するとともに、柔軟剤や保湿剤の添加を検討し、手法の最適化をはかる。また、新たに紙表面にナノ繊維を紡糸して補強する可能性を検討する。後者では、従来の脱酸性化処理法 (ドライ・アンモニア・エチレン法) の改良法として、酸性物質の中和剤を揮発させて酸性紙に直接付着させる手法を検討する。本研究では、技術改良の成果を自然科学的に検証したうえで、開発した手法の文化財への適用の判断までを総合的に行う。

活動報告

本研究では、日本の酸性紙の保存研究で未解決となっているふたつの課題、1) 実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、2) 気相型の脱酸性化処理の欠点克服、これらに新たな展開を提示することを目的としている。

- 1) 脆弱化した酸性紙の劣化抑制または強化処理を目的として、エレクトロスピンニング法を用いてセルロース誘導体溶液からナノ繊維を形成させ、紙表面に付着させることを試みた。経年劣化図書を試料として、エレクトロスピンニング法によってメチルセルロース (MC)、ヒドロキシプロピルセルロース (HPC)、カルボキシメチルセルロース (CMC) の3種類のセルロース誘導体溶液から紡糸したナノ繊維を紙表面に付着させた後、加速劣化処理を施し、紙の劣化抑制効果を評価した。このうち CMC のナノ繊維を付着させると、加速劣化処理による紙の劣

化が抑制されることが、引張強さ、引裂強さ、アコースティック・エミッションによる紙の劣化度の変化から認められた。紙のゼロスパン引張強さも同じ傾向を示したことから、本処理の劣化抑制効果は、紙中のパルプ繊維強度の変化を反映していると考えられる。

- 2) 現在実用化されている、アンモニアガスと酸化エチレンガスを紙中で反応させるドライ・アンモニア・酸化エチレン (DAE) 法は、アンモニアガスによる紙の黄変、酸化エチレンガスの危険性が問題となる。その改良法として、本研究において、酸性物質の中和剤であるジエタノールアミン (DEA) を揮発させて酸性紙に直接付着させる方法を検討したところ、良好な pH 上昇効果が得られた。今回検討した条件の中では、処理条件 80℃-24h-10mbar が最も高い pH 上昇効果を付与されることが明らかになった。この新しい手法を、酸性紙の図書・文書資料の脱酸性化処理の実用化へと展開するにあたっての今後の課題は、実験条件とくに加温条件の緩和の検討である。

基盤研究 (B) 一般

映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究

代表者 福岡正太

目的・内容

東南アジア諸地域において、ゴングは、霊的な力を備えた音具、楽器、権力を示す財産、交易品などとして重要な位置を占めてきた。この研究は、東南アジア諸地域のゴング文化の特徴と相互の関連を、現地調査と映像記録作成を通じて明らかにし、東南アジアのゴング文化を総合的に理解することを目的としている。特に、1) これまで研究の少なかった地域のゴング文化の調査、2) 各地におけるゴング製作と調律技術の比較、3) 主にゴング流通からみた地域間の相互関連の解明に重点をおく。また、映像を重要な研究手段として位置づけ、現地における映像上映と意見交換を通じて、研究成果をフィードバックし、ゴング文化を支える人びととともに東南アジアのゴング文化についての新たな知を構築する試みをおこなう。

活動報告

2013年度は、ラオス、インドネシア等にて調査撮影を進めたほか、東洋音楽学会大会にて、中間的な成果報告をおこなった。また、ロンドン大学等で関連する映像の上映をおこない、関連分野の研究者等との意見交換をおこなった。

- 1) ラオスにおいては、南部山間部において調査撮影等をおこなうとともに、2012年度の調査映像を政府関係機関および調査対象村の関係者に渡し、意見交換をおこなった。開発が進み、急速に社会が変化しつつあるが、伝統的なゴング文化は比較的変わらず伝えられており、ゴングに関する信仰やタブーについて調査を進めることができた。
- 2) インドネシアでは、ジャワ島、バリ島、ロンボク島などにおいて調査撮影を進めた。これまでの調査により、これらの地域における青銅製のゴングの製造および流通の概要を把握することができたが、それに加え、鉄製のゴングの製造および流通についても調査を進めた。鉄製ゴングは、青銅製のものとは異なる製造過程と流通経路をもつことが明らかになりつつある。
- 3) 東洋音楽学会大会において、パネルディスカッション「ゴング文化研究への視角」を組織し、これまでの研究成果の中間報告をおこなった。①これまで比較的調査が進んでいなかったベトナムとラオスの少数民族のゴング文化について報告し、②広い範囲でのゴングの製造拠点と流通の再編を背景として、地域のゴング文化を維持するために調律師の存在が重要であることを指摘、また、③鉄製ゴングが青銅製ゴングとは異なる製造と流通のパターンをもつことを示し、鉄製ゴングに注目することでゴング文化の多様性への理解を深めることにつながると論じた。
- 4) ロンドン大学、エストニアのワールド・フィルム・フェスティバル等で、東南アジアのゴングに関連する映像の上映をおこない、映像を通じてゴング文化を研究する可能性について、多くの研究者らと議論をおこなった。

基盤研究 (C) 一般

21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例

代表者 森 明子

目的・内容

本研究は、19世紀以来西欧を中心として近代世界を構成してきた社会原理が見直しを迫られているという認識のもとに、市民運動を新しい社会像を探るボトムアップの試みとしてとらえて、これを研究するものである。ベルリンの外国人が集住する地区においてすすめられている都市再生プロジェクトと、そこで展開している市民団体、移

民、行政、運動家らの織り成す動きに焦点をあてて、その展開のプロセスを明らかにする。この分析を通して、21世紀の新しい社会像を提言することをめざす。

活動報告

2013年度は、研究の最終年度として、これまで収集した資料と分析結果を総合し、そこからあぶりだされた重要な問題点についての補足的な調査をおこなった。

これまでの研究から、調査地においては、1960年代から展開した「新しい社会運動」の系譜と、1980年代初頭に劇的な高まりを見せた都市運動が、直接的な契機として絡み合いながら、現代にいたる市民運動が展開してきており、その背景に、冷戦と壁崩壊後の世界秩序の転回が磁力のように影響を及ぼしていることが明らかになった。東西冷戦の分断都市から再統合都市へ変容をとげたベルリンにおいて、外国人の位置づけも大きく変化した。単身の募集労働者から家族生活を営む市民へと転身をはかりながら、彼らは、世界政治の中での出身国との関係の再構成、行政の諸政策への対応、さらに移民自身の世代交代とともにあらわれてきた高齢化やアイデンティティをめぐる問題などに直面しており、このような外国人の存在が、現代の市民運動に影響を及ぼしている。本研究では、都市に生きる外国人の存在にも考慮して、現代都市の市民運動について、とくに多様なアクターが行政や種々のアソシエーションといかに交渉し重なり合いながら行動しているか、ということに焦点をおいて記述・検討し、現地の研究者および市民運動の当事者と意見交換をおこなった。また、最終年度として補足的な現地調査をおこない、アーカイブ資料の収集もおこなった。

基盤研究(C) 一般

アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究

代表者 吉本 忍

目的・内容

本研究は、現在アジア、アフリカにおいて民族衣装の素材として広く使用されているプリント更紗が、インドネシアやインドの伝統的染織技法とデザインをもとにして、ヨーロッパの植民地支配を背景にしたグローバルな交易と産業革命による技術革新によって創出され、広く展開してきた歴史的経緯を、サンプル帳をはじめとする資料の検討によって実証的に明らかにするものである。本研究を通して、私たちが経験する伝統工芸の変革と文化の創出の場面におけるグローバル化の功罪などの本質的意義について批判的視座を提示することを目的とする。

活動報告

9月に、吉本と研究分担者の金谷美和はインドネシアにおいてジャワ更紗と現代プリント更紗の現地調査を行った。まず、プカロンガンにおいて、両面ロウ置きバティックの製造工程を調査し、インタビューを行った。ジャカルタにおいて、National Museum所蔵の木版の調査を行い、I工房において機械による両面捺染のバティックの新技術についてインタビューを行った。これらの調査によって、インドネシアで展開している両面プリント技術と、伝統的な更紗技術の連関を明らかにすることができた。

10月に、吉本は、フランス（パリ）のパリ工芸博物館、オランダ（ヘルモント）のフリスコ社アーカイブ、ドイツ（ケルン）のダイヤモンド・ヨースト博物館（Rautenstrauch-Joest-Museum）、スイス（ブルシン）のピエール・ヴービエ（Pierr Bouvier）邸、スイス（グラルス）のグラルス州立博物館（Museum des Landes Glarus-Freulerpalast）において、プリント・テキスタイルの資料の閲覧、調査を行った。

2月に、吉本、金谷は、スイス（グラールス）のDaniel Jenny & Co.アーカイブにおいて、プリント・テキスタイルの資料の調査を行った。グラールス州立図書館において、染織産業に関わる資料の閲覧、調査を行った。これらの調査により、19世紀末から20世紀初頭のスイス東部における捺染業の概要とその製品について明らかにする資料を得ることができた。また、大阪府産業デザインセンター旧蔵のプリント資料について、吉本、金谷が調査を行い、研究補助者とともにデータ化した。

これらの研究の成果については、金谷が2013年11月に東京大学で開催された国際シンポジウムにて発表し、2014年2月に単著論文を出版した。

基盤研究(C) 一般

現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ

代表者 韓 敏

目的・内容

本研究の目的は、ライフヒストリーの手法を用い、安徽省都市部と農村に在住している8人とその家族に焦点を当てて、人々の生活実践レベルにおける社会主義革命の意義およびグローバル化による中国の社会変化の様態とメ

カニズムを考察すると同時に、人類学研究におけるライフヒストリー・アプローチの有効性を再検討し、ライフヒストリーの比較研究の理論的構築を試みるところにある。具体的に3つの視点からアプローチしていく。

- 1) 社会主義革命のイデオロギー、諸制度、市場経済体制の下に導入されたグローバルな理念と生活様式がいかに個人に受け入れられたのか？
- 2) 受容された概念や生活様式は、どのような意識と環境の下に如何に実践されているのか？
- 3) 複数の個人とその家族のライフヒストリーを比較し、共通点と多様性を見いだす。

活動報告

2011年度と2012年度の調査データを整理しながら前年度までのデータをもとに、安徽省宿州市とその周辺の農村で調査してきた研究対象のうちの3人（竹細工の職人、風水師、キリスト教宣教師）に絞り、インタビューと参与観察を通して、これまでの調査項目（出産、命名、躰、学校教育、働き・仕事、消費、交友、恋愛、結婚、家族、子育て、扶養、エージング、死、祭祀）について、再度確認し、個人々の生活実践レベルにおける社会主義革命の意義およびグローバル化による中国の社会変化と持続性を考察した。

- 1) 2013年11月中国社会科学院民族学・人類学研究所で文献資料を収集し、「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」という国際シンポに参加して、中国社会に関する人類学的研究の課題と方法について交流した。
- 2) 安徽省宿州市在住の竹細工の職人について再度調査を行い、花嫁の輿作りに関する伝統的技術の伝承、社会主義集団化後の職人の生活変化、現代のビジネス化された漢族の結婚式における輿の利用状況を調査した。
- 3) 安徽省宿州市基督教両会の宣教師S氏、その娘や教会の関係者に再度インタビューを行った。彼女のライフヒストリーおよび、牧師であった父、アメリカや香港に移住して行った兄弟、姉妹たちについても聞き取り調査を行い、キリスト教土着化の過程、中国において信者になる意味、彼らの宗教的実践を考察した。S氏本人の手書きの布教用ノートおよびその教会の布教資料も入手した。
- 4) 宿州市の風水師W氏について再度聞き取り調査と参与観察を行った。今回は、農民の息子、羊飼い、大学生、軍人、銀行マンを経て風水師になった彼の一生を詳細に調査し、周易・風水による予測技術の取得と伝承、ビジネス化された彼の風水事務所の運営、社会主義市場経済のもとに風水信仰とそのビジネス信仰の実態を調べた。

基盤研究 (C) 一般

瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究

代表者 笹原亮二

目的・内容

西日本各地には、瀬戸内海や五島灘・玄海灘等、多くの島々が存在する多島海の世界がある。そこでは古来、漁業・商業・交通等を生業とする海の民と、彼らを保護・支配する海の領主の活動圏として、島・海・沿岸地域から成る「領域」が形成されてきた。また、各海域は国内外を巡る航路上に位置し、人・物・情報が往来する「道」として外部と頻繁な交流・交渉が見られた。一方、個々の島は地理的制約から、天候等の自然状況や政治的・社会的要因により外部と隔絶し易く、個性や自律性を有する「コミュニティ」が形成された。更に、瀬戸内海は平家等の強大な政治勢力の活躍の場となり、五島灘や玄界灘は「異国」との境界となる等、それぞれ独自の地域性が形作られた。こうした海域の「領域」「道」「コミュニティ」という特質と各々の地域性が相俟って、各々の海域独自の歴史や社会が展開していった。

こうした海域の島々や沿岸地域には、海域外と共通しつつも各海域独自の特徴的な民俗芸能が分布する。その一方で、同一海域の同種の芸能にも様々な差異が認められる。こうした民俗芸能の多様性は、「領域」「道」「コミュニティ」という特質と地域性が交錯しつつ展開してきた、各海域の歴史的環境と民俗芸能の密接な関係の存在を示している。研究では、そうした海域の島と海と沿岸地域を一体として「島嶼世界」と捉え、それぞれの島嶼世界における民俗芸能の実態を、「領域」「道」「コミュニティ」の特質と地域性の中で歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明する。

活動報告

本研究は、島々・海・沿岸地域を一体の島嶼世界と捉え、そこでの民俗芸能を、歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明することを目指し、瀬戸内海を初め西日本各地の多島海の世界や島々や沿岸地域の民俗芸能について調査を行い、相互比較を試みるものである。

2013年度は、瀬戸内海東部の島々と本州・四国の沿岸地域の民俗芸能を中心に現地調査を行った。調査を行ったのは、五ツ鹿・牛鬼・四ツ太鼓・唐獅子・練り物（愛媛県宇和島市・愛南町・八幡浜市）、川名津神楽（愛媛県八幡浜市）、獅子舞（愛媛県今治市）、大三島神楽（愛媛県今治市）、かぶと踊（愛媛県新居浜市）、夏越しのお神楽（香

川県観音寺市)、念仏踊(香川県綾川町)、ひょうげ祭(香川県高松市)、獅子舞・虎頭の舞(香川県東かがわ市)、太鼓台・地芝居(香川県土庄町)、獅子舞(香川県三豊町)、だんじり・山鉦・祭礼芸能(徳島県海陽町)、踊念仏・盆踊(徳島県徳島市・つるぎ町)、神踊(徳島県徳島市)、鶯舞(山口県山口市)、滝坂神楽舞・腰輪踊(山口県長門市)、本山神事・獅子舞(山口県周南市)、厄神舞(山口県山口市)、矢野神儀(広島県三次市)、名荷神楽(広島県尾道市)、だんじり歌・獅子舞(兵庫県洲本市・南あわじ市)、国分神楽・宇目神楽(大分県大分市)等である。

また、現地調査を行った民俗芸能を初めとした調査地域の民俗芸能に関する論文・調査報告・関連情報等の調査・収集を各地の図書館等において行った。調査を行ったのは、愛媛県立図書館、松山市立中央図書館、香川県立図書館、ちょうさ会館、徳島県立図書館、山口県立山口図書館、下関市立図書館、大分県立図書館、島根県立古代出雲歴史博物館、島根県立図書館等である。現地調査と文献等の関連資料の調査を併せて行うことで、現地調査を行った民俗芸能に関する理解が促進し、本研究を効率的に進めることができた。

基盤研究(C)一般

博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

代表者 松岡葉月

目的・内容

代表者は一般の人々が人文あるいは自然科学の様々な切り口から科学に関心を持てるように、研究者の視点から文理融合の新たな手だてにおいて、天文・宇宙分野の科学映像「誰も知らなかった星座——南米天の川の暗黒星雲」を企画・制作し、普及までの手だてを整えた。

本研究は、この科学映像を全天周映像化し、博物館などのドーム型スクリーンで上映し、全天周科学映像による視聴者への影響・効果を、これまでに成されていなかった人文・社会学的側面から明らかにすることを目的とする。つまり、視聴者の多様な視聴特性を、人間工学的分析ではなく、視聴者の社会文化的背景と心理的、教育的影響との関わりから分析する。さらに、通常の平面版映像の上映効果との比較も踏まえて、全天周映像の特性と視聴者への影響、および研究者の視点からの映像を効果的に伝える方法を明確化する。

活動報告

2013年度は新たな調査協力館(2館)を得られ、昨年度の協力館(1館)の視聴者データと合わせて、これまでの研究では試みられていない文理融合的観点による全天周映像の視聴特性、および全天周映像の特性である臨場感や没入感の観点から研究を進めた。協力3館は地域性、来館者層や投影施設(ドーム径、プロジェクターなど)も異なる。

文理融合的観点が映像の内容理解に及ぼす影響については、アンケートの自由記述欄にある感想や意見からキーワードを抽出した。キーワードには、人文もしくは自然的事象への関心、あるいは論理的思考や芸術的思考があり、年齢や全天周映像の視聴経験などにおいて特色が見られる。これらのキーワードと、年齢および視聴経験数との繋がりを統計学的手法に基づく散布図で表すなどして解析を進めている。

全天周映像の特性である臨場感や没入感については、全天周と、そうでない投影の比較において、臨場感や没入感を5段階評価する回答から分析できた。臨場感・没入感には、画像精細度のみならず、視聴者の心理的側面も作用すると考えられる。調査結果より、臨場感や没入感に影響する要因として、画像精細度とドーム径などの物理的要因、さらに全天周ドームでの過去の記憶や経験などの人的要因が認められたので、物理・環境要因(画像の立体視は除く)と、視聴者個人に関する人的要因の双方から臨場感・没入感を検討した。

これら物理的要因と、来館者個人に関わる人的要因は複合的に絡み合っている傾向も見出せた。以上の研究成果を博物館学や天文学の学会で発表した。発表に際し、双方の分野の関係者から本研究の新規性と独創性について評価を得られたと共に、全天周映像の視聴特性を見出す新たな調査指針も得られた。さらに、宇宙・天文分野に近接する分野で球形立体表示装置を開発している研究者と連携することで、全天周映像特有の臨場感・没入感の検討課題を更に具体化できた。

基盤研究(C)一般

海外生産の技術移転の実態調査

代表者 出水 力

目的・内容

中国およびアセアン諸国を中心とした日本企業の海外生産は、現地の安い労賃、原材料を調達し、低価格部品を基に日本並みの高品質を実現することに他ならない。そのために日本のものづくりを現地で、どのように実現するかにかかっている。それには中小企業である日系二次サプライヤーの存在を無視できない。ところが二次サプライ

ヤーの生産実態を正面から取り上げた研究はほとんど皆無である。この等閑視された領域を現場・現物・現実の視点で明らかにしたい。

- 1) 海外生産における二次サプライヤーの役割を、技術経営的な側面から明らかにする。
- 2) 中小企業の海外進出の経緯、技術移転、現地での経営組織と運営の在り方を調査する。

活動報告

マレーシアでは、2輪車のスズキ、ホンダの工場とアームストロングオートパーツ、エンジン部品の加工をするリズム部品、自動車ボデーのトヨタ車体などを見学した。スマートホンなど電子部品企業の田中電子では精密ボンディングワイヤーの引き抜き、水晶振動子の日本電波工業では極薄膜加工、超小型モーターのコア部品のプレス成型の黒田精工を周った。

タイでは自動車関係でトヨタの2つの工場を見た、1つは乗用車工場と、もう1つは日本では見られないアセアンモデルのピックアップトラック工場である。後者はトラック兼乗用車というべき性格を有している。日野自動車は大型トラックとトヨタ用ピックアップトラックのラザーフレームが生産の主体である。

自動変速機のジャトコは、最新設備を備え日産の現地生産をサポートする体制にあった。ナプテスコの建機部門はコマツ製作所の協力部品工場で、油圧モーターなどコア部分を担当していた。パナソニックの協力工場の村元工作所を数年ぶりに訪ねたが、家電の不振から脱却すべくカーオーディオの生産に力が入られていた。樹脂部品・ダイカスト部品の企業は多く、5社を見学した。

ベトナムではホーチミンにある中小零細企業向けのロンドウック工業団地のレンタル工場を見て回った。ラオスではスーツ、カンボジアではベビー服の縫製などを見学した。

以上の調査結果から、もはや産業の空洞化は死語になった。

生産のグローバル化の進行は避けられなく、海外現地生産をこなしている企業は、国内との生産の棲み分け、仕事の還流などを行うことで、利益を上げている。その結果、貿易収支は赤字が続くのは当然の帰結に過ぎない。海外直接投資のリターンを、今後ますます増加させるには現地に出かけ日本的な技術経営を地道にこなせる人材の育成は不可欠であり、真に現地化出来る人材を、老人大国化した日本から輩出出来るかにかかっている。

若手研究 (B)

ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究

代表者 宮本万里

目的・内容

現代社会では地球環境保護と民主主義がそれぞれグローバルで普遍的な価値として流通し、民主主義は他の政治体と比較して相対的に環境適合的だと考えられている。そうした国際政治空間の認識のなか、「非民主的」な絶対君主制の下で自然保護を国是とし、森林面積の維持と生物多様性の豊かな保存を達成してきたブータンの事例は「特殊解」として位置づけられてきた(米本昌平 1998)。

しかし、近年ブータンはグローバルな要請に答えつつ王室政府の主導で君主制から民主制への漸進的な移行を図っている。本研究は、現在進行中の民主化プロセスのなかで政府が環境・開発政策をいかなる方向へ導き、制度としての民主主義の導入が人々の国家観や共同体観そして「よりよい生」をめぐる価値の体系をどのように再構成しつつあるかを、村落社会における人々の日常実践を手掛かりに考察していこうとするものである。

活動報告

現代社会において地球環境保護の理念と技術が普遍的な価値として位置づけられるなか、ブータンは経済的な指標でみれば世界でも最貧国のひとつながら、君主制の下で伝統文化および自然環境の保護を経済発展に優先させるとし、意識的な政治選択を実施してきた数少ない国である。しかし、近年の急速な民主化への動きは、君主制下での一元的で厳格な森林管理を環境保全成功の秘訣としてきたブータンの属性を大きく変えつつある。本研究では、選挙や分権化をとおした民主化プロセスの中で、自然保護区に暮らす村落社会の人々の価値体系がいかなる形でゆさぶられ、どのように再編されつつあるのか、その課程を森林局や畜産局、群議会や宗教機関を含めた複数のアクターによる日常的で多面的な交渉過程のなかから描き出そうと試みている。

本年度はブータンで行われた第2回目の国政選挙に際して現地調査を実施した。選挙では政権交代が起り、二大政党の議席バランスの向上がみられるなど、ブータンの政治領域におけるデモクラシーは徐々に当初の理想を達成しつつある。しかし、そうした結果は、都市と村落における社会変容を反映しているのだろうか。あるいは、デモクラシーの制度は人々の考え方や慣習を変容させつつあるのだろうか。国立公園下の村落での聞き取り調査では、選挙をめぐる文化政治と森林管理の分権化と制度化、社会における仏教信仰の動態を手がかりに、環境と社会そして信仰をめぐる人々の価値観の変容を重層的に明らかにしようとした。そのなかで、近代的な思想とシステムに

加えて体系的な仏教の流入が土着の呪術信仰の衰退を導いている状況が明らかとなり、その変容が村落社会における生物と環境に対する人々の認識の変化に結びついている様を示した。

研究成果は国際人類学会（IUAES）および京都人類学研究会等での研究発表と『ヒマラヤ学誌』等での論文の刊行をとおして公表することができた。

若手研究（B）

チャム系住民とイスラームの関係に関する地域間比較研究

代表者 吉本康子

目的・内容

本研究は、ベトナム中部から東南アジア大陸部のメコン川流域、中国・海南島およびアメリカ西海岸などに拡散し、ムスリムとして暮らすチャム系住民の宗教実践を比較検討することで、イスラームの要素とローカルな要素の交渉過程の多様性および民族・宗教ネットワークの関係性について検証することを目的としている。とりわけ、イスラームの共通項とされる諸実践に着目し、各地におけるイスラームの展開に関する新資料を提示すること、その上で、イスラームの「多様性」や「統一性」という視点を再考することを目指す。

活動報告

2013年度は、ベトナム、カンボジア、アメリカ合衆国のチャム系ムスリムを対象に行った現地調査で得た史資料のうち、イスラーム的知識の継承の媒体である文書に焦点を据えて研究を行った。特にベトナム中南部の「ムスリム」であるチャム・バニの人々が継承してきたチャム文字およびアラビア文字によって書かれた写本の分析を中心に行い、仏領期以降の記述において存在が指摘されてきたチャム・バニの社会における手書きの「クルアーン」の実態と継承の状況について検討した。これまでの活動で明らかになったことは、当該社会において、アラビア文字で記された文書は「クラン」と総称される傾向にあること、そのうち、最も重要視されている写本はクルアーンではないこと、文書としてのクルアーンが確認できないこと、などである。これらの研究成果の一部は「チャムの伝統文書にみるイスラーム的宗教知識——ベトナム中南部のチャムが継承する写本および目録の分析を通じた予備的考察」（『（東洋大学）アジア文化研究所研究年報』pp.297-304, 2014年）として公表した。

若手研究（B）

現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

代表者 相島葉月

目的・内容

中東におけるモダニティの系譜を探求するに際し、「社会階層」は最も有用な切り口の1つである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、エジプトのスポーツ実践に象徴された「身体化された教養」をめぐるポリティクスを、西洋的近代性に代わる、独自のモダニティを創出する試みとして考察する。エジプトを代表する大衆のスポーツである空手道コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、中流層的な倫理観とモダニティの関係性を再考する。

活動報告

2013年度の目標は空手の効果に関する機能主義的な言説を、エジプトの都市中流層の階級意識と教育論に位置付けて考察することであった。特に、空手実践における「楽しさ」の位置づけと中流層的倫理観の関係性について説明することを目指した。初年度の調査は高級住宅街にある上流階層向けの会員制スポーツクラブが中心となったものの、空手教室の指導者の多くは中流層出身者であることが判明した。よって今年度は指導者へのインタビューを中心に調査を進めた。エジプトでは公務員や会計士であっても本業から得る収入だけでは中流層的な生活水準を維持することは難しいため、副業を持っているのが一般的である。空手教室の指導者は学生時代に空手の稽古に励み、エジプト代表チームで活躍した経歴を持つ。ただ、空手の指導を本業としている者は希少で、多くの空手家は一般企業等に就職しつつ複数の空手教室を掛け持ちしている。上流階級出身者にとって空手などのスポーツは余暇を楽しく過ごす娯楽であるのに対し、中流層出身の空手家たちは試合に勝つことを目標としないスポーツは無意味であると主張する。よって健康管理や身体を動かす楽しみのために成人がジムで行うエアロビクスや重量挙げは「スポーツ」に該当しないのである。一方、稽古場や昇級試験においては生徒が委縮しないように、規律を重んじつつも過度に厳しく指導しないように努めているという。また保護者も子供がコーチを尊敬しつつも、楽しんで空手を学ぶことが重要であると考えているようだ。よって、中流階級の教育論において「楽しさ」は全く無縁の概念であるとはいえないことが判明した。今後はスポーツ実践において目的を持つことや、稽古を通じて強くなることの意味

について考察を深めたい。

研究活動スタート支援

ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造・流通に着目して

代表者 柳沢英輔

目的・内容

本研究は、東南アジアにおけるゴング文化の総合的な理解に向けた一歩として、ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態を、楽器の製造・流通に着目して明らかにする。具体的には、ベトナム中部高原コントゥム省、ジャライ省、中部沿岸部クアンナム省を主な調査対象地とし、ゴングの製造・流通に焦点を当てたフィールド調査を実施することでその実態を明らかにし、当該地域のゴング文化が抱える問題について考察することを目的とする。

活動報告

本年度は、前年度ベトナムで行ったフィールド調査で得たデータ（映像資料を含む）を分析して、キン族の鑄造によるゴング製作の詳細に関する論文としてまとめた。同論文は、『国立民族学博物館研究報告』に投稿し、2014年3月に出版された。また5月に国立民族学博物館で行われた研究会、および、11月に静岡文化芸術大学で行われた東洋音楽学会大会において、現地で撮影した映像を用いて研究成果の一部を発表した。12月には、イギリスの大英図書館、フランスのケブランリ美術館などにおいて、ベトナムのゴング文化に関する資料を収集し、複数の研究者と意見交換を行った。また前年度ベトナムで調査・撮影を行ったジャライ族の墓放棄祭に関する映像を編集して、民族誌映画「Po thi」を完成させた。同作品は、2014年3月にエストニアで行われた11th Tartu World Film Festivalに入選し、現地での作品上映とディスカッションに参加した。同作品は、今後も海外の国際民族誌映画祭などに積極的に出品する予定である。

以上より、東南アジアにおけるゴング文化の総合的な理解に向けた一歩として、ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態の一端を、とくにゴングの製作・流通の視点から明らかにすることができた。今後は、ベトナム中部地域のゴングの流通に関してさらなる研究を実施し、論文としてまとめる予定である。

研究活動スタート支援

生理用品の流入による女性の身体観の変容——パプアニューギニアの事例から

代表者 新本万里子

目的・内容

本研究は、モノの受容、流通による身体観の変容を考察することを目的とする。具体的には、メラネシアにおける生理用品（ナプキンなど西洋起源の月経処置の道具）の受容を事例に、月経にまつわる慣行や、その使用による身体観の変容を明らかにすることを目的としている。

月経と出産などの生理的現象を忌避する社会は広く世界各地にみられ、死の不浄などととも、文化人類学においてはケガレとして理論化されてきた。代表者は、先行研究を踏まえたうえで、メラネシアにおける身体観の変容を、女性たちの生理用品受け入れの経験という次元で考察するために、月経の禁忌が発達したパプアニューギニアの村落を調査地として取り上げ研究を進めていく。

活動報告

本研究課題について、資料の精読による歴史人類学的研究と、参与観察による民族誌的研究を行った。人口840人の調査村において、10代から80代までの52人の女性に、月経処置の道具の変遷と処置法に関する調査を行った。研究成果を整理すると以下ようになる。

生理用品を使用する慣行を生み出した近代医療や学校教育などの制度の導入は植民地時代に始まった。1960年代には医師・看護師による妊婦と乳幼児の健診が調査村でも始まり、月経小屋での出産が危険視され、月経処置は不衛生だとされたが、月経小屋を中心とする慣習は簡単には変わらなかった。生理用品が調査村で使用されるようになり月経小屋が数を減らしていくのは、都市部で生活し学校にも通学した経験のある女性の帰村と、生理用品の流通ルートが確保されたことによる。

生理用品の普及以前、女性たちは、土間式の月経小屋のなかで、ヤシ科植物の仏炎苞（羽状の葉で、人間1人が座ることのできるほどの大きさ）を敷き、下半身には何も纏わずに座っていた。仏炎苞は経血を吸収せず、女性たちは座っていなければならなかった。当時は、集落の誰もが月経期間の女性を知ることができ、月経小屋は女性の性を可視化する装置として機能していた。月経処置の道具には、仏炎苞、布、パンツ、ナプキン、タンボンという変遷が認められた。なかでもナプキンの使用によって、女性たちは月経期間でも人前を歩くことができるようになった。月経期間の女性が不可視となり、月経という身体の出来事が女性個人のものとなった。

本研究では、月経に対する忌避観の強い地域における生理用品の受容に関する具体的資料を収集することができた。身体に直接触れるモノの受容から身体観の変容を考え、対象社会の変容を女性の経験に即して描き直すための資料となったと思われる。今後は、生理用品の流通とイメージ、月経に関する言説の消費に研究を展開させていきたい。

研究活動スタート支援

現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究

代表者 呉屋淳子

目的・内容

本研究は、高等教育機関に設けられた伝統芸能の教授形態に注目し、伝統芸能が創生されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。

現代沖縄の若手芸能実演家たちは、徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、高等教育機関でも琉球芸能を修練し、実践的活動を展開している。こうした新しい教授基盤の登場は、従来にはなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい琉球芸能の担い手を創出し、琉球芸能の発展と創造に繋がっている。そこで、若手芸能実演家からの聞き取り、高等教育機関で目指される〈教授システム〉、行政文書の分析から高等教育機関で「琉球芸能」が創生される様相、「伝統」と「創造」のはざまで揺れ動く彼らの琉球芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察する。これらを通して公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が及ぼす影響を明らかにする。

活動報告

- 1) 沖縄県立芸術大学の琉球芸能専攻を修了した芸能実践家のライフストーリーから現代沖縄の伝統芸能の継承に関する実践について分析を行った。現在、大学で教授活動に関わる芸能家を対象にインタビュー調査を行い、彼らが歩んできた芸能人生においてどのように芸を学習し、そして継承者としての自覚を身につけてきたかについて具体的な継承の実態を明らかにした。「伝統」と「創造」のはざまで揺れ動く彼らの伝統芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察した。その結果、彼らの「二重的な教授の経験」、つまり従来の修練の場である「研究所」に加え、高等教育機関において芸能の修練は、「沖縄らしさ (okinawaness)」をいかに表現するかという問いに向き合うきっかけとなっていた。また、このような経験は、沖縄人としてのアイデンティティを最高する機会ともなっており、県内外での創作舞台を創り上げる過程でその様相が顕著に現れていた。
- 2) 琉球芸能を学ぶことを目的に沖縄県立芸術大学に在籍する留学生（日系人）へのインタビューを通して、沖縄県内の三線・舞踊「研究所」と移民先の沖縄県人会を中心とする稽古場との関係性について明らかにした。特に、母県の「研究所」と南米（ペルー）の稽古場は、教育形態や継承内容が異なるだけでなく、移民先の稽古場では、母県の「研究所」あるいは沖縄県立芸術大学で芸能を修練することが芸道を極める上で必要条件の1つであると認識されていた。

研究活動スタート支援

ベトナム・ハノイにおける都市民衆の相互扶助に関する人類学的研究

代表者 長坂康代

目的・内容

本研究は、ベトナム社会主義共和国の首都ハノイにおける都市民衆間の相互扶助の生活動態の解明を目的とする、ベトナム初のストリートの都市人類学的研究である。

旧市街にあるハンホーム通りは、現在は出身村落に関係なく、塗料販売をおこなっている。そこにあるハビ村の祠堂・集会所「ハビ亭」が、塗料販売の店主同士のコミュニティの場となり、商業組合としての機能を果たしている。また、路上茶屋では、「移動者」（出稼ぎの塗料販売員や荷物運搬者）がコミュニケーションを図り、ストリートの核となっている。

本研究では、こうした都市ストリートを対象に、社会主義国ベトナム都市における中下層民の生活動態の社会・経済活動に着目し、経済発展に伴い社会変容が進むなかでの、出身村の相違や経済格差を超えた都市民のネットワークのあり方を解明し、綿密な商業エスノグラフィを描いて、ハノイのストリート人類学を拓く。

活動報告

政治都市ハノイで、民衆が主体となって組織する同郷会について研究をおこなった。宗教施設・ハビ亭での月2回の活動のほか、旧正月の期間の活動にも参加して、その内容を詳しく調査した。母村であるハビ村での年2回の祭りでは、近年、行政の介入によるハビ亭の敷地をめぐる改築に関して、都市の同郷会と村の長老らとの意見の相

違が争点となっていたが、同郷会の説得によって歩み寄り、都市と村の相互扶助の関係を再構築する姿勢を確認することができた。また、ハビ亭で開かれた同郷会の総会にも参加し、民衆が主体となって、組織づくりやハビ亭の運営について議論する動態を確認した。

ハビ亭が位置するハンホーム通りに並ぶ塗料販売店についても調査をおこない、経済格差、地域格差を超えた相互扶助が明らかになりつつある。ハビ亭で、同郷会の非会員である塗料販売店の店主が民間信仰をおこなったことについて発表した。路上の茶屋をめぐる相互扶助に関しては、卸売のロンビエン市場も含めて論文で公表した。

村落から都市をみるかたちで、出稼ぎ労働者のコミュニティネットワークも調査した。卸売のロンビエン市場では、果物を市場から上に運搬するリヤカー引きとともに労働に従事するフィールドワークをおこなった。これにより、出稼ぎ労働者同士の都市生活の支え合いや、ハノイの都市経済と宗教の緊密性が明らかになりつつある。都市で築いたネットワークが村落で継続される事例も確認することができた。

このほか、ハノイのキリスト教の教会の民衆有志による、地方の某隔離病棟での人道支援活動に参加する機会を得た。これによって、祖先崇拜との関わりが深い道教との相違や、民衆組織の視点からも、比較対象として意義ある調査を遂行することができた。これらに関しても知見を深めて、今後さらに研究調査をおこなっていく予定である。

研究活動スタート支援

女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明——タイを事例に

代表者 松井智子

目的・内容

本研究の目的は、女性移民および人身売買被害者に関する言説を、国際レベル／送り出し国内レベル／支援運動の現場レベルに区分して分析し、それらの言説と女性移民および人身売買被害者当事者の多元的リアリティとの関係性を明らかにすることである。

本研究は、事例として、タイの女性移民・人身売買被害者支援運動を対象とする。まず、1990年代以降の女性移民・人身売買被害者に関する言説を、国際／国内／支援運動現場の各レベルにおいて分析し、女性の移動・親密圏・セクシュアリティ等を問題化する論理を明らかにする。次いで、支援運動の現場レベルにおけるミクロな過程を調査し、各レベルの言説・論理と現場のリアリティとの関係性を分析する。

活動報告

1990年代以降のタイ人女性移民・人身売買被害者支援運動の展開を、支援運動組織レベル／タイ国内レベル／国際社会レベルにおいて資料収集し、それぞれの文脈と論理を分析した。

政策志向の運動では、移住労働・人身売買は「被害-加害」の枠組みで捉えられ、加害者への訴追および被害者の地域への再統合が志向されがちであった。この枠組みにおいては、移動する当事者の経験は被害体験として構築され、支援の対象とされていった。

これに対し、当事者志向の運動では、いわゆる被害体験からはズレてしまう当事者の思いや語りを包含し、移動や移住労働における当事者の主体性を重視する。さらに、支援運動そのものが「支援-被支援」という固定的な関係の下で成立している問題に自覚的になり、「支援者が学ぶ／当事者同士で学ぶ」ことを通して固定的な関係を揺るがし、女性移民・人身売買被害者に対するまなざしを変えていこうとする運動もみられた。

本年度のデータ収集は、支援運動現場における多元的リアリティを明らかにするのにつながるものである。

特別研究員奨励費

民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築

代表者 梶丸 岳

目的・内容

本研究の目的は、ラオスと日本の歌掛けの民族誌記述を行い、それと先行研究のさらなる分析を合わせて、歌掛けの一般的特質を明らかにすることである。

ラオスでは、フアパン県で歌われているカップ・サムヌアの記述を行う。ここでの目標はこれまでまったく記録のない歌掛けの、現代における基本的状況を明らかにすることである。歌掛けの映像による記録、それに基づく歌詞や旋律の具体的記述と分析から、カップ・サムヌアのコミュニケーションとしての特徴を明らかにしていく。その上で、伝統文化の保存、そしてその現代性について考察を進める。

一方、日本の歌掛けでは、秋田県の金澤八幡宮伝統掛唄の記述を行う。歌詞そのものを記録することはもちろん、掛唄を映像で記録して具体的な相互行為の分析を行い、掛唄を取り巻く社会的状況とのかかわりを含めて総合的に記述していく。特に掛唄の学習過程や次世代育成の様子、歌い手同士の関係について重点的に調査し、掛唄の民族

誌的記述を行う。

歌掛けの一般的特質の解明は、これらの研究および、これまで行ってきた中国貴州省における歌掛け「山歌」の研究を合わせ、一般歌掛け論を構築することを目的とする。これまでの成果を踏まえ、歌掛けの言語的特徴、相互行為のあり方を既存の理論と接合させ、コミュニケーション、そして社会的意味についての理論を確立する。

活動報告

本研究の意義はこれまで注目されてこなかった歌掛けについて、言語人類学的方法論に基づいて個別の事例を包括的に記述し、それらを総合することでその特徴を明らかにし、さらにその文化的価値を明らかにして人間のコミュニケーションや文化の可能性と豊かさの一端を新たに示すことにある。

本年度はラオスにおいて昨年度収録した「カップ・サムヌア」の書き起こしと日本語訳を進め、その内部のやりとりの詳細を初めて明らかにした。また現地の歌い手の家に滞在し、その生活をつぶさに観察すること、そして歌い手への歌詞や歌い方などについてのインタビューを通して、カップ・サムヌアの歌詞が持つ社会的・歴史的文脈や掛け合いの具体的な技法、そしてこの歌掛け自身を取り巻く社会的状況について明らかにした。

また今後の課題として、サムヌアだけでなく首都ヴィエンチャンでの調査を行う必要があることも見えてきた。秋田の掛唄については今年初めて熊野神社で行われる掛唄大会に参加し、これまで調査してきた金澤八幡宮の大会との違いと共通点を明らかにし、掛唄の全体的状況について理解を深めることが出来た。

こうした研究成果を学会発表や論文と言ったかたちでまとめるとともに、先行研究である中国貴州省の歌掛け「山歌」を含めた形で比較を行い、一般歌掛け論の構築を推し進めた。

特別研究員奨励費

タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究

代表者 八塚春名

目的・内容

本研究の目的は、これまであまり注目されてこなかった狩猟採集民の生業複合に正面から取り組み、今日のアフリカの狩猟採集社会における生業の多様な展開を解明することである。このことをとおして、狩猟採集社会をめぐる「狩猟採集か農耕・牧畜か」といった二元論を突破し、両者のあいだにある人びとの生業実践のグラデーションを明らかにすることを旨とする。

そのために、タンザニアに暮らすサンダウェとハツァという2民族を主な研究対象とし、以下の3つの課題に取り組む。

- 1) 2民族が現在おこなう生業活動を実証的に把握する
- 2) 土地利用の推移を、聞き取りやGIS分析および過去の画像・映像資料を利用して理解する
- 3) 狩猟採集以外の生業活動をおこなうに至った社会的背景を解明する

活動報告

2013年度は、昨年度のフィールド調査において注目した生業活動について、より詳細な研究を実施した。今日のサンダウェ社会では、生計維持において狩猟はそれほど重要な位置を占めないが、一方で、農耕や家畜飼養だけでなく、採集と養蜂が生計維持においても、また社会的、文化的にも重要な活動である。そこで、養蜂の多面的な意義と養蜂とその他の資源利用との関連について明らかにした。またハツァ社会においては、昨年度に民族観光が重要な生計手段になっていることを示したが、民族観光がその他の生業活動とどのように共存しているのか、個人の移動と他民族との関係に注目しながら検討した。

以上の研究成果を、海外、国内の学会で報告するとともに、これら2民族がおこなう多角的な生業活動の展開の経緯を、社会経済的变化、国家政策、他民族との関わり、先住民運動、NGOなど外部のサポートといった多様な影響と関連させた考察を進めた。

近年、狩猟採集民は先住民の議論や民族観光に取り込まれることで、実際の生業実践よりも狩猟採集のイメージばかりが注目されがちだが、今後は本研究をとおして、グローバル化するアフリカ経済のもとで、狩猟採集民がローカルに実践する多角的な生業展開のあり方を提言したいと考えている。

特別研究員奨励費

タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究

代表者 岡部真由美

目的・内容

本研究の目的は、タイにおける仏教僧ネットワークを対象に、近代化ならびにグローバル化が進行する現代世界

においてコミュニティが動的に編成される過程を解明することである。より具体的には、第1に、1960年代以降の開発の進展とそれに伴う急速な社会変化を背景として、上座部仏教の僧侶たちが、国家・サンガ・地域社会という既存の脈絡を越えたネットワークを形成してきた歴史的過程と現状を、第2に、僧侶たちが、ネットワーク外部の諸勢力、制度や集団との接合をとおして創出する、価値や倫理ならびに共同性の特質を、それぞれ北タイ地域を中心とする現地調査から明らかにする。これを踏まえ、本研究では、人類学および関連諸分野におけるコミュニティ研究の問題点を乗り越えることが目指される。

活動報告

2年目にあたる本年度は、ローカルな地域社会における僧侶個人の実践が、仏教僧ネットワークという新たなコミュニティの内部で形成されつつある共同性といかなる関係をもっているのかについて詳細な民族誌的なデータを収集することを課題とした。これは、仏教僧ネットワークに関する基礎的資料の収集に重点を置いた昨年度の研究成果を踏まえて、僧侶個人の実践に着目しながら、よりミクロなレベルにおいてコミュニティの動的な編成過程を解明しようとするものである。

- 1) 現地調査は、「北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク」に参加する僧侶たちのなかで、タイ北部チェンマイ県ウィアンヘーン郡に新たな宗教施設を創設した特定の僧侶個人に着目し、①2013年11月の10日間、②2014年2月～3月の21日間の計2回実施した。①ではカティナ儀礼（ヂュンラ・カティン）、②ではローカルな社会状況に特に留意し、聞き取りと参与観察による調査を実施した。調査から明らかになったことは、僧侶個人の実践は、第1に、仏教僧ネットワークをとおして他の僧侶やNGO関係者と交換・共有することで得られた知識や経験が断片的に用いられていること、また第2に、外部社会のなかでもとりわけ、首都圏女性を中心にローカルな地域社会を越えて広がる信奉者ネットワークの影響を強く受けていること、である。
- 2) 文献調査では、現地調査の際に収集した、ヂュンラ・カティン儀礼に関する現地語資料（図書、論文、新聞記事）を読解し、現代タイ社会におけるこの儀礼の現状が把握できた。
- 3) 研究成果は、昨年度までの調査研究結果を日本文化人類学会第47回研究大会および国立民族学博物館共同研究会で口頭発表した。本年度の調査研究結果を、日本文化人類学会第48回研究大会で口頭発表し、『国立民族学博物館研究報告』へ論文投稿するための準備をすすめている。さらに、博士論文をベースに、その後の調査研究成果をとりまとめた単著を刊行した。

特別研究員奨励費

内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

代表者 小長谷有紀・Cajilahu (サイジラホ)

目的・内容

1940年代から1970年代にかけて、近代中国において「社会主義改造」、「文化大革命」などの社会主義的イデオロギーによる洗脳運動が全国的におこなわれた。しかし、1980年代以来の内モンゴル東部地域においてはシャマニズムが復活しつつある。シャマニズムは現在、多民族的中国の宗教政策、医療政策、民族政策に対応した柔軟性を発揮しながら、モンゴル人社会の日常と絡んで生き残っている。シャマニズム的諸活動のなかで、治療行為は重要な部分をなしており、依頼者の心身両方の要求を満たしている。

本研究では、そういった民間医療と絡んでいるシャマニズムの各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生と関連する諸問題を文化人類学的に捉える。そして、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようと試みる宗教政策、民族政策、医療衛生政策の本質と軌跡を解明することが強く求められるなか、シャマニズムを支持する人々と依頼者の視点から、シャマニズムと仏教、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題をエスニシティの問題として究明する。さらに、そういった諸問題が存在する内モンゴル東部のホルチンとフルンボイル両地域を相対化する目的で、モンゴル国に赴き、ダルハドやプリアートの間で生き残っているシャマニズムに関するフィールドワークをおこない、豊富な事例のデータを活用して、多様な医療の選択肢があるなかシャマニズムの治療が選択される状況をエスニシティの問題として論じる研究へと収斂させていく。

活動報告

中国内モンゴル東部地域においてシャマニズムが復活しつつある。本研究の目的は、多民族的社会主義中国の宗教政策、医療衛生政策、民族政策を視野にいれながら、民間医療と絡んでいるシャマニズムの各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題を文化人類学的に捉えることである。この研究は、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようとする諸政策の本質と軌跡を学問的に解明することが強く求められるなか、その分

野に対する新しい知見を提供することである。

本年度は研究計画通りに以下のような作業をおこなった。

まず、中国内モンゴル自治区フルンボイル地域においてシャマニズムに関する口述史調査と儀礼参与調査をおこない、オルタナティブ医療論、エスニシティ論およびシャマニズム的治療に関する事例資料を収集した。次に、モンゴル国におけるブリヤート・シャマニズム、ダルハド・シャマニズムに関する初めての現地調査をおこない、中国内モンゴルにおけるシャマニズムとの対比研究を実施した。最後に、医学史、医療人類学およびシャマニズムをアツクった国際学会に参加し、内モンゴルにおけるオルタナティブ医療およびシャマニズム的治療などについて得られた資料を取りまとめ学会発表をおこなった。

そして、以上の現地調査と学術交流で得られたデータを基に、1) オルタナティブ医療とエスニシティ問題の関係性に注目しアイデンティティ・ポリティクスとシャマニズムとの関連性を考察した。2) シャマニズム的民間治療が地域社会および国家の医療衛生政策の実施との相互作用に注目し、学術論文を執筆中である。

受託研究

「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」

委託者：日本学術振興会（研究拠点形成事業B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）

共同研究代表者：園田直子

実施期間：2012年4月1日～2015年3月31日

目的と概要

博物館は、単に資料を収集・保存・展示するだけの場ではなく、特に途上国においては国家・民族としてのアイデンティティを確立する場であり、また観光振興の要として、教育施設として、あるいは戦乱・災害からの復興の拠点としての役割を持つ。そのため、アジア・アフリカにおける自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成は、緊急の課題となっている。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館は、1994年から、途上国を対象に、博物館学ならびに博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。研修に参加したアジアの国ぐにのうち、タイ、ミャンマー、モンゴルでは、日本で研修を受けた人びとの間で国内ネットワークが構築されており、自国の文化的・社会的背景に即した博物館学・博物館研究を模索しているところである。

本事業では、国立民族学博物館が今までに培ったネットワークの新たな展開として、若手の人材育成を視野に入れながら、博物館学を中心とした実践的な学術基盤の形成をはかる。タイ、ミャンマー、モンゴルで博物館学の教育研究を行い、博物館活動や人材育成の中核をになう専門家とともに、日本をふくむ4か国での博物館学の研究成果や博物館活動の事例を共有し、共通の基盤をつくる。そのうえで、従来の受動的立場（「展示される」側）から主体的立場（「展示する」側）へと変容する、現代のアジアにおける博物館の潮流を明らかにし、アジア独自の博物館学・博物館研究のモデルをつくりあげる。

本事業の最終目標は、今までの欧米主流の博物館学・博物館研究とは異なる、アジアの文化的・社会的背景に即した独自の博物館学・博物館研究が創出されることであり、そのうえで、タイ、ミャンマー、モンゴルにおいて自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成の研究基盤が形成されることである。

実施状況

2013年度は、日本とミャンマーにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を目的に、ミャンマーで国際共同研究会を開催した。

ミャンマーでの国際共同研究会は、バガンとヤンゴンでの共同研究会と、ヤンゴンでの公開セミナーに分けられる。共同研究会は、博物館・博物館学の専門家や学生を対象に、博物館学の主要な構成要素である「展示」「保存とドキュメンテーション」をテーマに、日本とミャンマー両国の研究者や専門家が研究成果や博物館活動の事例報告を発表し、ディスカッションを行った。北部の中心都市であるバガン、南部の中心都市であるヤンゴン、この両都市で開催したのは、より多くのミャンマーの博物館関係者が参加できるよう考慮した結果である。各都市では、テーマごとに、日本、ミャンマー、モンゴル、タイ、それぞれの国の博物館事情や文化的・社会的背景をもとに全員でディスカッションを行い、情報と知見の共有をはかった。

また、共同研究会の一環として、ミャンマー国内の博物館・文化施設の視察、人材育成の現地調査を行い、研究者ネットワークの構築と共通の基盤形成をはかった。

成果

ミャンマーでの共同研究会開催により、日本とミャンマー間の博物館学・博物館に関わる研究交流が深化され、

従来の〈日本＝研修実施側〉、〈ミャンマー＝研修を受ける側〉という図式を超え、互いに研究成果や実践事例を共有しあう、新たな研究協力体制を構築できたと考える。

共同研究会にタイとモンゴルのコーディネーターが参画することで、情報と知見の共有がはかれるとともに、4か国間のネットワークの基礎がより強固になった。これにより、初年度のモンゴルでの共同研究会、最終年度タイで開催予定の共同研究会までを有機的に連携させることができる。

また、最終年度に日本で開催予定の国際シンポジウムにおいて、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤ができた。

被災の共同体から地域の復興へ——被災後の人びとの行動の記録化とそれに基づく新たな社会モデルの構築

委託者：三井物産（三井物産株式会社環境基金）

担当教員：竹沢尚一郎

研究期間：2011年6月1日～2014年9月30日

目的と概要

- 1) 岩手県大槌町、山田町、宮古市などで、被災者の被災後の行動と、かれらが形成した組織のあり方に重点をおいて映像記録と録音記録を作成する。
- 2) 先におこなった映像と録音を文字化し、社会モデルの構築のための材料とする。
- 3) 映像化および録音された資料の文字化を継続し、その分析をおこなう。
- 4) 海外の博物館や研究所と、将来の展示やシンポジウムの実施に向けて協議を始める。

実施状況

- 1) 岩手県大槌町、釜石市、山田町で、被災者が形成した団体の地域復興に向けた取り組みを記録した。
- 2) 2011年の6～12月に実施した映像記録の文字化を完成させ、それに基づく社会モデルの構築作業を開始した。
- 3) 岩手県下の市町村のまちづくりに協力するために「岩手まちづくりネットワーク」を立ち上げた。
- 4) 著書『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』と論文「津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——岩手県大槌町の避難所に見る地域原理」を執筆した。
- 5) 被災後の人びとの行動のビデオ記録を文字化し、それをもとに被災者の行動をパターン化した。
- 6) 国立民族学博物館で展示を実施するべく準備を進めたほか、展示の実施に向けて、海外の博物館と協議を進め、国際シンポジウムを開催した。

成果

研究成果に基づいて国際学会および海外で研究発表をおこなった。

- 1) Takezawa Shoichiro 'Positive or Negative?' (IUAES 国際大会、2014年5月15日)
- 2) Takezawa Shoichiro 'Au-delà du trauma' (MuCEM et EHESS、2014年11月24日)

手話言語学に関する講義の実施及びシンポジウム・セミナーの開催

委託者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

研究期間：2013年4月1日～2014年3月31日

目的と概要

日本では、手話の言語としての認識や、ろう者の母語であることへの理解は十分であるとは言えない。一方、手話を言語として科学的に記述・分析することへの関心は、ろう者・聴者を問わず少しずつ増えてきて入るが、この「手話言語学」という新しい分野の専門家は、まだ数が少なく、言語学科において講座を開講している大学も殆ど無い。本事業では、本館の共同利用研究機関という性質を生かし、1) 諸大学における手話言語学の講義の開講の援助、2) 手話言語学の研究成果の社会発信、3) ろう者コミュニティへの発信のための基盤づくり、を行うことにより、研究者育成に貢献するのみならず、長期的な意味での社会における言語としての手話に対する認識と手話言語学への興味を喚起することを目的とする。

実施状況

- 1) 手話言語学の専門家の諸大学への派遣
 日程：2013年10月28日～31日（4日間、集中講義）
 講師：スーザン・フィッシャー（アテンド 菊澤律子）
 派遣先：東北大学（受入研究者：小泉政利）
 内容：現代言語学 各論（学部）、言語学 特論（大学院）

「Sign Language Structures (手話言語の成り立ち)」

聴講：20人

言語：英語、必要に応じて菊澤が日本語で内容を補足

日程：2013年通年講義のうち、半年間（15日間）

講師：市田泰弘

派遣先：東京大学

内容：言語学概論（大学院および学部）

聴講：学部8名、大学院生2名が単位取得、他3名聴講

言語：日本語

日程：2013年10月19日より全6回

講師：松岡和美

派遣先：関西学院大学梅田キャンパス（関西学院大学日本手話講師陣主催）

内容：手話言語学入門講座（学生、教員、その他の関係者）

聴講：30人

言語：日本語、日本手話通訳付き

日程：2013年11月15日（1日間、異文化交流研究施設主催の講演会シリーズ）

講師：スーザン・フィッシャー

派遣先：山口大学（受入研究者：太田 聡・和田 学）

内容：①手話言語学に関する研究会（山口大学教員）

②「Sign Languages as Languages（手話は言語だ！世界のさまざまな手話とその言語学的特徴）」（学生、教員、一般）

言語：英語（英日の逐次通訳付き）

日程：2013年11月15日（1日間、講義）

講師：市田泰弘

派遣先：筑波技術大学（受入研究者：大杉 豊）

内容：「日本手話における動詞連続——語彙概念構造による分析」

「日本手話の基本文法——認知言語学の視点から」

聴講：30人（学生・教員・一般）

言語：日本語（日本手話通訳、要約筆記付き）

日程：2013年11月17日（1日間、講演）

講師：スーザン・フィッシャー

派遣先：関西学院大学（関西学院大学日本手話講師陣主催、都合により会場は国立民族学博物館）

内容：「Sign Languages as Languages（手話は言語だ！世界のさまざまな手話とその言語学的特徴）」

言語：英語（英日の逐次通訳、日本手話通訳付き）

日程：2013年11月26日（1日間、NINJAL コロキウムにおける講演）

講師：スーザン・フィッシャー

派遣先：人間文化研究機構 国立国語研究所（受入研究者：ジョン・ホイットマン）

内容：「Historical Change in Sign Languages（手話における通時論的变化について）」

言語：英語

その他、フィッシャー氏の研究活動については、以下について承認・派遣した。

日本手話学会 出席（2013年10月26日～10月27日）

日本言語学会 ディスカッサント（2013年11月23日～11月24日）

筑波技術大学 訪問（2013年11月28日）

また試験的に、国立民族学博物館において、ろう者一般および通訳士を対象とした入門レベルの「手話による言語学講座」、「楽しい言語学を学ぶ会」を開催し、結果として、上記関西学院大学での講座開講に結びつくことになった。関西近隣のろう者および手話通訳者にも広い関心があることがわかり、今後どのような形で類似の講座を提供すべきかについて検討中である。

日 程：2013年5月～8月（全6回、講義）
講 師：松岡和美
派遣先：国立民族学博物館
内 容：手話による言語学講座
聴 講：各回15～25名
言 語：日本手話

日 程：2013年4月8日～8月（全6回、講義）
講 師：菊澤律子
派遣先：国立民族学博物館
内 容：手話による言語学講座
聴 講：各回10～15名
言 語：音声日本語、日本手話通訳付き

2) 国際ワークショップ・国際シンポジウムの開催 予定通り、以下の内容で開催した。

日 程：

- ①2013年9月27～9月28日（ワークショップ）
- ②2013年9月29日（シンポジウム）
- ③2013年9月30日（通訳士交流会）

場 所：国立民族学博物館

対象者：

- ①国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）
- ②研究者、一般公開
- ③①、②で通訳をした通訳士（通訳コーディネーター、日本手話、日英同時通訳、アメリカ手話、国際手話）
および菊澤と相良がオブザーバー参加。

内 容：

- ①言語の記録・保存の基礎知識および技術習得のためのワークショップ
- ②言語の記述・記録・保存に関する学術シンポジウム
- ③通訳士間の反省会および今後に向けての検討会

参加者数：

- ①116名（1日目）+ 125名（2日目）、②159名、③約30名

使用言語：

- ①、②英語、アメリカ手話、国際手話、日本語、日本手話、③英語、日本語（日英同時通訳付き）※ 総合研究大学院大学の研究事業の一環としてインターネット配信を行った。

3) 手話言語学セミナーの開催

予定通り、以下の内容で開催した。

日 程：2013年12月1日

場 所：東京・日本財団ホール

対象者：一般

内 容：みんなくセミナー 暮らしの中の言語学「ことばの機能障害と言語学」

聴 講：42名

使用言語：日本語、日本手話、英語（日本手話通訳、日英同時通訳付き）

4) 1)～3)の講義・講演等の内容については、総合研究大学院大学のOERプロジェクト（別事業）において、イ

インターネット発信の準備を進めている。

成果

- 1) 手話言語学を専門とする研究者を、手話言語学の開講に関心を持つ大学等を対象として、集中講義もしくは単独の講演のための講師を派遣することができた。これをきっかけとして、東北大学で2014年度から全学教育枠での「手話言語学」の講義の正規の開講が決定したことは大きな成果であったと考える。事業を進める中で、多くのケースにおいて、講師の派遣のみではなく、日英もしくは／および日本手話通訳派遣を組み合わせなくては効果がない、もしくは実現が難しいことがわかり、通訳および通訳謝金の確保が当初想定していたより重要な部分を占めることがわかった。一方で、リレー通訳の場合には、日英の逐語通訳でも、よい通訳者に入ってもらえば、学術的な内容であっても十分よい講演になりえることもわかった。

今後の進め方であるが、正規の集中講義等は、前年度半ばには担当者やテーマが決まってしまうため、仮に関心を持つ機関に空きがあっても、広報から実現までには最低2年かかることがわかり、当初想定していたよりも長期的に取り組む必要があると感じた。

- 2) 手話言語学に関する国際ワークショップやセミナーを開催し、言語学の基礎概念や海外の研究動向に触れる機会を手話通訳者および一般社会に提供することができた。一方で、広報時期を早めることで参加人数や周知の範囲を伸ばせる可能性はあり、次年度以降の課題となっている。
- 3) 国内研究者およびハワイ大学言語記録保存センター（LDTC）との協力により、ろう者が自分の言語を記述するための研修カリキュラムを整備し、国内実施の可能性を検討するという目標については、LDTCが現在、独自のプログラムを発展させている途上であり、今後の進展を見極めつつ、具体化してゆきたい。

本事業開始後、手話言語学の専門家に限らず、言語学者、大学関係者に関心を持ってもらうことができはじめており、この事業を通して少しずつ、諸大学や社会における手話言語学に対する認識の向上に向かうことができるという手ごたえを感じている。ただし、国内の関係機関および研究者のネットワークづくりによる現存するカリキュラムの取り込み、聴者、ろう者を対象としたときの条件、手話通訳者養成を視野にいたれた共同研究機関における研究部門設置の可能性等、要検討事項は多く、国内のニーズや現状に即した内容に結びつけることができるようになるためには、より長期的な視点から地道な事業を展開してゆく必要があると感じている。

天城町伝統芸能映像記録作成事業委託者：天城町文化財活性化実行委員会

担当教員：福岡正太・笹原亮二

研究期間：2013年12月20日～2015年3月31日

目的と概要

これまで、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究の「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」（代表者：福岡正太）における研究活動の一環として、また、一部は国立民族学博物館の文化資源プロジェクト「徳之島の民俗芸能の保存伝承への活用のための映像資料の試験的取材と製作」（代表者：笹原亮二）等により進めてきた徳之島の芸能に関する調査撮影の成果を基礎として、伝統芸能の継承活動や文化振興に役立てることを目的として、新たに鹿児島県大島郡天城町の各集落に伝承される芸能を映像で記録する。

実施内容

天城町文化財活性化実行委員会具志堅亮氏のコーディネートにより、2014年1月31日～2月2日、および、3月1日～3月2日の延べ5日間にわたり、調査撮影をおこなった。成果としての映像は、国立民族学博物館にて保管するとともに、天城町文化財活性化実行委員会にDVDにて納入した。調査撮影には、連携研究の研究活動の一環として、笹原亮二（1月31日～2月2日、3月1日～2日）および福岡正太（1月31日～2月2日）が同行し監修をおこなった。

成果

下記の3番組を制作した。

笹原亮二・福岡正太監修

- 2014 『天城町の芸能Ⅰ 稲作と芸能』（映像番組）
- 2014 『天城町の芸能Ⅱ 祭りと唄と踊り』（映像番組）
- 2014 『天城町の芸能Ⅲ シマの唄と踊り』（映像番組）

民間などの研究助成金による研究活動

・寄附金

「渋沢敬三没後50周年記念特別展」運営助成金 —— 財団法人MRAハウス
 吉田ゆか子機関研究員研究助成金（公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団） —— 吉田ゆか子
 JFE21世紀財団「アジア歴史研究」助成金 —— 出水 力
 順益台湾原住民博物館研究賛助金 —— 順益台湾原住民博物館
 公益財団法人高梨学術奨励基金 —— 公益財団法人高梨学術奨励基金
 「渋沢敬三記念事業」運営助成金 —— 一般財団法人MRAハウス
 台湾平埔族の歴史と文化展に係る研究助成 —— 日本たばこ産業株式会社
 市川彰外来研究員研究助成 —— 市川 彰
 企画展・国際連携展示「台湾平埔族の歴史と文化」運営助成金 —— 台北駐日経済文化代表処

間接経費による研究環境整備事業

研究広報事業に係る経費（梅棹忠夫アーカイブズ研究プロジェクト）

申請者：久保正敏

使用目的等：

最も古い資料から順次、資料整理と索引情報作成、劣化資料の修復作業などを行い、モンゴル調査フィールドノート（44冊）の画像公開、オープンファイル見出しリスト作成と公開（900件）、ローマ字カード（5000件）の画像電子化と公開などを行った。これらの膨大なアーカイブ資料を整理・分析することにより、資料間の関係を明らかにして、梅棹学の根幹を把握するとともに、日本の民族学研究史の解明に繋がることを期待できる。2013年度は、劣化の進んだ最も古い時期の資料を中心に電子化を進め、研究者の閲覧に便宜を図る体制が整備できた。引き続き、資料の電子化を進めるとともに、資料相互の関係性を反映した構造化を進める予定で、これにより、研究者の発見を共有する仕組みを構築したい。

研究活動の推進に係る必要経費（シンポジウムの組織・支援、研究開発に関する調査分析等）

申請者：塚田誠之

使用目的等：

研究戦略センターは、機関研究員（1名）を2013年5月1日より2014年3月31日まで雇用し、前年度に引き続き、科学研究費に基づく研究プロジェクトの成果を研究者コミュニティに還元し、新たな分野や領域の展開につなげることができた。具体的には、関連シンポジウムの組織・支援、研究開発に関する調査分析、さらに外部資金の獲得支援、研究開発プロジェクトのマネジメント、本館の研究広報の支援などを行った。これにより、本館における科学研究費プロジェクトの成果を、本館がイニシアティブをとる形で研究者コミュニティに還元する上で多大なる成果をあげた。また、新たな研究の立案を検討することにより、本館の共同利用性を高めた。

館全体の研究の応用ないし発展に係る必要経費（クラウド型情報ミュージアム構築に向けた基盤整理）

申請者：伊藤敦規

使用目的等：

2014年度文部科学省概算要求「フォーラム型情報ミュージアム構想」の課題を明らかにするワークショップを国立民族学博物館で開催した。本館の研究者と、米国北アリゾナ博物館とズニ博物館およびズニの宗教指導者が、資料情報管理の現状を振り返り、将来的な展望と課題を議論することができた。また、本館が所蔵する米国先住民ズニ製と記録されている資料の著作権状況を調査し、一部の資料の制作者（著作者）および著作権を継承した遺族から公衆送信に関する利用許諾を書面で取得することができた。

（その他館の整備、運営などに関するもの2件）

2-3 研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

38巻1号(2013年12月25日刊行)

• 論文

藏語和漢語对嘉戎語的影响变迁情况研究 ————— 严木初

• 研究ノート

東南アジアにおける客家研究の新傾向——シンガポール、マレーシアを対象として ————— 河合洋尚

Expedition to the Tuvans in China, Russia, and Mongolia in 2012: A Preliminary Report

————— Marina V. Mongush

• 資料

南島研究回想 ————— 伊藤幹治

悪霊ミカ祓いの祈祷書 *Mi kha'i bzlog'gyur* 校注 ————— 村上大輔

38巻2号(2014年2月28日刊行)

• 論文

アンデス文明形成期の金属製品の製作に関する一考察——クントゥル・ワシ遺跡およびパコバンパ遺跡出土の
金属製品の蛍光X線分析の結果から ————— 日高真吾・関雄二・橋本沙知・椎野博

• 研究ノート

ムスリムの国へ行ったムスリム——トルコ・イスタンブールに住む中国新疆ウイグル族の事例から — 熊谷瑞恵

• 資料

琉球弧・八重山諸島における通耕実践と生態資源利用

——19世紀末期から20世紀初頭における「高い島」と「低い島」との往来をめぐる事例 —— 藤井絢司

38巻3号(2014年3月25日刊行)

• 論文

日本における民法施行前の「講」と現代非営利組織(NPO)との特性の共通性 ————— 出口正之
支援のフィールドにおける人類学——カレンニー難民の移動と定住 ————— 久保忠行

• 研究ノート

貝殻交易ネットワークの地域史

——ビスマルク諸島とソロモン諸島地域間におけるムシロガイ交易の歴史の変遷と現状 —— 深田淳太郎

• 資料

ベトナムにおけるゴング製作——フッキウ村を事例として ————— 柳沢英輔

38巻4号(2014年3月31日刊行)

• Special Issue —— Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe

Introduction: Exhibiting Cultures from Comparative Perspectives ————— Akiko Mori

Exhibiting European Cultures in the National Museum of Ethnology, Osaka ————— Akiko Mori

Exhibiting European Cultures in Berlin, Germany ————— Elisabeth Tietmeyer

Museum Experiments in Living Ethnography: 'At Home in Japan' in London? ————— Inge Daniels

The Exhibition of Japanese Cultures in the National Museum of Ethnology ————— Shingo Hidaka

• 論文

移民の軍務と市民権

——1997年以前グルカ兵の英国定住権獲得をめぐる電子版新聞紙上の論争と対立 —— 上杉妙子

● Senri Ethnological Studies

No.83 (2013年6月10日刊行)

Maitseo M. M. Bolaane, *Chiefs, Hunters and San in the Creation of the Moremi Game Reserve, Okavango Delta: Multiracial Interactions and Initiatives, 1956-1979*

No.84 (2013年8月30日刊行)

Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi and James M. Savelle (eds.), *Anthropological Studies of Whaling*

No.85 (2013年12月25日刊行)

Naoko Sonoda, Claude Laroque, Jeong Hye-young and Chen Gang (eds.), *Research on Paper and Papermaking: Proceedings of an International Workshop*

No.86 (2014年2月24日刊行)

I. Lkhagvasuren and Yuki Konagaya, *Oirat People: Cultural Uniformity and Diversification*

No.87 (2014年3月24日刊行)

Nanami Suzuki (ed.), *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies*

No.88 (2014年3月28日刊行)

Peter J. Matthews, *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History*

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.114 (2013年6月28日刊行)

小長谷有紀・斯琴編『モンゴル口頭伝承の一資料——モンゴル国ホブド県トルグードのノースタイ氏の語り』

No.115 (2013年11月29日刊行)

小長谷有紀・J. ルハグワデムチグ・Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ編『モンゴル国における20世紀 (3)』

No.116 (2014年3月5日刊行)

韓 有峰・孟 淑賢著『中国鄂伦春语方言研究』

No.117 (2014年3月24日刊行)

山本紀夫著『中央アンデス農耕文化論——とくに高地部を中心として』

No.118 (2014年3月31日刊行)

陳 天璽編『世界における無国籍者の人権と支援 日本の課題——国際研究集会記録』

● 民博通信

No.141 (2013年6月28日刊行)

評論・展望 「アーカイブ映像の創造的活用に向けて——エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを事例に」
川瀬 慈

No.142 (2013年9月30日刊行)

評論・展望 「みんぱく若手研究者奨励セミナー」 平井京之介
「セミナー参加者の声」 河野明佳・鈴木佑記・久保忠行・櫻田涼子・小林宏至・奈良雅史・上村淳志

No.143 (2013年12月25日刊行)

評論・展望 「文化人類学の輝きをもとめて」 小長谷有紀

No.144 (2014年3月28日刊行)

評論・展望 「民博の舞台裏で——展示にまつわる人びととその業務上の裁量」 太田心平

●研究年報2012 (2014年2月28日刊行)

●国立民族学博物館論集 (館外出版)

No.2 (2014年3月31日刊行)

杉本良男編『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』東京：風響社

●外部出版

小田博志・関 雄二編『平和の人類学』京都：法律文化社 (2014年3月15日刊行)

武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』東京：風響社 (2014年3月20日刊行)

森 明子編『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社 (2014年3月31日刊行)

●共同研究の成果

小田博志・関 雄二編『平和の人類学』京都：法律文化社 (2014年3月15日刊行)

* 共同研究「平和・紛争・暴力に関する人類学的研究の可能性」(2008～2011年度)

武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』東京：風響社 (2014年3月20日刊行)

* 共同研究「民族文化資源の生成と変貌——華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究」(2006～2009年度)

森 明子編『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社 (2014年3月31日刊行)

* 共同研究「ソーシャル概念の再検討——ヨーロッパ人類学の問いかけ」(2006～2009年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

本館では共同研究の成果等を学術成果として出版し、国内外の研究者に広く配布してきたが、より公開度を高めるために、機関リポジトリを構築することとした。一般公開後4年が経過した「みんぱくりポジトリ」は、恒常的な館内刊行物の登録を継続するとともに、『研究年報2011』の掲載業績を基に個人業績の抽出・許諾・登録作業を行った。また、『リポジトリ運用指針』の多言語化を進め、これまでの主要言語に加え、韓国語・ヒンディー語を登録するとともに、TOP画面のレイアウトを変更して利便性の向上をはかった。さらに、モバイル用（スマホ自動対応）のTOP画面および検索画面を新たに構築した。

本年度新たに登録したコンテンツは306件で、2014年3月末のコンテンツ登録数は4,158件となった。今後も、年間300件の登録を目指したいと考えている。また、コンテンツのダウンロード数は、2013年度月平均約39,000件に達した。前年度の約25,000件と比較して、5割以上も増加しており、「みんぱくりポジトリ」の認知度が一層高まって来ていることが伺える。

「みんぱくりポジトリ」に対する国際的な評価も高まっており、スペイン高等科学研究院 CSIC がおこなうリポジトリの定量的総合評価では、日本135機関中42位、世界1,746機関中677位にランキングされた。

学術講演会

●みんぱく公開講演会

「ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし」

実施日 2013年10月25日

場 所 日経ホール (東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 427人

講演1 「社会の底流から民主化を考える」

講 師 田村克己

内 容 ミャンマーは今、社会の大きな転換期を迎えている。そうしたなかで、国民の大多数を占める上座部仏

教徒の宗教的行為はどのように変容していくのであろうか？仏教と王権のうえにつくりあげられてきた伝統文化はどのようになるのであろうか？伝統的な価値観や倫理観とはうらはらな、特有の社会関係のあり方は変わっていくのであろうか？あらためて考えた。

講演2 「アウンサンスーチーと民主化のゆくえ」

講師 伊野憲治（北九州市立大学地域創生学群教授）

内容 「慈悲の政治」という言葉で特徴付けられる、ガンディーや仏教思想をベースとしたアウンサンスーチーの政治思想・理念を検討し、その実現を目指す民主化運動の抱える矛盾と苦悩を明らかにした。その上で、ミャンマー政治の現状と今後のミャンマーの民主化のゆくえ、「慈悲の政治」の実現可能性について考えた。

パネルディスカッション

土佐桂子（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）× 田村克己 × 伊野憲治

司会 三尾 稔

内容 ミャンマーは、長く政治的緊張のもとにあったが、軍事政権によって繰り返し自宅軟禁下に置かれたアウンサンスーチーが2010年11月に解放されると、その翌年3月に新しい政権が成立し、2012年12月には米国のオバマ大統領が公式訪問するなど、近年は民主化を印象づけるできごとが続いている。またアセアン諸国をはじめ中国、韓国、インド、欧米諸国、さらには日本などの海外企業の進出も進み、停滞していた経済も急速に発展する兆しをみせている。地政学的にも、政治・経済の面でも、今最も注目を集めている国の1つと言えるであろう。今回の講演会では、長期にわたり実地調査に基づいてミャンマーの社会や政治を研究してきた2名を講師とし、また同じく長年ミャンマー研究に携わる研究者をコメントーターに迎えた。講演とパネルディスカッションを通じ、ミャンマーの劇的変化の社会的背景に迫り、またアウンサンスーチーの政治思想を手がかりに、ミャンマーの今後について考えた。

『働き者と、ナマケモノ——『はたらきかた』文化論』

実施日 2014年3月20日

場所 オーバルホール（大阪）

共催 毎日新聞社

参加者 303人

講演1 「『勤勉は身を助く』——フィンランド的処世術からの検証」

講師 庄司博史

内容 世の中では勤勉が身を助けるといわれている。果たしてそうであろうか。フィンランド人の生活をみてみるとつくづくそう思う。労働時間も作業効率も生産性も決して日本よりすぐれているとは思えない。それでも5時になれば職場をはなれて家族生活に十分時間を使い、確実に1か月以上の年次休暇を楽しむ。よほど望まないかぎり路上に放りだされることのない彼らにとって、勤勉とは労働観とは何であろうか。

講演2 「『カツオの狩人』たちの働きぶり——オキにおける漁業労働と生活文化」

講師 若林良和（愛媛大学南予水産センター副センター長・教授）

内容 大海原で泳ぐカツオの群れを狩るカツオ1本釣り。カツオの漁撈も3K（きつい、きたない、危険な）労働とされ、常に不確実性ははらんでいる。カツオ漁船で営まれる生活の生産と消費に注目してみると、私たちの生活に比べ特徴的であり、オキ（海上）の論理や漁民の心性が浮かびあがる。日本漁船のほか、異なった文化的背景を持つ漁民が乗り込む混乗漁船でのフィールドワークの成果をもとに検証した。

パネルディスカッション

平井京之介×庄司博史×若林良和

司会 樫永真佐夫

内容 北タイの農村と日系工場における女性たちの「はたらきかた」に焦点を当てた視点からコメントをいただき、文化としての「はたらきかた」をめぐって議論した。このテーマは「労働環境への適応」、「『はたらきかた』にはたらきかける習慣や制度」、「ハタラクモノはどこに？」というような、かなり次元の異なる議論へと展開する可能性をもっている。

2-4 学会開催

学会開催

2014年1月28日～29日 国際ワークショップ『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』

2-5 研究員制度

外来研究員

Ahmed Khairy Mohamed (アフメッド・ハイリー・モハメッド) エジプト The Grand Egyptian Museum Conservation Center GEM-CC 保存修復者

研究課題：大エジプト博物館保存修復センターにおける二酸化炭素殺虫処理方法の実践的研究

Amal Refaat Youssef (アマル・レファート・ユーセフ) エジプト カイロ大学講師

研究課題：大エジプト博物館保存修復センターにおける二酸化炭素殺虫処理方法の実践的研究

Amr Mustafa Abd El-Hamid (アムル・ムスタファ・アブデル・ハミッド) エジプト The Grand Egyptian Museum Conservation Center GEM-CC 文化財搬入準備室 保存修復者

研究課題：大エジプト博物館保存修復センターにおける二酸化炭素殺虫処理方法の実践的研究

Antonymsamy Sagayaraj (アントニサーミ・サガヤラージ) インド 南山大学人文学部人類文化学科准教授

研究課題：南インド・タミルナードゥ州におけるドラヴィダ運動についての人類学的研究

ATWOOD, Christopher Pratt (アトウッド クリストファー プラット) アメリカ インディアナ大学准教授 / 内蒙古大学客員教授

研究課題：内陸アジア遊牧民の社会史

Banerjee Rita (バネルジー リタ) インド デリー大学英文学部准教授

研究課題：東インドと日本の女性の民俗的韻文におけるイデオロギーの比較研究

CAIJILAHU 財吉拉胡 (サイジラホ) 中国 日本学術振興会外国人特別研究員

研究課題：内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

DE ST. MAURICE, Gregory A. (デ セイント モーリス グレゴリー エイ) アメリカ ピッツバーグ大学大学院博士課程 (Ph. D. Candidate)

研究課題：地域に根ざすローカリズムの可能性と現代における京都の食文化

Dijana Nikodinovska (ディヤナ ニコディノフスカ) マケドニア セント・キリル・メトヂウス大学博士課程 (Ph. D. Candidate)

研究課題：極東とバルカンの和解は可能か——日本とマケドニアのことわざにおける価値のカテゴリーに関する研究

Dina Momdouh Mohamed (ディーナ・マムドゥア・モハメッド) エジプト The Grand Egyptian Museum Conservation Center GEM-CC アノクシア・ラボラトリー化学者

研究課題：大エジプト博物館保存修復センターにおける二酸化炭素殺虫処理方法の実践的研究

DJORDJEVIC BOGDANOVIC, Biljana (ジオルジヴィッチ ボグダノヴィッチ ビルヤナ) セルビア セルビア

国立博物館 Executive Director

研究課題：陶器づくりの通文化的研究民族考古学の視点から

ELIKHINA, Iuliia Igorevna (イリーヒナ ユリア イーゴレヴナ) ロシア 日本学術振興会外国人招聘研究者

研究課題：エルミタージュのカラコルム・コレクション——モンゴル伝統文化の資料として

Hanan Ahmed Mohalhal (ハナン・アフメッド・モハルハル) エジプト The Grand Egyptian Museum Conservation Center GEM-CC アノクシア・ラボラトリー化学者

研究課題：大エジプト博物館保存修復センターにおける二酸化炭素殺虫処理方法の実践的研究

ICHINKHORLOO, Lkhagvasuren (イチンホルロー ルハグワスレン) モンゴル 日本学術振興会外国人招聘研究者

研究課題：モンゴルにおける博物館学の構築

Khaled Abdel Rady Basier (ハレッド・アブデル・ラディ・バシル) エジプト The Grand Egyptian Museum Conservation Center GEM-CC 文化財搬入準備室保存修復者

研究課題：大エジプト博物館保存修復センターにおける二酸化炭素殺虫処理方法の実践的研究

KIM, Jung 金山 晶 (金 晶) (カナヤマ アキ) 韓国

研究課題：東アフリカ地域にみられる乳歯抜歯慣習について

LIN, Liying 林 麗英 (リン レイエイ) 台湾

研究課題：近現代台湾におけるエスニシティの変化について——原住民族の林野開発を中心にして

Ma Qian 馬 茜 (バ セン) 中国 中国北京市中央民族大学民族学・社会学学院民族学博士課程

研究課題：開発主義言説における人間という概念の検討——中国寧夏回族の観光開発プロジェクトを中心に

MARZEC, Agnieszka (マジェツツ・アグネシカ) ポーランド TECC 語学学校非常勤講師

研究課題：日本における外国人の文化変容の受け止め方に関する研究

MCGUIRE, Jennifer (マグワイア ジェニファー) アメリカ オックスフォード大学博士課程 (Ph. D. Candidate)

研究課題：教育現場における「ろう者コミュニティ」およびアイデンティティ形成

McHugh, Christopher James (マキュー クリストファー ジェームス) イギリス サンダーランド大学大学院学生

研究課題：ジョージ・ブラウン・コレクションの再文脈化に関する実践的研究——市民参加による陶芸制作を通じて

NARAN 娜然 (ナラン) 中国 東京外国語大学研究員

研究課題：環境政策実施後の内モンゴルにおける牧畜の変化と土地劣化

OH, Ahhee 豊山亜希 (呉 亜希) (トヨヤマ アキ) 韓国 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員

研究課題：両大戦間期の日本陶磁器業のアジア戦略——インド商家建築の和製タイル装飾を事例として

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ペルー

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究

SCHNELL, Scott Randall (シュネル・スコット・ランダル) アメリカ Department of Anthropology, University of Iowa, Associate Professor

研究課題：自然との共生——東北日本におけるマタギの狩猟伝統と自然環境の管理責任

Shaaban Abdel-moneim Ahmed (シャーバーン・アブデル・モナイム・アフメッド) エジプト The Grand

Egyptian Museum Conservation Center GEM-CC 文化財搬入準備室室長

研究課題：大エジプト博物館保存修復センターにおける二酸化炭素殺虫処理方法の実践的研究

Shaglanova, Olga Andreevna (シャグラノヴァ オルガ アンドレエヴァ) ロシア トランスバイカル地方民族学博物館主任学芸員兼研究員

研究課題：博物館活動のための情報交流

YOTOVA, Mariya Ivanova (ヨトヴァ・マリア・イヴァノヴァ) ブルガリア 中垣技術士事務所

研究課題：バルカン地域における社会経済変動と文化変容

相島葉月 (あいしま はつき) 日本 英国マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師

研究課題：現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

浅見恵理 (あざみ えり) 日本

研究課題：地域社会の発展と独自性の形成過程——チャンカイ文化の世帯考古学的研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本

研究課題：アンデス形成期祭祀遺跡における工芸品製作

石丸恵利子 (いしまる えりこ) 日本 熊本大学埋蔵文化財調査センター

研究課題：同位体分析による日本列島貝の道の解明

石森大知 (いしもり だいち) 日本 武蔵大学社会学部准教授

研究課題：宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究

市川 彰 (いちかわ あきら) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究

伊藤 悟 (いとう さとる) 日本

研究課題：中国徳宏タイ族社会の音文化——感性と感覚の人類学

伊藤まり子 (いとう まりこ) 日本 京都外国語大学非常勤講師 和歌山市医師会看護専門学校非常勤講師

研究課題：ベトナム北部地域都市における「独身」女性の社会生活に関する人類学的研究

今中崇文 (いまなか たかふみ) 日本

研究課題：中国陝西省勝西安市における回族コミュニティの再編をめぐる人類学的研究

岩谷洋史 (いわたに ひろふみ) 日本 神戸大学国際文化学部非常勤講師 / 立命館大学理工学部非常勤講師 / 関西大学文学部非常勤講師

研究課題：人類学的な資料の情報化に関する研究

大場千景 (おおば ちかげ) 日本

研究課題：無文字社会における社会変動と歴史意識の動態

岡田育子 (おかだ いくこ) 日本 アイヌ刺しゅう家

研究課題：アイヌ衣服文様の技法・手法について——現在から未来に向けた発展を模索する

岡部真由美 (おかべ まゆみ) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究

岡本尚子（おかもと なおこ） 日本 国際基督教大学高等学校教務員

研究課題：アラビアンナイト仏語訳者J.-C. マルドリュスに関する遺贈コレクションによる研究

小川さやか（おがわ さやか） 日本 立命館大学先端総合学術研究科准教授

研究課題：現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して

小野林太郎（おの りんたろう） 日本 東海大学海洋学部専任講師

研究課題：アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究——資源利用と物質文化の時空間比較

梶丸 岳（かじまる がく） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築

金子正徳（かねこ まさのり） 日本 三重大学人文学部非常勤講師 / 津看護専門学校非常勤講師

研究課題：東南アジア島嶼部における民族・文化動態の研究

金谷美和（かねたに みわ） 日本 京都大学地球環境学堂三才学林研究員 / 大阪芸術大学芸術学部非常勤講師

研究課題：グローバル化のなかのインド染織品

上池あつ子（かみいけ あつこ） 日本

研究課題：インドのヘルス・ツーリズムの伝統医療

神本秀爾（かみもと しゅうじ） 日本

研究課題：グローバリゼーション下のジャマイカにおけるラストファーライの変容に関する人類学的研究

川田順造（かわだ じゅんぞう） 日本 神奈川大学特別招聘教授

研究課題：日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する

河西瑛里子（かわにし えりこ） 日本

研究課題：イギリスのグラストンベリーにおけるスピリチュアリティ諸実践の共存と交流

神田每実（かんだ つねみ） 日本 愛知県立芸術大学美術学部彫刻専攻教授

研究課題：造形美術様式と風土の関係

岸本誠司（きしもと せいじ） 日本 東北公益文科大学 非常勤講師

研究課題：東アジアにおける在来農業とマメ科作物に関する民俗学的研究

窪田幸子（くぼた さちこ） 日本 神戸大学大学院国際文化学研究科教授

研究課題：表象のポリティックス——グローバル世界における先住民 / 少数者を焦点に

窪田 暁（くぼた さとる） 日本

研究課題：ドミニカ共和国からアメリカに渡る「野球移民」の民族誌

熊谷瑞恵（くまがい みずえ） 日本 ウィグル・アカデミー外国人研究員

研究課題：牧畜民と言語情報をめぐる人類学的研究——パキスタンのワヒを対象に

藏本龍介（くらもと りょうすけ） 日本

研究課題：ミャンマーにおける宗教の統制と公共性

- 栗田（山内）梨津子（くりた（やまのうち）りつこ） 日本
研究課題：高等教育機関におけるアボリジニの文化的知識の形成と階層差に関する文化人類学的研究
- 桑山敬己（くわやま たかみ） 日本 北海道大学大学院文学研究科教授
研究課題：海外における人類学的日本研究の総合的分析
- 高本康子（こうもと やすこ） 日本 北海道大学スラブ研究センター学術研究員
研究課題：国立民族学博物館「青木文教アーカイブ」資料の調査分析
- 坂田博美（さかた ひろみ） 日本 富山大学経済学部教授
研究課題：手芸をめぐる消費文化研究——フィールドワークに基づく消費者行動分析
- 佐藤吉文（さとう よしふみ） 日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員
研究課題：存在論的アプローチによる先スペイン期アンデスにおける初期国家モデルの構築——ペルー共和国、プーノ県、パレルモ遺跡出土考古学資料と ティワナクを事例に
- 眞田岳彦（さなだ たけひこ） 日本 女子美術大学大学院教授
研究課題：気候風土に育まれた人の幸福観と文様、装飾、記号との造形デザイン研究
- 新本万里子（しんもと まりこ） 日本 広島大学大学院総合科学研究科研究員
研究課題：生理用品の流入による女性の身体観の変容——パプアニューギニアの事例から
- 杉島敬志（すぎしま たかし） 日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
研究課題：エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望
- 鈴木博之（すずき ひろゆき） 日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員
研究課題：言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究
- 関根康正（せきね やすまさ） 日本 関西学院大学社会学部教授
研究課題：ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究
- 添野 勉（そえの つとむ） 日本 城西国際大学メディア学部非常勤講師 / 成城大学社会イノベーション学部非常勤講師
研究課題：社会集団の写真資料に対する分類・メタデータ付与手法の研究
- 藪田 郁（そのだ いく） 日本
研究課題：近代日本における人形芝居の生成と展開——猿倉人形と西畑人形
- 高橋晴子（たかはし はるこ） 日本 大阪樟蔭女子大学学芸学部国文学科教授
研究課題：世界の身装・布文化デジタルアーカイブの構築
- 武田和久（たけだ かずひさ） 日本 日本学術振興会海外特別研究員
研究課題：南米ラプラタ地域イエズス会布教区の先住民社会組織に関する歴史学的研究
- 竹村嘉晃（たけむら よしあき） 日本 和歌山県立医科大学非常勤講師 / 奈良大学非常勤講師 / 関西大学非常勤講師
研究課題：ダンス・エスノグラフィーに関する理論的研究——南アジア芸能を事例に
- 玉山ともよ（たまやま ともよ） 日本
研究課題：米国南西部先住民のウラン鉱山による影響と環境正義運動

辻 貴志 (つじ たかし) 日本

研究課題：フィリピン・パラワン島先住民の狩猟採集活動に関する生態人類学的研究

辻 輝之 (つじ てるゆき) 日本

研究課題：宗教と移民のアイデンティティ・共生——南アジア系ディアスポラを事例として

津田浩司 (つだ こうじ) 日本 東京大学大学院総合文化研究科准教授

研究課題：「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生

椿原敦子 (つばきはら あつこ) 日本

研究課題：ディアスポラ状況下での集団の再編に関する人類学的研究——ロサンゼルス出身のイラン出身者を事例に

出水 力 (でみず つとむ) 日本 大阪産業大学経営学部教授

研究課題：海外生産の技術移転の実態調査

土佐桂子 (とさ けいこ) 日本 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

研究課題：「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ

友永雄吾 (ともなが ゆうご) 日本 佛教大学非常勤講師 / 大阪産業大学非常勤講師 / 大阪学院大学非常勤講師

研究課題：オーストラリア南東部における先住民と非先住民との相互変容に関する研究

中井信介 (なかい しんすけ) 日本 大谷大学非常勤講師

研究課題：生業活動の域内多様度に関する人類学的研究——東南アジア大陸部におけるモンの事例

長坂康代 (ながさか やすよ) 日本 京都大学文学研究科 GCOE 研究員

研究課題：ベトナム・ハノイにおける都市民衆の相互扶助に関する人類学的研究

長谷千代子 (ながたに ちよこ) 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院講師

研究課題：宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代社会

中村真里絵 (なかむら まりえ) 日本 岡山理科大学非常勤講師 / 四條畷学園短期大学非常勤講師

研究課題：タイにおける土器づくりの職人集団の形成に関する人類学研究

奈倉京子 (なぐら きょうこ) 日本 静岡県立大学国際関係学部専任講師

研究課題：帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界

名和克郎 (なわ かつお) 日本 東京大学東洋文化研究所准教授

研究課題：ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究

根津朝彦 (ねづ ともひこ) 日本 同志社大学人文科学研究科嘱託研究員 / 立命館大学非常勤講師

研究課題：桑原武夫の思想史研究——「戦後京都学派」のエクスペディションの源流

橋本裕之 (はしもと ひろゆき) 日本 追手門学院大学地域文化創造機構特別教授

研究課題：災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承

早坂ユカ (はやさか ゆか) 日本 アイヌ刺しゅう家

研究課題：文様の違いについて——文様の地方差、技法の違いについて知見を深める

比嘉夏子 (ひが なつこ) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究——ポリネシアにおける贈与の全体性

- 福岡まどか（ふくおか まどか） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科准教授
研究課題：東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化
- 藤井龍彦（ふじい たつひこ） 日本 国立民族学博物館名誉教授／総合研究大学院大学学融合推進センター特任教授
研究課題：総研大文化科学研究科「学術資料マネジメント教育プログラム開発によるグローバルな人文研究者の養成機能強化」におけるプログラム開発事業
- 舟橋健太（ふなはし けんた） 日本 京都大学大学院文学研究科研究員（グローバルCOE）
研究課題：現代インドにおける「改宗仏教徒」の生活実践に関する文化人類学的研究
- 堀田あゆみ（ほった あゆみ） 日本
研究課題：モンゴル遊牧民のモノをめぐる文化研究
- 堀内正樹（ほりうち まさき） 日本 成蹊大学文学部教授
研究課題：非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ
- 前川真裕子（まえかわ まゆこ） 日本
研究課題：日本をめぐる表象の系譜と現在に関する人類学的研究——オーストラリアの事例から
- 前島訓子（まえじま のりこ） 日本 椋山女学園大学人間関係学部非常勤講師
研究課題：インド・ブッダガヤにおける「聖地」構築プロセスの場所論的研究
- 増野高司（ますの たかし） 日本
研究課題：東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究
- 松井智子（まつい ともこ） 日本
研究課題：女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明——タイを事例に
- 松井生子（まつい なるこ） 日本 昭和薬科大学非常勤講師
研究課題：カンボジアの国籍／市民権をめぐる法と実践——在カンボジア・ベトナム人との関わりを中心に
- 松岡葉月（まつおか はつき） 日本
研究課題：博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究
- 松川恭子（まつかわ きょうこ） 日本 甲南大学社会学部准教授
研究課題：グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究
- 松川孝祐（まつかわ こうすけ） 日本
研究課題：ミシュテク語系トーン言語の比較研究
- 道信良子（みちのぶ りょうこ） 日本 札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門准教授
研究課題：現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」
- 宮本万里（みやもと まり） 日本 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員／国立民族学博物館現代インド地域研究拠点拠点研究員
研究課題：現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究
- 宮脇千絵（みやわき ちえ） 日本
研究課題：中国雲南省におけるモンの装いにみる自己表象に関する人類学的研究

八塚春名（やつか はるな） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究

柳沢英輔（やなぎさわ えいすけ） 日本 青山学院大学総合文化政策学部付置 ACL 特別研究員

研究課題：ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造と流通に着目して

藪中剛司（やぶなか たけし） 日本 新ひだか町教育委員会社会教育課文化財グループ主幹

研究課題：アイヌ民具の中にみられる特徴的な漆器資料の分析

山崎浩平（やまざき こうへい） 日本

研究課題：インド・ヒジュラ社会における共同性と移動の人類学研究

吉江貴文（よしえ たかふみ） 日本 広島市立大学国際学部准教授

研究課題：近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開

吉岡由佳（よしおか ゆか） 日本 くらしき作陽大学子ども教育学部専任助教

研究課題：アジア系アメリカ詩における「声」の研究

吉田佳世（よしだ かよ） 日本

研究課題：沖縄における祖先崇拜の私事化とオルタナティブな女性像の創造に関する人類学的研究

吉本康子（よしもと やすこ） 日本 神戸学院大学非常勤講師/園田学園女子大学非常勤講師/放送大学非常勤講師

研究課題：チャム系住民とイスラームとの関係に関する地域間比較研究

劉 麟玉（りゅう りんぎょく） 日本 奈良教育大学教育学部准教授

研究課題：音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2013年度は、国立大学1人、私立大学2人の、合計3人の大学院生を受け入れた。

2-6 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料収集および映像取材地域



- 平成25年度までの標本資料調査・収集地域
- 平成26年度の標本資料調査・収集計画地域
- 平成25年度までの映像取材地域
- 平成26年度の映像取材計画地域

●標本資料の収集・利用状況

・収集

太田心平	韓国	36点 (プレーマット他)	2013年2月4日～3月30日
朝倉敏夫	韓国	3点 (石うす他)	2013年2月14日～2月18日
鈴木七美	アメリカ	75点 (ベッドカバー他)	2013年5月30日～6月3日
藤本透子	カザフスタン	69点 (弦楽器他)	2013年7月29日～9月5日
佐々木史郎	ウズベキスタン	42点 (手紙、写真、竜舞他)	2013年8月5日～8月21日
杉本良男	インド	5点 (サリー他)	2013年8月10日～8月18日
上羽陽子	インド	134点 (プリント用木版他)	2013年8月24日～9月27日
樫永真佐夫	タイ	16点 (ムエタイ資料他)	2013年9月23日～10月2日
南 真木人	ブータン	48点 (テント他)	2013年10月29日～11月15日
樫永真佐夫	ベトナム	75点 (木箱他)	2013年11月20日～12月3日
寺田吉孝	ネパール	166点 (金糸刺繍他)	2013年11月20日～12月11日
上羽陽子	インド	73点 (両面木版捺染ストール他)	2013年11月30日～12月28日
平井京之介	タイ	8点 (ヘルメット他)	2013年12月4日～12月30日
朝倉敏夫	韓国	7点 (看板 (味の素) 他)	2013年12月11日～12月14日
福岡正太	インドネシア	26点 (バロン他)	2014年1月12日～1月16日
信田敏広	マレーシア	164点 (ゴング (シラット用) 他)	2014年1月17日～1月25日
三尾 稔	インド	26点 (クリケット他)	2014年2月13日～2月26日
南 真木人	ネパール	30点 (頭飾り (ケース付き) 他)	2014年2月24日～3月11日
上羽陽子	インド	8点 (肩掛け他)	2014年2月25日～3月11日
平井京之介	タイ	98点 (仏陀像他)	2014年3月5日～3月13日
福岡正太	インドネシア	2点 (シャツ他)	2014年3月16日～3月23日

・2014年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料/176,732点 国内資料/162,816点 (未登録資料含む) 総点数/339,548点 (未登録資料含む)

・大学・博物館等への貸し出し

総点数/1,246点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

三尾 稔 南アジア (ネパール) 南アジア展示場新構築のための標本・映像音響資料収集
2013年11月27日～12月11日

・2014年3月現在の収蔵資料数

映像資料/7,937点 音響資料/62,651点 総点数/70,588点

・映像音響資料の貸し出し

利用総件数/136件 (内、大学19件) 資料利用総点数/433点 (内、大学63点)

館内利用など

利用件数/72件 資料利用点数/259点

特別利用 (館外での上映・視聴など)

利用件数/64件 資料利用点数/174点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2013年度図書室の活動

1. 利用者サービス

1) 図書室内に無線LANが整備され、利用目的に応じて、本館構成員*および外部研究者が利用可能となった。

* 本館構成員（本館教職員、名誉教授、客員教員、機関研究員、共同研究員、外来研究員、特別共同利用研究員、外国人研究員、総合研究大学院大学生）

2. 利用者研修会の開催——教育・研究支援

- 1) 外来研究員オリエンテーション
- 2) 総研大新入生ガイダンス
- 3) 博物館学コース（JICA）オリエンテーション
- 4) 国会図書館職員研修
- 5) 若手研究者奨励セミナー

* 随時受付のツアーも実施している。

3. 資料整備関係

- 1) マイクロフィルム資料（11,273リール）について、長期保存に適した資料整備を行った。
- 2) 遡及入力を引き続き実施し、約36,000冊を登録した。
- 3) 地図書所蔵資料約5万枚のうち約3万枚の整備（整理およびリスト化）を実施した。
- 4) 研究業績の点検、整理を行い、3か年計画の2年目として、3,421件の整理を行った。
- 5) 資料管理IDラベルの貼付作業が2012年度に完了し、蔵書点検が簡略になったため、書庫3層にある約15万冊を対象に蔵書実査を行った。
- 6) 発行年が1911年以前で、取扱区分が「一般図書」になっている資料2,976冊に対し、館内利用であることを表示するシールを貼付し、データについても「館内貸出専用」に変更する作業を行った。

4. 施設整備

- 1) 間接経費にて、書庫2層荷捌きコーナーに書架を設置（約2,600冊分の収容能力増加）これにより経典関係資料の配架を2層に集中でき、3層の書架の狭隘化が緩和された。
- 2) 書庫の避難経路である階段にすべり防止処置を施した。
- 3) 昨年に続き、地震発生時の書架資料落下防止対策のため、書庫1層の書架上段3段に落下防止テープを貼付。
- 4) 視聴覚室の映像音響機器を更新し、窓にブラインドを設置した。
- 5) 緊急時に備えて、図書室カウンター横に、簡易組み立て式の担架を設置した。

5. 広報、社会貢献その他

- 1) 「みんなく図書室ニュース」を月に1度発行し、図書室の情報提供を行った。
- 2) 中学生の職場体験学習受入れ。

箕面市立第二中学校（2013年10月30日 2年生男子3名）
吹田市立第三中学校（2013年11月1日 2年生女子3名）
豊中市立第九中学校（2013年11月6日 2年生男子3名）
豊中市立第十二中学校（2013年11月13日 2年生男子1名、女子2名）

●2013年度新規受入数

日本語図書	3,149点	外国語図書	2,898点		
AV資料他	175点	製本雑誌	978点	合計	7,200点

●2014年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	264,266点	外国語図書	391,849点	合計	656,115点
日本語雑誌	10,090種	外国語雑誌	6,818種	合計	16,908種
HRAF	385ファイル	HRAF 原典（テキスト）	7,141冊		

●利用状況（2013年度）

入室者	全体	12,136人
	館外者	1,628人
時間外入室者		119人
うち日曜、祝日		34人
貸出	図書	11,691冊
	雑誌	323冊
うち館外貸出図書		3,471冊
HRAF 利用受付		13件
		(カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内（うち謝絶）	2,185 (304)件
		国外（うち謝絶）	60 (24)件
		来室*	3,026 件
依頼	国内	522 (30)件	
	国外	27 (11)件	
現物貸借	受付	国内	1,000 (49)件
	依頼	国内	501 (15)件
		国外	1 (0)件
事項調査	受付		32 件

*うち大学等の機関1,556件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2013年度の問い合わせ利用件数は、345件であった。

問い合わせ者別 (件)

教員（大学）	34
大学院生	11
大学生	5
教員（小・中・高）	5
学生（小・中・高）	3
博物館・美術館関係	19
図書館	21
教育・研究機関	2
マスコミ関係	14
会社・団体	54
一般	69
本館教職員	108
計	345

問い合わせ者の所属機関別 (件)

公的機関	大学・大学図書館	62
	博物館・美術館	33
	小・中・高	8
	その他教育機関	0
	研究機関	1
	公共図書館	6
	地方公共団体	5
	団体	5
民間	研究機関	1
	会社	56
	団体	6
個人	館外	68
	館内	93
	不明	1
計	345	

資料の利用目的

調査・研究	研究*1	83	業務用	展示用	33
	論文作成	12		番組制作	31
	学習*2	4		出版物作製	21
	図書館から	13		参考資料	7
	授業で利用	28		入手方法	3
	その他	38		小計	95
	小計	178		寄贈申出	3
館内利用	刊行物作成	10	その他	1	
	館の事業	31	小計	4	
	参考資料	6	合計	345	
	資料の複製	21			
	小計	68			

*1 大学生以上の調査を「研究」とする

*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の1つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、大内青琥、桂米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、篠田 統、杉浦健一、土方久功、馬淵東一、および「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ、松尾三憲旧蔵絵葉書コレクションなどの資料リスト作成等を行い、その成果を順次公開している。

2013年度は、昨年度に引き続き既存アーカイブズの整理作業を行い、鹿野忠雄アーカイブの写真資料のデジタル画像等を公開した。また、新規に沖 守弘アーカイブを受入れ、その権利処理および岩本公夫アーカイブの写真資料3,086点のデジタル化を完了し、梅棹忠夫アーカイブのリストを作成した。

リストを公開し、利用に供しているアーカイブは12件である。2013年度の利用状況は閲覧12件、特別利用4件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像付き）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2012年度までの作成件数	263,465
2013年度の作成件数	13,741
2013年度のアクセス件数	66,256

・標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像付き）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2012年度までの作成件数	47,413
2013年度の作成件数	2,395
2013年度のアクセス件数	5,716

・標本資料記事索引

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2012年度までの作成件数	44,523
2013年度の作成件数	6,138
2013年度のアクセス件数	3,462

・韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあつたすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像付き）。

2012年度までの作成件数	7,827
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	3,673

・George Brown Collection (ジョージ・ブラウン・コレクション)

宣教師であり神学博士でもあつたジョージ・ブラウン氏が19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像付き）。

2012年度までの作成件数	2,992
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	7,730

・映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2012年度までの作成件数	7,853
2013年度の作成件数	28
2013年度のアクセス件数	13,831

・ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。ビデオテークブースと同じメニューで番組を探したり、キーワードで検索が可能。

2012年度までの作成件数	626
2013年度の作成件数	18
2013年度のアクセス件数	3,889

・音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2012年度までの作成件数	849
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	346

・ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像付き）。

2012年度までの作成件数	3,879
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	3,933

・松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像付き）。高精細でデジタル化した絵葉書画像の連続的な拡大が可能。

2012年度までの作成件数	169
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	1,994

・音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2012年度までの作成件数	62,453
2013年度の作成件数	198
2013年度のアクセス件数	1,040

・音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、および昔話の一話単位の情報。

2012年度までの作成件数	346,772
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	586

・図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌の書誌・所蔵情報。

2012年度までの作成件数	666,543
2013年度の作成件数	6,480
2013年度のアクセス件数	218,322

・梅棹忠夫著作目録（1934～）

梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録データベース。

2012年度までの作成件数	6,473
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	1,063

・中西コレクション——世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西 亮氏が世界各地で収集。

2012年度までの作成件数	2,729
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	39,001

・吉川「シュメール語辞書」

吉川 守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2012年度までの作成件数	
キーワード：33,450語（40,596頁）	
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	641

・Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）

Lawrence A. Reid 氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2012年度までの作成件数	
見出し語：7,637語	
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	298

・日本昔話資料（稲田浩二コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声付き）。音声は館内限定公開。

2012年度までの作成件数	3,696
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	1,916

・rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）[英語、中国語]

長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声付き）。81の方言ないし言語それぞれについて、426または1200の語彙項目と200文例を収録している。

2012年度までの作成件数	—
2013年度の作成件数	
語彙：39,826語（文例：15,706件）	
2013年度のアクセス件数	36,154

・衣服・アクセサリ

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像付き）。

2012年度までの作成件数	19,577
2013年度の作成件数	1,908
2013年度のアクセス件数	28,518

・身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2012年度までの作成件数	151,869
2013年度の作成件数	7,897
2013年度のアクセス件数	33,641

・近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2012年度までの作成件数	10,049
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	1,584

●館内で利用できるデータベース

・標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像付き）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2012年度までの作成件数	261,800
2013年度の作成件数	2,606
2013年度のアクセス件数	51,175

・カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像付き）。特別展「自然のこえ 命のかたち ——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2012年度までの作成件数	158
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	209

・音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2012年度までの作成件数	849
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	269

・朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像付き）。

2012年度までの作成件数	3,966
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	7

・タイ民族誌映像——精霊ダンス

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2012年度までの作成件数	10,082
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	0

・東南アジア稲作民族文化総合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像付き）。

2012年度までの作成件数	4,393
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	60

・オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2000年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像付き）。

2012年度までの作成件数	8,019
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	25,719

・西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像付き）。一部に「日本山岳会第一次マ

ナスル登山隊] (1953年) 科学班 (推定) の写真を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2012年度までの作成件数	620
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	30

・京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」(1961年～1967年) と「京都大学探検部トンガ王国探検隊」(1960年) が撮影した写真の情報 (画像付き)。

2012年度までの作成件数	11,663
2013年度の作成件数	12,355
2013年度のアクセス件数	5,581

・梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報 (画像付き)。

2012年度までの作成件数	35,420
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	3,192

・日本昔話資料 (稲田コレクション)

稲田浩二氏 (当時京都女子大学教授) らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料 (446本のテープ・約190時間) の情報 (音声付き)。

2012年度までの作成件数	3,696
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	141

・国内資料調査報告集

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集 (1980年～2003年) をデータベース化。

2012年度までの作成件数	21,373
2013年度の作成件数	0
2013年度のアクセス件数	41

●2013年度に館外公開されたデータベース

・rGyalrongic Languages (ギャロン系諸語) [英語、中国語] (2013年7月18日公開)

●2013年度に館内公開されたデータベース

なし

2-7 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館 (展示場) を利用した大学・研究機関等 (50音順、カッコ内は人数)

上田安子服飾専門学校 (46)、追手門学院大学 (14)、大阪大学 (315)、大阪学院大学 (7)、大阪教育大学 (59)、大阪芸術大学 (130)、大阪国際大学 (119)、大阪産業大学 (76)、大阪樟蔭女子大学 (68)、大阪成蹊大学 (54)、大阪総合デザイン専門学校 (166)、大阪府立大学 (7)、大阪文化服装学院 (13)、大阪YWCA専門学校 (29)、大谷大学 (8)、沖縄県立芸術大学 (27)、学校法人京都國學院 (11)、学校法人山口学園 ECC 国際外語専門学校 (14)、関西大学 (110)、関西学院大学 (70)、京都市立芸術大学 (35)、京都外国語大学 (4)、京都教育大学 (12)、京都精華大学 (25)、京都造形芸術大学 (67)、京都大学 (52)、京都橘大学 (154)、京都ノートルダム女子大学 (15)、京都府立大学 (17)、京都文教大学 (26)、近畿大学 (11)、熊本大学 (6)、高知大学 (35)、甲南女子大学 (53)、神戸大学 (52)、神戸学院大学 (30)、神戸女学院大学 (24)、神戸女子大学 (100)、神戸スポーツアート Cocoro 専門学校 (37)、兵庫教育大学 (41)、山陽学園大学 (8)、滋賀県立大学 (13)、芝浦工業大学 (14)、昭和女子大学 (51)、杉野服飾大学 (73)、駿台観光&外語専門学校 (4)、成安造形大学 (37)、摂南大学 (31)、千里

金蘭大学 (58)、園田学園女子大学 (26)、筑波大学 (7)、帝京大学 (6)、東京藝術大学 (23)、同志社女子大学 (40)、東北学院大学 (72)、東北生活文化大学 (43)、東洋きもの専門学校 (12)、獨協大学 (14)、ドレスメーカー学院 (94)、名古屋学芸大学 (82)、奈良教育大学 (26)、奈良大学 (44)、日本大学 (8)、阪南大学 (66)、姫路獨協大学 (6)、ファーマン大学 (16)、ファッション専門学校 ESMOD JAPON 大阪校 (23)、福井大学 (13)、佛教大学 (6)、文化服装学院 (52)、文教大学 (20)、平安女学院大学 (11)、法政大学 (21)、松山大学 (16)、武庫川女子大学 (53)、明治大学 (8)、桃山学院大学 (16)、淀川区医師会看護専門学校 (135)、立教大学 (40)、立正大学 (19)、立命館大学 (9)、龍谷大学 (116)、早稲田大学 (15)、hong-IK 大学校 (韓国) (28)、Mahasarakham University (タイ) (34)、順天郷大学 (韓国) (16)、東國大学院 (韓国) (29)、北京大学 (中国) (16)

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

・来館目的 (アンケート回答より、順不同抜粋)

授 業	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 回生の韓国ゼミ ・ 美術学部工芸科工芸基礎授業の見学 ・ 「フィールドワーク」 ・ 「信仰と祝祭」 ・ 1 回生対象の基礎ゼミナール ・ 留学生対象の地域の歴史・文化を学ぶ研修 ・ ゼミの大阪研修旅行 (貴館の他、釜ヶ崎、生野、鶴橋等を訪問) の一環 ・ 「経済経済学科 演習 I (地域おこしとフィールドワーク)」 ・ 「クリエイション&デザイン」 ・ 「宗教学概論 A」 フィールドワーク ・ 「博物館実習 (学内実習)」 ・ ポケットゼミナール：中国語の諸言語 (1 年次生共通科目)・中国語学特殊講義 (学部大学院共通)
-----	---

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績 (カッコ内は人数)

大阪大学、京都文教大学、同志社大学 文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学 (1,685)

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 障がい有する者等への配慮についての取組状況

- ・ 来館者に安心・安全な施設環境を提供するため引き続きバリアフリー化を実施し、来館者・職員用エレベーター (4号機) を視覚に障がいのある方のため、音声ガイド装置の設置を行った。講堂においては、客席に車椅子用の観覧スペースを整備し、障がいのある方や高齢者の方々の安全に配慮した改修を行った。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・ 施設設備の使用状況を把握するため館内部署と協議しつつ、共同利用スペースの創出など、施設の有効活用に取り組んだ。
- ・ 展示準備室等の空間の有効活用を図るため、機能・設備の改修を行い、新たな資料閲覧室を設置するとともに、外部研究者の利用も想定した資料閲覧室への導線を整備した。

3) 施設の維持管理の取組状況

- ・ 館内の環境整備としては、常設展示場のうち、中国地域の文化・朝鮮半島の文化・日本の文化展示場の展示施工と併せて老朽化した床材の修繕を実施した。
- ・ 環境衛生を確保するため、今年度も館内害虫駆除を行った。
- ・ 自主点検および保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- ・ 昨年に引き続き、夏季および冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知したほか、館内各所に節電、節水の貼紙をし、教職員へ一層の意識啓発を行った。
- ・ 昨年に引き続き、省エネ仕様の中央監視設備に、高効率な省エネルギー型熱源機器 (主電動機310KW から120KW に更新) を導入し、更なる節電・節水を図った。
- ・ 特別展示館および第7展示棟・第8展示棟の階段に設置されている非常用照明器具を常時点灯のものから、全て人感センサー付きに取替えを行った。

2-8 受賞

●2013年度の職員受賞者

川瀬 慈	2013年4月21日	第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞
小長谷有紀	2013年4月29日	紫綬褒章
小長谷有紀	2013年5月1日	モンゴル国「優秀学術研究者」徽章
吉田ゆか子	2013年6月9日	第8回日本文化人類学会奨励賞
朝倉敏夫	2013年10月19日	大韓民国「玉冠文化勲章」
藤本透子	2013年12月10日	人間文化研究奨励賞
野林厚志	2014年1月24日	総合研究大学院大学 2013年度学融合推進センター公開研究報告会ポスター賞・学融合推進センター賞
菊澤律子	2014年1月24日	総合研究大学院大学 2013年度学融合推進センター公開研究報告会ポスター賞・学融合推進センター賞

